発 行 者：熊本県教育委員会
所　　属：教育総務局文化課
発行年度：平成29年度

新南部遺跡群（12次）　熊本県文化財調査報告第三二九集　二〇一八　熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第３２９集

新南部遺跡群（12次）

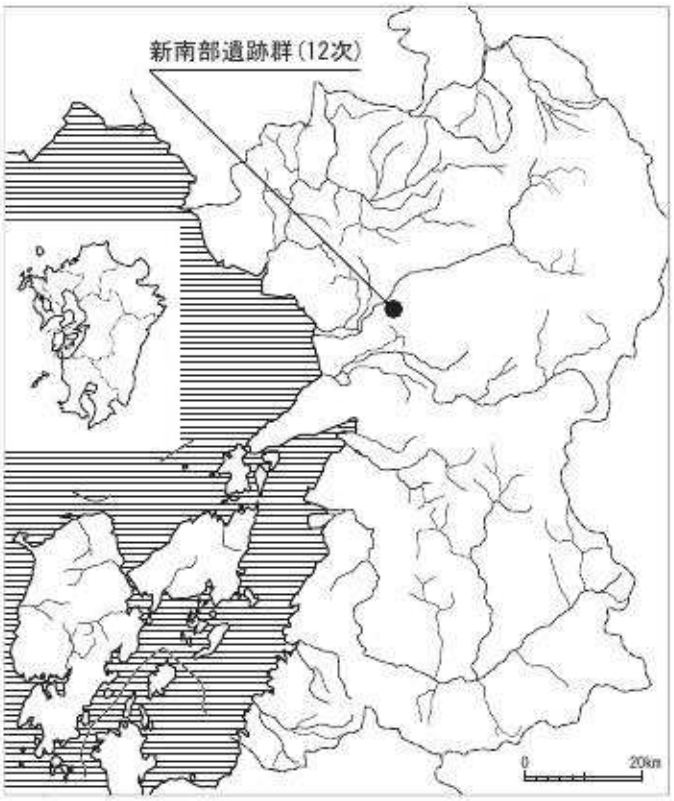
－白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

熊本県教育委員会

２０１８．３

新南部遺跡群（12次）

－　熊本県熊本市所在の埋蔵文化財　－



熊本県教育委員会

２０１８．３

序　文

熊本県教育委員会では白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴い、新南部遺跡の発掘調査を実施し、この一帯は遺跡の宝庫で、新南部遺跡群は今回で第１２次調査となります。調査の結果、弥生時代や古代の生活の痕跡を確認することができました。

弥生時代は中期、古代は８世紀の住居地での生活、また出土遺物の土器、石器などから自然の恵みを享受したその様子を垣間見ることが出来、今後の白川流域の歴史解明の一助となりました。

本調査も平成２４年７月に発生した「熊本広域大水害」に起因する復興事業に伴うもので、水は生活に恩恵を与えますが、また時には災害を引き起こすという両面を持ち、改めて自然を考える機会にもなり、このことは、私たちの生活においてこれからの精神的な糧ともなりましょう。

本報告が地域の発展とともに、貴重な歴史の情報として引き継がれ、これから生かされていくことを望んでおります。なお、本調査を実施するにあたり、ご理解とご協力をいただいた地元の皆様並びに関係機関に深く感謝申し上げます。

平成３０年３月３１日

熊本県教育長　宮尾千加子

例　言

1　本書は、熊本県熊本市東区に所在する新南部遺跡群12次調査の報告書である。

2　発掘調査は、熊本県災害対策班及び熊本県土木部の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、同事業部が負担した。

3　遺物の整理は、熊本県文化財資料室で実施した。

4　遺跡の発掘調査は平成28年度に実施し、株式会社アートの補助委託事業である。整理報告作業は平成29年度まで実施した。

5　本書で用いる地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図をもとに作成した。

6　現地での遺構実測・写真撮影は調査員、補助委託業者が実施した。遺物の実測・製図は、春川香子・濱﨑清子・立石美代子・山下義満が主に実施し、一部 株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。遺物洗浄・接合・復元は、熊本県文化財資料室で行った。

遺物の写真撮影は、村田百合子・松本智子・野下智美が行った。

7　本書の執筆は、山下が行った。

8　整理後の資料は熊本県文化財資料室で保管されている。

9　本書の編集は、熊本県教育総務局文化課が行い、春川の援助を得て山下が担当した。

凡　例

1　**方位／座標／標高**　国土座標第Ⅱ系を基準とし、方位もそれに準じた。標高は東京湾平均海水面（Tokyo Peil［T.P.］）による。

2　**遺構名略号**　遺構は、住居・土坑・溝・ピット・集石・不明遺構と区別し、掲載順にS-001から遺構名を付け、調査時の遺構名を（　　）で示し、巻末に一覧表を載せた。図版中のPはピットの略記号である。

3　**遺構図版 縮尺／線種**　縮尺はキャプション及びスケールで図示した。遺構平面図は原則として確定ラインは実線で掲載し、遺構上・下端の推定線は破線で示した。

4　**遺構図版 断面ポイント**　各遺構の平面及び断面図では ― ラインの内側をポイントとしている。

5　**遺物図版 縮尺**　土器は1/3、石器は1/6・2/3・1/2・2/5で掲載し、図中に縮尺を示した。

6　**遺物図版**　外形線、中心線及び区画線は実線、稜線は一点破線または二点破線、推定線は破線で示した。また、須恵器については、断面を塗りつぶした。接合痕跡は、断面の内側に細線を入れている。赤彩、石器の使用痕については、以下の通りである。

赤彩、磨痕、敲打痕

土器の小破片については、断面図の左を内面、右を外面の立面図にしている。

7　**遺物観察表**　すべての実測個体について、遺物観察表を掲載した。

8　**色調**　本書で用いた土壌・胎土色調名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」を用いた。青磁片については、大日本インキ化学工業株式会社発行「中国の伝統色」第2版（1986）を用いた。

本文目次

第 1 章　調査の経過
　第 1 節 調査に至る経緯 …… 1
　第 2 節 調査及び整理の組織 …… 1
　第 3 節 調査と整理の経過 …… 2
第 2 章　新南部遺跡群の位置と環境 …… 3
第 3 章　調査の成果
　第 1 節 調査の方法 …… 9
　第 2 節 基本土層 …… 9
　第 3 節 調査成果 …… 12
第 4 章　遺物 …… 88
第 5 章　総括 …… 104
出土遺物観察表 …… 108
遺構一覧表
写真図版
報告書抄録

図版目次

第１図　白川関連遺跡地図（S=1/50,000）…… 4
第２図　新南部遺跡群周辺地図（S=1/25,000）…… 4
第３図　１工区・２工区遺構配置図 …… 10
第４図　１工区基本土層・２工区トレンチ 101
　　土層断面図 …… 11
第５図　S-001 完掘状況 …… 16
第６図　S-002 完掘状況 …… 17
第７図　S-003 完掘状況及び遺物出土状況 …… 18
第８図　S-001 出土遺物実測図１ …… 19
第９図　S-001 出土遺物実測図２ …… 20
第10図　S-001 出土遺物実測図３ …… 21
第11図　S-002 出土遺物実測図１ …… 22
第12図　S-002 出土遺物実測図２ …… 23
第13図　S-003 出土遺物実測図 …… 24
第14図　S-004 完掘状況・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 25
第15図　S-005 完掘状況 …… 26
第16図　S-005P1 ～ P7 断面図
　　及び上層遺物出土状況 …… 27
第17図　S-005 下層遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 28
第18図　S-005 出土遺物実測図１ …… 29
第19図　S-005 出土遺物実測図２ …… 30
第20図　S-006 床面検出状況及び遺物出土状況 …… 31
第21図　S-007 完掘状況及び出土遺物実測図 …… 32
第22図　S-008 完掘状況・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 33
第23図　S-008 出土遺物実測図１ …… 34
第24図　S-008 出土遺物実測図２ …… 35
第25図　S-009 完掘状況及び遺物出土状況 …… 36
第26図　S-009 出土遺物実測図 …… 37
第27図　S-010 完掘状況・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 38
第28図　S-011 完掘状況 …… 39
第29図　S-011 竈断面図及び遺物出土状況 …… 39
第30図　S-011 出土遺物実測図 …… 40
第31図　S-012 完掘状況・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 41
第32図　S-013 完掘状況 …… 42
第33図　S-013 竈実測図・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 42
第34図　S-013 出土遺物実測図 …… 43
第35図　S-014 完掘状況 …… 44
第36図　S-014 竈実測図・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 44
第37図　S-014 出土遺物実測図１ …… 45
第38図　S-014 出土遺物実測図２ …… 46
第39図　S-015 床面検出状況・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 47
第40図　S-015 完掘状況・遺物出土状況 …… 48
第41図　S-016 床面検出状況・遺物出土状況及び
　　遺物実測図 …… 49
第42図　S-016 出土遺物実測図 …… 50
第43図　S-017 硬化面検出状況・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 51
第44図　S-017 完掘状況及び出土遺物実測図 …… 52
第45図　S-018 床面検出状況・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 53
第46図　S-018 完掘状況・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 54
第47図　S-019 完掘状況及び遺物出土状況 …… 55
第48図　S-019 完掘状況及び出土遺物実測図 …… 56
第49図　S-020 完掘状況・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 57
第50図　S-021 完掘状況・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 58
第51図　S-022 完掘状況及び出土遺物実測図 …… 59
第52図　S-023 完掘状況・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 60
第53図　S-024 完掘状況・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 64
第54図　S-025・S-026 完掘状況・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 65
第55図　S-027・S-028・S-029 完掘状況 …… 66
第56図　S-030・S-031・S-032・S-033 完掘状況 …… 67
第57図　S-034・S-035・S-036・S-037 完掘状況 …… 68
第58図　S-038・S-039・S-040・S-041・S-042・S-043
　　完掘状況及び出土遺物実測図 …… 69
第59図　S-044・S-045・S-046 完掘状況
　　及び出土遺物実測図 …… 70
第60図　S-047 上面・下面遺物出土状況 …… 71
第61図　S-048 遺物出土状況 …… 72
第62図　S-047・S-048 完掘状況
　　及び出土遺物実測図 …… 73
第63図　S-047・S-048 出土遺物実測図１ …… 76
第64図　S-047・S-048 出土遺物実測図２ …… 77
第65図　S-047・S-048 出土遺物実測図３ …… 78
第66図　S-049 完掘状況・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 79
第67図　S-049 出土遺物実測図 …… 80
第68図　S-050 完掘状況・遺物出土状況
　　及び遺物実測図 …… 81
第69図　S-051 完掘状況 …… 82
第70図　S-052・S-053・S-054・S-055・S-056
　　S-057・S-058・S-059 完掘状況
　　及び出土遺物実測図 …… 84
第71図　S-060・S-061・S-062・S-063・S-064
　　完掘状況及び出土遺物実測図 …… 85

第72図　S-065・S-066 完掘状況 …… 87
第73図　出土遺物実測図 1 …… 91
第74図　出土遺物実測図 2 …… 92
第75図　出土遺物実測図 3 …… 93
第76図　出土遺物実測図 4 …… 94
第77図　出土遺物実測図 5 …… 95
第78図　出土遺物実測図 6 …… 96
第79図　出土遺物実測図 7 …… 97
第80図　出土遺物実測図 8 …… 98
第81図　出土遺物実測図 9 …… 99
第82図　出土遺物実測図 10 …… 100
第83図　出土遺物実測図 11 …… 101
第84図　出土遺物実測図 12 …… 102
第85図　出土遺物実測図 13 …… 103
第86図　白川流域時期別遺跡分布図 …… 106

表 目 次

第 1 表　白川関連遺跡周辺遺跡一覧 1 …… 5
第 2 表　白川関連遺跡周辺遺跡一覧 2 …… 6
第 3 表　白川関連遺跡周辺遺跡一覧 3 …… 7
第 4 表　出土遺物観察表 …… 108

写真図版目次

図版 1　1 工区全景　東→ …… 119
　　2 工区全景
図版 2　S-005 完掘状況　西→ …… 120
　　S-008 遺物出土状況　南西→
　　S-010 完掘状況　北西→
図版 3　S-013 竈部分検出状況　東→ …… 121
　　S-015 完掘状況　南西→
　　S-016 遺物出土状況　南西→
図版 4　S-022 完掘状況　北東→ …… 122
　　S-017 遺物出土状況　北西→
　　S-018 遺物出土状況　南西→
図版 5　S-047 遺物出土状況　西→ …… 123
　　S-027 完掘状況　北西→
　　S-063 耳環出土状況　南東→
図版 6　出土遺物（1～8） …… 124
図版 7　出土遺物（9・12・16・18～20・25・35） …… 125
図版 8　出土遺物（36・39・41～43・47・48・53） …… 126
図版 9　出土遺物（54・57・58・60・65・66
　　70・74～76） …… 127
図版10　出土遺物（79～91） …… 128
図版11　出土遺物（92～95・105～108） …… 129
図版12　出土遺物（109・111・113～118） …… 130
図版13　出土遺物（119～126） …… 131
図版14　出土遺物（127～134） …… 132
図版15　出土遺物（135～142） …… 133
図版16　出土遺物（143～150） …… 134
図版17　出土遺物（151～158） …… 135
図版18　出土遺物（159～166） …… 136
図版19　出土遺物（167～174） …… 137
図版20　出土遺物（175～179・181） …… 138
図版21　出土遺物（30・103・104・112・196
　　199・204・224） …… 139
図版22　出土遺物（188～195・197・198
　　200～203・205～208） …… 140
図版23　出土遺物（23・28・56・63・67・96
　　98・101・102・110
　　209～212・214・218） …… 141
図版24　出土遺物（15・17・59・64・77
　　100・221・222） …… 142
図版25　出土遺物（13・14・69・180・184～187
　　225～228） …… 143

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

調査の原因は平成 24 年 7 月 12 日に発生した熊本広域大水害の復興事業によるものであり、詳細な経緯は、「新南部遺跡群（10 次・11 次）吉原遺跡－白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－」（熊本県文化財調査報告 第 320 集 2016）を参照されたい。

今回報告する新南部遺跡群については、平成 26 年 8 月 27 日の試掘・確認調査を皮切りに平成 26 年 8 月 27 日、10 月 20 日の計 3 回の試掘・確認調査を実施している。その結果、今回の調査区内において、弥生、古代の遺物の存在を確認した。この調査結果について平成 27 年 11 月 2 日付け教文第 1521 号で熊本土木事務所に通知した。

その後、平成 27 年 5 月 27 日付け央土災対 12 号の熊本県知事名で文化財保護法第 94 条第 1 項の通知が熊本市教育委員会に提出され、平成 27 年 5 月 28 日付け文振発 000370 号で熊本市教育長から熊本県教育長あて進達された。工事内容と試掘・確認調査の結果を照らし合わせた結果、発掘調査が必要と判断した。「発掘調査」の指示を教文第 2530 号で熊本市教育長、熊本県知事あて通知した。

第２節　調査及び整理の組織

調査及び整理は下記の組織で行った（所属等は調査当時のものである）。

１　発掘調査の組織（平成 28 年度）

調査責任者　平井 貴（文化課長）
村﨑孝宏（課長補佐）
調査総括　岡本真也（主幹兼文化財調査第 2 係長）
調査事務局　左座 守（主幹兼総務文化係長）　稲本尚子（参事）　天草英子（主任主事）
試掘担当　古城史雄（主幹）　廣田静学（主幹）
調査担当　1 工区 山下義満（参事）　中野幸太郎（文化財保護主事）　2 工区 中村幸弘（参事）
調査受託業者　株式会社 アート（調査補助委託業務）
調査作業員
上村久子　緒方久美子　清田博文　斎藤敏哉　斎藤 稔　佐藤幸也　鈴木典子　武内雅成
田中鳴海　谷川 清　塚本 勇　辻崎秀幸　永田宗一　西岡春代　西坂章宏　西山雅廣　濱村經也
早田咲百合　東 康晴　平野浩治　藤本浩樹　松井昭子　松浦 守　松崎仁美　松本博樹　松山誠一
溝口彩日　村口康弘　村山國誠　森　直人　森川 護　森川征子　森田幸雄　吉田熊一　吉村 力
渡辺由佳里

２　整理の組織

整理責任者　岡村郷司（文化課長）
村﨑孝宏（課長補佐）
整理総括　岡本真也（主幹兼文化財調査第 2 係長）
整理事務局　左座 守（主幹兼総務文化係長）　稲本尚子（参事）　竹馬牧子（主事）
整理担当　山下義満（参事）　春川香子（臨時整理補助員）
整理作業員
笹原英子　重永照代　立石美代子　田中洋子　中尾規子　中島幸子　二田美記子　濵﨑清子
久野成實　松本加代子　柳瀬英一郎

第３節　調査と整理の経過

１　調査の経過

平成 28 年 8 月 18 日から実施した。本調査が 1・2 工区と着手時期に分かれているのは本体工事の関係によるものであるが、調査開始まで試掘データを基に表土剥ぎを 1・2 工区まで終了させ、調査開始後、間を置かずに標準的グリットを設定した。1 工区調査は平成 28 年 8 月 16 日から平成 28 年 10 月 17 日までの約 3 カ月、2 工区は平成 28 年 11 月 1 日から平成 29 年 2 月 23 日までの約 4 カ月である。

以下は調査日誌から抜粋する。

平成 28 年 8 月 18 日作業員説明会後 調査区清掃、精査開始。毎朝 調査開始時は「今日の安全目標」を定め、安全に対し意識付けを行った。本体工事に伴い南側は 1 割・北側は 2 割勾配の傾斜を求められ、以後、これに従う。調査開始時期、この時点で弥生土器・土師器・須恵器・近世磁器・黒曜石片が出土。9 月 1 日 台風 13 号接近のためブレハブ、現場の養生を行う。

9 月 5 日　これまで表土剥ぎの面（基本土層第③層）で精査後検出を行った。当初、調査区東側の遺構確認は困難のため、手掘りにより掘削を開始し基本土層第③層での検出を試みる。9 月 9 日　東側は、掘削後切り合いの住居地プランを検出した。切り合い不明のためサブトレンチを設定し、新旧関係を把握し掘削を行い、弥生中期（黒髪式）の住居地と判断した。また調査区北側には粘土面が数ヵ所検出されたため、竈と想定し周囲を精査すると方形プランが検出された。この頃（9 月中旬）から遺構の検出が顕著になる。

10 月 6 日　S-063 のピット状の掘り込み下層から耳環が出土した（第 71 図）。この希少な装飾品に作業員一同色めきだった。またこの 1 工区で確認される粘土面は住居に伴う竈で時期は 8 世紀頃と推定した。調査の終盤に入り、大型の溝状遺構（S-047）が検出され、この遺構には夥しい遺物が廃棄されていたため、この記録に時間を要した。10 月 13 日は近隣の公園に野外学習中の熊本市立西原小学校 2 年生児童に遺跡説明を行う。10 月 15 日全景写真撮影を行い 1 工区は終了した。

2 工区は 11 月 1 日より開始。清掃から行ったが調査区には後世の撹乱も多く、これを取り除く作業に時間を費やした。11 月中旬　住居と想定される遺構が検出され始め、また清掃時の遺物も 1 工区と差異がないため、2 工区は 1 工区の連続性と思われる。また一部、土層確認のため包含層掘削を行ったところ調査区南端下層より縄文後晩期の土器が出土した。以後、この時期の遺構検出に努めたが困難を極める。

遺構検出面は基本土層の第③層で、弥生、古代が重複しているため、新旧関係を明確に確認した後、検出に努める。また調査区全体を精査の結果、北側は川砂の埋土層であり遺構は残存していないようである。

12 月に入り、住居地を中心に遺構検出に入り、7 基の住居プランを確認した。プラン確認後は掘削に入る。12 月 8 日　調査区東側の精査後、大型の円形プラン（S-005）を確認。この遺構の掘削に入る。

平成 29 年に入り、掘削を終えた遺構の記録に入りながら他の遺構検出に努め、調査は目的に応じ分散化する。1 月 23 日　調査区内を横断していた工事用道路が取り除かれ、この未調査区域の調査に入り、これにより全面調査になる。2 月の後半に調査は終了予定としているため、記録化の作業が中心になる。2 月 8 日天候曇り　実機による空撮を行う。後半は天候にも恵まれ記録化も順調に進み、2 月 23 日をもって調査は終了した。

2　整理の経過

整理は平成29年4月16日より1工区の整理作業を開始した。1次整理として、まず遺物の洗浄から注記までをセットとし、次に遺物の接合及び石膏入れを行い、この作業が終了後、遺物の選別を行った。

2次整理作業の主な業務は、図面の検討から行い、製図作業に移っていった。また製図作業と並行して遺物の実測図を作成していった。また実測の一部は委託業務とした。これらの作業が終了後、遺物写真撮影を行った。

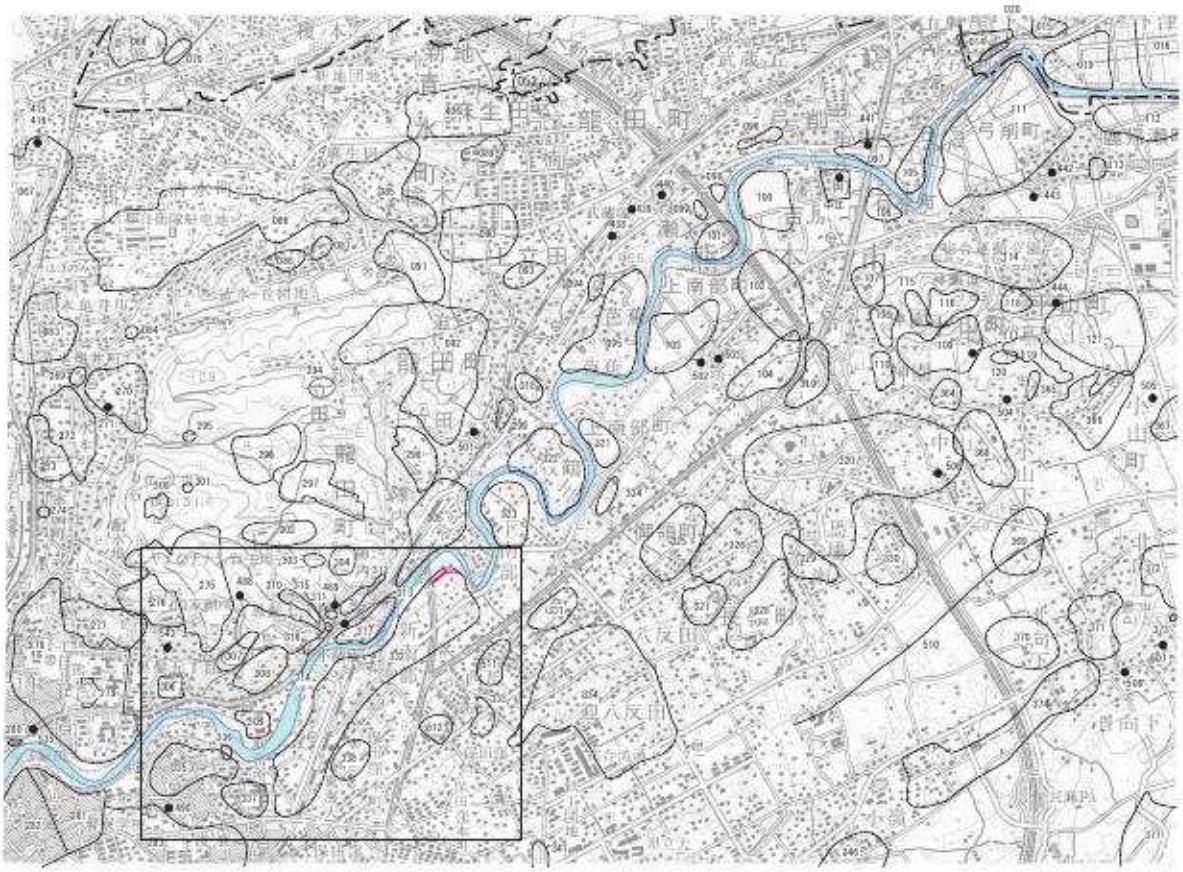
第2章　新南部遺跡群の位置と環境

遺跡の所在する熊本市東部の白川流域の地理的環境、歴史的環境については、「新南部遺跡群（10次・11次）吉原遺跡－白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－」（熊本県文化財調査報告第320集　2016）10頁～12頁に記載されているので、ここでは新南部遺跡群の立地を中心として記述する。

熊本市東部の東区新南部に所在する新南部遺跡群は、一級河川「白川」に沿う遺跡でこの「白川」は阿蘇カルデラを源流とし、西南西にむかって貫流し、大きく蛇行を繰り返しながら有明海に注ぐ。その中途箇所に新南部遺跡群が存在する。広域の新南部に広がるこの遺跡群は昭和25年に発見され、縄文後晩期（御領式・北久根山式・太郎迫式）を中心とする遺跡として「新南部遺跡A地点」として周知される。後年、近隣に発見される北久根山遺跡もこの新南部遺跡群（43-201-332）に包括され、広大な範囲の遺跡となる。

遺跡の周囲は同事業で調査を行った下南部遺跡群（熊本県文化財調査報告第325集　2016）、近年、平成25年に熊本県が調査を行った新南部遺跡群（10次・11次）、吉原遺跡（43-201-100）（熊本県文化財調査報告第320集　2016）も弥生中期を中心とした遺跡である。このことからも白川流域の新南部遺跡群近隣には本遺跡と同様の性格を持つものも多い。

白川を挟み北側には立田山を含む丘陵地帯が東西に延び黒石原台地の一端を成し、南には託麻三山と称される小丘陵を含む託麻台地がほぼ東西に広がりを見せている。遺跡は白川が北に大きく蛇行して作る突出部の標高25ｍの丘陵低地に占有する。



第１図　白川関連遺跡地図　S=1/50,000

第２図　新南部遺跡群周辺地図　S=1/25,000

（遺跡番号は旧番号で表示した）

熊本県（43）熊本市（201）

旧番号	現番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
067	407	清水町遺跡群	清水町山室など	縄文～古墳	包蔵地			楢山要楯群、山室要楯・土師器、八景水谷縄文前後晩・要楯
082	370	羽田	鶴羽田町	古代・中世	包蔵地		飛田眼鏡橋	
083	409	亀井遺跡群	清水町亀井	縄文～中世	包蔵地		亀井遺跡・亀井城跡・亀井金剛院跡・亀井松山墓地・亀井薬師堂前板碑	城は現光照寺内、板碑天文2年銘
084	401	万石昭和団地前	清水町万石	縄～中世	包蔵地			
085	380	楢木	清水町楢の木	縄文・弥生	包蔵地			縄文早・前・後・晩、要楯群
086	384	岩倉山中腹	清水町兎谷	縄～中世	包蔵地			
087	385	岩倉山山頂	清水町兎谷	縄～中世	包蔵地			
088	386	岩倉山	清水町兎谷	旧～中世	包蔵地			
089	379	楠	龍田町	縄～中世	包蔵地			
090	381	堂ノ前遺跡群	清水町楢木・堂の前	旧～中世	包蔵地		堂の前遺跡・一丁霍遺跡	
091	383	庵ノ前	清水町兎谷・上龍田	旧石器・弥生	包蔵地			早期住居跡2基・要楯墓群、県報告書あり
092	389	迫ノ上遺跡群	龍田町藤内など	縄文～平安	包蔵地		迫ノ上要楯群・緑が丘遺跡・緑ヶ山ノ神遺跡・堂ノ前屋敷墓跡・長蓮寺墓跡	堂の前墓跡は平安期か？
093	382	巻町鶴	清水町楢木一町鶴	縄～中世	包蔵地			
094	387	吉ノ平	龍田町上立田	縄～中世	包蔵地			
095	388	竹ノ後・芭蕉遺跡群	竜田町上立田竹の後	縄文～平安	包蔵地		竹ノ後遺跡・竹ノ後要楯群・芭蕉遺跡	竹の後縄文後期土器・合口要楯・土偶
096	375	弓削小坂横穴群	龍田町弓削小坂屋敷	古墳	古墳			50基以上
097	374	弓削前畑	龍田町弓削小坂屋敷	縄～中世	包蔵地			
098	376	弓削平ノ下A	龍田町弓削平の下	縄～中世	包蔵地			
099	377	弓削平ノ下B	龍田町弓削平の下	縄～中世	包蔵地			
100	680	吉原	吉原町殿田	縄文～平安	包蔵地			縄文後晩期（南福寺・中津）、弥生後期、奈良平安在銘土器
101	378	片座瀬	龍田町弓削片座瀬	縄文	包蔵地			
102	684	北上遺跡群	石原町平	縄文・古代	包蔵地		北上遺跡・北上B遺跡	縄文晩期土器、布目瓦
103	685	上南部	上南部町村下	縄文	包蔵地			縄文前期・後期・晩期・後晩期集落発掘調査、市報告書あり
104	686	供合松ノ上	上南部町	縄～中世	包蔵地			
105	373	法王鶴	龍田町	縄文・弥生	包蔵地			
106	681	石原町	石原町	縄～中世	包蔵地			
107	693	石原瀬々井	石原町瀬々井	縄文	包蔵地			縄文晩期
108	688	神園桜井	長嶺町	縄～中世	包蔵地			
109	695	神園山遺跡群	長嶺町、小山町	奈良・平安	包蔵地		神園山窯跡群・中山窯跡群・西福寺跡・西福寺墓地・花園元禄（14年）板碑	
110	694	神園田渕屋敷	小山町、長嶺町	平安・中世	包蔵地		太神宮碑・？田川観世音寺跡	
111	677	託麻弓削遺跡群	弓削町	縄文	包蔵地		弓削上古閑遺跡・弓削宮原遺跡	縄文前期・後期・晩期
112	678	鹿帰瀬	鹿帰瀬町西原	縄文・弥生	包蔵地		鹿帰瀬河原遺跡	県調査あり
113	679	弓削廃寺跡	龍田町弓削	中世	寺社			
114	682	山尻遺跡群	龍田町弓削山尻	弥生	包蔵地		山尻遺跡・石原竜ノ甲遺跡・下南部地蔵墓碑	弥生時代を中心とした大集落
115	689	神園山西麓	長嶺町下の山	古代	包蔵地			
116	690	神園山城跡	長嶺町下の山	中世	城			
117	696	正平塔（石燈籠）	小山町	中世	石造物	市		国訪神社、正平12年銘、凝灰岩製、石工藤原助次
118	691	平山居屋敷	平山町	古代・中世	包蔵地			
119	697	小山城跡	小山町	中世	城			
120	698	小山上の山	小山町	縄～中世	包蔵地			
121	692	平山石ノ本	平山町	旧石器～縄文	集落			国体会場、県調査報告書あり
269	406	古閑前	清水町亀井	縄文～中世	包蔵地			旧石器
270	402	清水町谷口	清水町万石	旧石器～平安	包蔵地		万石遺跡	県調査あり
271	402	万石塚坊主古墳群	清水町大字万石	古墳	古墳			2基円墳
272	442	松崎遺跡群	清水町松崎	弥生～平安	包蔵地		松崎要楯遺跡・松崎中世遺跡・松崎菖山天神跡	
273	443	松崎八幡箱式石棺	清水町松崎字上屋敷	古墳	埋葬		松崎石棺	
274	444	室園	清水町室園	縄文～中世	包蔵地			
275	592	黒髪町下立田遺跡群	黒髪町	古墳～江戸	包蔵地		白石古墳・白石遺跡・立田南中腹遺跡・城床古墳群・豊国廟跡	
276	593	泰勝寺細川家墓所・庭園	黒髪4丁目	江戸	寺社	国	泰勝寺墓地古塔碑群・六地蔵	細川家霊廟は国指定の史跡、寺跡を含む庭園は県指定
277	595	小峰	黒髪町小峰	縄文～平安	包蔵地		金光山無相寺跡	
278	597	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	包蔵地		黒髪町遺跡（済々黌高校敷地）・九州女学院遺跡・坪井古屋敷出土の要楯	一基に要楯墓群
279	598	旧第五高等中学校本館・化学実験場・表門	黒髪2丁目	明治	建造物	国		国指定重要文化財、イギリスのフィーン・アン様式

第1表　白川関連遺跡一覧 1

旧番号	現番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
280	603	子飼	子飼町	縄文～中世	包蔵地			
281	646	大江白川	大江１丁目	縄文～平安	包蔵地		旧往生院跡・善行寺の板碑・放牛地蔵	甕棺
282	647	新屋敷	新屋敷町	弥生～中世	包蔵地			弥生環濠、弥生前期土器、輸入陶磁器
283	648	大江遺跡群	大江３丁目	縄文～明治	包蔵地		大江遺跡・大江青葉遺跡・大江東原遺跡・白川中学校校庭遺跡・渡鹿旧電電波高校遺跡・熊高敷地遺跡・熊高通り遺跡・杉ノ本遺跡・託麻郡家推定地・渡鹿廃寺・熊本英学校跡・建設会館遺跡他	
284	649	大江義塾跡（旧徳富邸）	大江４丁目	明治	建造物	県		大江義塾：県指定史跡、徳富旧邸：市指定史跡
294	395	天祥山	清水町権木	旧石器～弥生	包蔵地			石槍、須玖式甕棺群
295	403	万石乗越	清水町万石	縄～古代	包蔵地			
296	404	万石茶山	清水町万石	縄文・弥生	包蔵地			夜臼式土器
297	397	秋野	龍田町上立田	縄文～平安	包蔵地			
298	393	陳内上ノ園遺跡群	龍田町上立田	縄文～古墳	包蔵地		上ノ園Ａ・Ｂ遺跡・竜田陳内館跡	御手洗Ａ式、押型文、須玖式甕棺、方形周溝墓
299	391	三の宮（牧鶴宮脇）	龍田町上立田	縄文	包蔵地			
300	405	立田山山頂	黒髪町	古墳～平安	包蔵地			
301	396	万石茶山古墳	清水町万石（通称）茶山	古墳	古墳			横穴式石室
302	588	立田山東中腹	黒髪町	古代・中世	包蔵地			
303	589	宇留毛浦山市営墓地	黒髪町７丁目	縄文～平安	墓地			
304	398	九女グランド	黒髪町		包蔵地			
305	394	竜田陳内遺跡群	龍田町陳内	旧石器～中世	包蔵地		竜田陳内遺跡・陳内宮の前遺跡	曽畑式土器、県報告あり
306	604	桜山中学校校庭	黒髪町５丁目	古墳～平安	包蔵地		下立田一里木	
307	609	カブト山	黒髪町字留毛字甲山	縄文	包蔵地			早期、轟Ｂ、北久根山、黒川、山の寺
308	610	宇留毛Ａ	黒髪町６丁目	縄文	包蔵地			
309	611	宇留毛Ｂ	黒髪町６丁目	縄文～平安	包蔵地			
310	590	浦山第２横穴群	黒髪７丁目浦山	古墳	古墳	県		
311	591	浦山第１横穴群	黒髪７丁目浦山	古墳	古墳	県		18基
312	399	女瀬平横穴群	竜田町陳内女瀬平	古墳	古墳		長薫寺横穴群を含む	
313	605	長薫寺古墳	黒髪町７丁目	古墳	古墳			円墳横穴式石室
314	606	宇留毛小磧橋際横穴群	黒髪町７丁目	古墳	古墳			
315	607	つつじヶ丘横穴群	黒髪町７丁目	古墳	古墳	県		
316	608	宇留毛神社周辺遺跡群	黒髪町6-8丁目	古墳・中世	包蔵地		宇留毛神社境内古墳群・立田山南古墳（上・下）・宇留毛浦山火葬墓・立田山城跡	立田山南麓古墳円墳２基横穴式石室
317	400	竜田口	龍田町女瀬、黒髪７丁目	縄文～平安	包蔵地			
318	390	堂前畠	龍田町	縄文～平安	包蔵地			
319	687	神園	長嶺町上西原	縄文～平安	包蔵地			
320	706	長嶺遺跡群	長嶺町	縄文～平安	包蔵地		長嶺遺跡・中山叶遺跡・中山五輪塔遺跡（若殿塚遺跡）・馬場居屋敷遺跡・長嶺南遺跡・坂田長者屋敷跡・長嶺石神碑・坂田家墓地	石神碑天文18年銘
321	707	王田	上南部町王田	縄文～平安	包蔵地			黒髪式合口甕棺
322	392	牧鶴遺跡群	龍田町上立田	古墳	包蔵地		牧鶴古墳・西牧鶴箱式石棺群・中牧鶴箱式石棺群	
323	709	下南部	下南部町下山	縄文～古墳	包蔵地			須玖式甕棺
324	708	平ノ山	上南部町		包蔵地			
325	710	北小迫	御領町		包蔵地			
326	711	南小迫	御領町	縄文～平安	包蔵地			
327	724	八反田居屋敷	長嶺町		包蔵地			
328	723	八反田遺跡群	長嶺町八反田	縄文・中世	包蔵地		殿山古墳参考地	縄文後晩期、土偶
329	712	長嶺南	長嶺町南居屋敷	弥生・中世	包蔵地		長嶺広福寺跡・長嶺南遺跡・長嶺共有墓地	須玖式甕棺、寛文・延宝・元禄・正徳の記念碑銘
330	713	長嶺油出	長嶺町		包蔵地			
331	725	松の窪			包蔵地			
332	726	新南部遺跡群	新南部町	旧石器～平安	包蔵地		新南部Ａ～Ｄ遺跡・北久根山遺跡・西谷遺跡・小関原遺跡・小関小松山甕棺遺跡・新南部三石遺跡	県北バイパス調査、市マンション調査、田辺昭三調査などあり
333	929	南原			包蔵地			
334	728	乾原・迎八反田	長嶺町乾原・迎八反田	縄文～平安	包蔵地		乾原迎・八反田遺跡・田の迎遺跡	乾原縄文後晩期中心、迎八反田縄文早期中心
335	643	渡鹿遺跡群	渡鹿５丁目	縄文・弥生	包蔵地		渡鹿貝塚・北原甕棺遺跡	渡鹿貝塚阿高・鐘ヶ崎式、北原須玖式甕棺、板碑釈迦像天文16年銘
336	644	渡鹿菅原神社境内	渡鹿６丁目		寺社	市		市指定史跡
337	645	辻	渡鹿７丁目	縄文～平安	包蔵地			縄文後晩期、へら描き土器・墨書土器
338	731	新南部西原	新南部町	縄文～平安	集落		保田窪地蔵碑	
341	654	保田窪東一本松		縄文～平安	包蔵地			
346	733	小嶺	健軍町小峰	縄文～平安	包蔵地			
364	704	中山	小山町	縄文～平安	包蔵地			
365	703	桜（梅）谷寺瓦窯跡群	小山町	奈良・平安	生産		小山瓦窯跡群	バイコクジ
366	702	小山上	小山町	弥生	包蔵地			
367	701	御船塚	小山町御船塚	縄文・中世	包蔵地			

第２表　白川関連遺跡一覧 2

熊本県（43）熊本市（201）

旧番号	現番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
368	705	小山山伏塚	小山町	弥生	墳墓		馬場氏裏山板碑	豊福墓、銅剣出土
369	714	上黒迫	戸島町	縄文・中世	包蔵地			二岡中学校校庭
370	718	戸島京塚	戸島町	縄文～中世	包蔵地			
371	717	戸島北向（戸島西）	戸島町	縄文・中世	包蔵地		札の辻遺跡・戸島香福寺跡・戸島神社境内古塔碑群	
372	715	戸島東	戸島町日向	縄文	包蔵地			
373	716	戸島経塚跡	戸島町日向	縄文・中世	包蔵地			経塚一字一石埋納
374	721	葉山遺跡群	戸島町葉山	旧石器・縄文	包蔵地		葉山遺跡・葉山B遺跡・日向下六地蔵	
377	732	日向桟敷尾	戸島町日向	縄文	包蔵地		日向遺跡	
406	372	麻生田	麻生田町	縄文～平安	包蔵地			
415	-	須屋開観音堂板碑	清水町八景水谷	中世	石造物			
416	-	八景水谷塔の本五輪残欠	清水町八景水谷	中世	石造物			
438	-	二里木跡	龍田町上立田	近世	交通			
439	-	武蔵塚	龍田町弓削	近世	墓			宮本武蔵墓正保２年
440	-	セボンサン	龍田町弓削	中世	墳墓			経文ある小石出土
441	-	弓削寺跡	龍田町弓削	中世	寺社			五輪塔
442	-	弓削薬師堂板碑	弓削町	中世	石造物			大永６年銘線刻仏像
443	-	弓削山伏塚板碑	弓削町	中世	石造物			天文17年銘人骨出土
444	-	菊池家墓地	平山町	中世	墓地			宝篋印塔，元亀２年銘
488	-	狐穴古墳参考地	黒髪町下立田	古墳	古墳			
489	-	宇留毛城床古墳	黒髪町宇留毛城床	古墳	古墳			石材各所に散乱
490	-	浪底板碑	大江浪底	中世	石造物			釈迦座像，天文16年
501	-	伝立田将監墓・古塔碑群	龍田町上立田	中世	石造物			五輪塔
502	-	乙姫宮	上南部町	中世	寺社			
503	-	上南部板碑	上南部町	中世	石造物			元亀２年供養
504	-	模国寺境内古塔碑群	小山町	中世	石造物			宝篋印塔，一字一石，五輪塔
505	-	御船塚墓地群	小山町	中世	墓地			
506	-	中山畜犬管理所五輪塔	小山町	中世	石造物			同所出土
507	793	円通寺跡	戸島町	中世	寺社			地蔵堂，観音堂，塔碑
508	-	戸島神社入口古塔碑群	戸島町	中世	石造物			宝篋印塔，五輪塔
510	-	南郷往還跡	長嶺町，戸島町	近世	交通			
511	727	市営託麻団地	新南部託麻団地	縄文	包蔵地			押型文，御領式
512	730	西原	新南部	縄文	包蔵地			押型文
535	-	一夜塘	小幡町	近世	建造物			
543	-	常楽寺	黒髪町　下立田・小峰	中世	寺社			
	924	中江	中江町		包蔵地			

熊本県（43）西合志町（407）

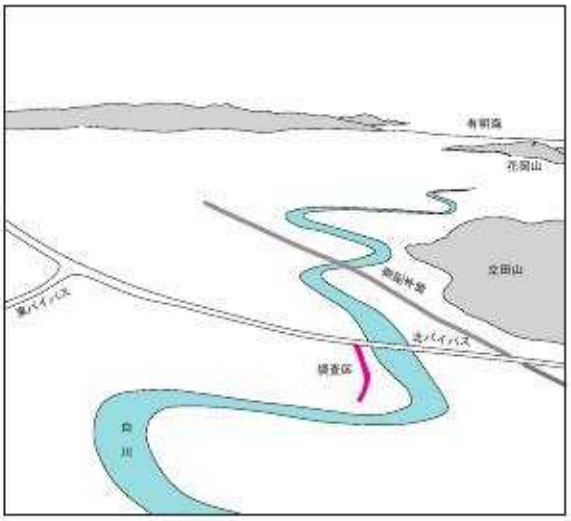
現番号	新番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
066		須屋城跡	須屋　城跡	中世	城			中世城跡
070		船入	須屋	中世	包蔵地			

熊本県（43）菊陽町（404）

現番号	新番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	旧遺跡名	備考
014		今石	津久礼　今石	縄文～中世	包蔵地			
015		津久礼今石城跡	津久礼　今石	中世	城	町		
016		津久礼六地蔵	津久礼　梅木	縄文・弥生	石造物	町		
019		梅ノ木	津久礼　梅の木	弥生	包蔵地			
020		今石横穴群	津久礼　今石	古墳	古墳	町		９基
052		杉ノ木	津久礼	縄文	包蔵地			

第３表　白川関連遺跡一覧 3

白川流域　東 → 西



第３章　調査の成果

第１節　調査の方法

(1)　調査の方法

本遺跡は調査期間も調査員も異なるが、連続した調査区のため調査期間の前半を１工区、後半を２工区と調査区を設定した。調査前に重機による表土剥ぎを先行し、これを完了すると標準的グリットを設定した。これは一辺５ｍの正方形のグリットを平面直角座標系に合わせ、各グリットの中心からみて北東側のＸ軸、Ｙ軸の交点の数値をＸ座標の百の位と十の位、続いてＹ座標の百の位と十の位を並べて表示し、そのグリットの正式名称としたが、調査時は簡素化の意でＸ軸にアルファベット Ｙ軸にアラビア数字を用い調査に活用した（第３図）。次いで人力による遺構確認のための清掃作業、遺構検出、遺構掘削という手順で調査を進めた。その間に随時、土層断面図・遺構配置図・遺構実測図の作成や写真撮影を行った。

(2)　整理の方法

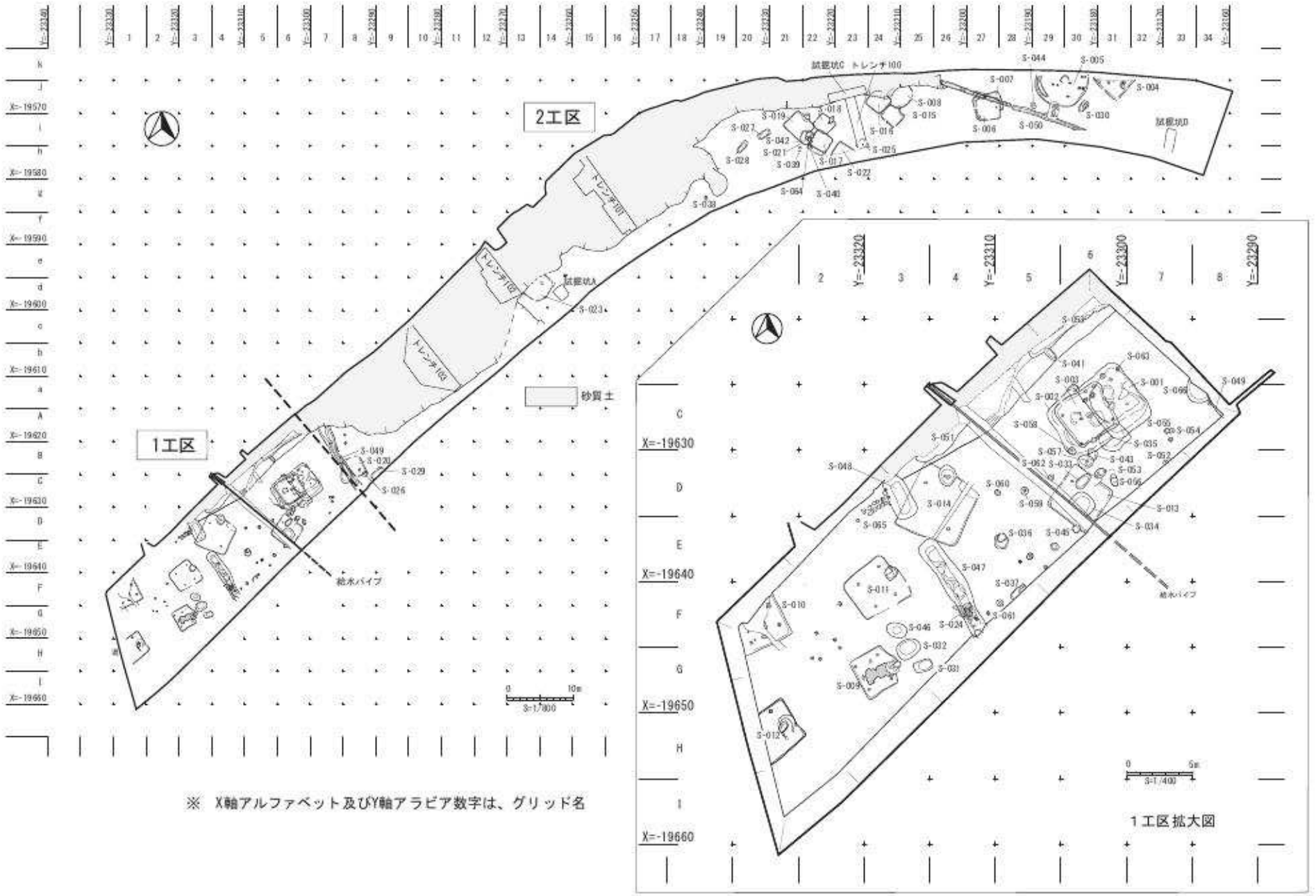
検出の遺構にはＳ番をつけた番号で表示（S-001 等）し、これを番号順で設定したが現場判断でも苦慮した遺構は整理時に再検討後、整理担当者が判断し遺構でないものは削除した。本報告書ではすべてＳ番で表記したが、住居状遺構・土坑・溝・ピット・集石・不明遺構等に大別しこの内容で掲載した。ピットについてはすべてＳ番をつけたが掘立柱建物や柱列以外の連立が認められないものについては除外し遺構配置図（第３図）にのみ掲載している。

遺物については遺構出土の遺物を優先して選出し、遺構図とともに掲載した。一方、包含層等出土の遺物は時代とその性格ごとに配列した。

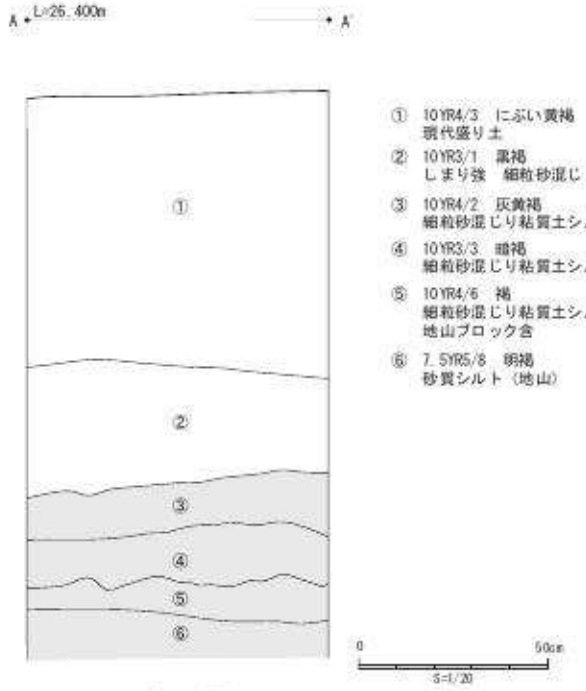
第２節　基本土層

本遺跡は白川に近接し、昭和 28 年６月 26 日の大水害、そして平成 24 年７月に発生した白川激甚災害と近年でも大水害の被害を受けた地域である。白川が古代も位置を変化していない可能性を示唆するのは、本遺跡の砂層土の堆積状況である。このことからこの地域は氾濫を繰り返し堆積した土層で一様でなく数メートル離れるとその様相は変化している。したがって基本土層の明確化が困難であったが、予備調査時のトレンチ土層を参考にほぼ全域に共通する土層模式図を作成した。これをもって基本土層とした。

① 層　耕作土 現在の耕作土
　10YR4/3 にぶい黄褐色土
② 層　遺構検出層１　しまり強く、細粒砂混じる粘質土
　10YR3/1 黒褐色土
③ 層　遺構検出層２ 細粒砂混じる粘質土シルト しまり中
　10YR4/2 灰黄褐色土
④ 層　細粒砂混じる粘質土シルト しまり中
　10YR3/3 暗褐色土
⑤ 層　細粒砂混じる粘質土シルト しまり中 無遺物層
　10YR4/6 褐色土
⑥ 層　砂質シルト無遺物層
　7.5YR5/8 明褐色土



第３図　1工区・2工区遺構配置図



A－A' 土層図

① 10YR4/3 にぶい黄褐
現代盛り土

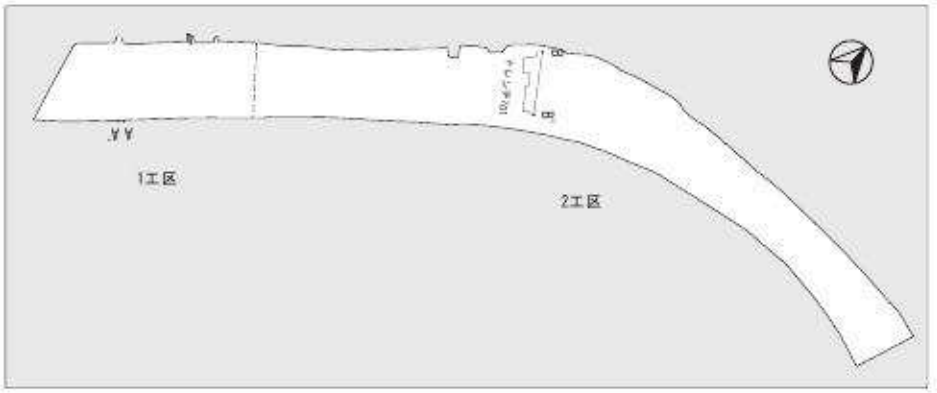
② 10YR3/1 黒褐
しまり強 細粒砂混じり粘質土（川砂含）

③ 10YR4/2 灰黄褐
細粒砂混じり粘質土シルト しまり中

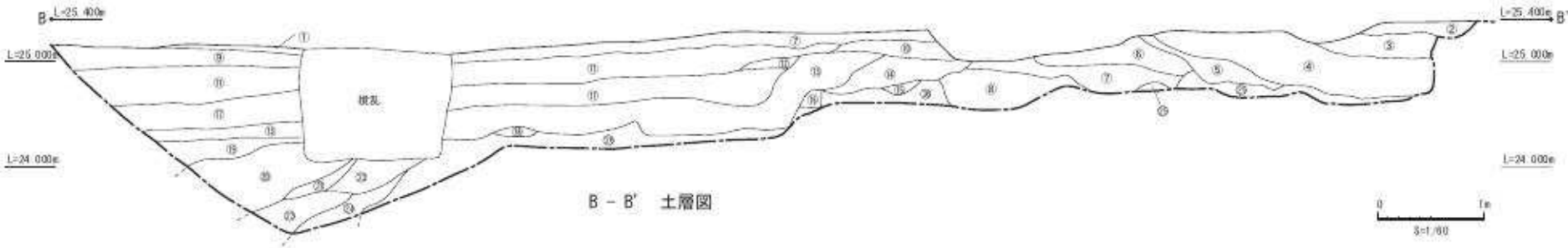
④ 10YR3/3 暗褐
細粒砂混じり粘質土シルト しまり中

⑤ 10YR4/6 褐
細粒砂混じり粘質土シルト しまり中
地山ブロック含

⑥ 7.5YR5/8 明褐
砂質シルト（地山）



① 10YR4/4褐 粘土質シルト しまり中
② 10YR4/3にぶい黄褐 粘土質シルト しまり弱（地山ブロック含む）
③ 10YR3/3暗褐 細粒砂～粗粒砂混じり粘土質シルト しまり中
④ 10YR3/3暗褐 粗粒砂混じり粘土質シルト（部分的に地山ブロックが見られる
⑤ 10YR3/3暗褐 粘土質シルト（全体的に地山ブロックが見られる）
⑥ 10YR2/2黒褐 シルト質粘土 しまり中
⑦ ⑤と同じ
⑧ 10YR3/3暗褐 粘土質シルト しまり弱（地山ブロックが見られる）
⑨ 10YR4/3にぶい黄褐 シルト質粘土 しまり強
⑩ 10YR3/3暗褐 粗粒砂混じり粘土質シルト
⑪ 2.5Y5/2暗灰黄 細粒砂～中粒砂 しまり弱
⑫ 10YR3/3暗褐 シルト質粘土 しまり中
⑬ 10YR3/3暗褐 粘土質シルト（底部付近に地山ブロックが見られる）
⑭ 10YR3/4暗褐 粘土質シルト
⑮ ⑭と同じ（砂岩含む）
⑯ ⑤と同じ
⑰ 10YR5/2灰黄褐 細粒砂～礫（1cm～8cm程度の礫と20cm程度の礫が見られる）川の氾濫などによって堆積した層だと思われる
⑱ 10YR4/4褐 細粒砂混じり粘土質シルト
⑲ 10YR4/3にぶい黄褐 粘土質シルト しまり中
⑳ 10YR4/3にぶい黄褐 細粒砂
㉑ 10YR3/2黒褐 シルト質粘土 しまり中（粘質性が強い）
㉒ 10YR3/3暗褐 シルト質粘土 しまり中（粘質性が強い）
㉓ 10YR4/3にぶい黄褐 しまり弱 極細粒砂～細粒砂部分的に10YR5/1褐灰
㉔ 22と同じ 砂岩含む
㉕ 10YR5/8黄褐 砂質シルト（地山）
㉖ 7.5YR4/4褐 砂質シルト 硬質砂岩含む しまり弱（地山）



B－B' 土層図

第４図 1工区基本土層・2工区トレンチ101土層断面図

また遺跡の土層図として第4図を提示。これは基本土層として、後世の河川侵食を受けていないA-A´を提示した。これが従って前述した基本土層図となる。B-B´の土層状況は複雑に堆積し氾濫堆積を提示する。これも本遺跡土層の参考とするため掲載した。本遺跡の層位は概観すると全体が砂質土でありこれは近接する白川の堆積によるものであり、上層には北西側に一部水平堆積が見られるが、全体が砂質土シルト層で、これは河川による氾濫、削平によるものであろう。従ってこの本調査区は古来から白川の恩恵と災害の両面を持つことを窺い知る。

第3節　調査成果

遺構（住居）

（弥生）

S-001（S-008　第5・8～10図）

1工区西側にあたるB-6、C-6グリッドにおいて検出した。主軸はN-48°-W、長軸5.1m 短軸3.8mでやや長方形を呈する。S-002と重複している。検出はサブトレンチを十字状に設定し掘削を行い、0.2m程掘削を行うと貼床部分を確認した。さらに掘り進めると住居形成時の掘り込みも確認された。従って住居形成は掘り込み後、居住区確保のため貼床を施したのであろう。しかし本来の生活面であるこの貼床上部には明確な硬化面は検出されなかった。これは住居使用期間の問題もあるが、貼床形成土が砂質シルト土で硬化しにくいという土質にもよるものであろう。遺構南東側には幅0.6mの高まりがあり、ベット状遺構の呈を成す。ピットは4基確認され検出面と四方の規則性から柱痕跡であろう。また中央には土坑状の掘り込みが検出され、その埋土は炭化物を含んでいるためこれは炉跡と推定される。また一部であるが土坑周囲は帯状の埋土とは異なる土層があるため炉壁の残存であろうか。

遺物は遺構南端部から弥生土器甕（1～3）、4・5は壺で5は口縁から頸部、胴部上位にかけて暗文を施す黒髪式土器である。出土土器から弥生中期の遺構であろう。また6は口縁部を損失した遺物で、この部位を観察すると連続打痕がみられ、意図的に打ち欠いているようである。これは土器の再利用か、または廃棄儀礼の一種であろうか。ここでは資料提示に留めたい。

S-002（S-009　第6・11・12図）

1工区東側B-6、C-6グリッドにおいて検出。S-001と重複し北東部分がこれに一部を切られている。プランはS-001より古い。主軸はN-46°-E、長軸4.8m、短軸は残存3.2mを検出した。生活面の貼床まで0.2mの掘削を必要とし、この貼床面において中央部に土坑状の掘り込みが確認され、その埋土にはカーボン、焼土混入が認められるため炉跡と判断した。ピットは3基確認されるが、P 4には生活面に径20～30cmの平石が存在している。この平石を剥すと僅かな掘り込みはあるが、この掘り込みは柱を固定するには困難であり、この平石を礎石として柱を設置したことも想定される。またこの平石の中央部は赤く変色しており被熱の可能性もあり、遺構南側には長軸20cm程の炭化物も点在するため、この遺構は燃焼に関与するものか。7～9 は土器で炉跡を中心に出土した。9は黒髪式土器の甕で、7・8は貼付突帯の弥生土器である。7は胴部上位に穿孔が施され、この穿孔は土器内部から強い衝撃が加えられた痕跡であり、その類例は多い。これは土器としての機能を消失する廃棄儀礼とも考えられている。また前述した大型の川原石（10・11）はP 4の位置に並んだ形状で出土した。肉眼観察では火熱痕跡があるため、本来 炉に伴う遺物と考えられるが、P 4の掘り込みが浅いことから住居の後年、柱を支える機能として使用したとも考えられる。

S-003（S-051　第7・13図）

1工区東側C-6グリッドにおいて検出した方形状遺構である。S-001、S-002の下層にて検出し、主軸はN-41°-W、長軸約4.2m、短軸約4.0m、深さ約0.4mである。遺構検出時には竪穴住居として考え掘削を開始した遺構で、十字状にベルトを設定し、貼床まで掘削を行い検出したところ8基のピットと1基の土坑を検出した。さらにサブトレンチを設定し再度掘削した結果、僅かながら硬化面が検出された。8基のピットを検討したが並ぶピットがなく土坑も炭化物等は見られないが、そのプランは竪穴住居と想定されS-002より新しい竪穴住居の僅かな残存と考えられた。12は黒髪式土器の甕の口縁から胴部上位資料、13・14は小型円形の自然石で、これは投石と想定した。また破損しているが砂岩質の砥石（15）は頻度に使用した痕跡として、全面の摩耗と中央部の窪みを挙げることができる。また一部打痕も見られる。これは破損後、砥石としての機能を消失後の痕跡であろうか。

S-004（S-001　第14図）

2工区東側にあたるj-31・32グリッドにおいて検出した。遺構の斜め半分は調査区外である。主軸はN-48°-W、残存では長軸5.1m　短軸3.8mでやや正方形を呈するか。遺構には硬化面と炭化物が検出された。遺構の西端は後世の撹乱であるが、東端には土坑状の掘り込みがあり、これに僅かであるがピット状の窪みが見られる。他にP1なども検出されたことから竪穴住居であろう。遺物は弥生中期の口縁部片（16）が出土していることや炭化物が遺構中央部で検出されたことから、本遺跡のピークの一つである弥生中期の遺構であろう。また17は石錘で民俗事例から紐は上下に位置するため、掲載はこれに従った。厚みのない安山岩を用いているため、漁網を安定させるため川底に固定化するのであろう。

また本体工事に伴い、平成29年6月26日工事立会を行い、これにより一辺5.2～5.6mのほぼ正方形を呈すことが判明した。

S-005（S-005　第15～19図）

2工区東側にあたるj-29・30　グリッドにおいて検出。これもS-004と同じく遺構の半分は調査区外に存在する。全体は径8mを測る大型の遺構である。西端には僅かであるが硬化面、また中央には方形の土坑が検出された。ピットはP1-6-4-8が円形に並び、その内側にP2-3が方形に並ぶようである。またP4にはP5、P8にはP7の小ピットが近接し、これらはそれぞれの主柱を補強するものであろうか。これらの情報から大型円形建物の可能性が高く、その条件として遺構西端にはプランに沿う溝が存在する。これは湿気取りなどの竪穴住居に見られることが類例として挙げられる。

遺構の時期は中央から西端にブロックで出土した弥生中期土器からこの時期の遺構であろう。また全体は円形プランであり、その径は8m強を測り、かなり大型の遺構である。本調査終了後、本体工事に伴いこの遺構の工事立会（平成29年6月29日）を行い全体のプランを確認した（第15図）。この遺構は生活をした空間であろうが、出土遺物に乏しく、今後の類例を待ちたい。近年では上南部遺跡（熊本県2017）の径6m強の円形プラン「3号竪穴建物」はこの遺構に酷似し、時期も中期後半と比定されている。

出土遺物はこの遺構時期の弥生中期土器（18～20）。21は台石でありその平面はやや窪み擦痕も認められることから、住居地内での食物の磨り潰し行為に伴う食に関する道具であろう。また22・23は磨石で原型を保っており、この21とセット関係を想定させる遺物である。また埋土中には縄文後期土器、土師器などが見られたことも追記しておきたい。

S-006（S-040　第20図）

2工区東側にあたるi・j-27・28グリッドにて検出された。主軸はN-5°-E、長軸3.7m　短軸3.5mで方形を呈する。P1は遺構隅に位置し、またプランを切っているため柱としては判定が困難である。柱

痕跡としてはＰ２・３が該当する。硬化面、焼土等の検出はなく、また時代特定の遺物も出土しなかったが、竈不在やそのプランから本遺跡での弥生期の住居の一つとして想定した。

S-007（S-041　第21図）

２工区東側にあたるｉ・ｊ-27、J-28グリッドにて検出された。大半をS-006に切られているため、詳細は不明であるが、主軸はN-9°-E、残存では長軸4.2m 短軸3.1mでやや長方形を呈するか。S-006が弥生期と想定しているので、この時期より古くなることになる。遺構の北東位置より台石（24）が出土している。川原石を転用したもので、平面に擦痕が認められ、また敲打痕もある。本遺跡最大の遺物で最大幅28㎝を測る。平面に擦痕があり、また打痕も一部認められることから台石として使用したのであろう。また側面には僅かであるがホゲット状の窪みがあり、これも作為が窺われることから、この遺物は平面だけでなく、やや高さのある側面も利用したのであろう。

S-008（S-042　第22～24図）

２工区東側にあたるｊ-24・25グリッドにて検出された。遺構南西側を後世の遺構で切られているため、詳細は不明であるが円形または楕円形を呈するのであろう。25は黒髪式土器の甕の口縁部から胴部上位資料で、これにより弥生中期の遺構とした。

他に出土遺物として26・28は打痕のある敲石であるが平面にも打痕が認められるため、この敲石が台石状の使用をされていたことも窺わせ、27・29は棒状の敲石で先端に敲打痕が確認される。いずれも片手で操作できる大きさである。31も同様の小型敲石で先端に多くの打痕が確認される。またこの遺物は磨痕状の平面を持つため、小規模ながら敲石と磨石の機能を有している。30は円盤状の磨石・敲石であるが、この平面部に上位４㎝、底部0.8㎝のホゲットを有している。孔は摩耗し明らかに使用されており、その用途は不明であるが発火具としての使用も考えられる。33は磨石・敲石で原型はさらに大型であったであろうが、残存部はその大きさと重量では片手で持ちやすく、また使用し易いことから、故意に破損後に敲石として使用したのであろうか。32は扁平の楕円形の磨石で、両平面に磨痕が確認され、34は楕円形の磨石・敲石であるが、その平面は磨痕が認められ、これも敲きと磨りの両機能を併せもつ石器である。

（古代）

S-009（S-011　第25・26図）

１工区G-2・３グリッドにおいて検出した主軸N-59°-Eの竪穴住居跡である。長軸3.4m 短軸3.1mで西側端部を撹乱により削平されている。

遺構検出時において竈を伴う楕円形の遺構を確認した為、十字ベルトを設定し、竈を残して掘削を行い、ほぼ竈に沿い南西壁付近まで直線状の硬化面を検出した。柱穴は４基（Ｐ１～４）検出し、いずれも径約0.4m深さ約0.15～0.4mの規模である。これにより４本柱の竈付き住居地となる。遺構の時期は35の土師器片、36の須恵器片から古代の竪穴住居とした。硬化面から住居地の生活行動が竈中心であったことが窺える。37は大型砥石で、その使用状況は平面的でなく溝状の痕跡使用をされたものである。全体に余すことなく使用痕があることから、素材として優れていたのであろう。

38も大型砥石であるが、37と異なるのは三角錐状の原石の面を利用していることで、使用目的によるものであろうか。本遺跡で使用痕が異なる大型砥石の出土はこの住居地の状況を思考させる一助にもなりえる遺物である。

S-010（S-012　第27図）

1工区西側のF・G-1グリッドにおいて検出したが、遺構は調査区外にも延長することが想定されるため、その全体は不明であるが、主軸はN-70°-Eであろう。また遺構中央部には後世の溝状の撹乱を受けており、この撹乱周囲に硬化面が点在していることから、主な硬化面はこの撹乱により消滅したのであろう。残存として長軸3.9m 短軸3.5mを測り、連続した柱穴は3基（P 1～3）検出した。遺構は調査区外に延長したならば、この遺構は本遺跡ではやや大型の竪穴住居跡であり、調査区外には柱穴の存在と、土師器片（39）の出土から竈の存在も窺える。

S-011（S-013　第28～30図）

1工区E-2・3、F-2・3グリッドにおいて検出した。東側に後世の直線状撹乱を受けている。長軸4.3m、短軸3.8mを検出した。主軸はN-60°-Eである。床直での検出であるため、従って埋土は僅かに第⑦層のみである。遺構東側端部に1.7m×1.2mの焼土、炭化物が混在している粘土面が存在しており、このプランは竈と想定される。柱穴は4基検出され、いずれも径約0.25m、深さ約0.1～0.45mの規模である。また本遺跡の竈付住居は4本柱の傾向にある。遺構の時期は竈から出土した土師器片から古代の竪穴住居とした。40は楕円形を有した磨石であるが、打痕も認められることから敲石としても使用していたのであろう。全体は扁平で平面に磨痕が認められることから、小型台石としても使用したのであろうか。

S-012（S-017　第31図）

1工区G-1、H-1・2グリッドにおいて検出し、遺構西側は調査区外である。長軸約3.6m 残存短軸約3.5mを測るが主軸はN-46°-Eである。この遺構も床直であり埋土は僅かに上層と下層（第④・⑤層）である。

遺構東側端部に1.3m×1.7mの焼土、炭化物が混在している粘土面が存在しているため、このプランは竈と想定され、またその土層はレンズ状堆積で竈が崩壊した痕跡であろう。柱穴は1基の検出に留まったが、撹乱、または調査区外に存在するのであろう。遺物は完形の須恵器の蓋（41）で、竈から出土した。これまで土器片の出土の傾向の中で、この完形遺物は住居やそれに伴う竈の廃棄儀礼のものであろうか。本遺跡では特異である。また天井部に、三角形に×印のヘラ書きが施される特異な遺物である。6世期後半か。

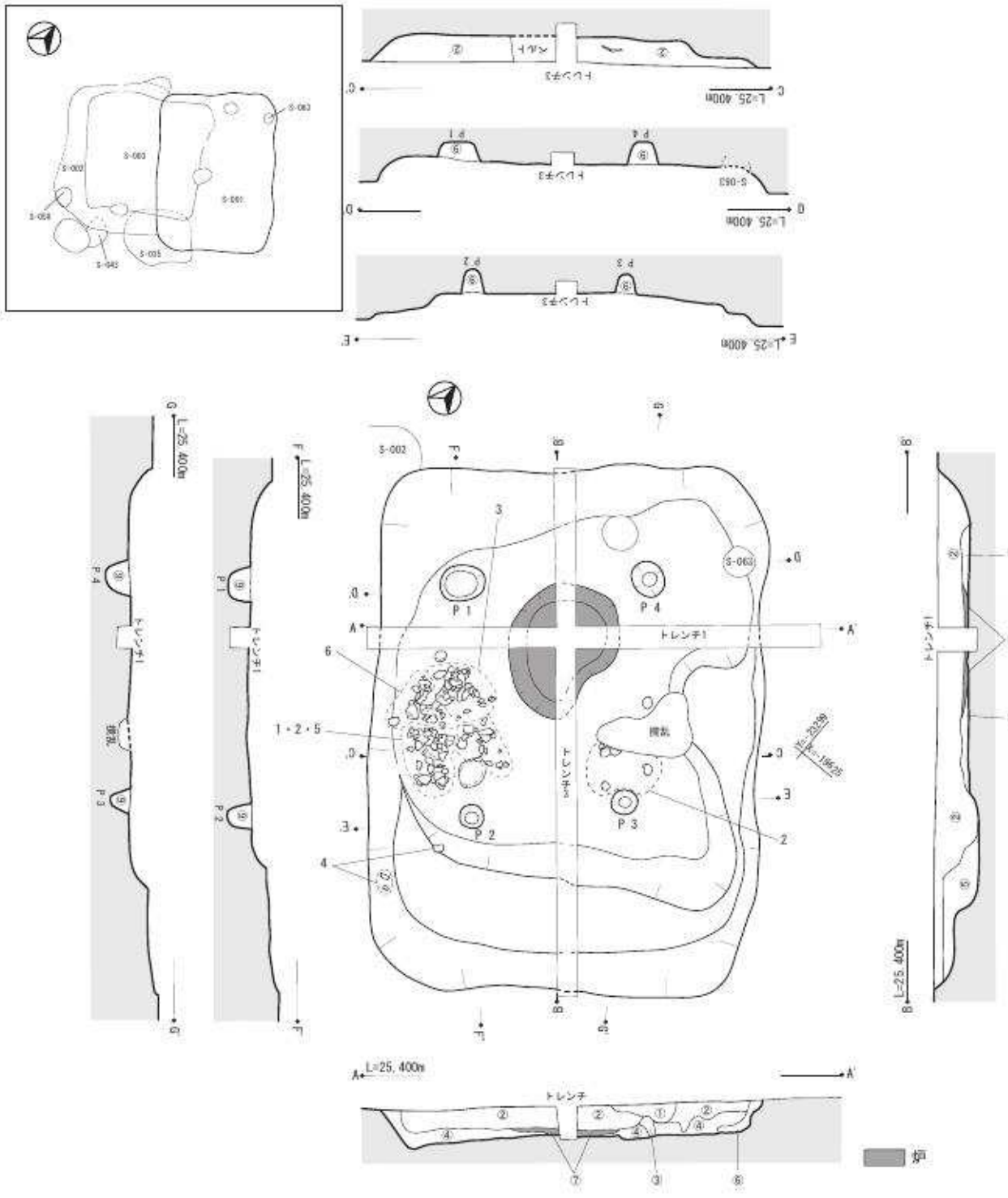
S-013（S-022　第32～34図）

1工区東側にあたるD-6、E-6グリッドにて検出された。主軸はN-50°-E であるがS-053・056・034・033・045と重複し、その全ての遺構より古いものである。南東から北西に導水管を通すための撹乱がこの遺構を貫いており、これによりその情報の大半を消失し、また南端部は調査区外であるが、そのプランは長軸4.2m 短軸 3.8mを測る。東端部に竈が存在しているが、この遺構の特筆すべきところは竈支柱（43）が出土したことである。これは土製で全体は緩やかに湾曲し、端部には使用土器を支える面取りが施されている。竈周囲の撹乱等で破壊されたため、惜しむらくは1点の出土であったが竈機能を窺い知る貴重な遺物である。埋土は暗褐色砂質土で地山土がブロック状に構成されている。更に灰褐色砂質土で竈壁を構成している。周辺から赤褐色の焼土が見られた。ピットは1基検出されたが、他ピットの推定位置には撹乱が切り合っており、他に検出することはできなかった。

土師器甕の42、石器の44～46は何れも火受けの痕跡が認められ、特に44と45はその材質が砂岩質のこともあり風化激しく、長い時間の加熱を想定される。これらの遺物に共通することは加工が施されているということで、これは火熱痕から竈などの支柱的な用途であろうか。

S-014（S-061　第35～38図）

1工区D-3・4、E-3・4グリッドにおいて検出した。主軸はN-22°-Eであり、長軸5.4m 短軸4.9mを



① 10YR4/1 褐灰 砂質シルト
細粒砂混じる 根撹乱

② 10YR2/3 黒褐 砂質シルト
しまり弱 細粒砂混じる

③ 10YR4/4 褐 砂質シルト
しまり弱 貼床部分 炉壁？

④ 7.5YR4/2 灰褐 砂質シルト
しまり弱 細粒砂混じる S-008貼床埋土

⑤ 7.5YR4/6 褐 砂質シルト
しまり弱 細粒砂含む

⑥ 7.5YR3/4 暗褐 砂質シルト
しまり弱 細粒砂混じる S-008壁方

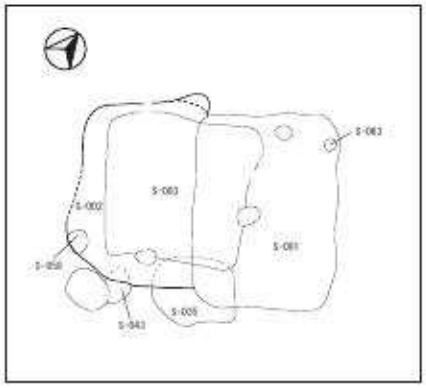
⑦ 10YR2/2 黒褐 砂質シルト
しまり弱 炭化物混じる S-008炉

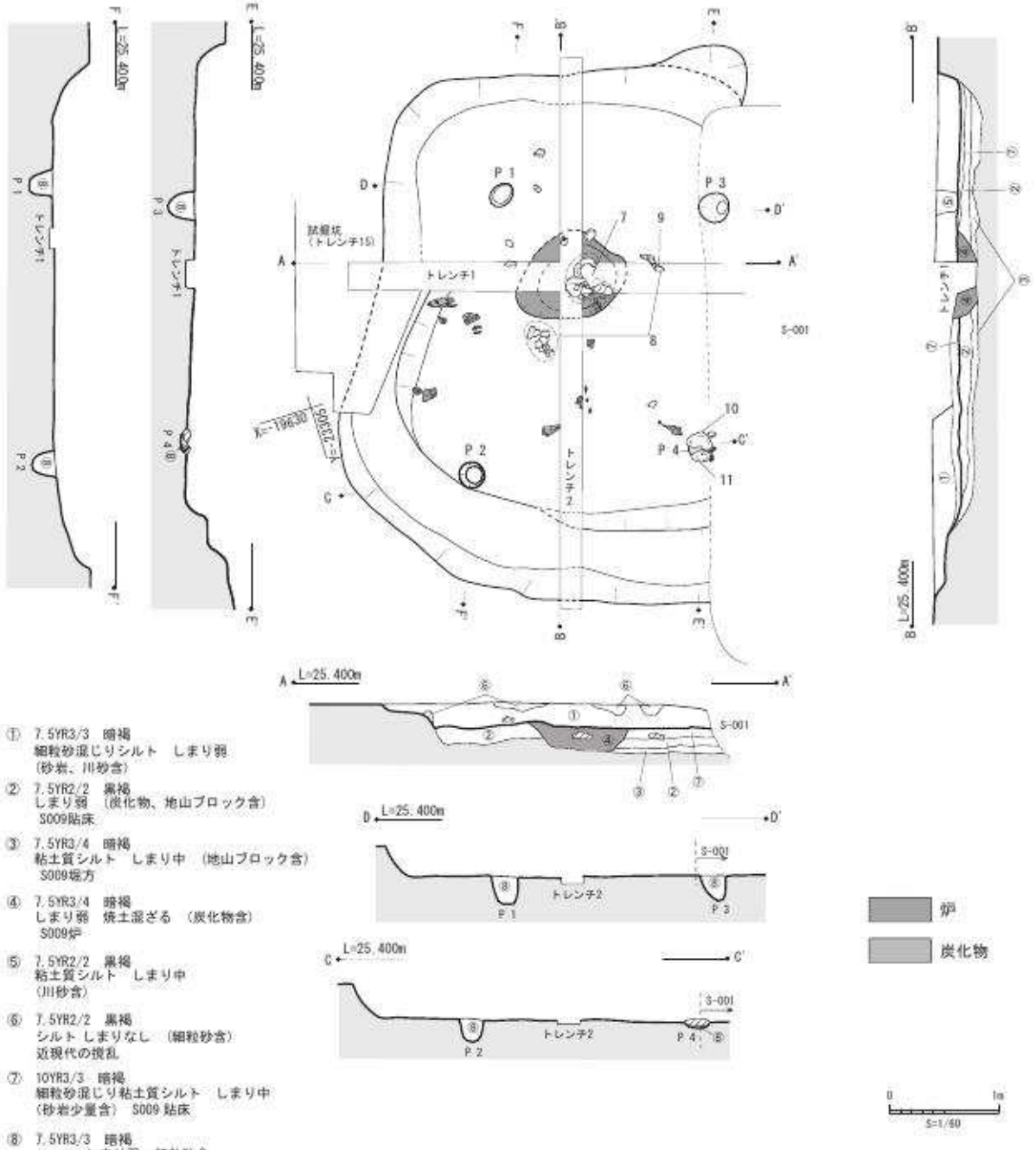
⑧ 7.5YR4/3 褐 砂質シルトに⑤層のブロック混じる
しまり弱 細粒砂混じる

⑨ 7.5YR3/2 黒褐 砂質シルト
しまりなし 細粒砂含む S-008ピット埋土

0 1m
S=1/60

第5図 S-001完掘状況





① 7.5YR3/3 暗褐
細粒砂混じりシルト しまり弱
(炭粒、川砂含)

② 7.5YR2/2 黒褐
しまり弱 (炭化物、地山ブロック含)
S009貼床

③ 7.5YR3/4 暗褐
粘土質シルト しまり中 (地山ブロック含)
S009埴方

④ 7.5YR3/4 暗褐
しまり弱 焼土混ざる (炭化物含)
S009炉

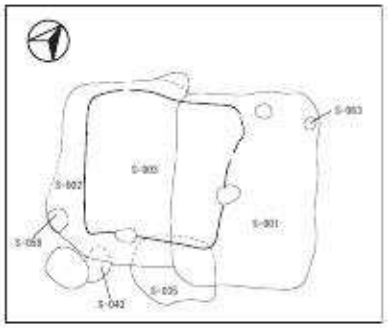
⑤ 7.5YR2/2 黒褐
粘土質シルト しまり中
(川砂含)

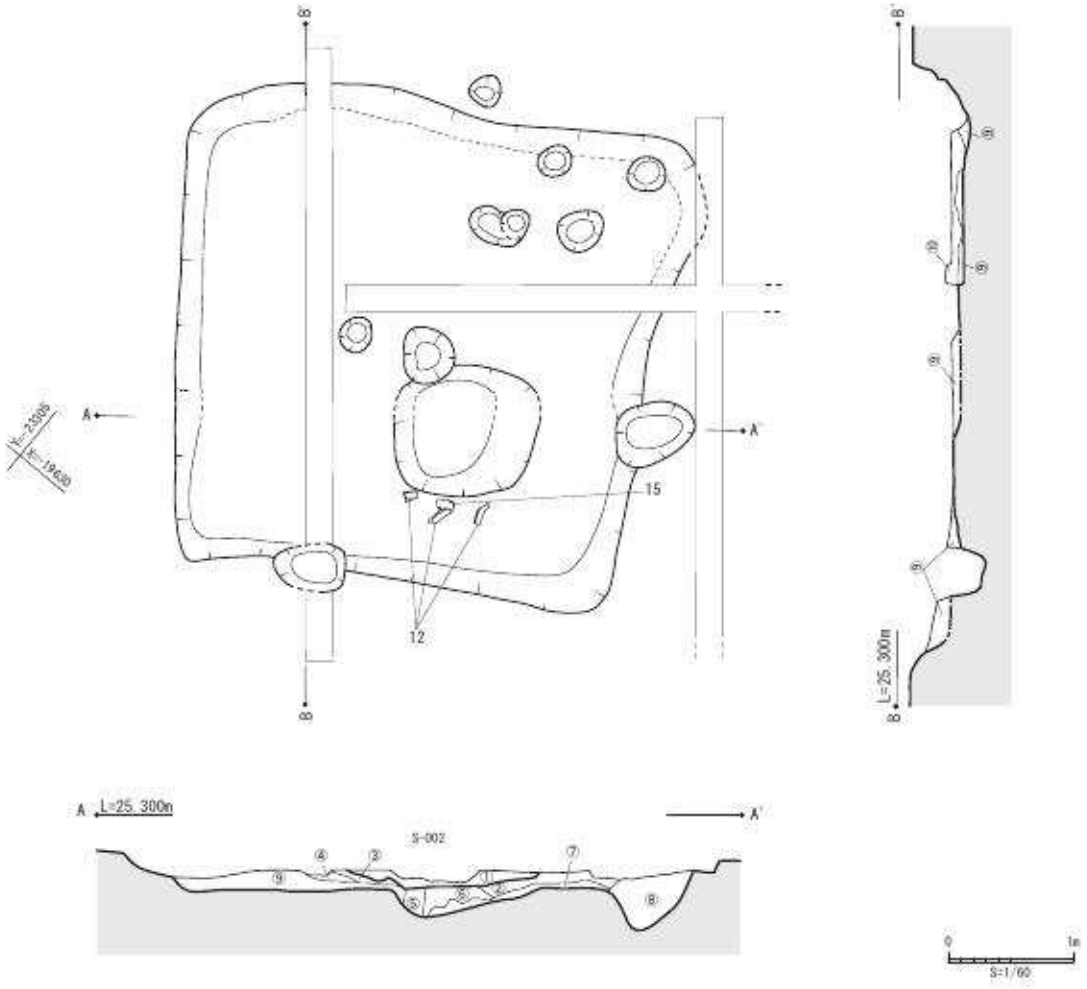
⑥ 7.5YR2/2 黒褐
シルト しまりなし (細粒砂含)
近現代の撹乱

⑦ 10YR3/3 暗褐
細粒砂混じり粘土質シルト しまり中
(砂岩少量含) S009 貼床

⑧ 7.5YR3/3 暗褐
シルト しまり弱 細粒砂含

第6図 S-002完掘状況





0 1m
S=1/60

① 7.5YR2/3 極暗褐
砂質シルト しまりやや弱い 細粒砂混じる（S-002掘方）

② 7.5YR3/3 暗褐
砂質シルト しまりやや弱い 細粒砂混じる
7.5YR6/8橙色砂質シルトのブロック土含む

③ 7.5YR3/2 黒褐
砂質シルト しまり弱い

④ 7.5YR4/3 褐
砂質シルト しまり弱く細粒砂混じる

⑤ 10YR3/4 暗褐
砂質シルト しまり弱く細粒砂混じる

⑥ 7.5YR3/3 暗褐
シルト しまり弱く細粒砂混じり2cmの砂粒混じる

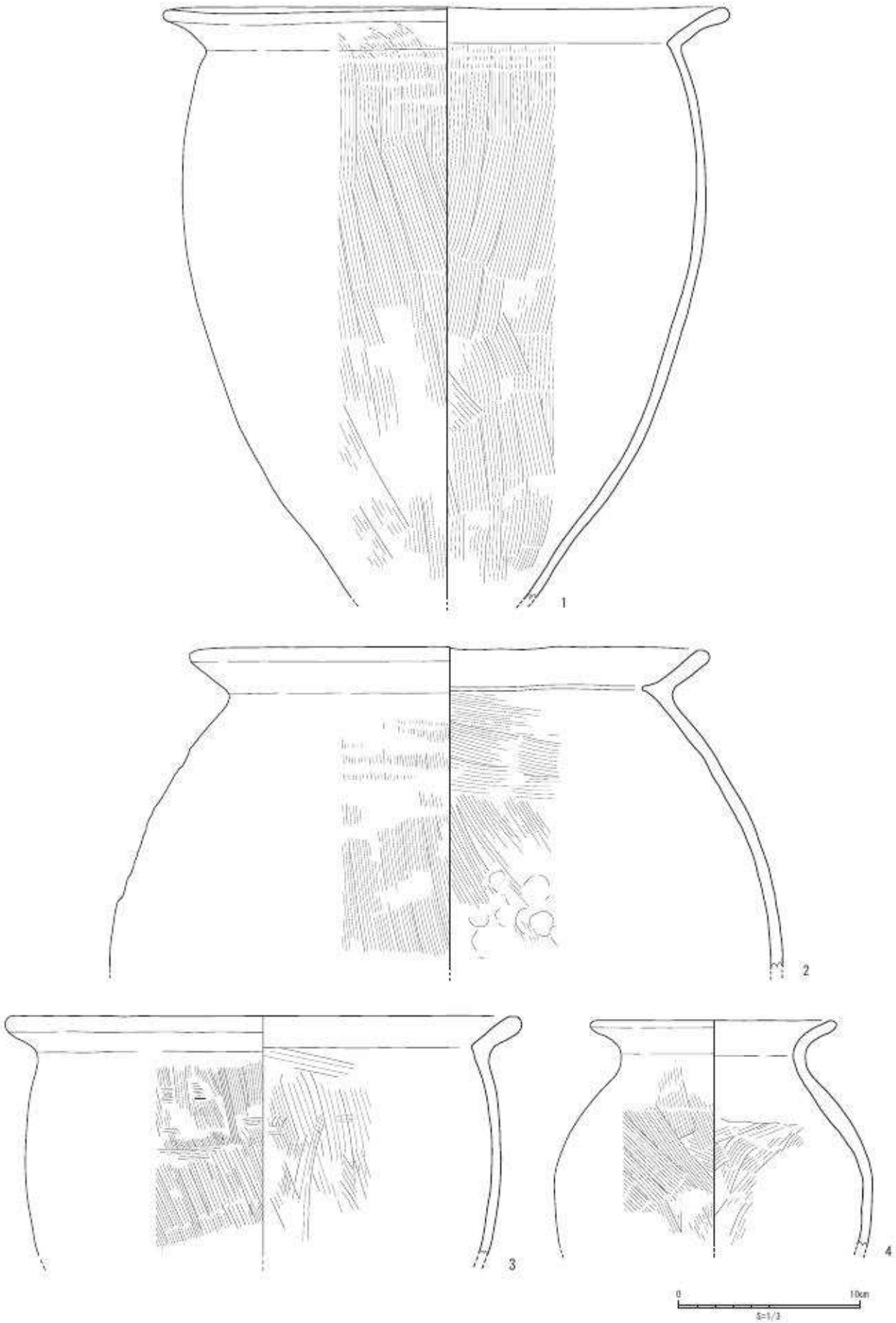
⑦ 7.5YR4/4 褐
シルト しまりやや弱く細粒砂混じる

⑧ 7.5YR4/6 褐
砂質シルト しまり弱く細粒砂混じる

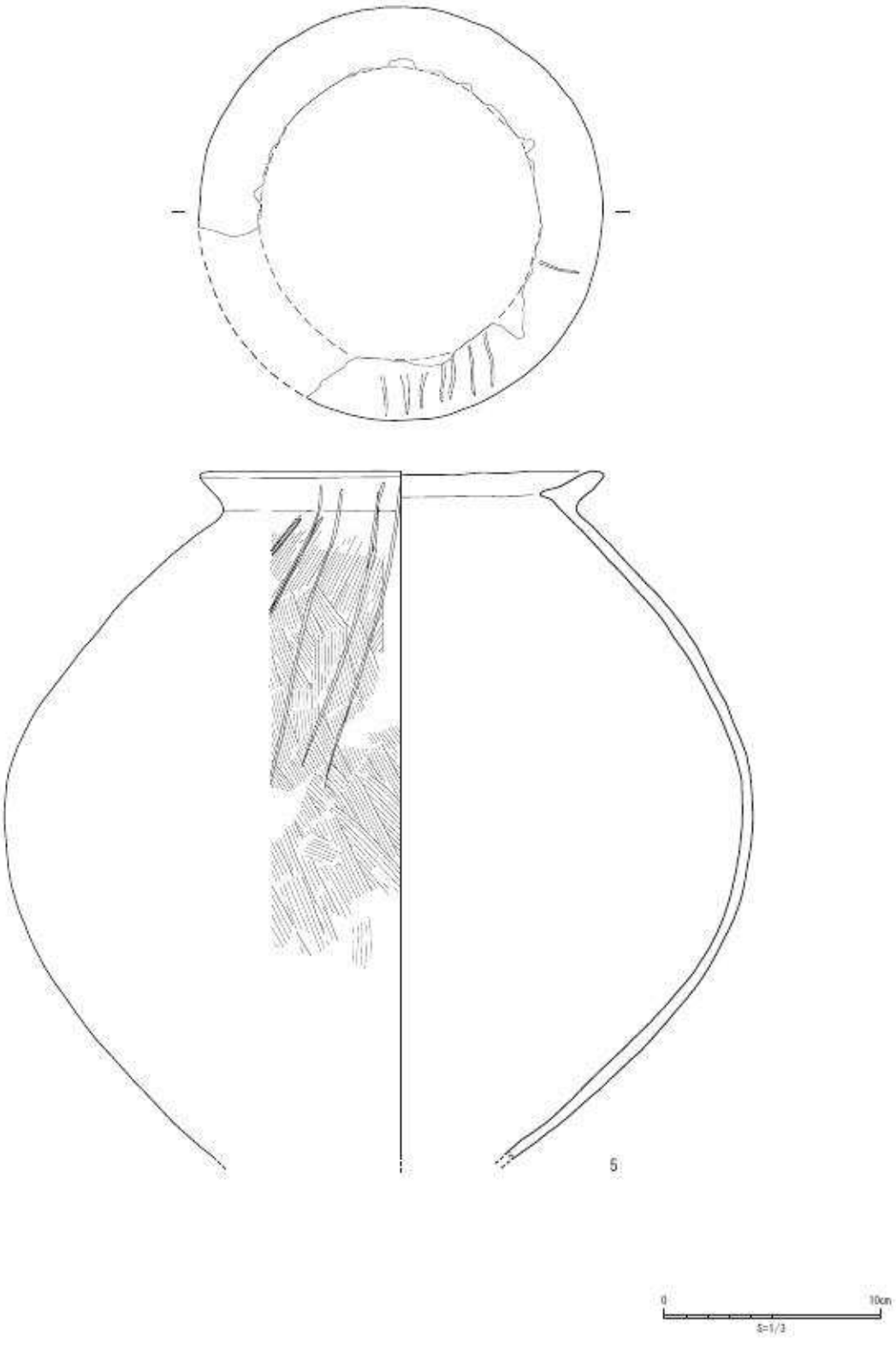
⑨ 7.5YR3/4 暗褐
シルト しまり弱く細粒砂混じる

⑩ 7.5YR3/3 暗褐
砂質シルト しまりやや強く炭化物、砂岩を含む

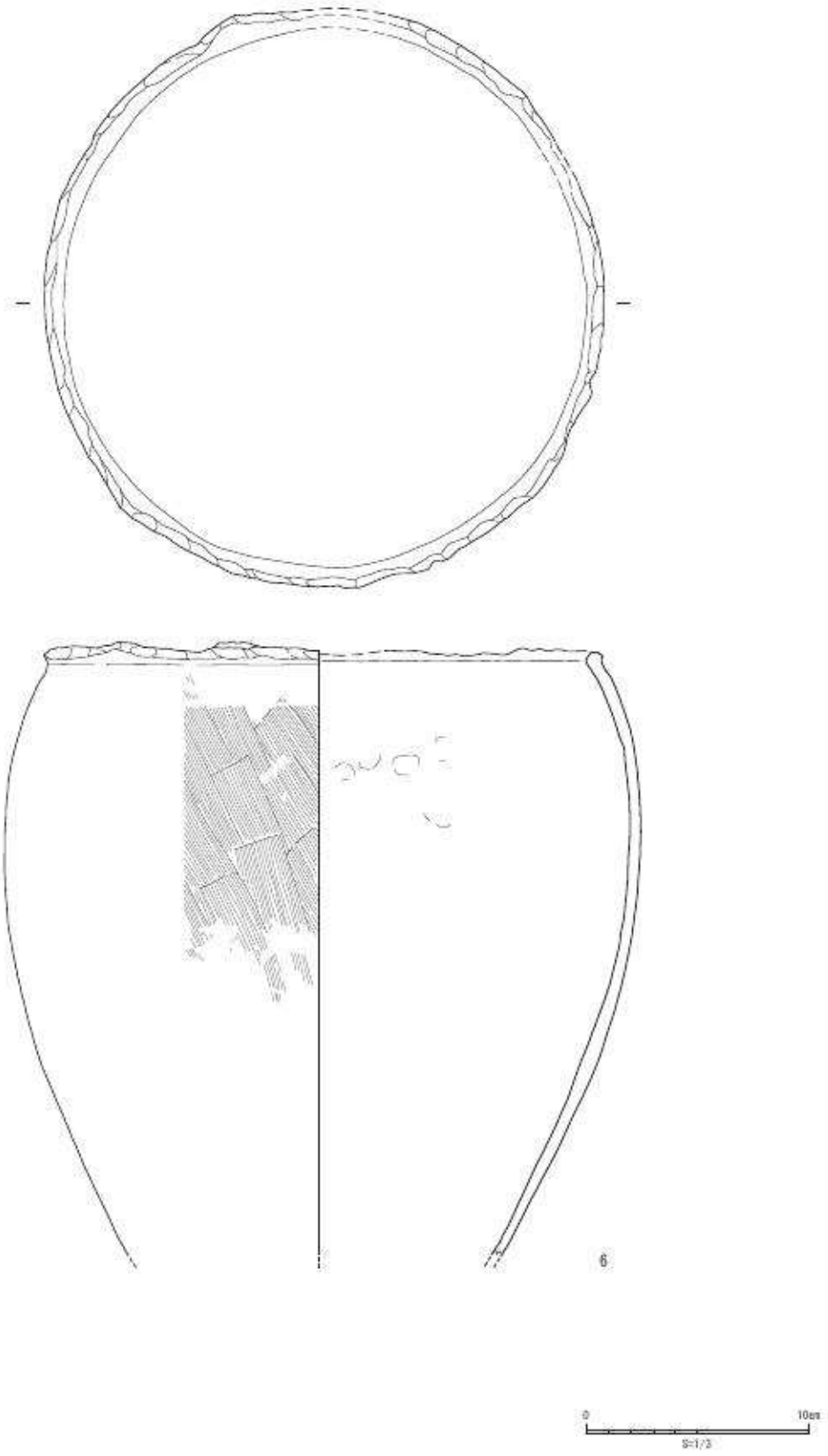
第７図　S-003完掘状況及び遺物出土状況



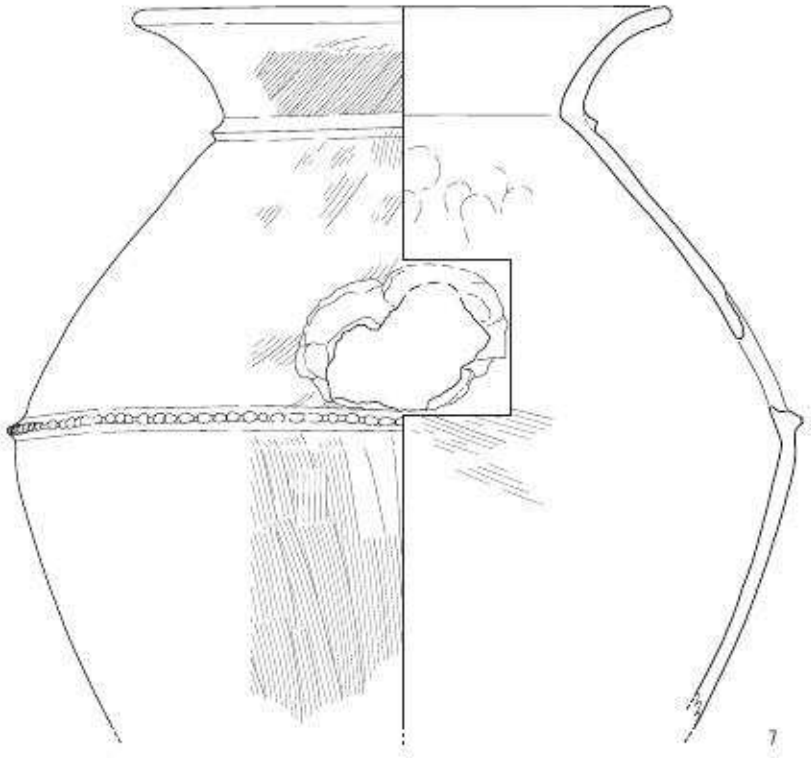
第 8 図　S-001 出土遺物実測図 1

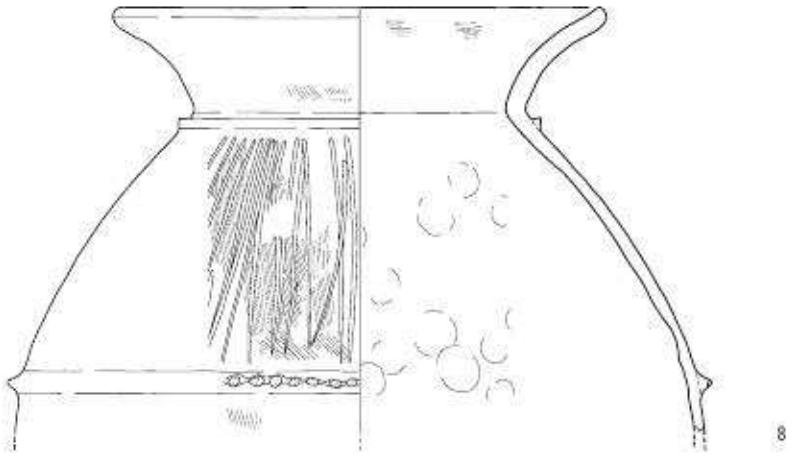


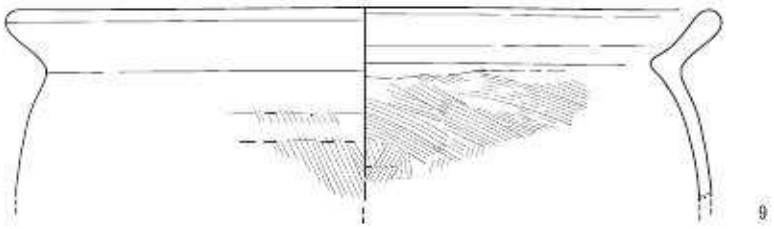
第 9 図　S-001 出土遺物実測図 2



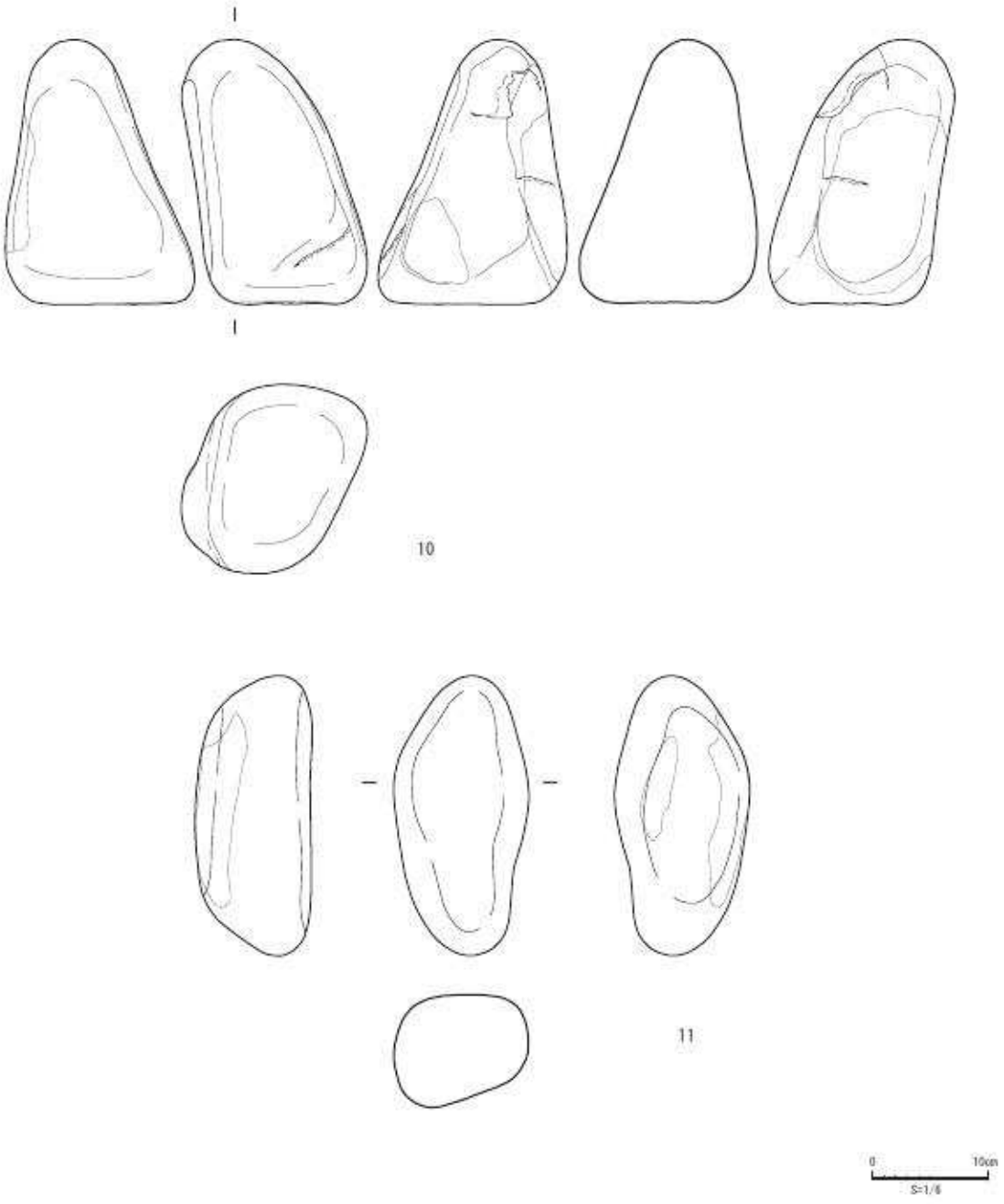
第10図　S-001出土遺物実測図3



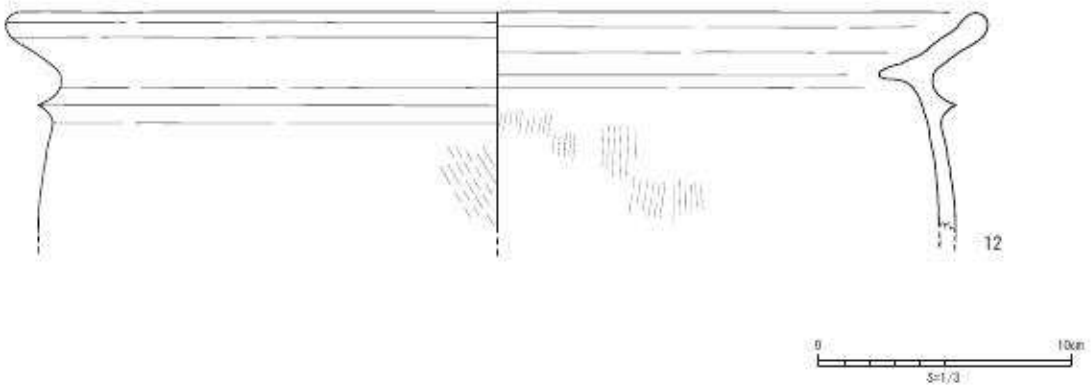


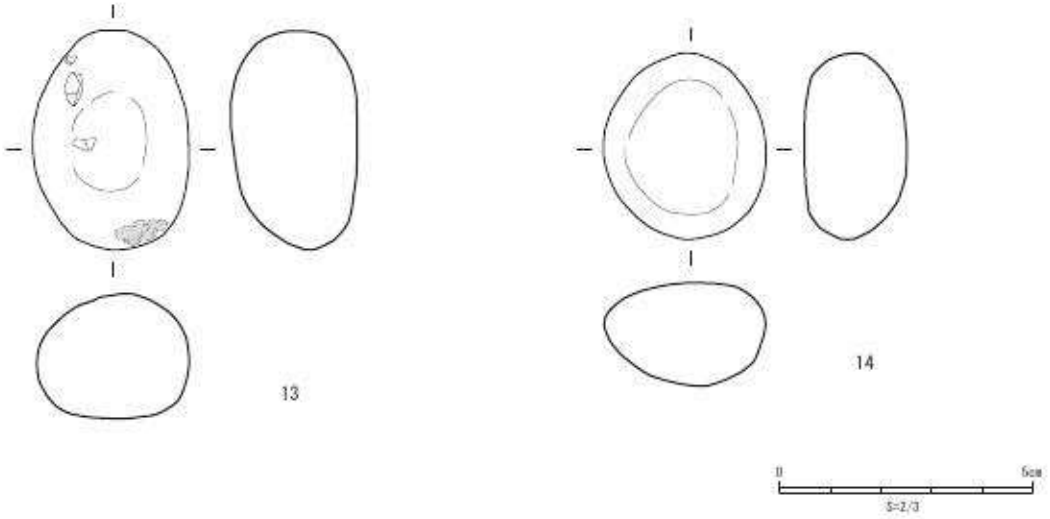


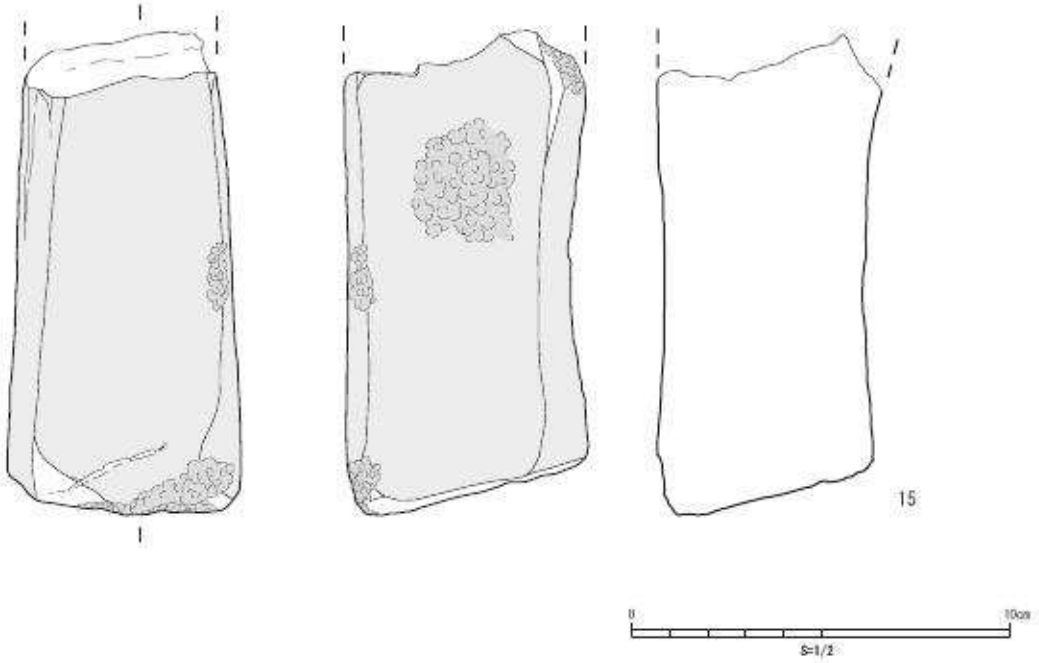
第11図　S-002出土遺物実測図1



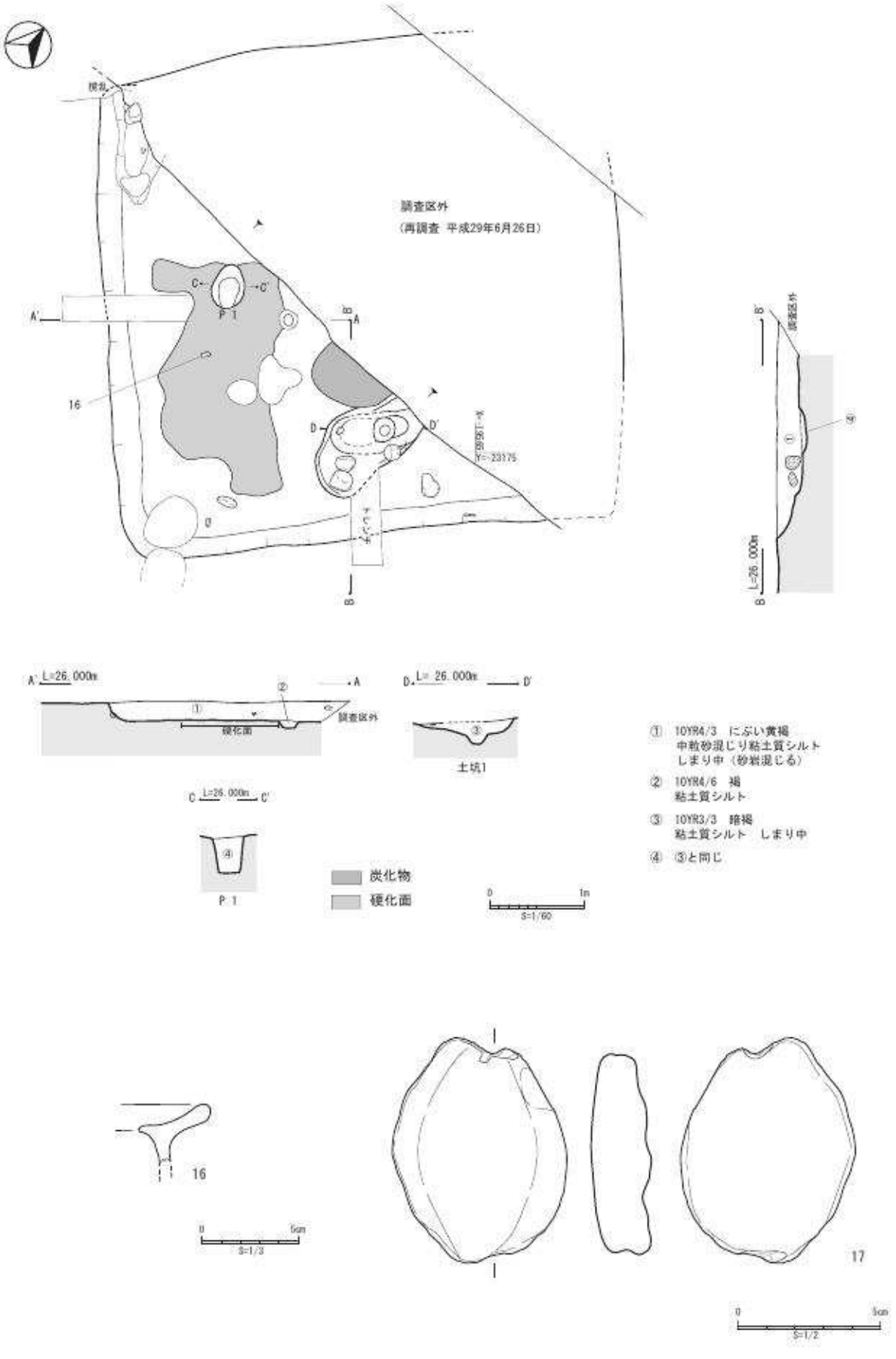
第12図　S-002出土遺物実測図2



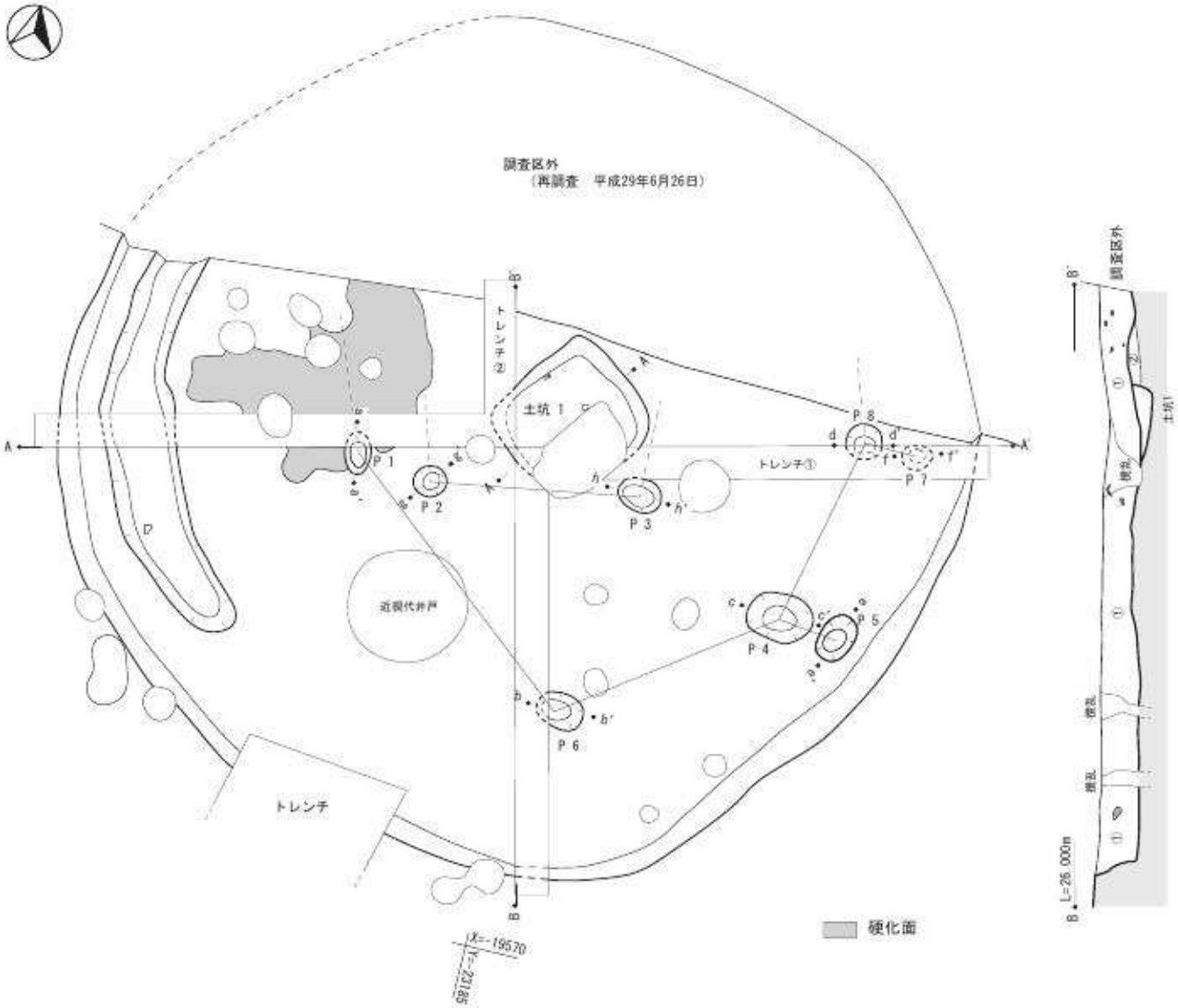


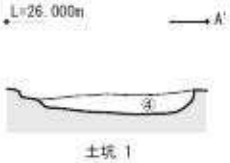


第13図　S-003出土遺物実測図

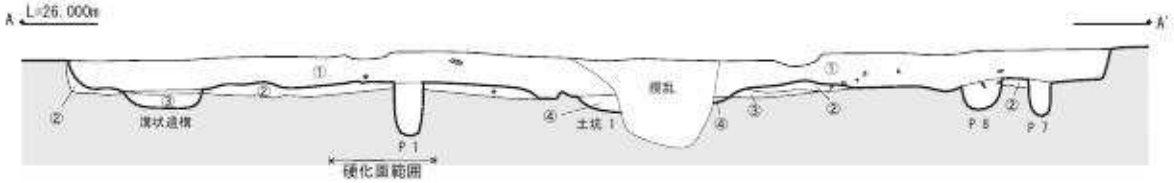


第14図　S-004完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図





土坑 1 埋土
④ 10YR3/4 暗褐
粘土質シルト
しまり弱



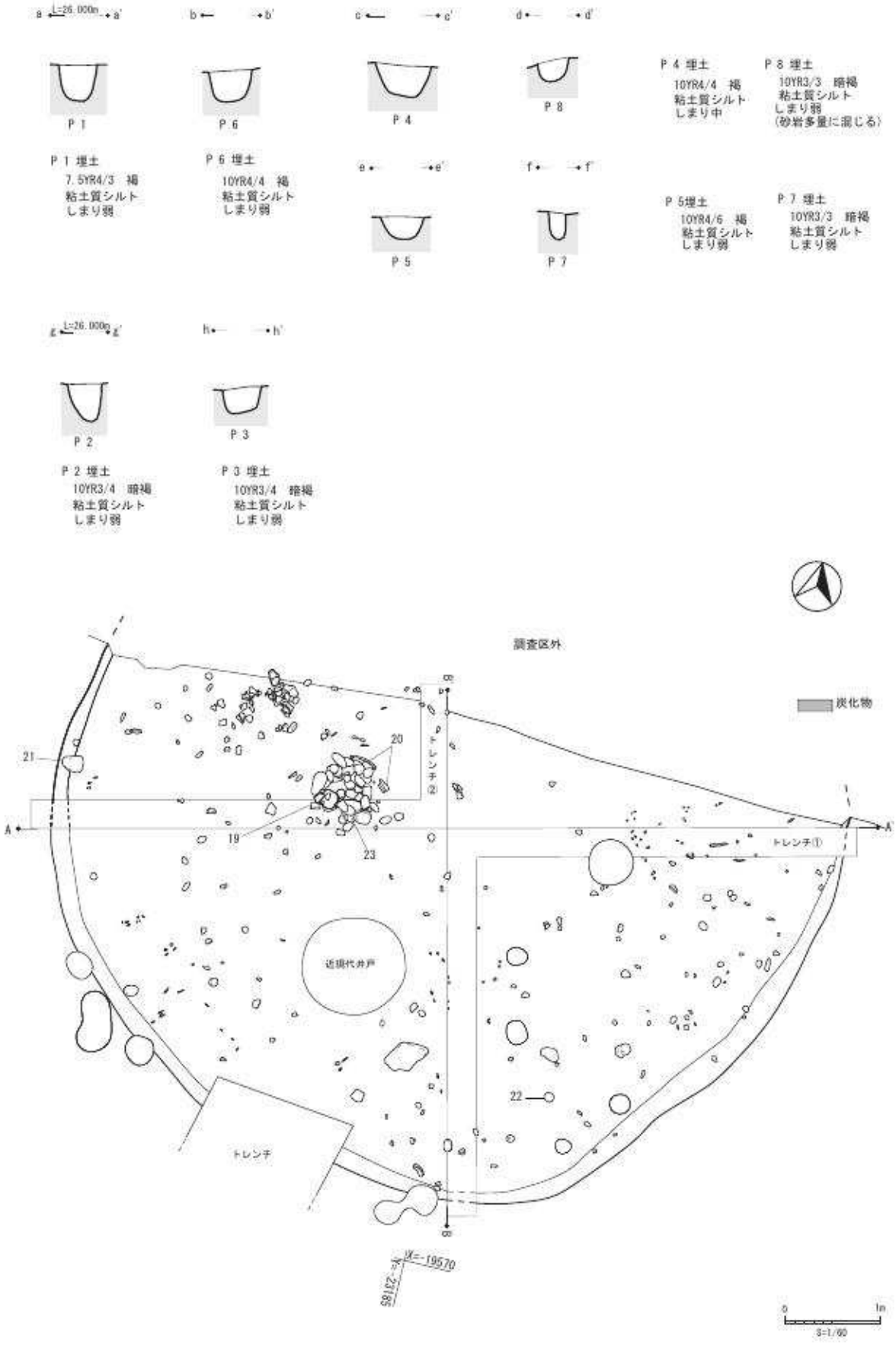
① 10YR4/3 にぶい黄褐
粘土質シルト しまり中 炭化物混ざる
（東側10YR3/3暗褐 しまり中 炭化物・砂岩含む）

② 10YR4/4 褐
シルト質粘土 しまり中

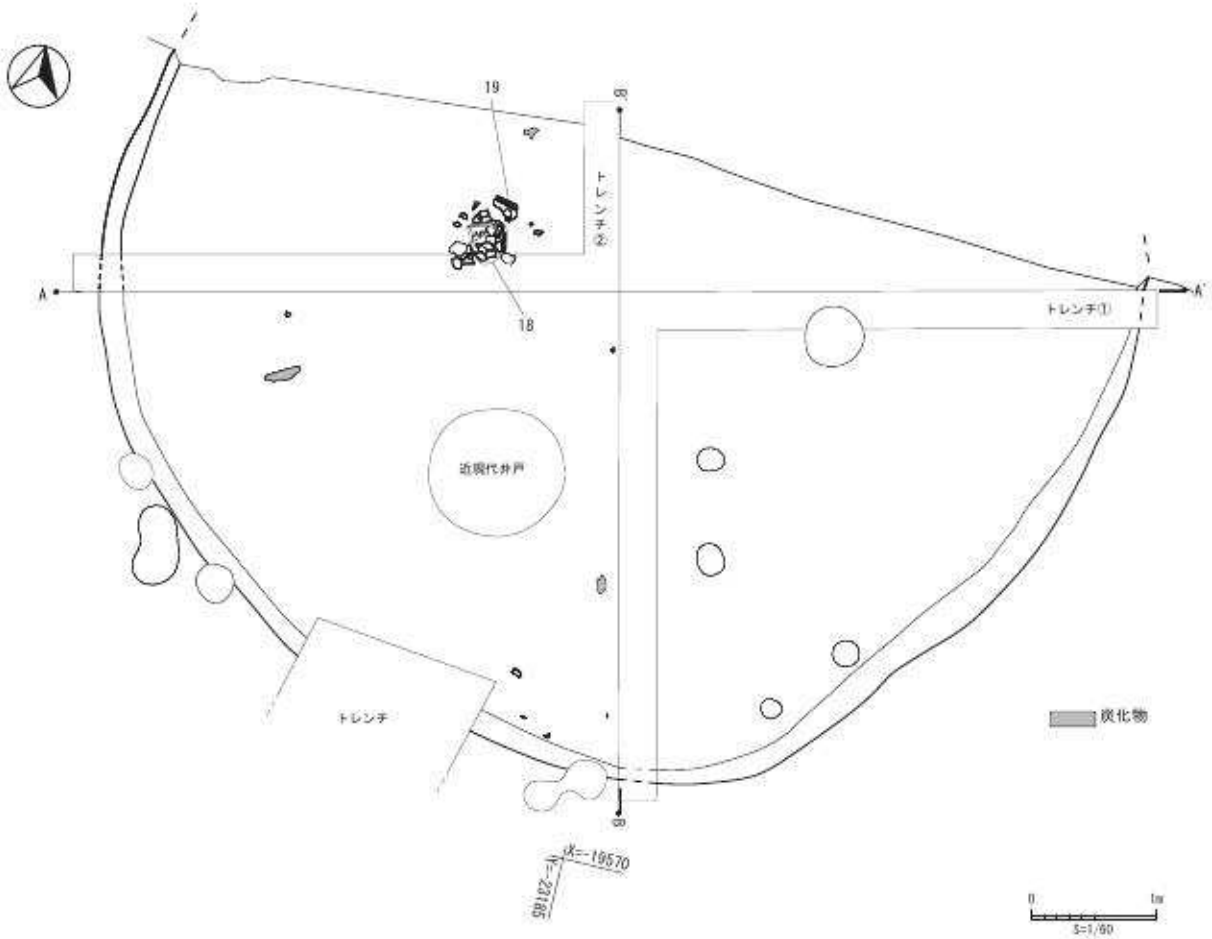
③ 10YR4/4 褐
シルト しまり弱

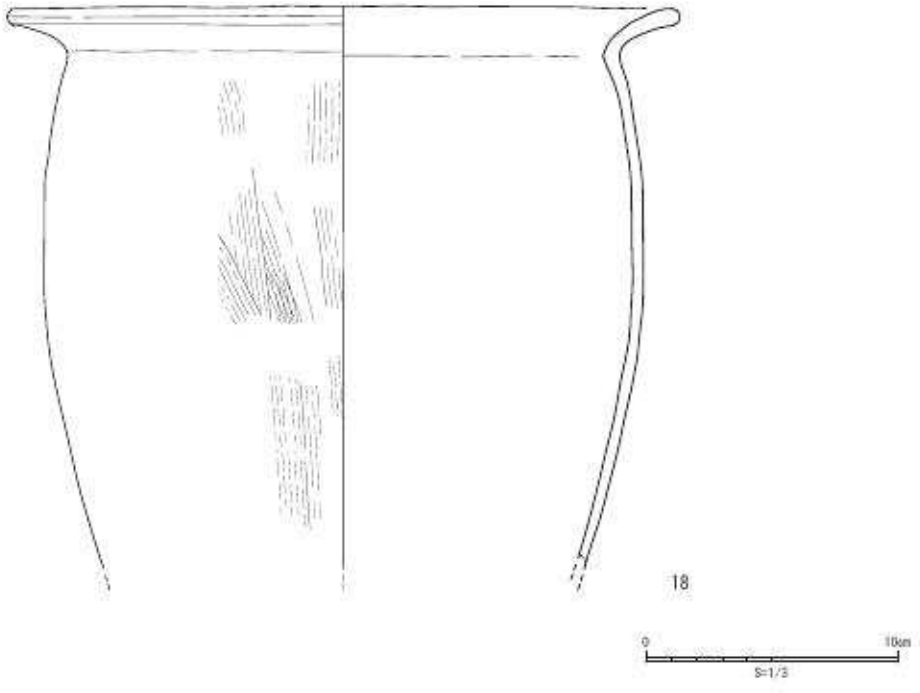
0 1m
S=1/60

第15図　S-005完掘状況

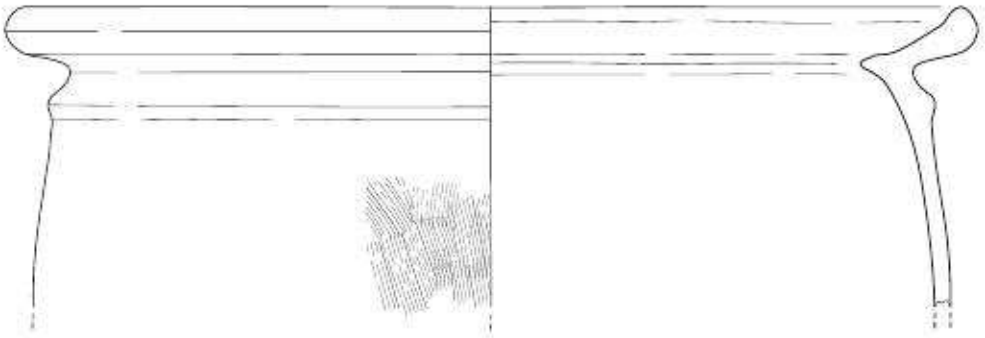


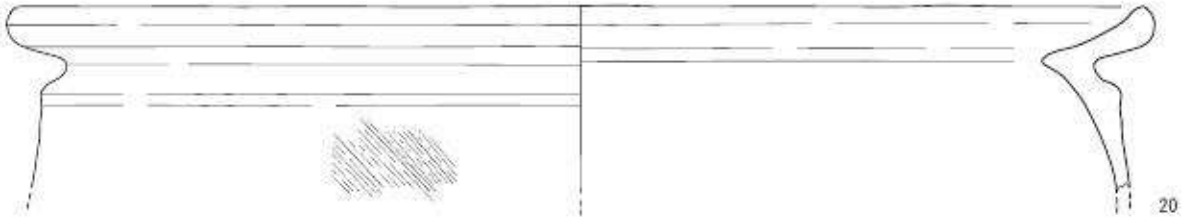
第16図　S-005 P 1 ～ P 7 断面図及び上層遺物出土状況

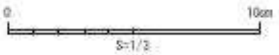


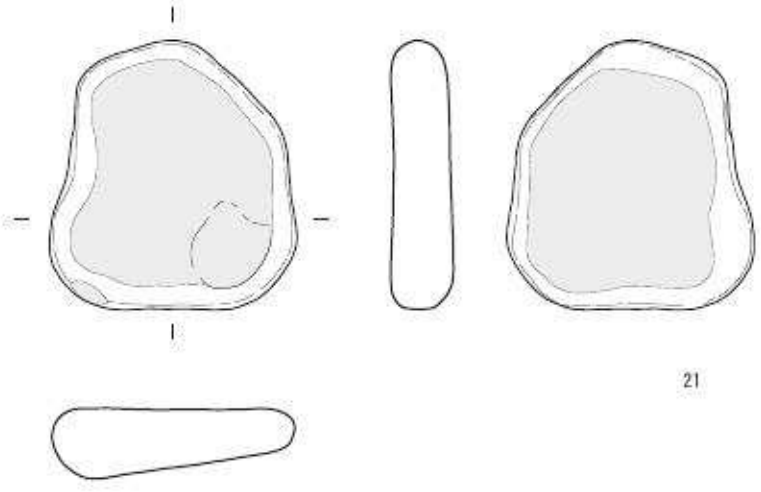


第17図　S-005下層遺物出土状況及び遺物実測図

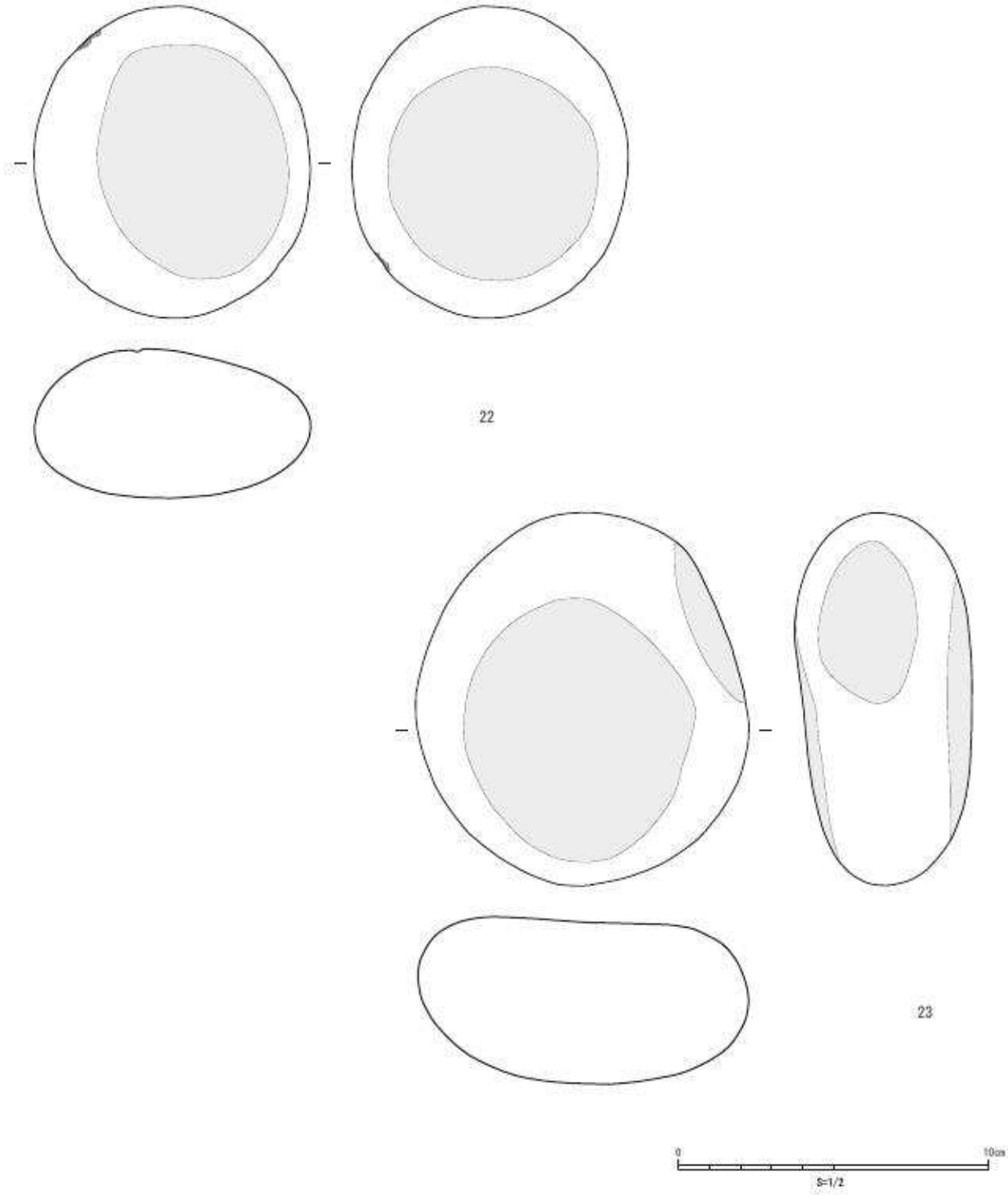




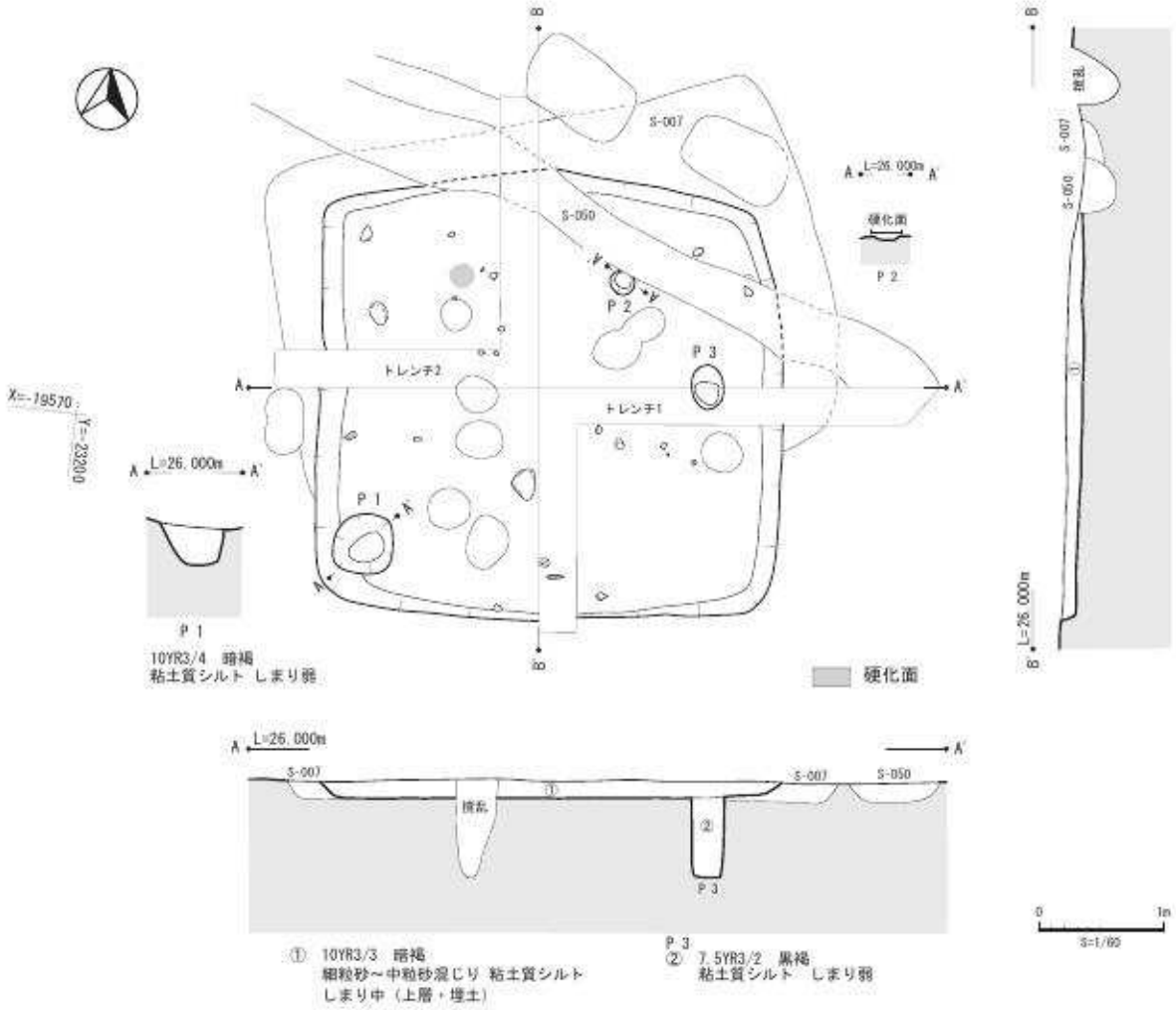




第18図　S-005出土遺物実測図1



第19図　S-005出土遺物実測図2



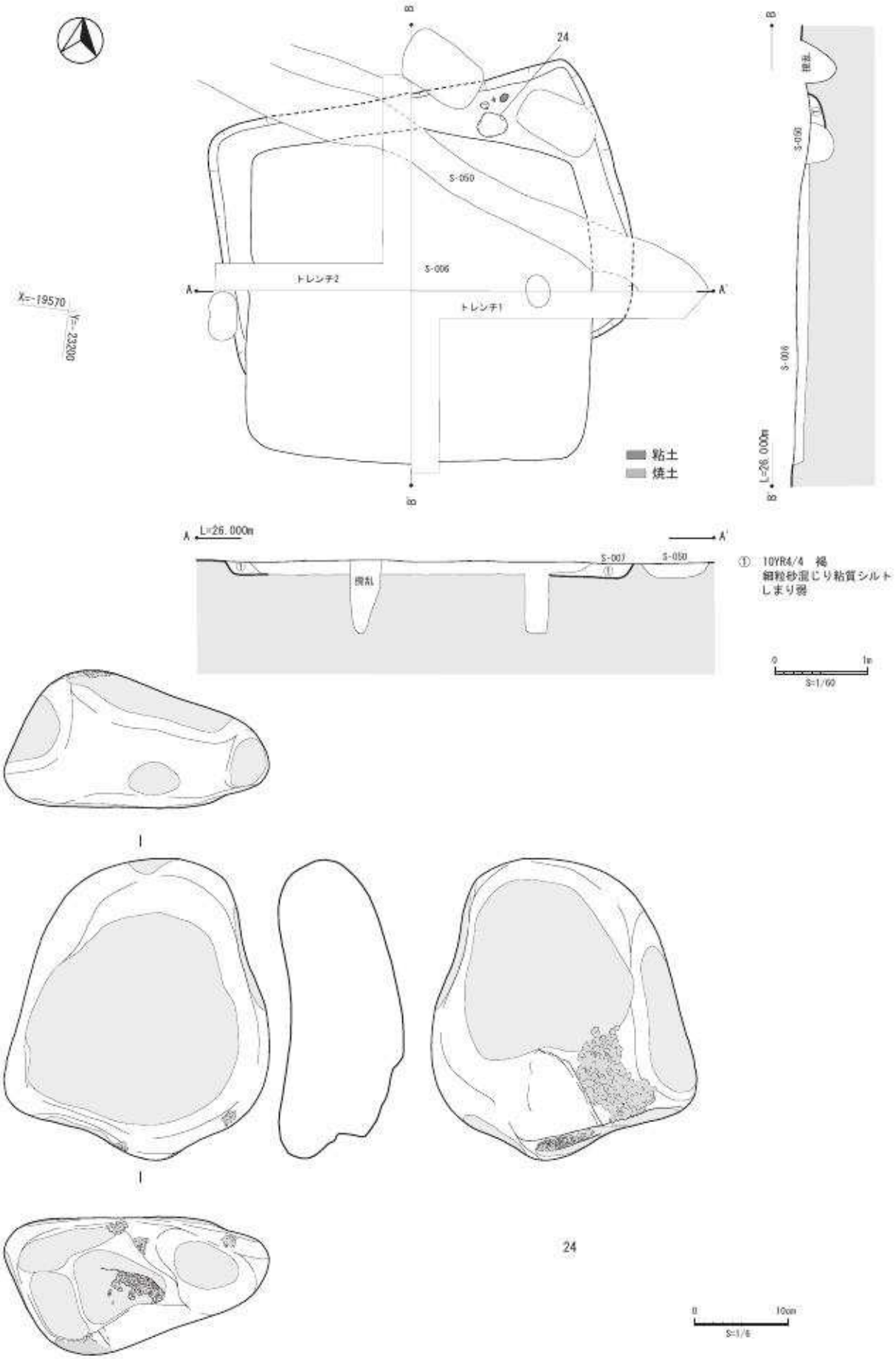
第20図　S-006床面検出状況及び遺物出土状況

測るが、南側はS-047に、西側はS-048に、北側及び東側は撹乱により削平されている。1工区では最大の遺構である。検出時、焼土及び白色粘土を検出した為、竈付き竪穴住居と想定し遺構検出を行ったところ方形の遺構を確認した。硬化面は僅かであるが一部に検出された。柱穴は2基確認出来た。他に2基存在の本来は4本柱と思われるが、S-048と撹乱により削平されている。

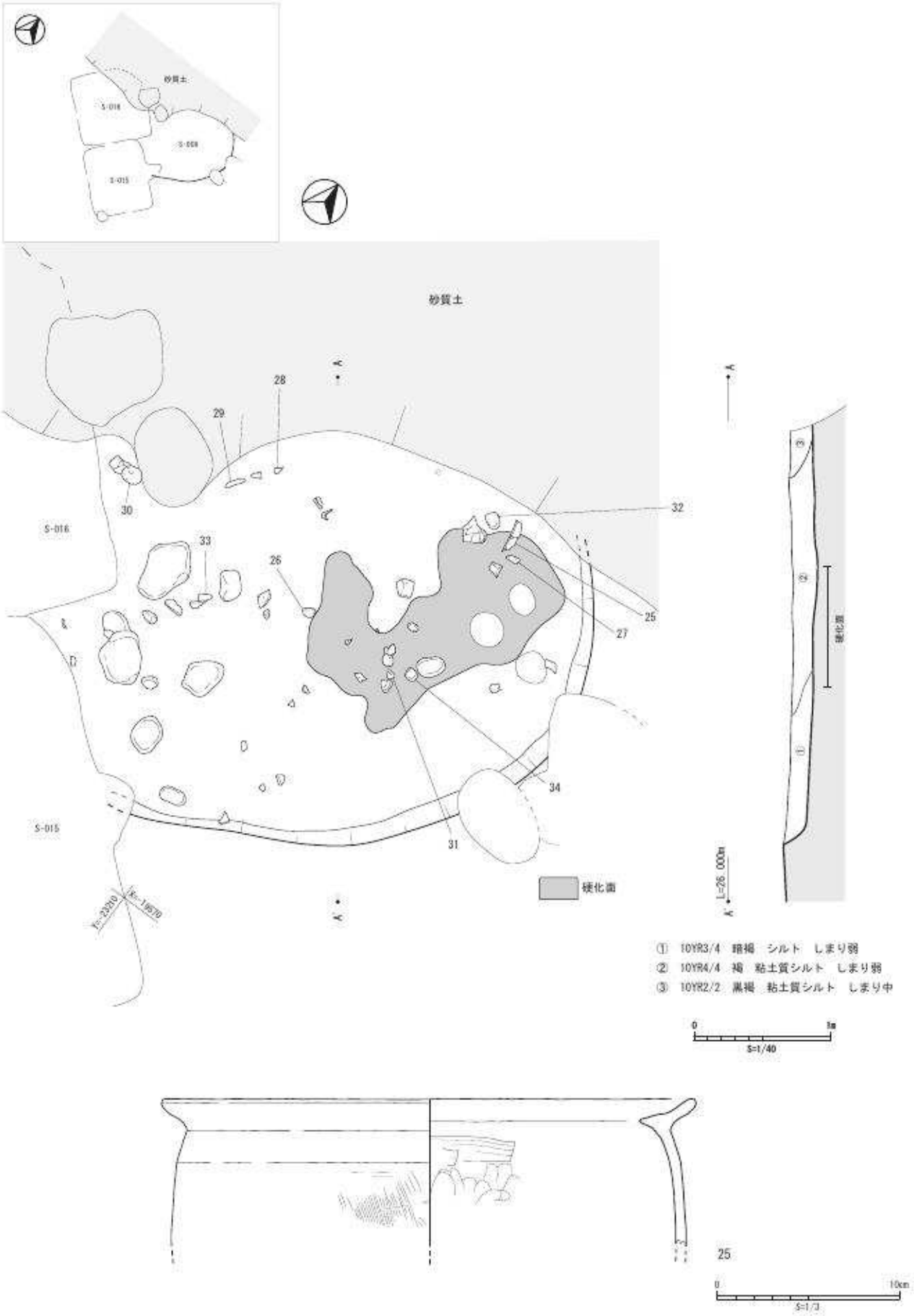
竈には長軸35㎝の被熱石（49）が出土している。自然面も残しているが棒状に加工され四面を呈する。火受け痕もあり、この遺物は出土状態と形状から竈支柱と想定される。50～52は大型遺物で51はやや三角錐状、50・52は方形に面取りを行っている。擦痕など認められないことや、出土地と火熱痕があることから竈に伴う遺物であろう。土器は土師器甕口縁部片（47）と土師器坏（48）が出土した。この48は底部に丸く穿孔が故意に施されているが、これは再利用のためか、廃棄儀礼の範疇かは不明であるが、資料提示として掲載した。

S-015（S-010　第39・40図）

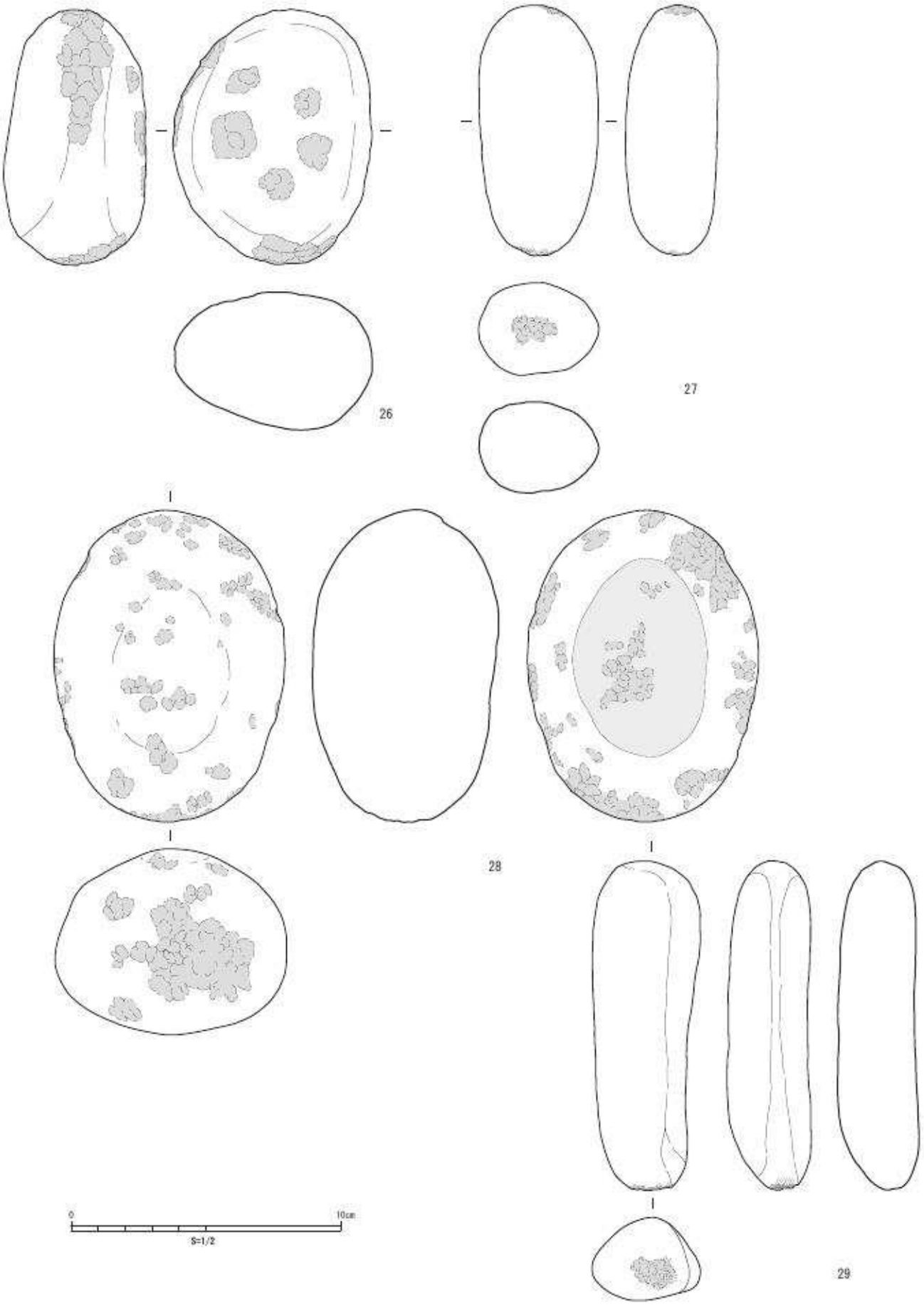
2工区中央にあたるi・j-24・25グリッドにおいて検出。主軸はN-43°-E、長軸2.9m 短軸2.5mを測る。遺構北東位置に竈が存在していた。住居地内には硬化面も確認され竈を中心にした生活の様子が窺える。柱痕跡は確認できなかった。竈内より53が出土した。土師器口縁部から胴部下位資料で竈で使用した煮炊き用の土器であろう。



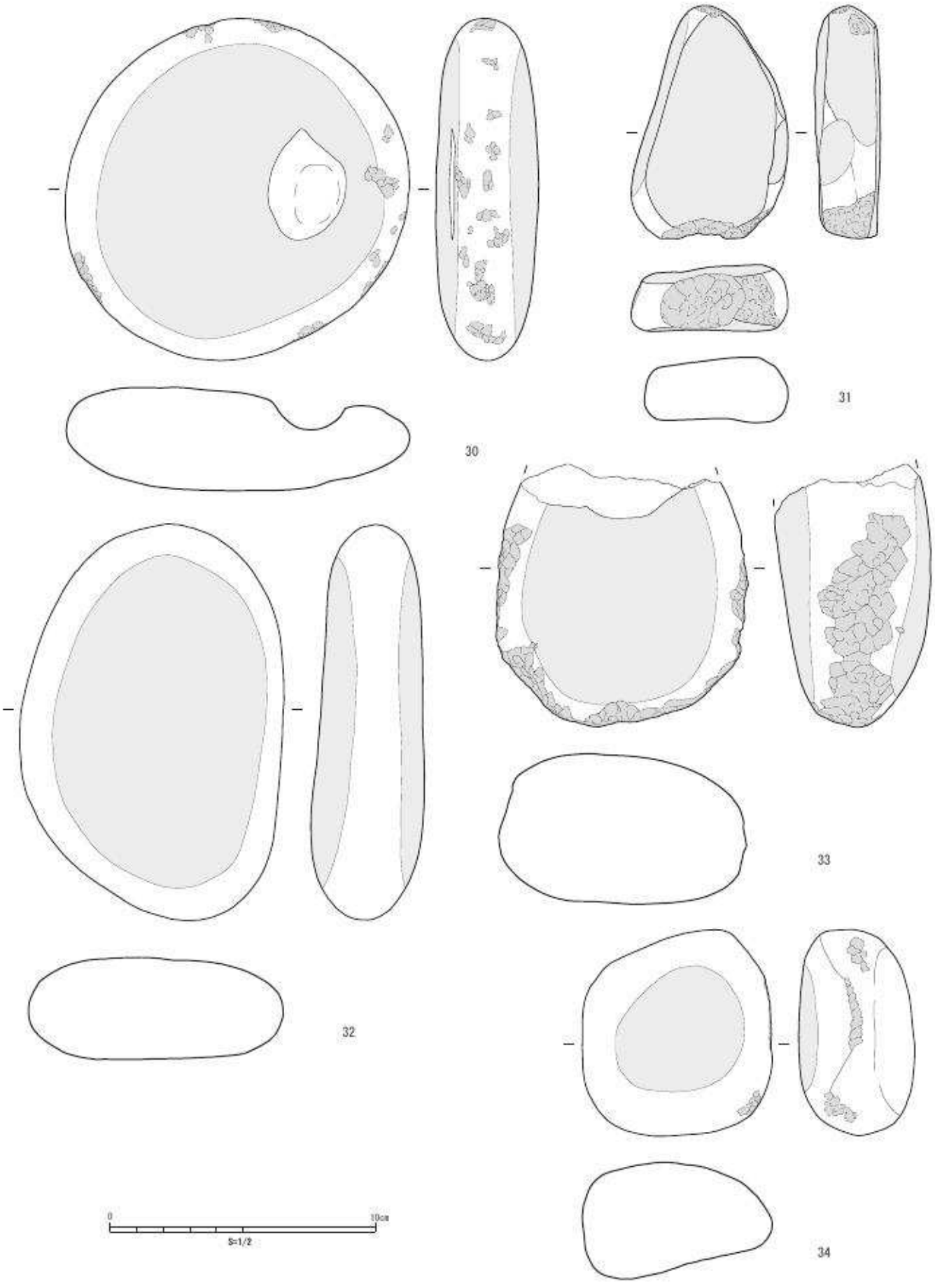
第21図　S-007完掘状況及び出土遺物実測図



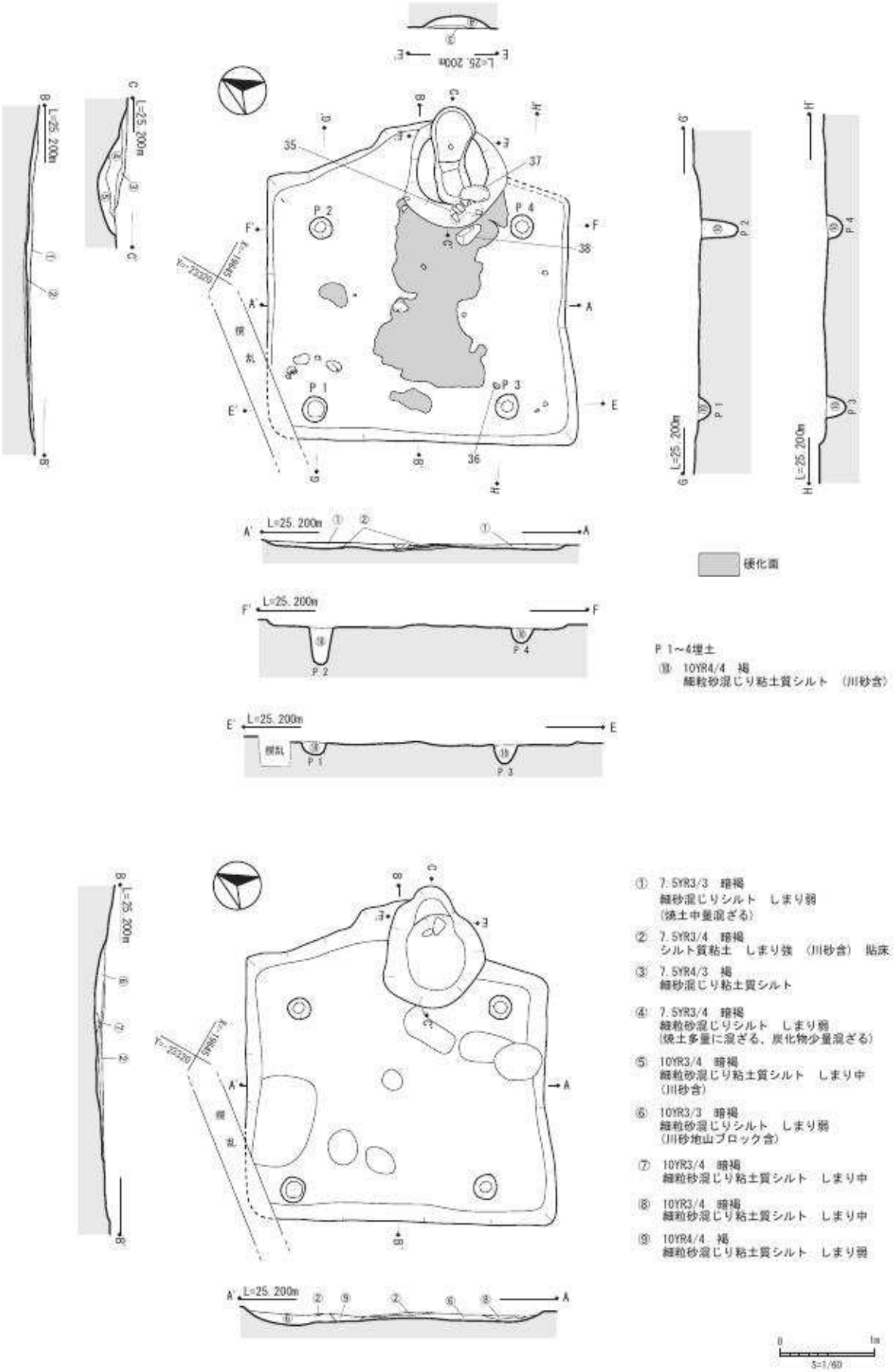
第22図　S-008完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図



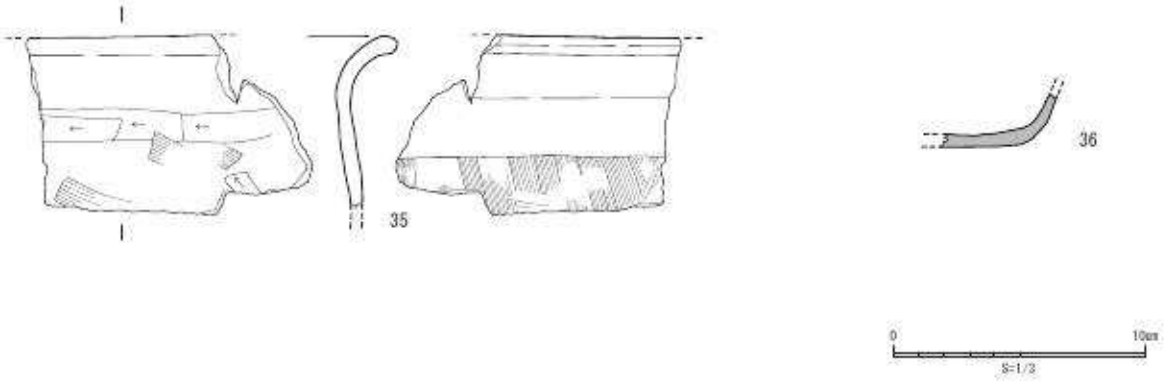
第23図　S-008出土遺物実測図1

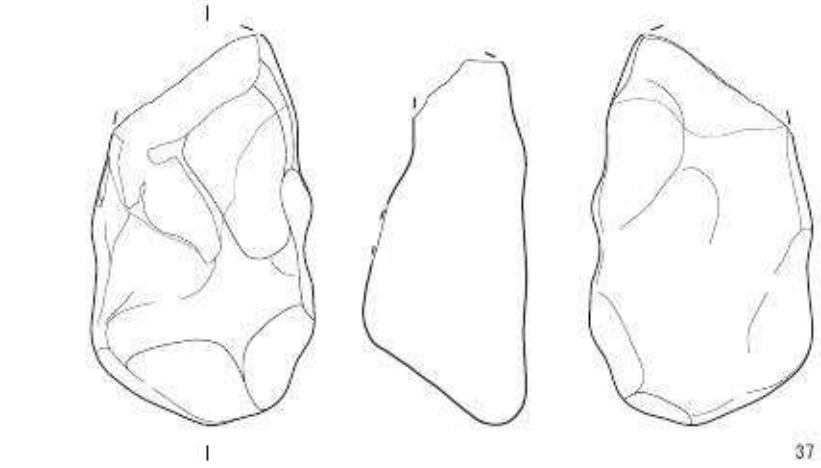


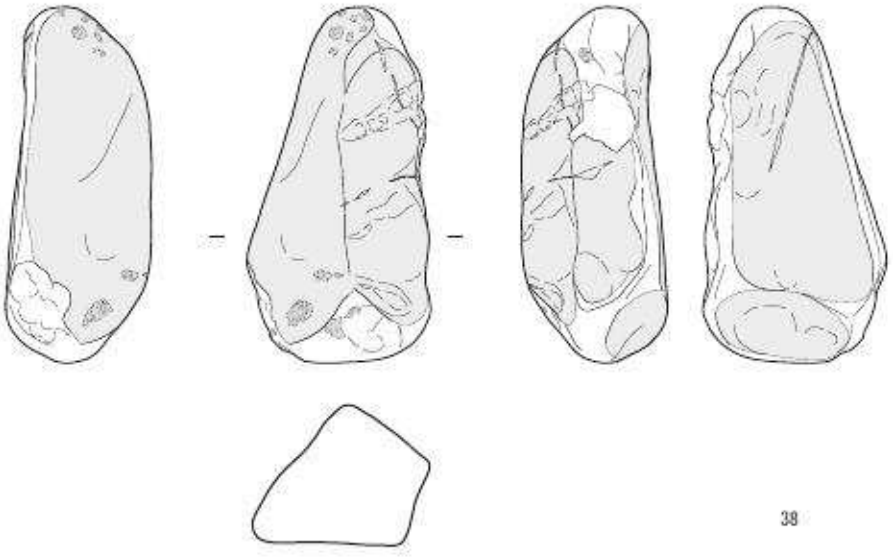
第24図　S-008出土遺物実測図2



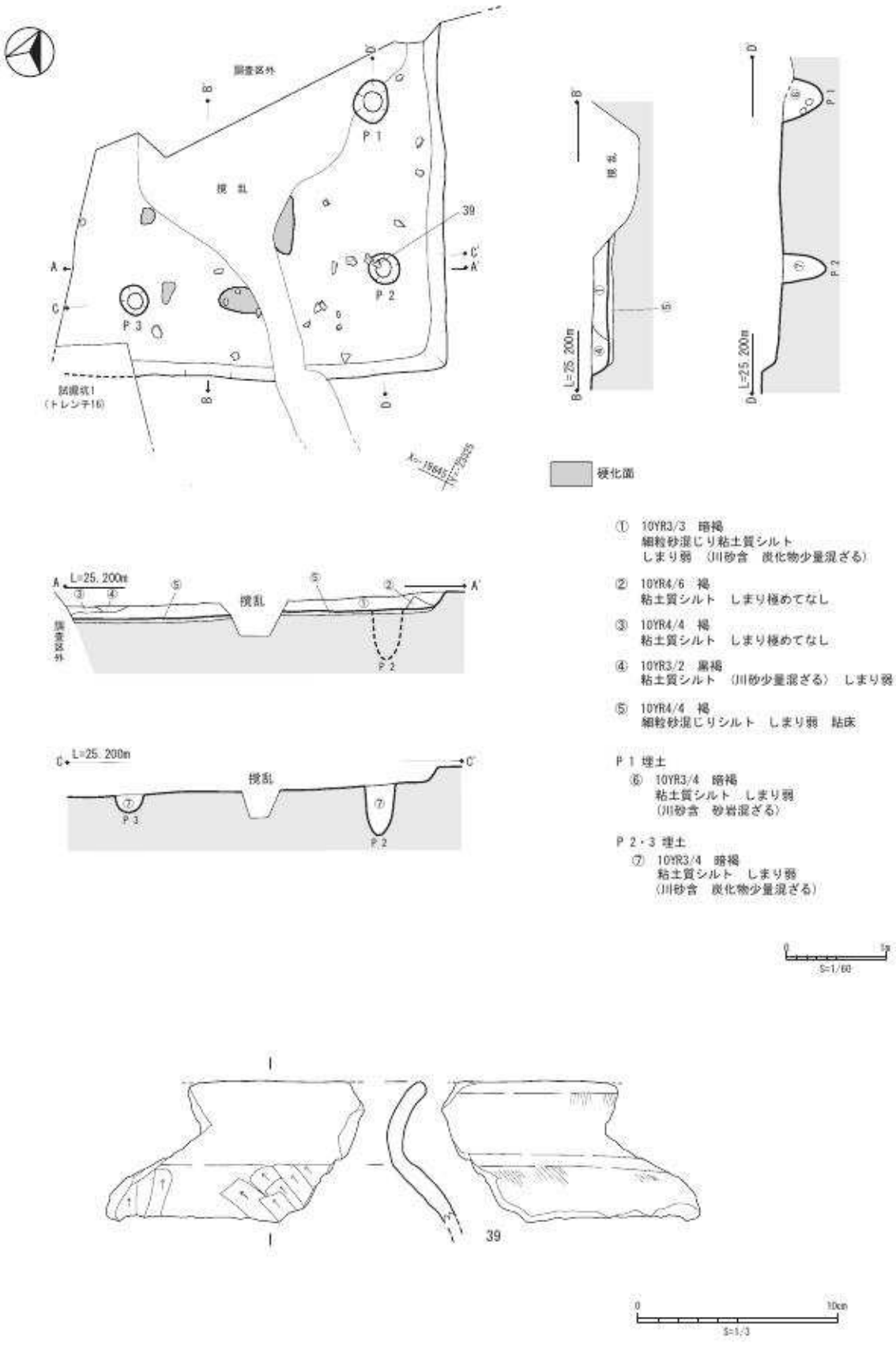
第25図　S-009完掘状況及び遺物出土状況



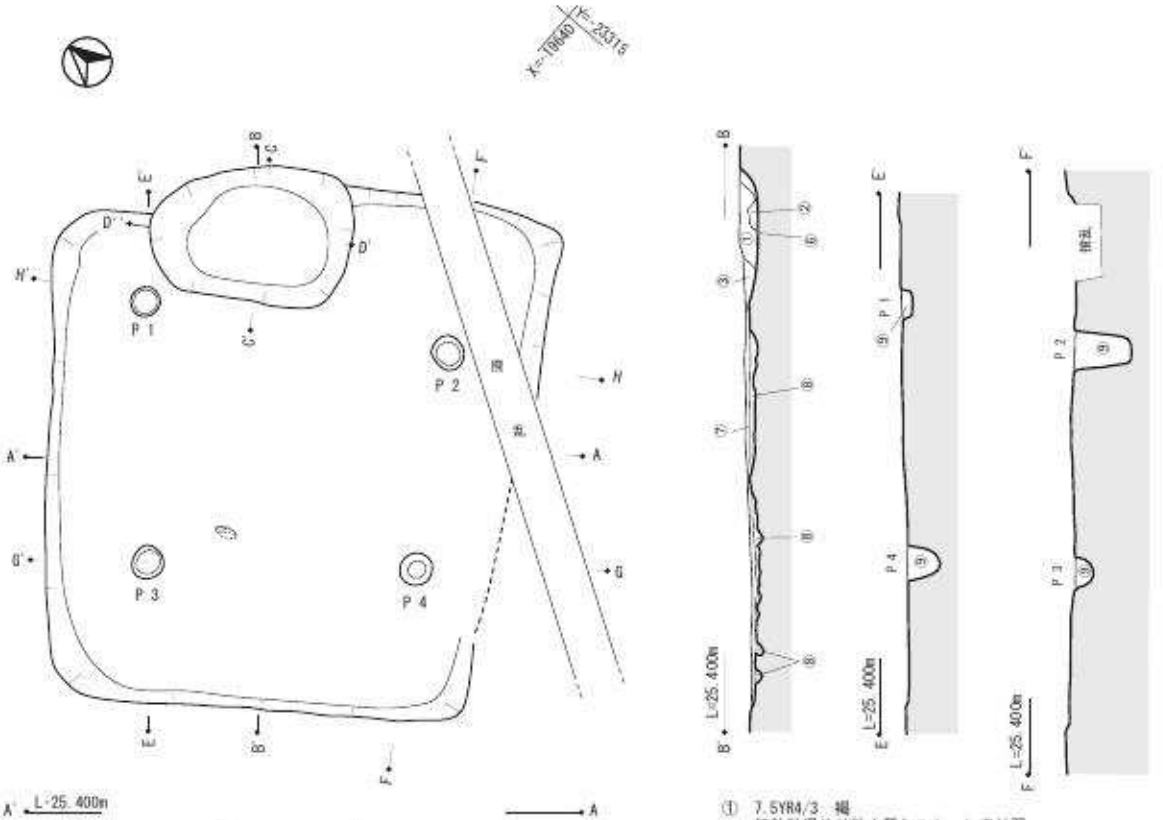




第26図　S-009出土遺物実測図



第27図　S-010完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図



① 7.5YR4/3 褐
細粒砂混じり粘土質シルト しまり弱
(焼土混じる)

② 10YR3/4 暗褐
細粒砂混じり粘土質シルト しまり中
(川砂・岩・炭化物少量混じる)

③ 10YR3/4 暗褐
細粒砂混じり粘土質シルト しまり普通
(焼土・炭化物中量混じる)

⑥ 7.5YR4/3 褐
細粒砂混じり粘土質シルト しまり中
(川砂含む)

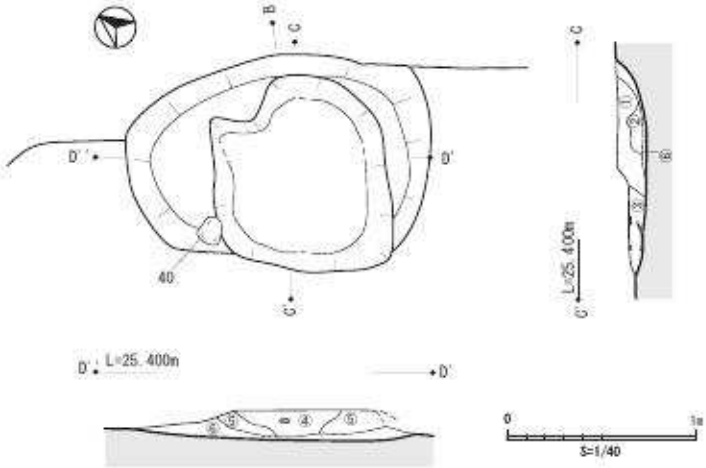
⑦ 10YR3/4 暗褐
細粒砂混じり粘土質シルト
(川砂含む)

⑧ 10YR4/4 褐
細粒砂混じり粘土質シルト しまり中

P 1～4 埋土
⑨ 10YR4/6 褐
砂質シルト しまり中

0 1m
S=1/60

第28図 S-011完掘状況



①7.5YR4/3 褐
細粒砂混じり粘土質シルト しまり弱
(焼土混じる)

②10YR3/4 暗褐
細粒砂混じり粘土質シルト しまり中
(川砂・岩・炭化物少量混じる)

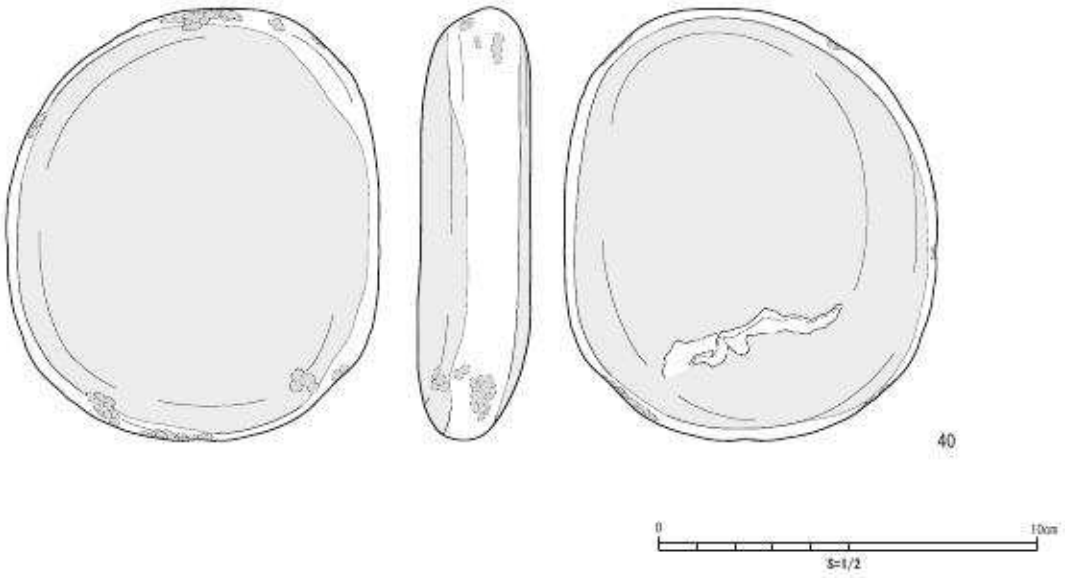
③10YR3/4 暗褐
細粒砂混じり粘土質シルト しまり普通
(焼土・炭化物中量混じる)

④①と同じ

⑤②と同じ

⑥7.5YR4/3 褐
細粒砂混じり粘土質シルト しまり中
(川砂含む)

第29図 S-011竈断面図及び遺物出土状況



第30図　S-011出土遺物実測図

S-016（S-011　第41・42図）

2工区中央にあたるj-24グリッドにて検出された。主軸はN-44°-E、長軸3.1m 短軸3.0mの方形を測る。遺構北東部に竈が存在するが、一部撹乱により消失している。竈近くに僅かであるが硬化面も確認された。また遺構西側には溝状の掘り込みがあり、これは住居地構築の際の最初の掘り込みであろう。

54は須恵器蓋で天井部は平たく、つまみは平坦である。また口縁端部はやや屈曲し内側に至る。55は小型の磨石で平面に窪みと側面にも僅かながら磨痕が確認される。片手で簡単に操作できる形状と重量からコンパクトな砥石としても使用したのであろう。56は敲石であるが平面に擦痕も認められることから、磨石としても使用したのであろう。

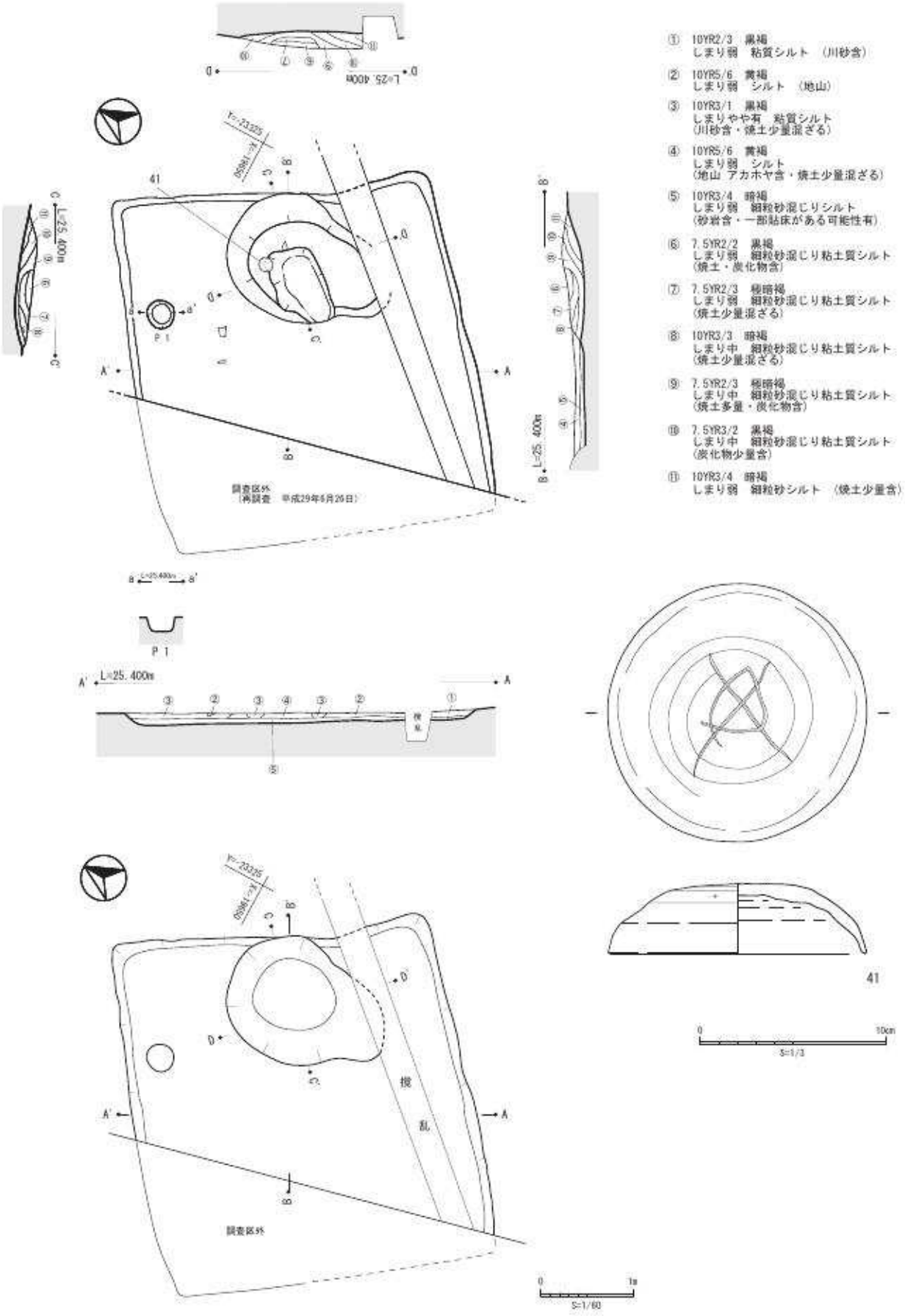
S-017（S-014　第43・44図）

2工区中央にあたるi・h-22グリッドにて検出された。主軸はN-51°-W、一辺2.8mの方形を測る。遺構全体に硬化面が確認されたが、竈や炉は検出されなかった。出土遺物から古代の住居と想定した。また第44図は下層の状況であるが、段差があるのは住居構築の際の掘り込み痕跡であろう。

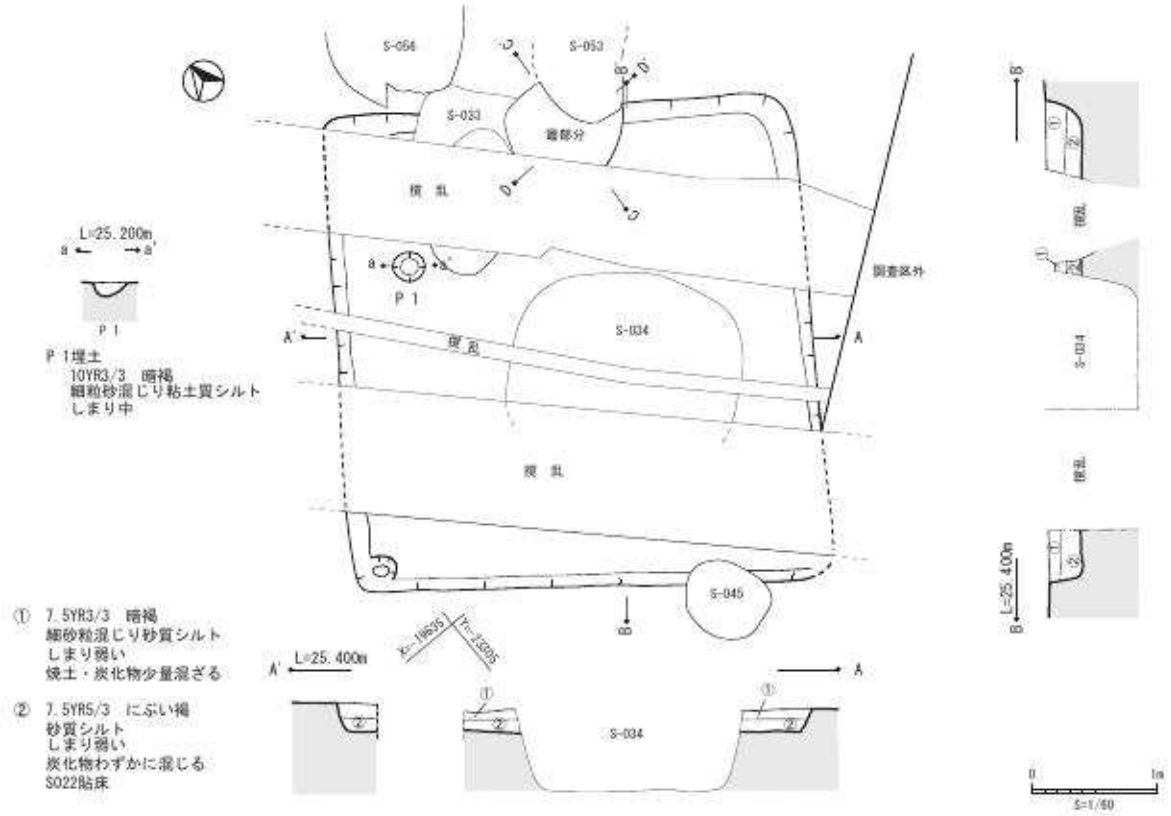
57・58は須恵器である。57は蓋でつまみ部は凸線を輪状に巡らせたもので、天井部は比較的平坦で、中位から端部附近にかけて下行し、さらにやや内側に曲げられ端部に至る。58は甕の口縁部から頸部資料で内面は連続した同心円状の叩きが見られる。また石器の59は胡桃大の大きさで、上面に溝状と背面に平坦な擦痕が確認されることから、手に収めながら対象物を磨く可動式の砥石として用いたのであろう。

S-018（S-015　第45・46図）

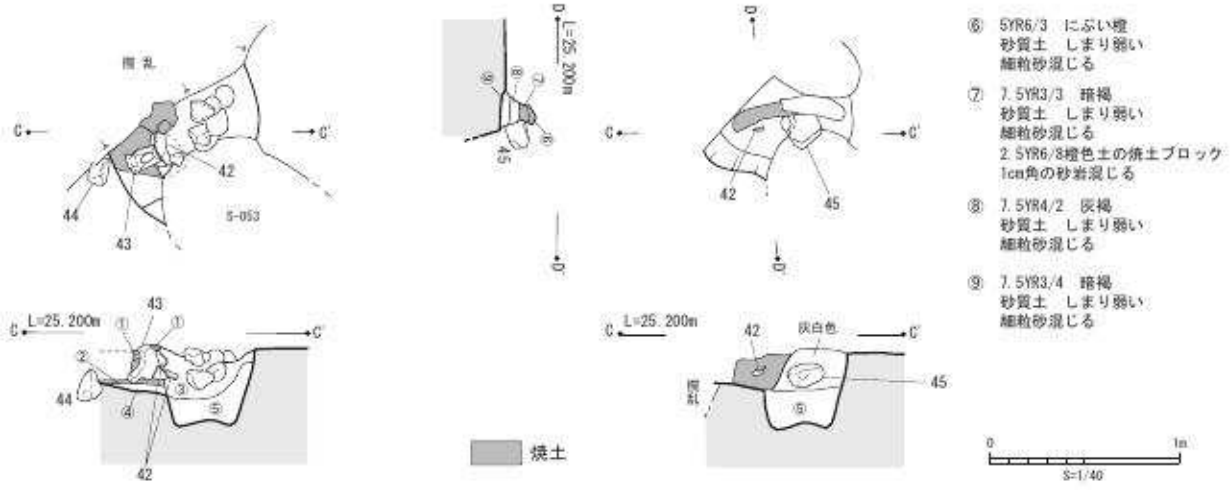
2工区中央にあたるi-22グリッドにて検出された。主軸はN-35°-E。これも一辺2.6mの方形を測る。竈の周囲に硬化面も確認されたが、柱痕跡は確認できなかった。60は移動式竈の庇部片で二次焼成を受け、一部煤煙によるものか黒色化している。胎土は極めて粗く粗製の感を受ける。大型器であるため粗大な造りとなったのであろうか。61は楕円形を呈した磨石で平面を主とし、また側面も使用している遺物である。片手での操作が可能な重量と形状である。62は大型の敲石で端部は激しく使用した打痕が残る。また平面は磨痕があることから面としての磨りも行われたが、一部 打痕も認められる。

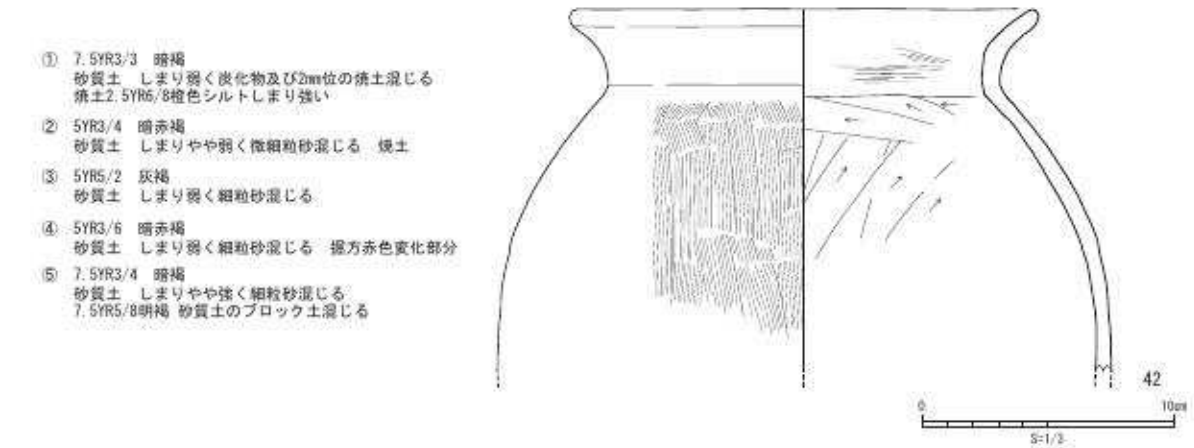


第31図　S-012完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図

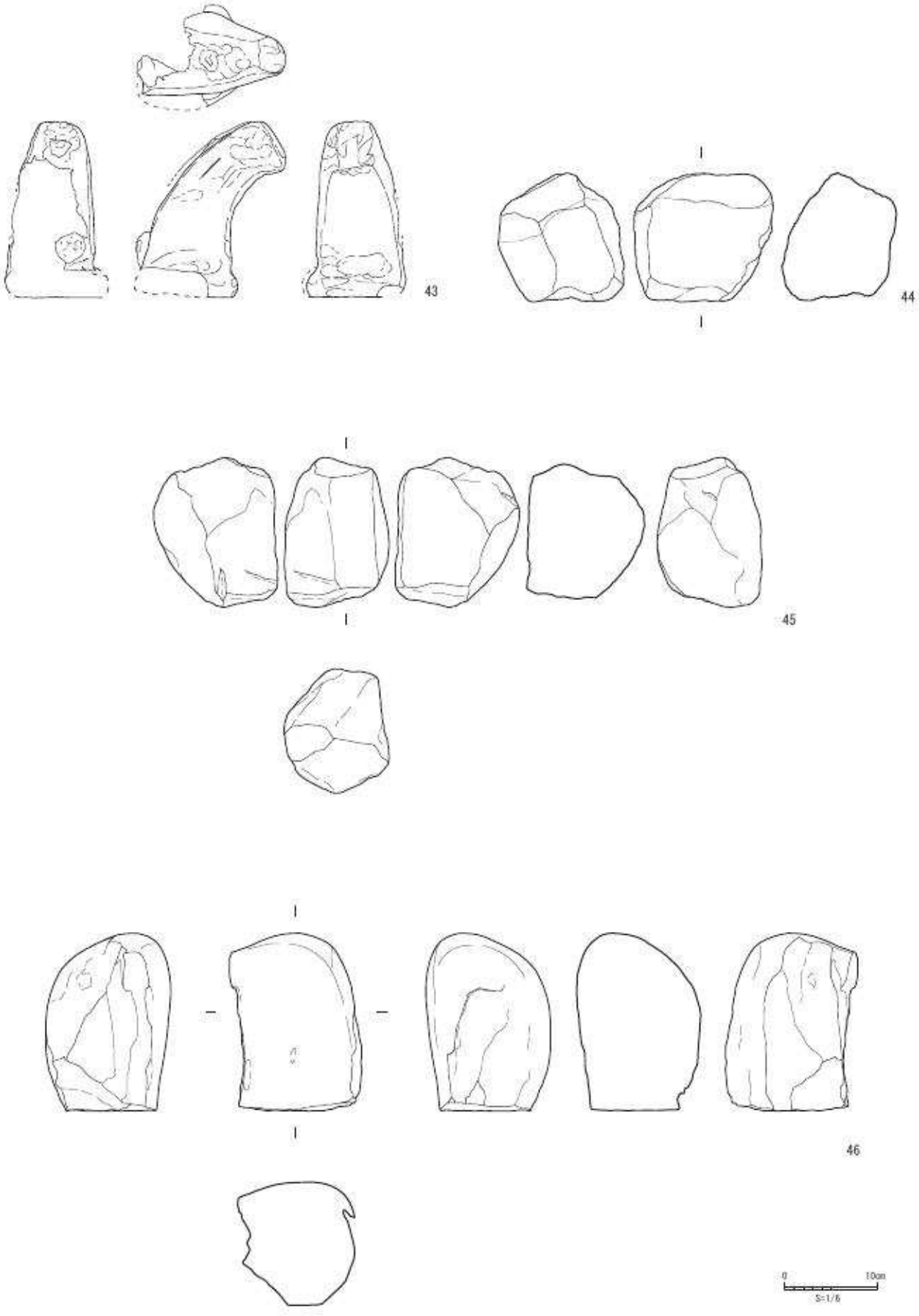


第32図　S-013完掘状況

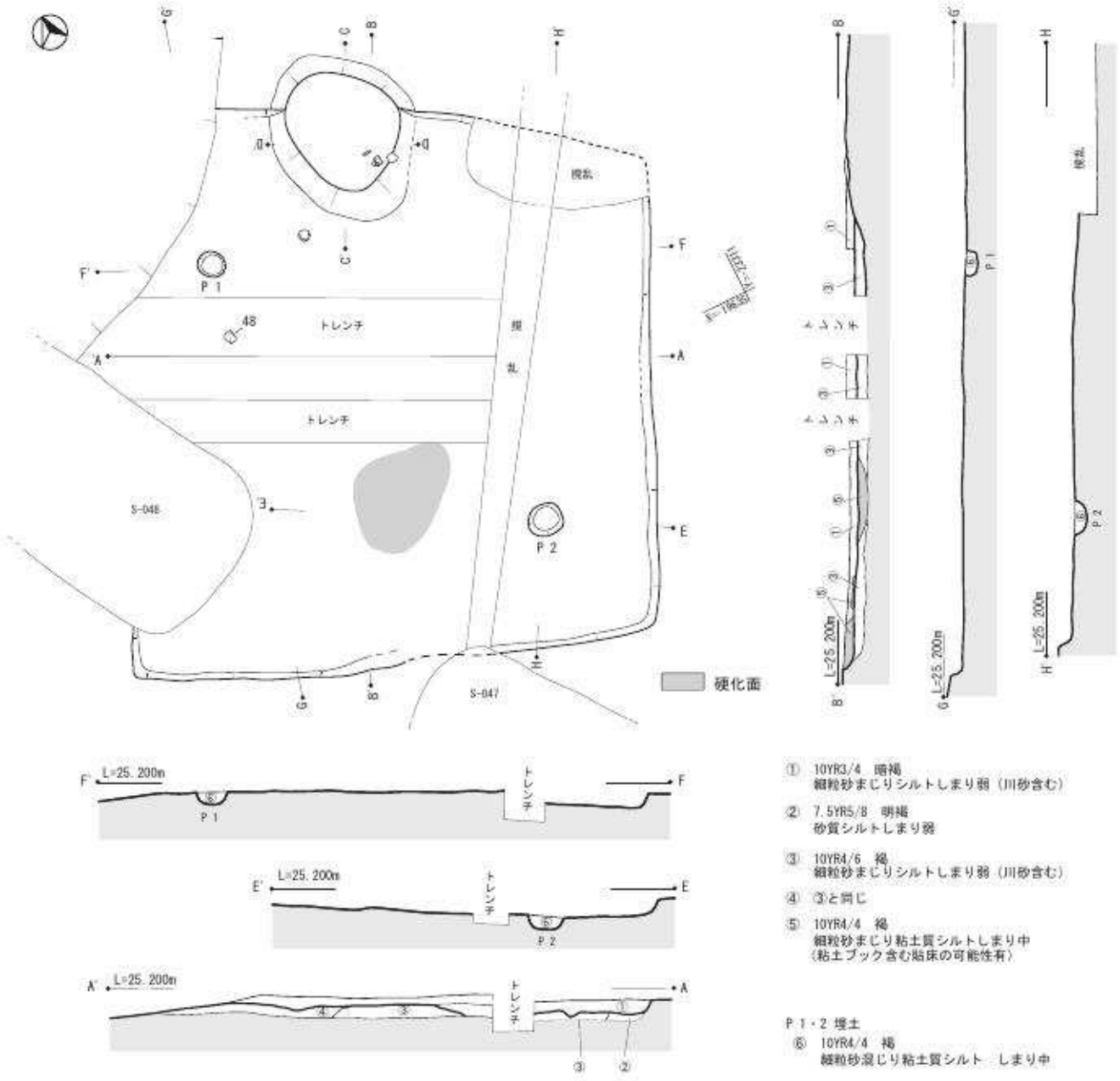




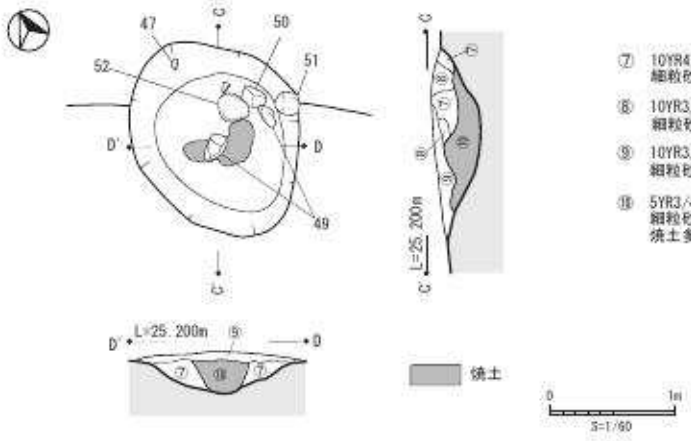
第33図　S-013竈実測図・遺物出土状況及び遺物実測図



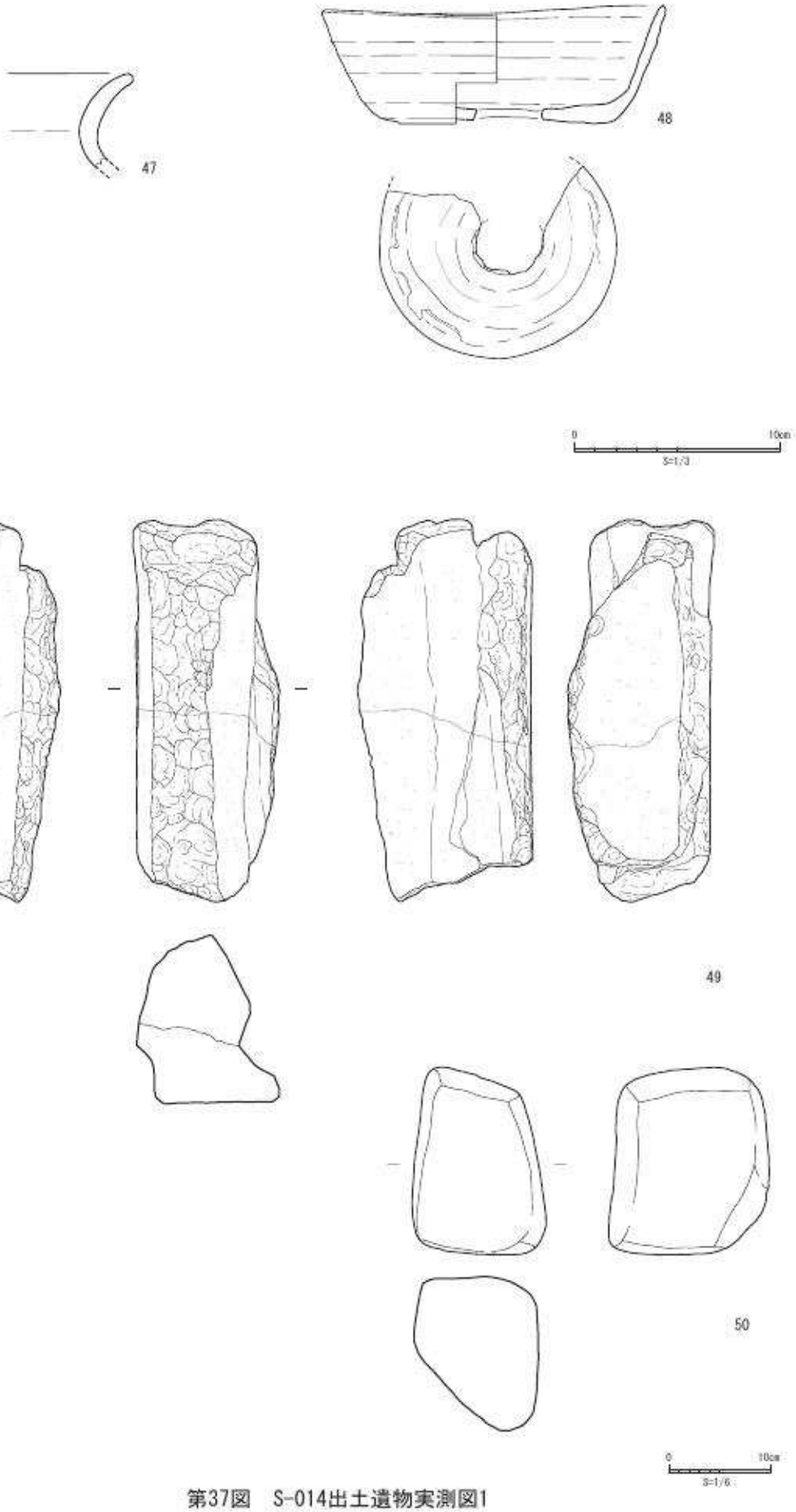
第34図　S-013出土遺物実測図



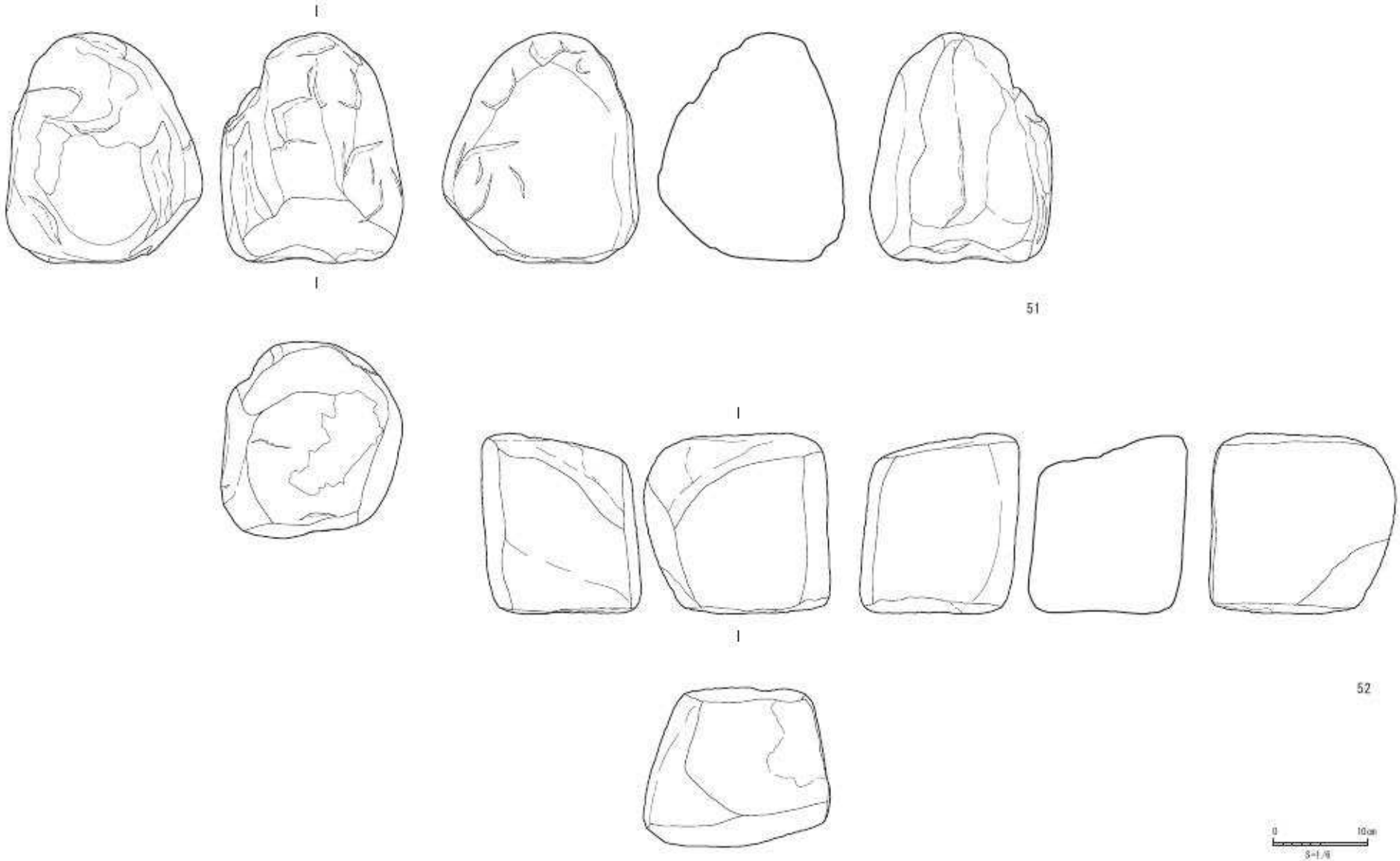
第35図　S-014完掘状況



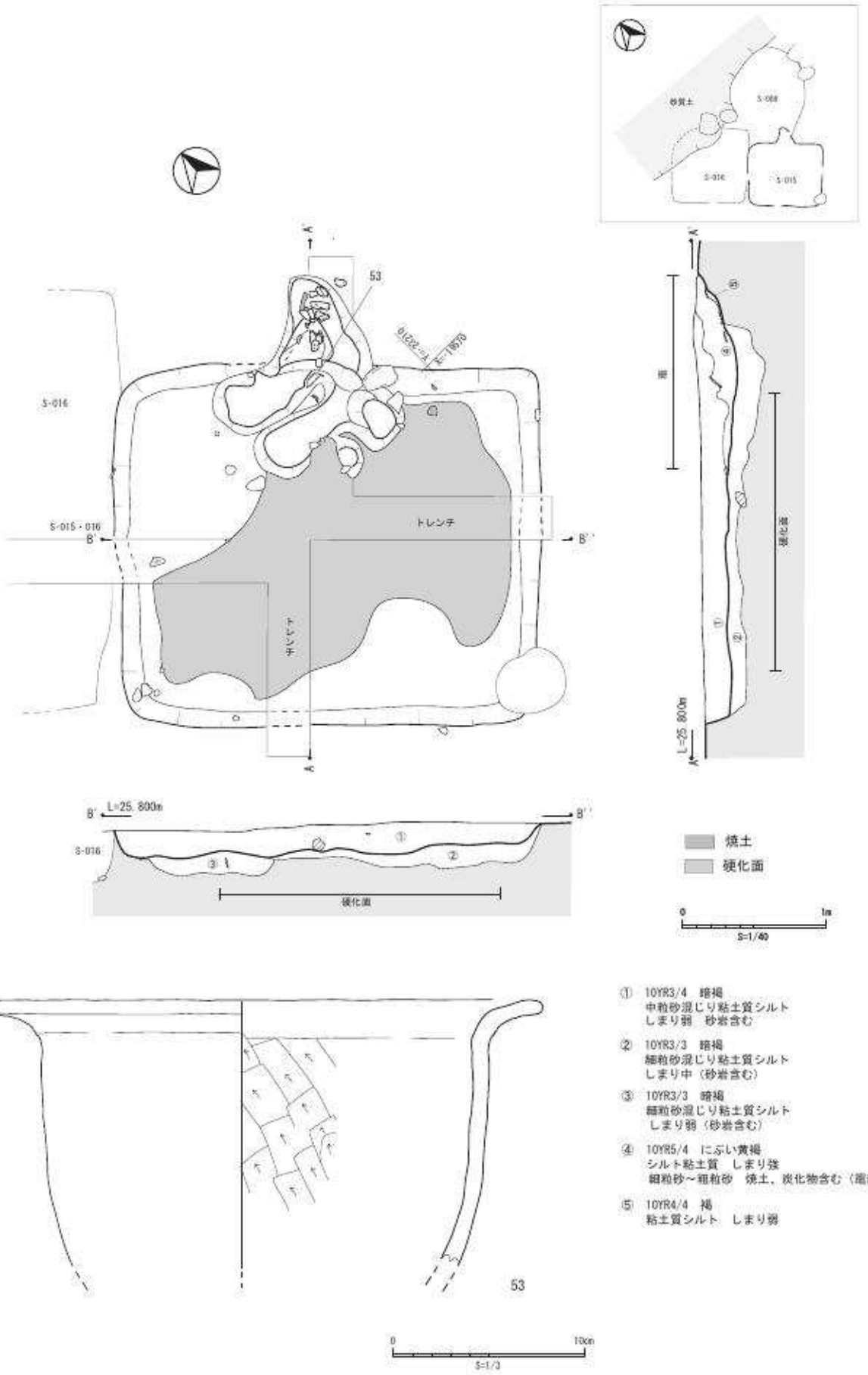
第36図　S-014竈実測図・遺物出土状況及び遺物実測図



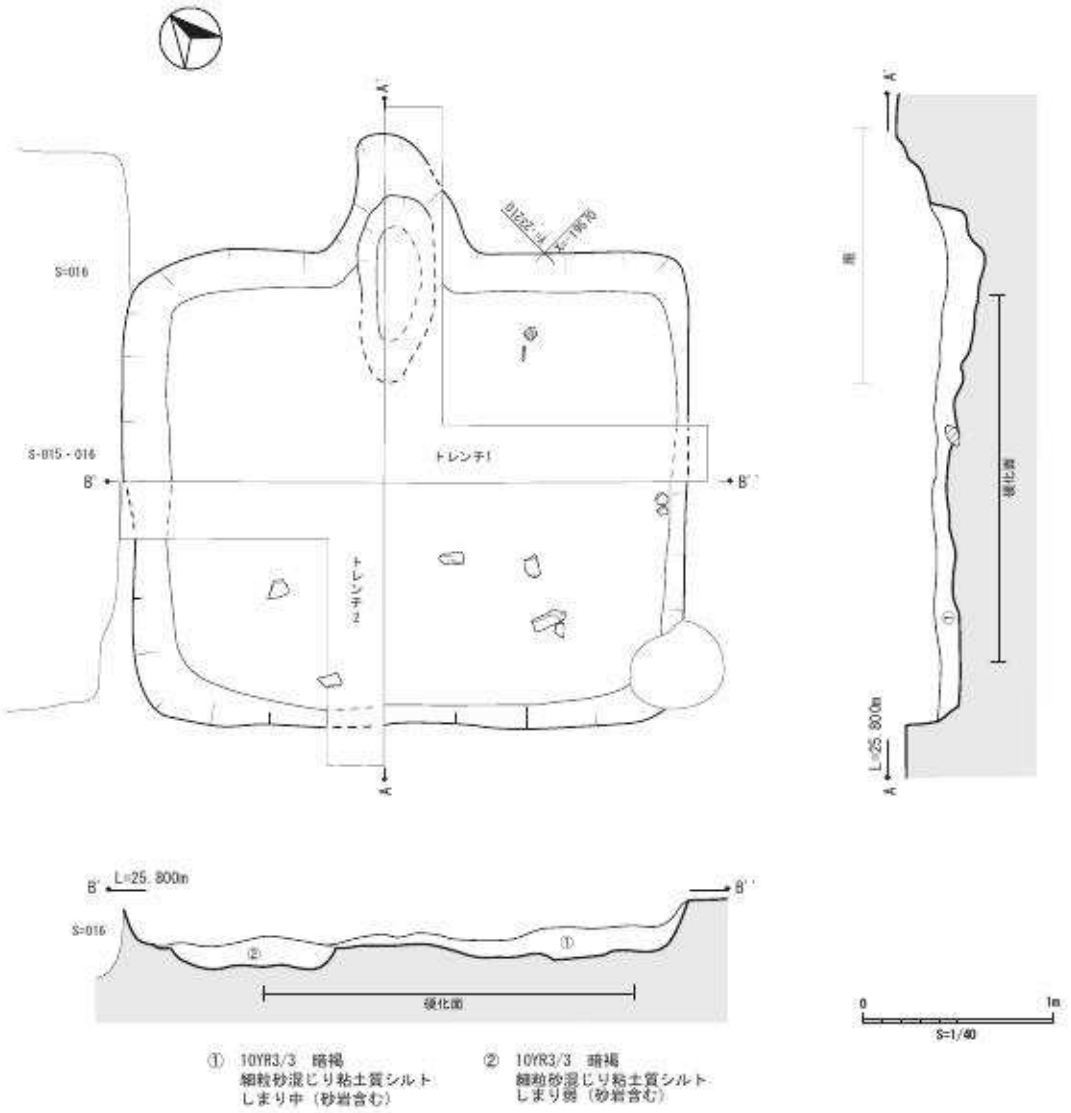
第37図　S-014出土遺物実測図1



第38図　S-014出土遺物実測図2



第39図　S-015床面検出状況・遺物出土状況及び遺物実測図



第40図　S-015完掘状況・遺物出土状況

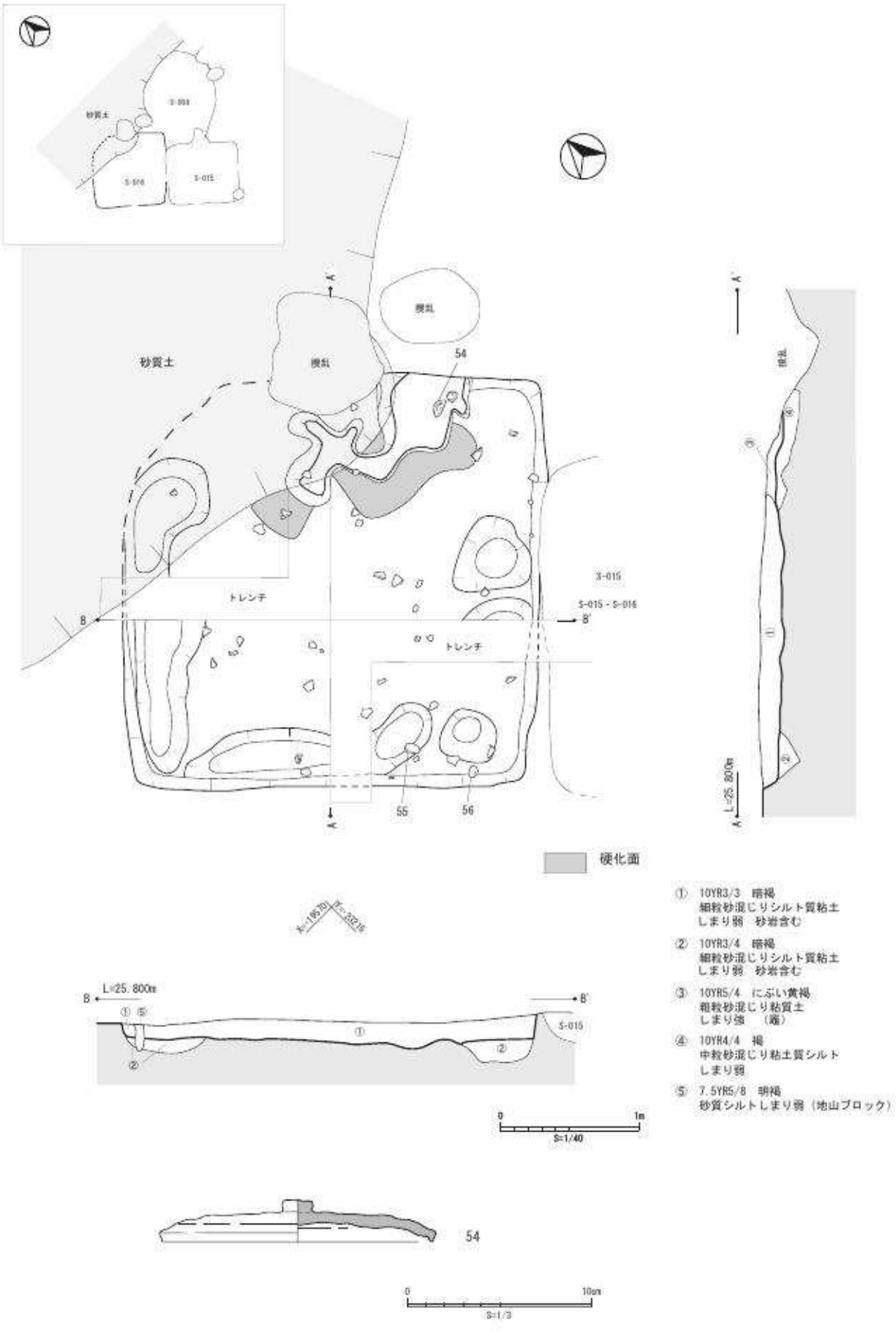
S-019（S-016　第47・48図）

2工区中央にあたるi-21・22グリッドにて検出された。主軸はN-40°-E、長軸3.7m 短軸3.2mの長方形を測る。遺構南側をS-021により一部切られている。竈付住居で竈周辺には硬化面が確認された。P 1に対応する柱が存在したであろうが、前述したS-021により消滅したのならば2本柱の住居地として想定される。

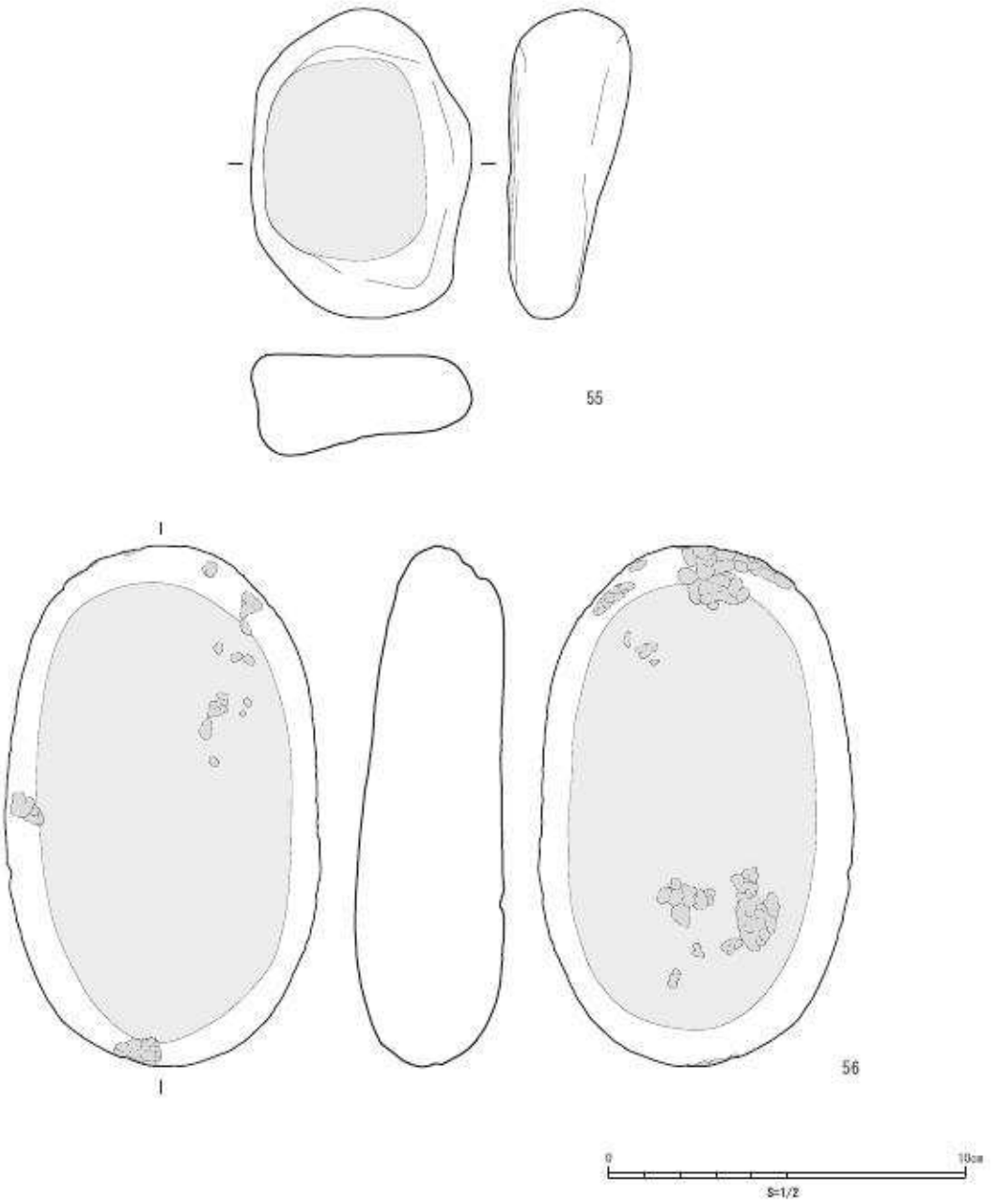
63は本遺跡では平均的な形状の磨石で両面を顕著に使用している。この遺物はまた炭化物付着が見られ、これにより火熱を受けていたことが想定され、その出土位置も竈に近い。64は小型の石錘である。

S-020（S-032　第49図）

2工区西側にあたるB・C-8グリッドにて検出された。S-049により大きく削平されているため、詳細は不明であるが、残存プランから一辺3 mほどの住居地であろう。主軸はN-28°-E、埋土は薄く、また下位層はインボリューションも見られることから、住居地構築の掘り込みが僅かに残存したのであろうか。土師器坏片（65）から古代の竪穴住居跡と想定した。



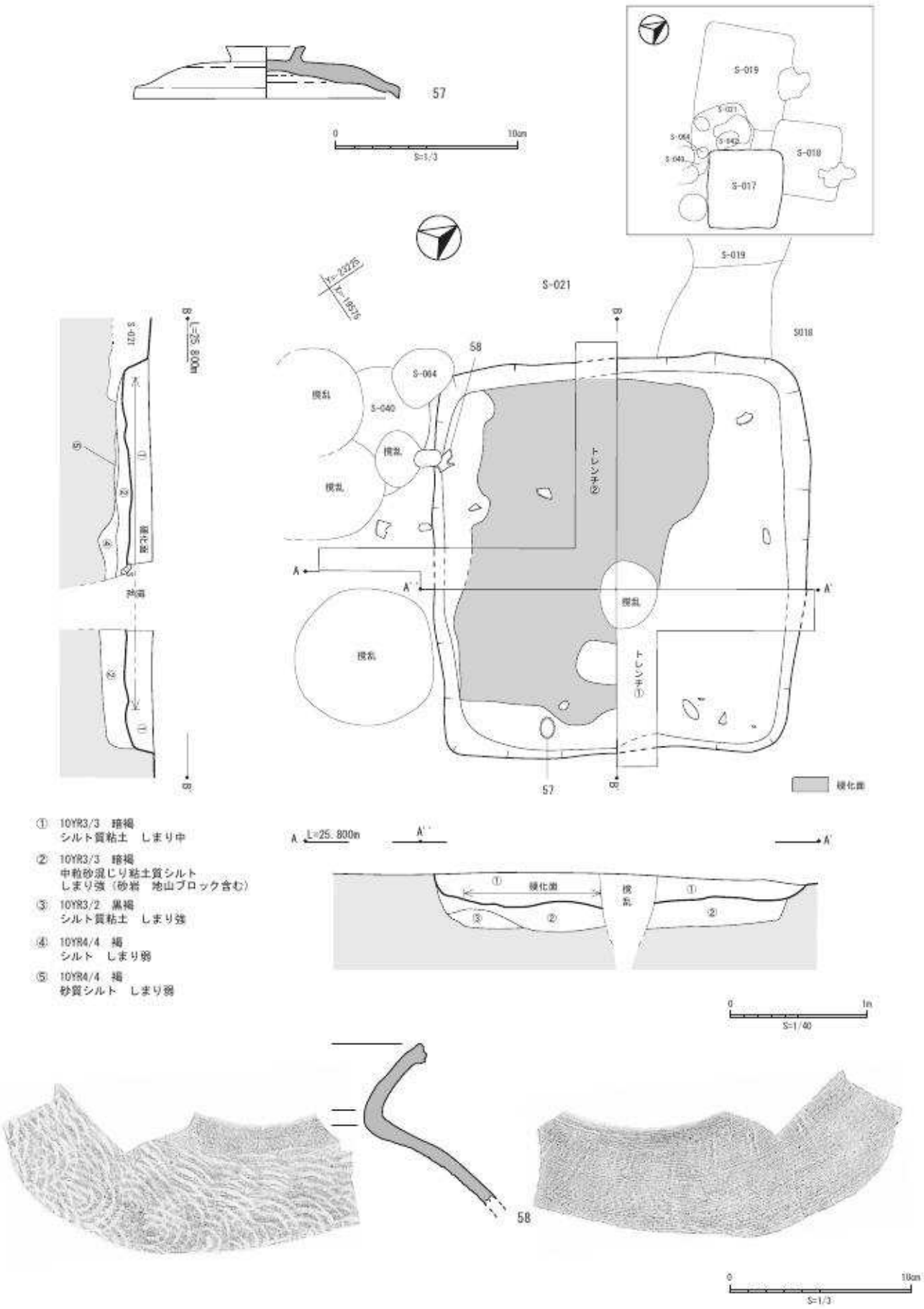
第41図　S-016床面検出状況・遺物出土状況及び遺物実測図



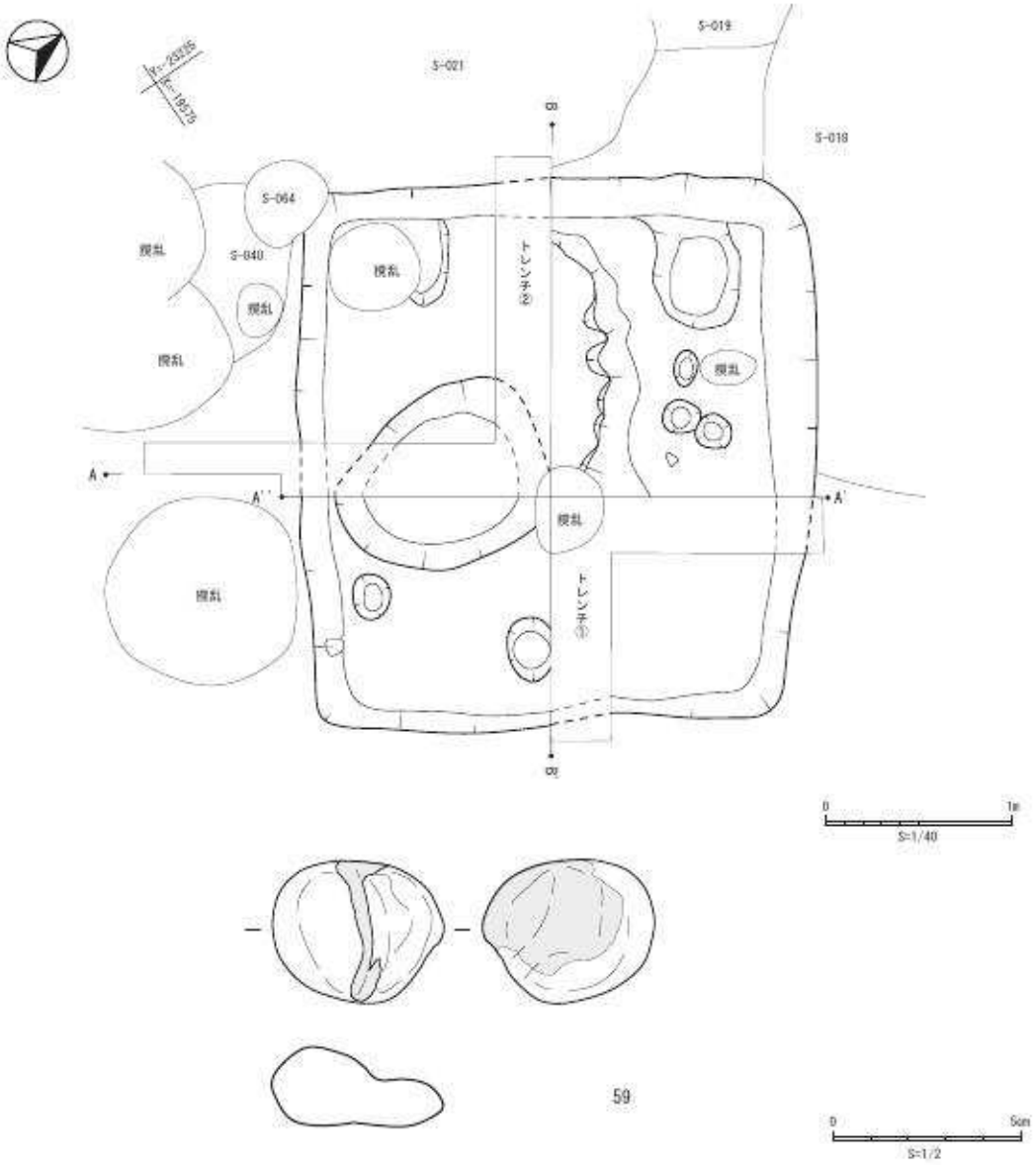
第42図　S-016出土遺物実測図

S-021（S-038　第50図）

2工区中央にあたるi-21・22グリッドにて検出された。主軸はN-21°-E、長軸2.8m 短軸2.2mの隅丸方形を測る。遺構東部をS-017など多くの遺構に切られているが、そのプランは復元を想定できる。遺構北東部に粘質土層が検出されたことから、竈の粘土が崩壊し流れ込んだのであろう。本来はこの方向にさらに竈痕跡の存在を窺わせる。竈粘土層からは、土師器甕（66）が出土した。竈内であるため煮炊き用の土器として想定される。



第43図　S-017硬化面検出状況・遺物出土状況及び遺物実測図



第44図　S-017完掘状況及び出土遺物実測図

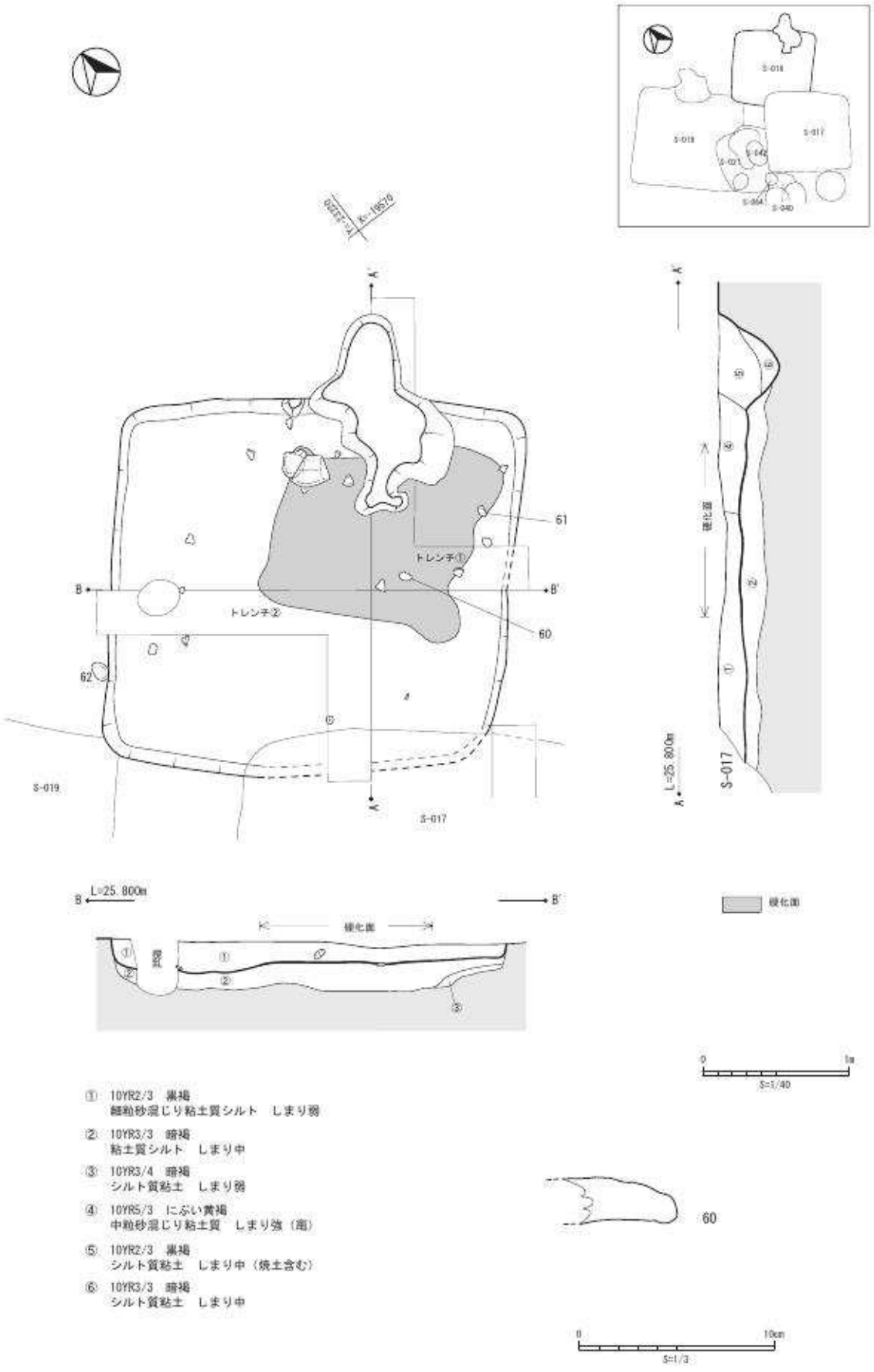
S-022（S-013　第51図）

2工区西側にあたるh・i-23、h-22グリッドにて検出された。遺構の半分以上は調査区外で一辺2.6mの方形、残存は三角形の全体に硬化面とピットが確認された。主軸はN-55°-Eの方、長方形住居地を想定させる。

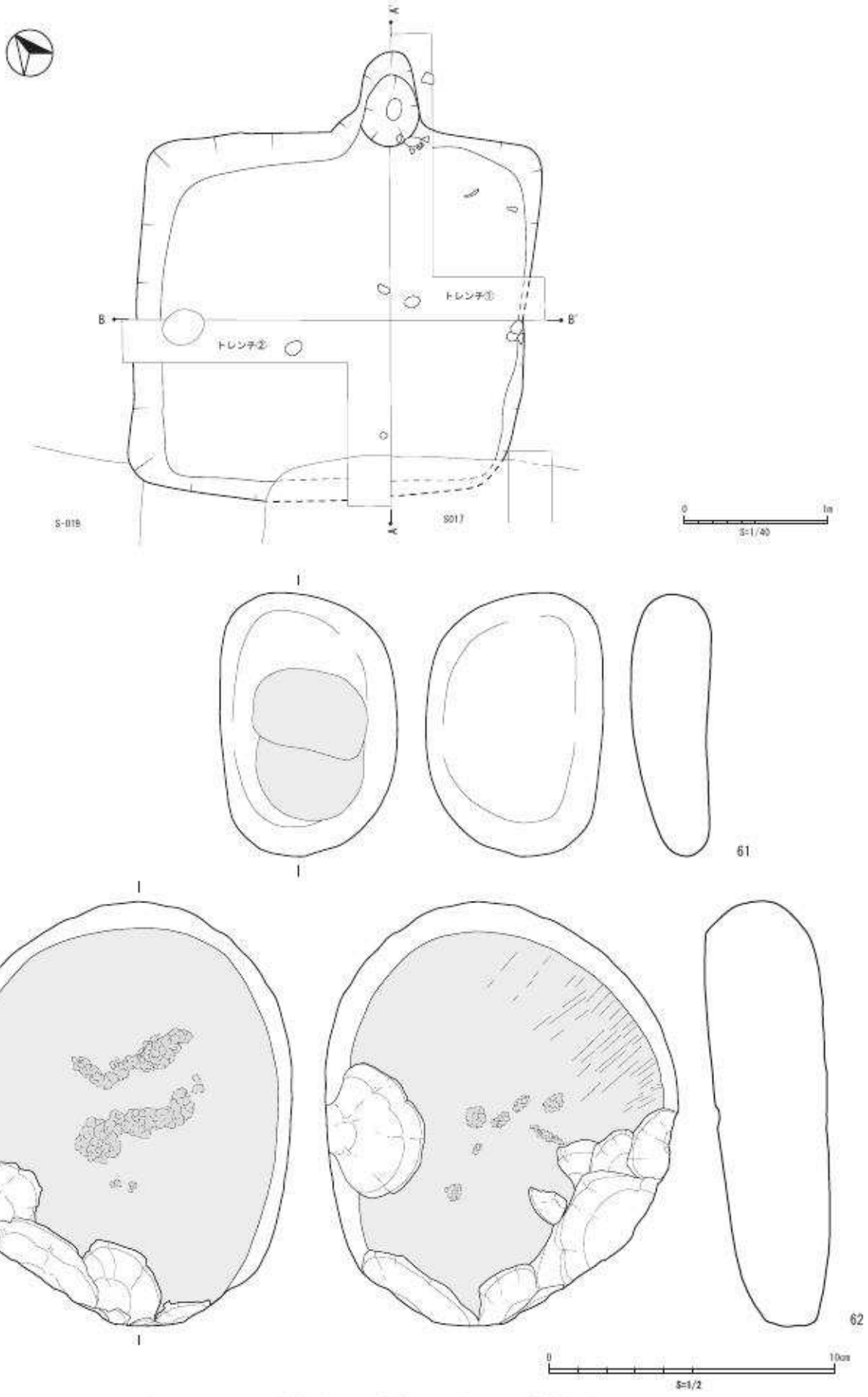
68は穿孔部存在やその残存形状から原形は不明であるが、孔のある石製品とした。材質は不明であるが気泡の多い火山岩質で、発色は10R4/8赤（標準土色帖）。その形状、発色から装飾品の可能性も否定できない。67は小型の磨石であろう。

S-023（S-029　第52図）

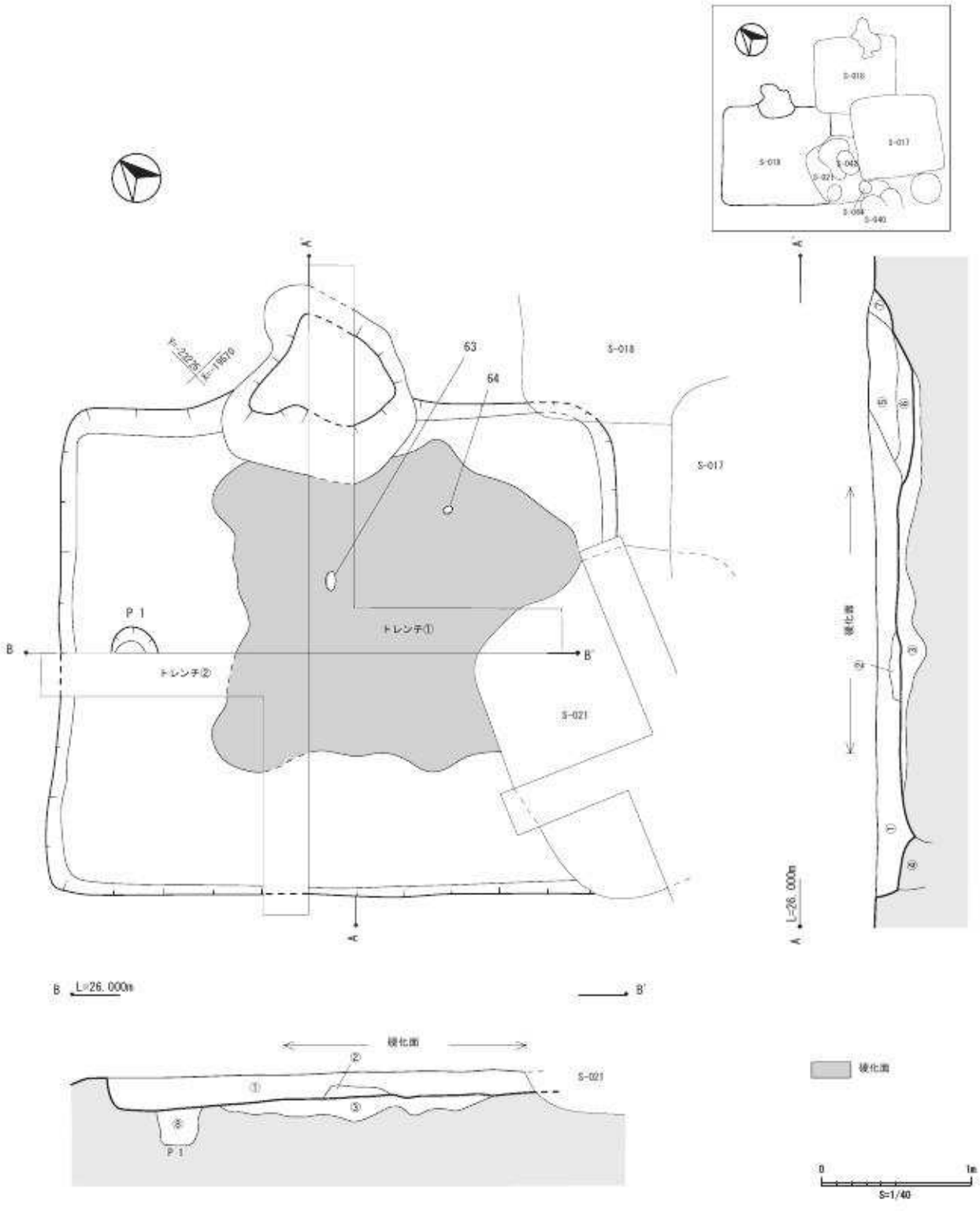
2工区西側にあたるd-13・14、e-14グリッドにて検出された。遺構の北西側を後世の削平により損失している。主軸はN-70°-W、長軸残存3.2mと短軸4.2mから隅丸方形プランであろうか。P1はやや大きめであるが、その掘り込みから柱痕跡であろう。69は径4.8cm 厚さ1.6cm、中央に穿孔が施されているため紡錘車である。胎土は精製され、磨き調整も施されている。しかし遺物はこれのみである。炉痕跡が見当たらないのは、削平された箇所に竈の存在を想定させ、また紡錘車の精製された胎土から弥生期ではなく、それ以降の時期の住居と仮想定し、ここに配置した。



第45図　S-018床面検出状況・遺物出土状況及び遺物実測図



第46図　S-018完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図



① 10YR3/3 暗褐
中粒砂混じり粘土質シルト　しまり弱

② 10YR4/3 にぶい黄褐
細粒砂混じり粘質土　しまり強（亜角礫がい）

③ 10YR4/4 褐
シルト　しまり弱

④ 10YR3/3 暗褐
粘土質シルト　しまり中

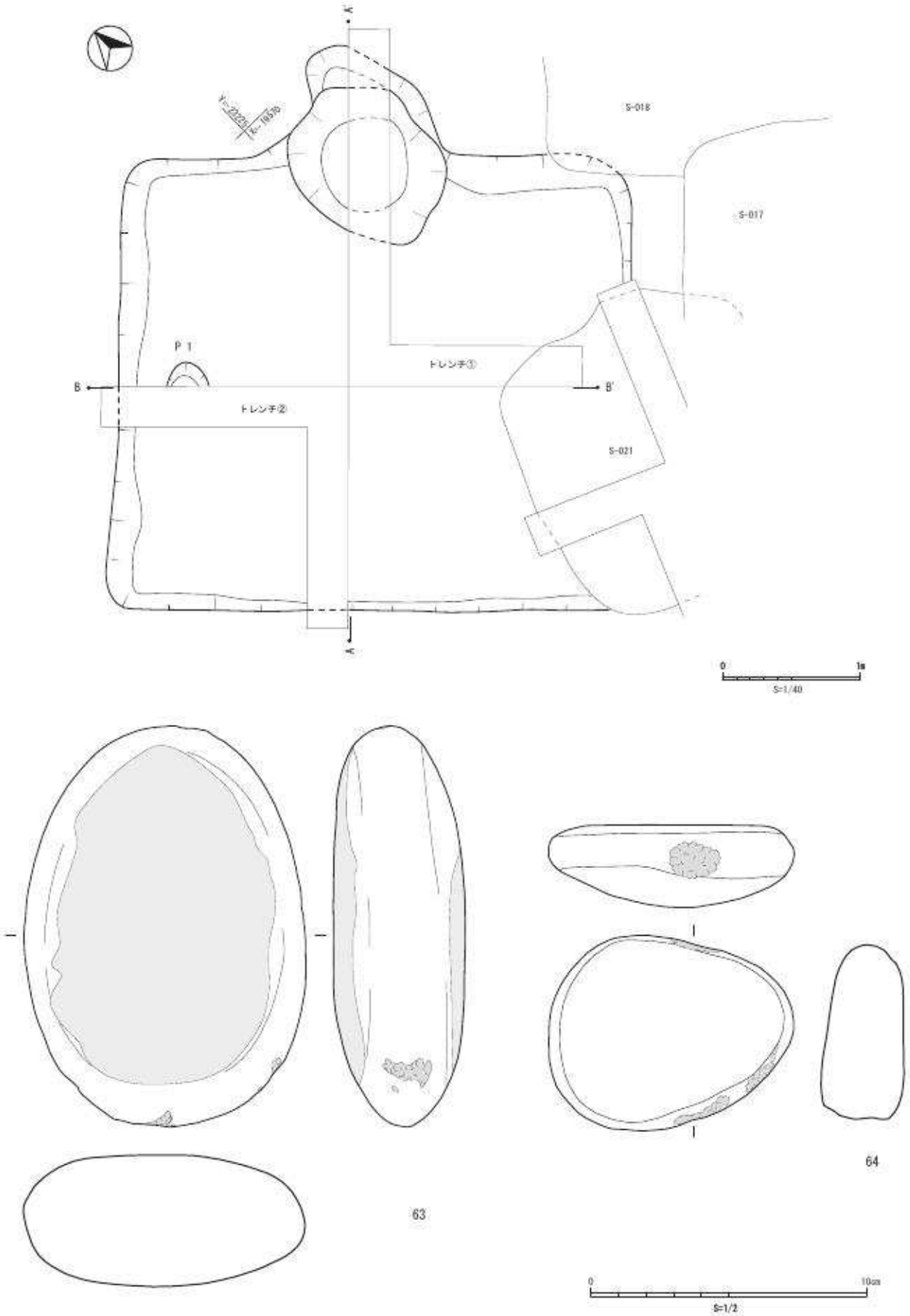
⑤ 10YR6/4 にぶい黄橙
粘土質シルト　しまり中（焼土混じる）（亜）

⑥ 10YR4/3 にぶい黄褐
粘土質シルト　しまり中（焼土混じる）
（竈底部と思われる）

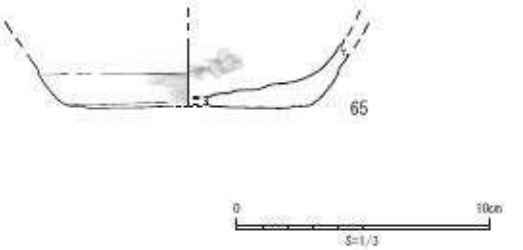
⑦ 10YR3/4 暗褐
細粒砂混シルト質粘土　しまり弱

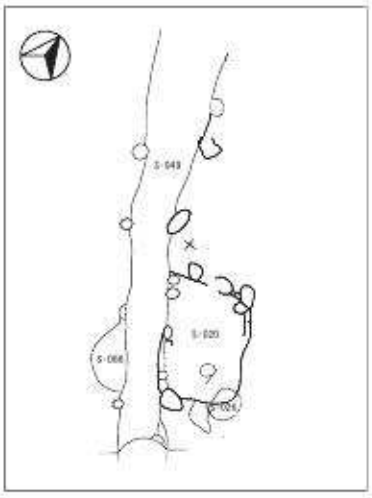
P 1埋土
⑧ 10YR3/4 暗褐
粘土質シルト　しまり弱

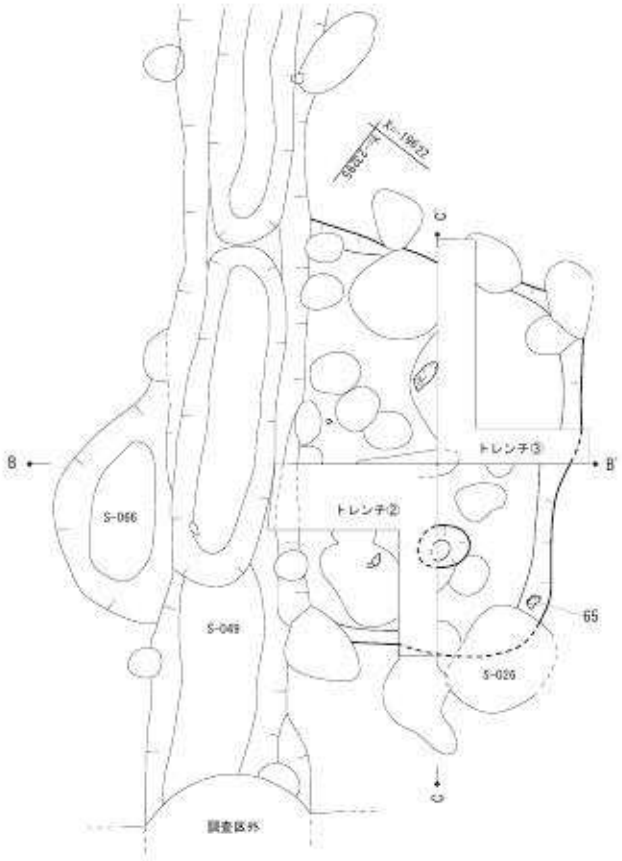
第47図　S-019完掘状況及び遺物出土状況

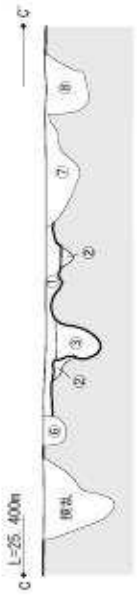


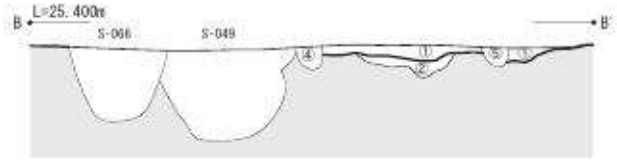
第48図 S-019完掘状況及び出土遺物実測図











① 10YR3/4 暗褐
中粒砂混じり粘土質シルト しまり弱

④ 10YR3/4 暗褐
シルト しまり弱

② 10YR4/4 褐
中粒砂混じり粘土質シルト しまり中

⑤ ④と同じ

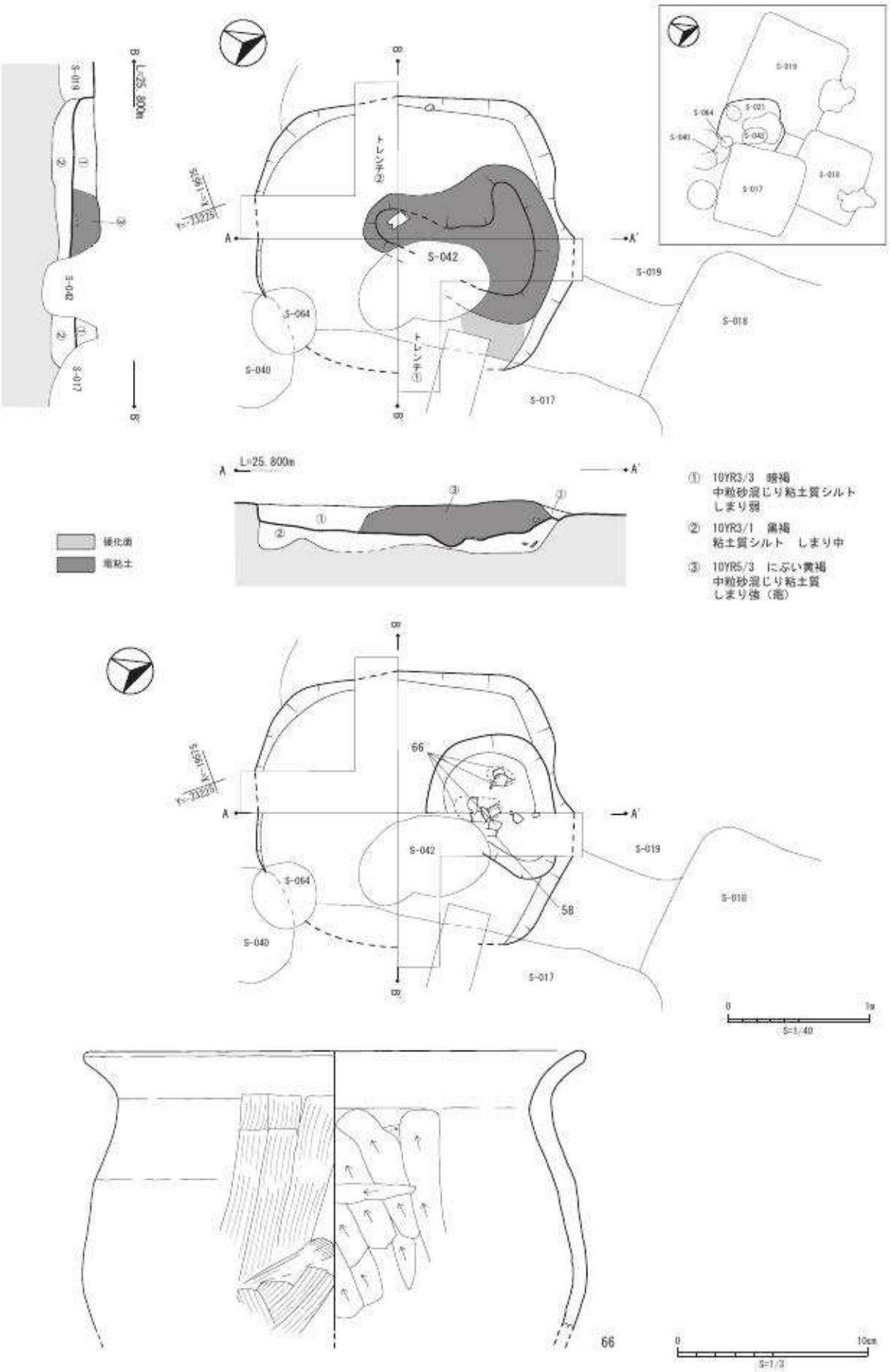
⑥ 10YR3/4 暗褐
細粒砂混じり粘土質シルト しまり強

③ 10YR3/3 暗褐
粘土質シルト しまり弱

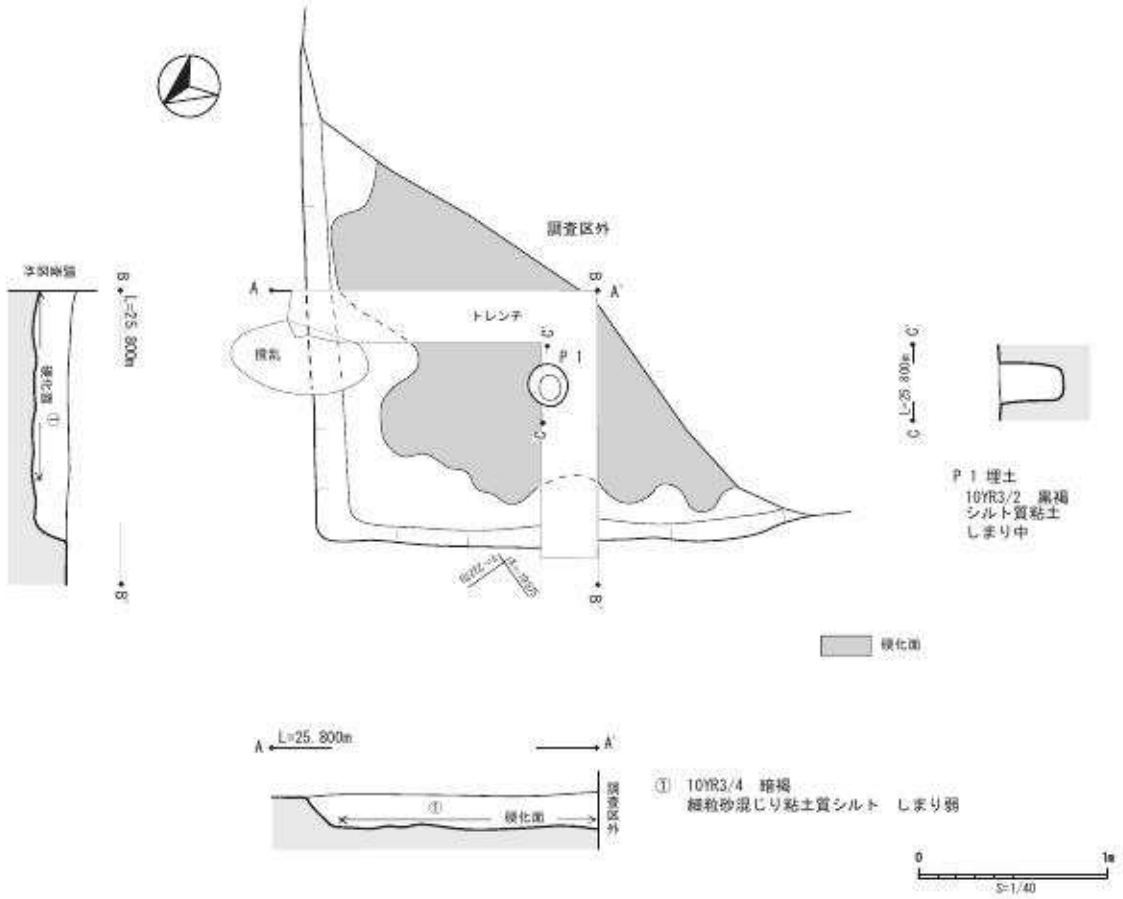
⑦ 10YR2/2 黒褐
細粒砂混じり粘土質シルト しまり中 (地山ブロック含)

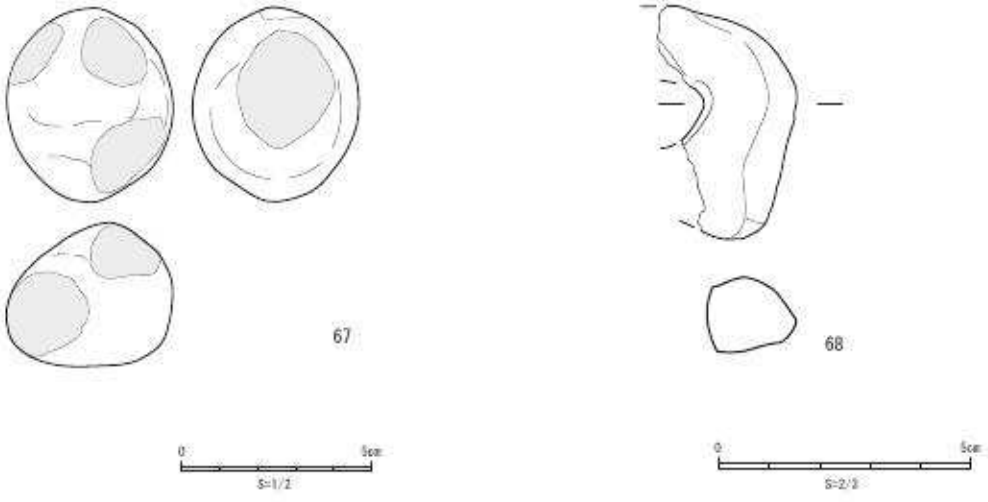
⑧ 10YR3/3暗褐
細粒砂混じり粘土質シルト しまり中 (地山ブロック・砂岩含)

第49図 S-020完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図

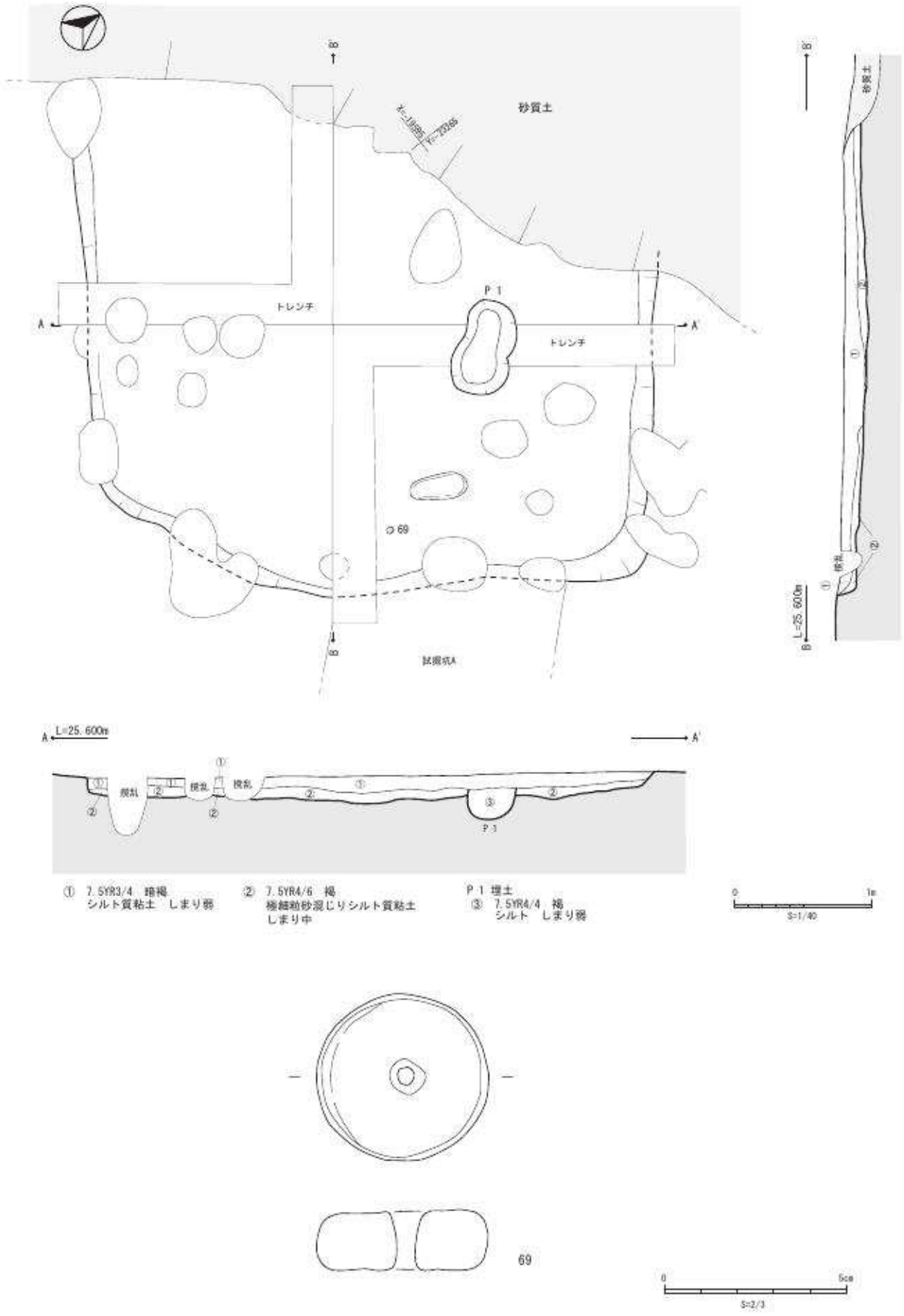


第50図　S-021完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図





第51図　S-022完掘状況及び出土遺物実測図



第52図　S-023完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図

（土坑）

S-024（S-028　第53図）

1工区F-4グリッドにおいて検出された土坑である。平面形態は不定形を呈し、断面形態は皿状を呈する。長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.2mの規模である。主軸はN-150°-Eである。

遺構検出時に焼土を多量に検出した為、竪穴住居跡の竈と考え調査を開始した遺構である。竪穴住居であれば東壁に付随する竈と考え、S-024より西側を中心に検出を繰り返した結果、竪穴住居跡のプランは確認出来なかった。第⑤、⑦層以外は焼土を多量に含むため、住居燃焼部（竈）の一部が残存したと考えるのが自然であろう。

70は須恵器皿で底部は回転ヘラ切りである。全体の発色はにぶい黄橙色で焼成時の低温によるものであろう。71は竈支柱の破片であり、本来は平面を呈したのであろう。72は原形を残した竈支柱で棒状を呈し、一部に打痕が見られる。73は小型敲石で側面に打痕が確認される。本遺跡出土遺物中で最小の敲石である。

S-025（S-012　第54図）

2工区東側にあたるh・i-23グリッドにて検出された土坑である。大半をトレンチや調査区外に切られ、平面形態は残存から隅丸長方形を呈し、断面形態は皿状を呈するようである。遺構中央部にややピット状の浅い掘り込みがある。

S-026（S-037　第54図）

2工区西側にあたるB・C-8グリッドにて検出された土坑である。一部撹乱により損失しているが、遺構プランは完掘に近い。平面形態は不定形を呈し、断面形態は椀状を呈する。長軸0.82m、短軸0.72m、深さ0.29mの規模である。

74は土師器埦で復元であるが、口径は12cm強を測る。底部は回転ヘラ切りを施した後、ナデ調整を行っている。75は土師器で復元から口径18cm強を測る大型埦である。風化が激しいが外器面、内器面とも赤彩色が施されている。76は須恵器蓋で、天井部は低く平らであり、つまみは平坦、端部はやや内側に屈曲する。天井部に降りかかかった灰が自然釉となっているが、高温の釉垂れの一つ手前、陶芸用語「ゴマ塩」の点在釉である。このことにより遺物は使用時と同じような形態で窯入れが行われたことを証する。

S-027・S-028（S-022・S-023　第55図）

S-027は、2工区中央にあたるi-20グリッドにて検出された土坑である。平面形態はほぼ長方形を呈し、断面形態は皿状を呈する。長軸2.1m、短軸0.9m、深さ0.3mの規模である。主軸はN-53°-Eである。S-028も同様のプランで長軸2.2m、短軸0.9m、深さ0.2mの規模である。主軸はN-42°-Eである。2工区西側にあたるh・i-20グリッドで検出された。これらの遺構の性格を裏付ける遺物は出土しなかったが、プランは土壙墓に良く見られ、この両遺構の主軸は同一方位である。

S-029（S-031　第55図）

2工区西側にあたるB-8・9グリッドにて検出された土坑である。遺構の大半は調査区外になるが、平面形態は隅丸長方形を呈するようで、断面形態は皿状を呈する。残存軸2.2m、深さ0.3mの規模である。

S-030（S-004　第56図）

2工区東側にあたるj-30グリッドにて検出された土坑である。平面形態は不定形を呈し、断面形態は椀状であるが、数回の掘り込みをされているようである。長軸1.9m、短軸1.1m、深さ0.7mの規模である。最深部はピット状の掘り込みで礫等の出土があり、遺構の性格として廃棄土坑と想定する。

S-031（S-023　第56図）

1工区G-3グリッドにおいて検出された土坑である。平面形態は長方形を呈し断面形態は凹字状を呈する。長軸1.45m、短軸0.9m、深さ0.45mの規模である。またS-031の北側に同じ規模の土坑が2基並ぶように検出した。北側からS-046、S-032、S-031となっている。意図的な掘り込みが感じられるため土壙墓の可能性もあるが、それを確証する遺物が出土しなかった。

S-032（S-024　第56図）

1工区F・G-3グリッドにおいて検出された古代の土坑である。平面形態は楕円形を呈し断面形態はすり鉢状を呈する。長軸1.85m、短軸1.4m、深さ0.6mの規模である。0.35×0.25m大の砂岩ブロックが西壁付近に混入している。

S-033（S-063　第56図）

1工区東側D-6グリッドにおいて検出された土坑である。検出時にはS-013と重複していたが、埋土の状況等からS-033の方が新しい。長軸約1.4m、短軸約0.8m、深さ約0.4mである。遺構検出面から約0.15m掘削すると径約0.4mの角礫と約0.3mの扁平礫がそれぞれ1点ずつ出土した。これらは掘立柱建物の隅柱礎盤の可能性も考えたが、周囲に掘立柱の痕跡は検出できなかった。

S-034（S-064　第57図）

1工区東側D-6グリッドにおいて検出された土坑である。S-013と重複しているが、S-034の方が新しい。残存として長軸約1.9m、短軸約1.1m、深さが約0.4mである。遺構検出時にはS-013に伴う遺構として掘削したが埋土の状況からS-013より新しい遺構であった。遺構の性格を窺い知る遺物等の資料に乏しく、土坑状の掘り込みとして提示した。

S-035（S-052　第57図）

1工区東側C-6グリッドにおいて検出された土坑である。全体はS-002と重複しており、S-002が本遺構の上に構築されている。残存として長軸約2.3m、短軸約1.8m、深さ約0.3mである。楕円形プランを呈するようであるが、遺構の性格を含め不明部分が多い。

S-036（S-037　第57図）

1工区E-4・5グリッドにおいて検出された土坑である。平面形態は不定形を呈し、断面形態は皿状を呈する。長軸1.2m、短軸1.0m、深さ0.2mの規模である。主軸はN-157°-Wである。

遺構検出時は竪穴住居の竈に使用されたと考えられる白色粘土を多量に検出した為、竪穴住居の竈と考え調査を開始した。竪穴住居であれば南壁に付随する竈と考え、本遺構より北側を中心に検出を繰り返した結果、竪穴住居のプラン、そして竈に伴う焼土、灰等が確認出来なかった為、白色粘土を伴う土坑とした。

S-037（S-040　第57図）

1工区F-5グリッドにおいて検出された土坑である。遺構は南側の調査区外に広がっている。現状では平面及び断面形態はそれぞれ、隅丸方形及び皿状を呈する。主軸はN-122°-Wである。

遺構検出時は焼土を検出した為、竪穴住居の竈と考え調査を開始した遺構である。竪穴住居であれば南西壁に付随する竈と考え、北東側を中心に検出を行ったが、竪穴住居のプランを確認出来なかった。焼土を伴う土坑としたが住居の竈部残存であろう。

S-038（S-024　第58図）

2工区中央にあたるg-19グリッドにて検出された土坑である。平面形態は不定形を呈し、断面形態は皿状を呈する。長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.3mの規模である。

S-039（S-021　第58図）

2工区中央にあたるh-21グリッドにて検出された土坑である。攪乱により削平されているが、平面形態は楕円状を呈するようで、断面形態は椀状を呈する。残存径0.7m、深さ0.3mの小規模である。主軸は不明である。

S-040（S-020　第58図）

2工区中央にあたるh・i-22グリッドにて検出された土坑である。これも攪乱により情報を損失しているが、平面形態はほぼ楕円形を呈し、断面形態は皿状にさらに掘り込みを呈する。残存径0.8m、深さ0.4mの規模である。

S-041（S-021　第58図）

1工区東側におけるB-5グリッドに位置する不定形土坑で、長軸約1.0m、短軸約0.5m、深さは約0.3mである。中層から火熱痕のある砥石片（77）が出土した。残存20cm弱を測る大型の砥石である。廃棄に伴うものであろうが、四面全て使用されており、各面に窪みも認められることから使用頻度は高かったのであろう。火熱の痕跡も見られることから、廃棄に伴う遺物であろうし、この遺構は廃棄土坑の性格を持つものである。

S-042（S-017　第58図）

2工区中央にあたるi-22グリッドにて検出された土坑である。平面形態は不定形を呈し、断面形態は緩やかなV字状を呈する。長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.5mの規模である。

S-043（S-053　第58図）

1工区東側C-6グリッドにおいて検出した土坑である。S-057・S-002と重複し、S-043が最も古くS-002、S-057の順に新しくなる。長軸約1.0m、短軸約0.7mの楕円形である。埋土中に樹痕撹乱が見られるため、S-002を構築する以前の風倒木痕ではないかと考えられる。

S-044（S-002　第59図）

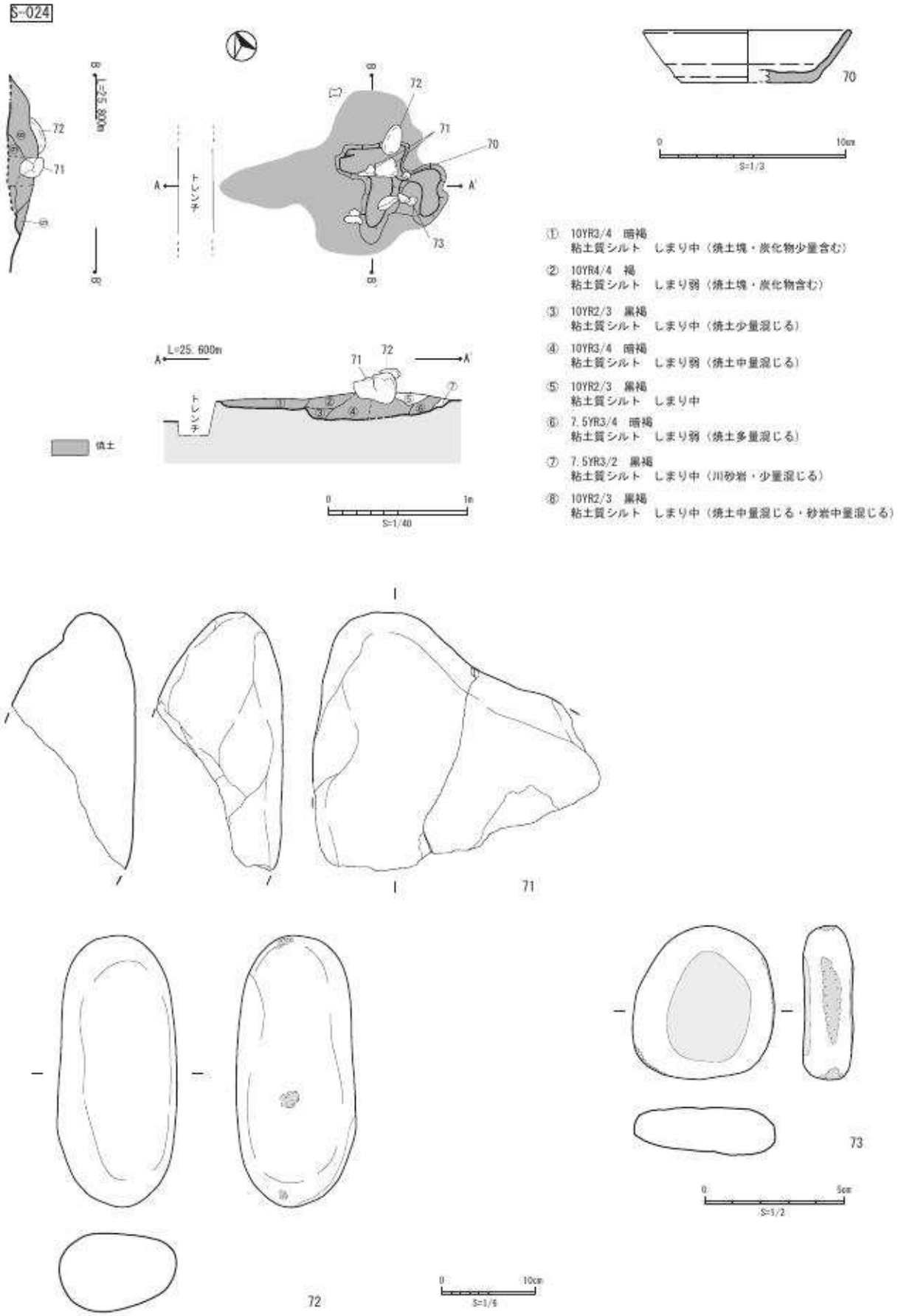
2工区東側にあたるj-28・29グリッドにて検出された土坑である。平面形態は不定形を呈し、断面形態は皿状にさらに浅いピットを掘り込んだようである。長軸1.1m、短軸0.7m、深さ0.3mの規模である。

S-045（S-029　第59図）

1工区E-6グリッドにおいて検出された土坑である。平面形態は円形を呈し、断面形態は椀状を呈する。径約0.6m、深さ0.3mの規模である。S-013と重複し、S-013より新しい。複雑に入り込んだ埋土は7層に分層されることから、後世の樹痕等の影響を受けたものであろう。

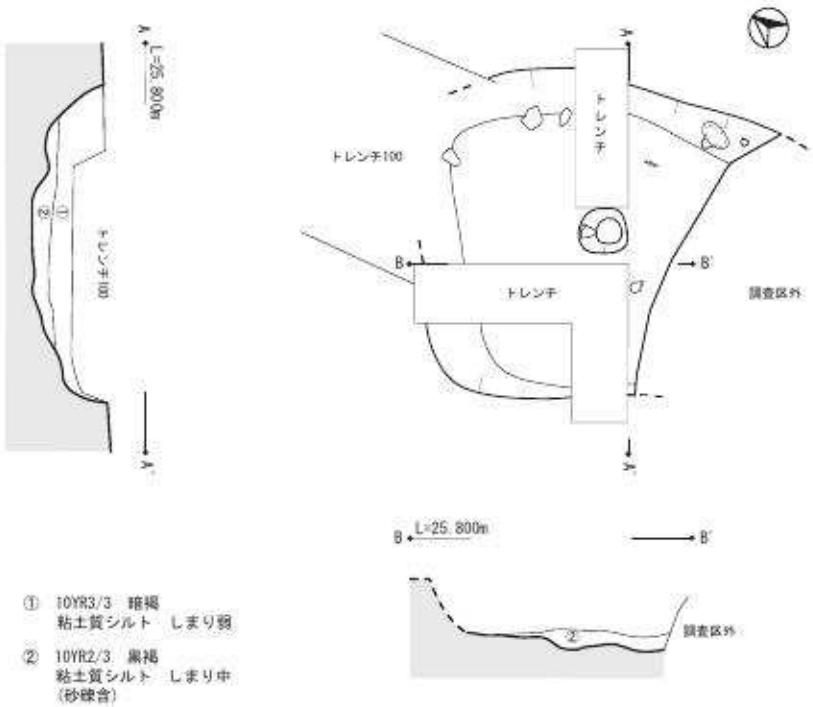
S-046（S-010　第59図）

1工区F-3グリッドにおいて検出された土坑である。平面形態は楕円形を呈し、断面形態は弧状を呈する。長軸1.6m、短軸1.1m、深さ0.35mの規模である。下層は複雑であるが、これは後世の樹痕によるものであろう。遺物は上層より礫が数点出土している。78は磨石・敲石破片で廃棄された遺物であることから廃棄土坑であろう。



第53図　S-024完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図

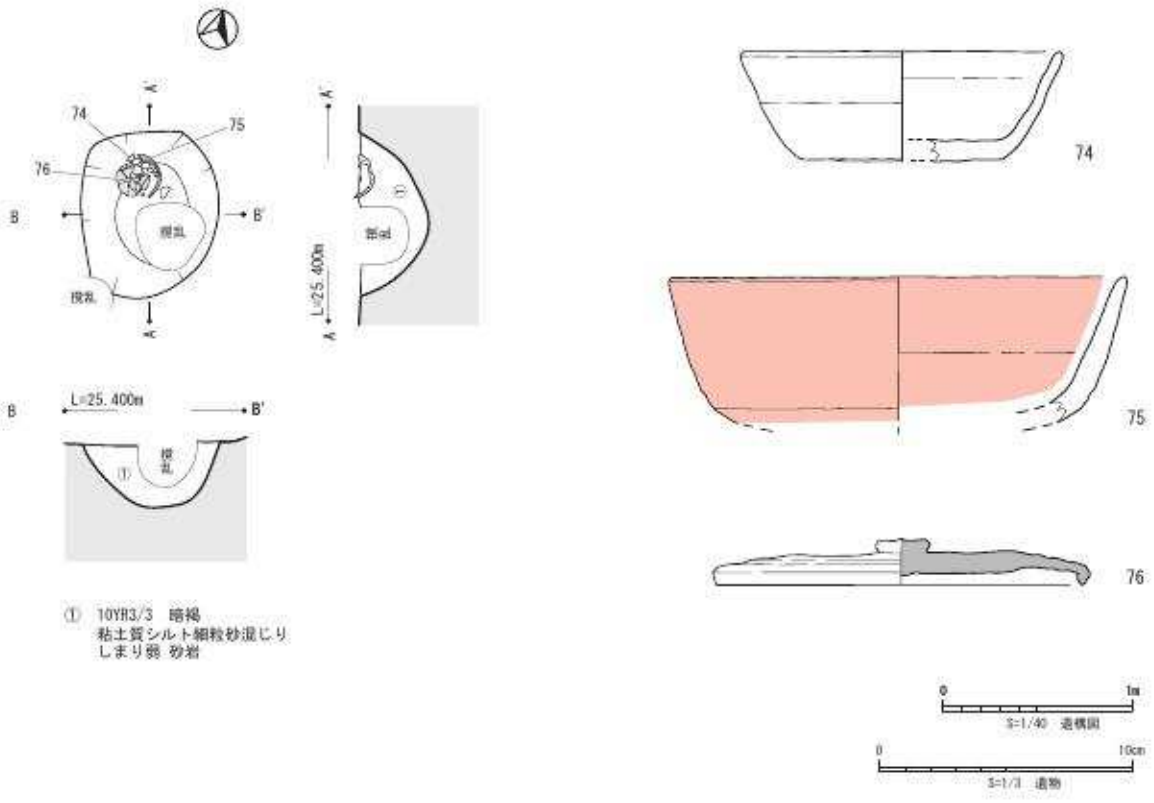
S-025



① 10YR3/3 暗褐
粘土質シルト しまり弱

② 10YR2/3 黒褐
粘土質シルト しまり中
(砂礫含)

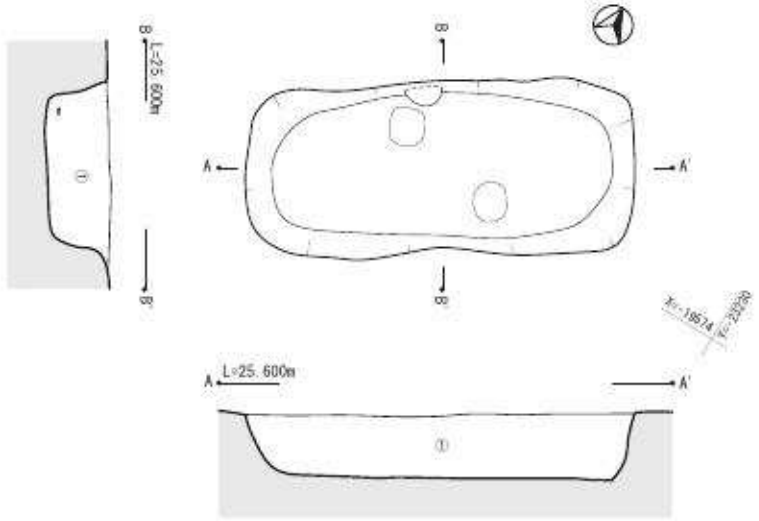
S-026



① 10YR3/3 暗褐
粘土質シルト細粒砂混じり
しまり弱 砂岩

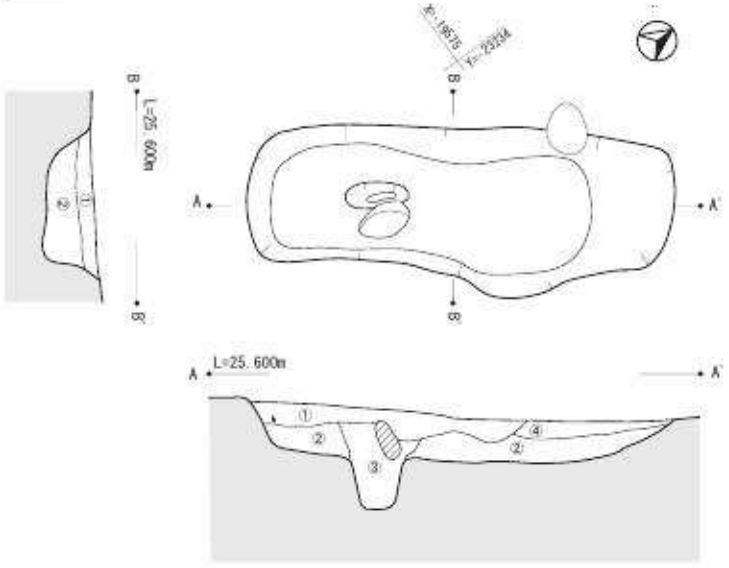
第54図 S-025・S-026完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図

S-027



① 10YR3/2 黒褐
中粒砂混じり粘土質シルト しまり弱
(地山ブロック・砂岩含む)

S-028



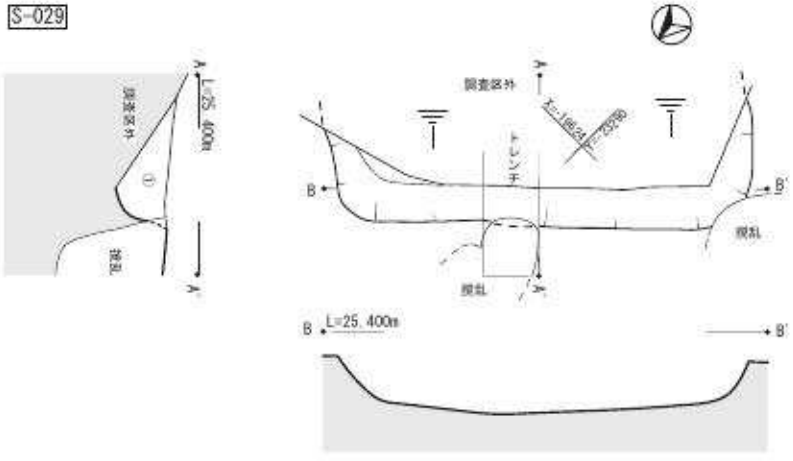
① 10YR3/3 暗褐
粘土質シルト しまり弱

② 10YR4/4 褐
粘土質シルト しまり中

③ 10YR4/2 灰黄褐
細粒砂混じり しまり中

④ 10YR3/4 暗褐
細粒砂混じり粘土質シルト(砂岩含) しまり中

S-029

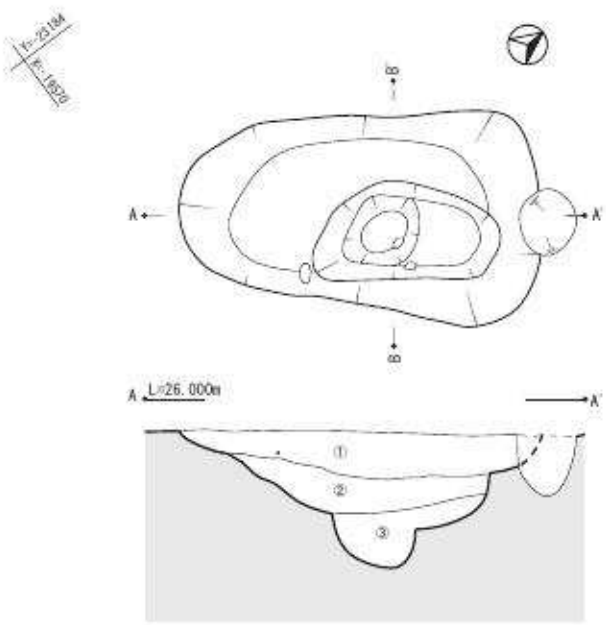


① 10YR4/4 褐
粘土質シルト しまり中

0 1m
S=1/40

第55図 S-027・S-028・S-029完掘状況

S-030

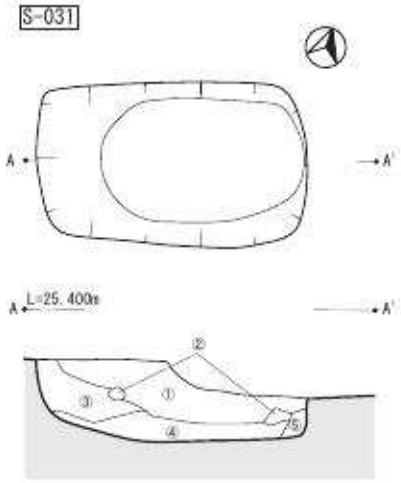


① 7.5YR4/4 褐
中粒砂混じり粘土質シルト しまり弱
(地山ブロック混じる)

② 7.5YR3/4 暗褐
シルト質粘土 しまり中

③ 10YR3/3 暗褐
シルト質粘土 しまり中

S-031



① 10YR4/1 褐灰 砂質土 しまりあり 粘性なし
1cm大の10YR6/8明黄褐色砂質土ブロック少量混じる

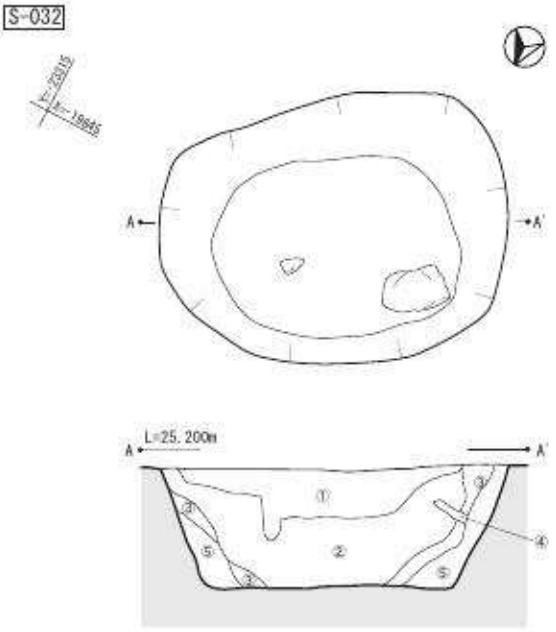
② 10YR6/2 灰黄褐 砂質土ブロック

③ 10YR5/3 にぶい黄褐 砂質土 しまりあり 粘性なし
2cm大の10YR6/8明黄褐 砂質土ブロック少量混じる

④ 10YR6/3 にぶい黄橙 砂質土 しまりあり 粘性なし

⑤ 10YR6/8 明黄褐 砂質土 しまりあり 粘性なし

S-032



① 10YR4/4 褐
細粒砂混じり粘土質シルト 川砂含, 砂岩含 しまり中

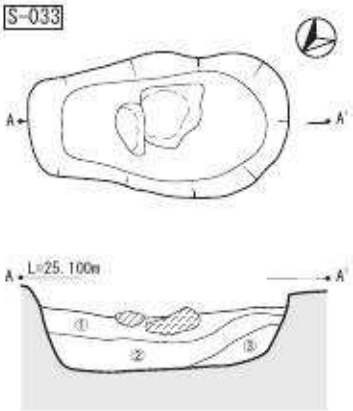
② 10YR2/2 黒褐
細粒砂混じり粘土質シルト 砂岩含 しまり中

③ 10YR3/3 暗褐
細粒砂混じり 粘土質シルト砂岩少量混じる しまり中

④ 10YR3/4 暗褐
粘土質シルト 川砂少量混じるしまり弱

⑤ 10YR3/4 暗褐
粘土質シルト しまり弱

S-033



① 7.5YR2/3 極暗褐
シルト しまり弱い

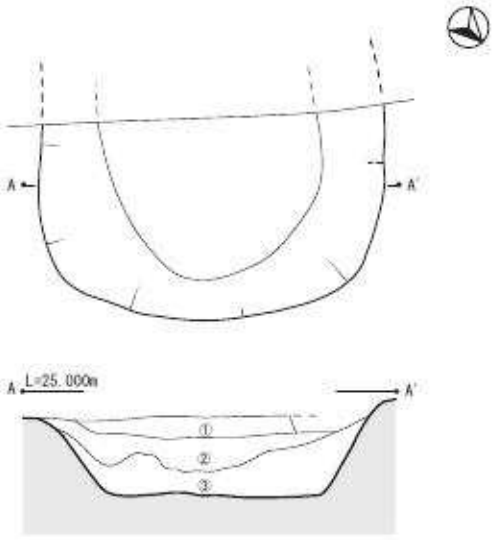
② 7.5YR6/8 橙
シルトに7.5YR4/3褐色シルト しまり弱く ブロック状に含む

③ 7.5YR4/3 褐
シルト しまり弱い 細粒砂混じる

0 1m
S=1/40

第56図 S-030・S-031・S-032・S-033完掘状況

S-034

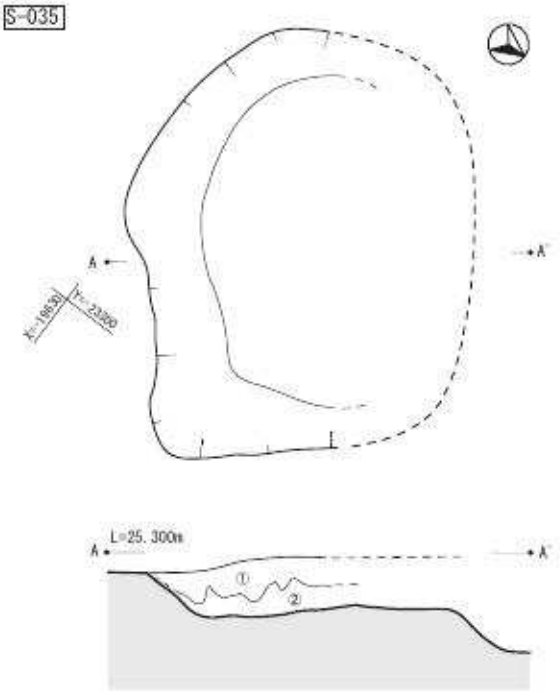


① 7.5YR4/3 褐
シルト しまり弱く細粒砂まじる 焼土混じる

② 7.5YR3/4 暗褐
シルト しまり弱く細粒砂混じる

③ 10YR3/4 暗褐
シルト しまり弱く細粒砂混じる

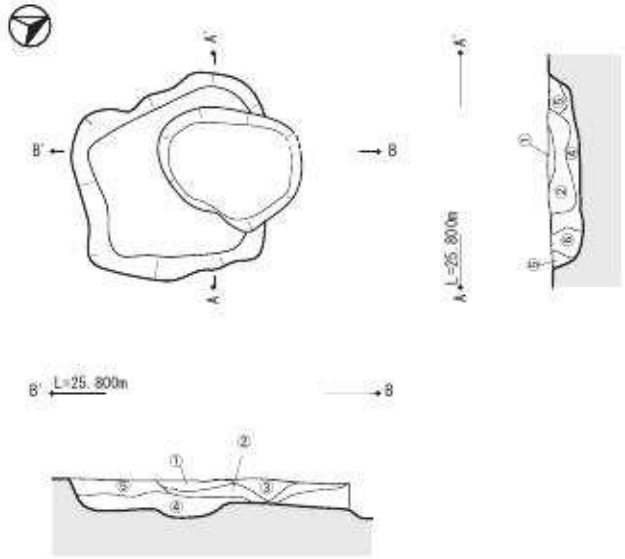
S-035



① 7.5YR3/4 暗褐
砂質シルト 細粒砂混じる

② 10YR5/3 にぶい黄褐
砂質シルト しまり弱く 細粒砂 砂岩混じる

S-036



① 10YR3/2 黒褐
細粒砂まじり粘土質シルト しまり弱

② 10YR3/3 暗褐
細粒砂混じりシルト しまり弱
(底部に白色粘土まざる)

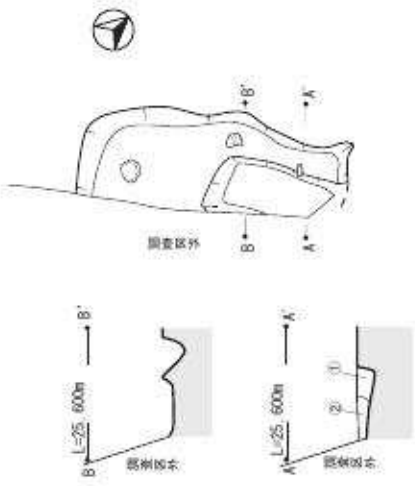
③ 10YR3/2 黒褐
細粒砂まじり粘土質シルト
しまり中 (川砂含む)

④ 10YR3/4 暗褐
粘土質シルト しまり中 (川砂含む)

⑤ 10YR3/3 暗褐
細粒砂まじり粘土質シルト
しまり中 (白色粘土多量に混じる)

⑥ 10YR4/3 にぶい黄褐
粘土質シルト しまり弱 (川砂含む)

S-037



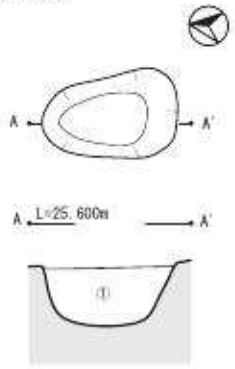
① 7.5YR4/4 褐
細粒砂混じりシルト しまり中
(焼土・炭化物岩)

② 10YR3/4 暗褐
細粒砂混じりシルト しまり弱
(焼土少量混じる)

0 1m
S=1/40

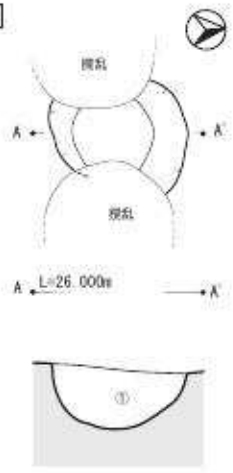
第57図 S-034・S-035・S-036・S-037完掘状況

S-038



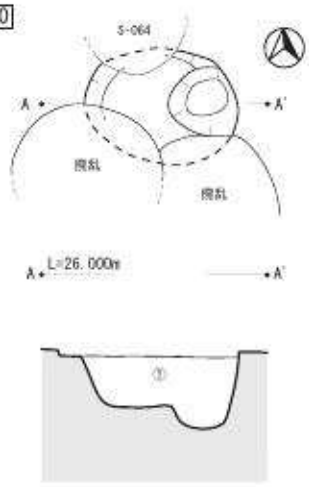
① 7.5YR4/4 褐
砂質シルト しまり中

S-039



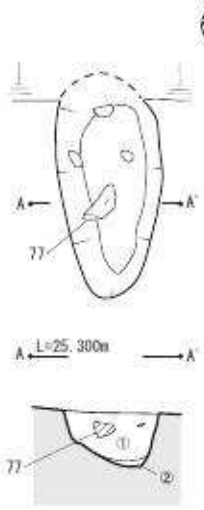
① 7.5YR3/2 黒褐
シルト質粘土 しまり中

S-040



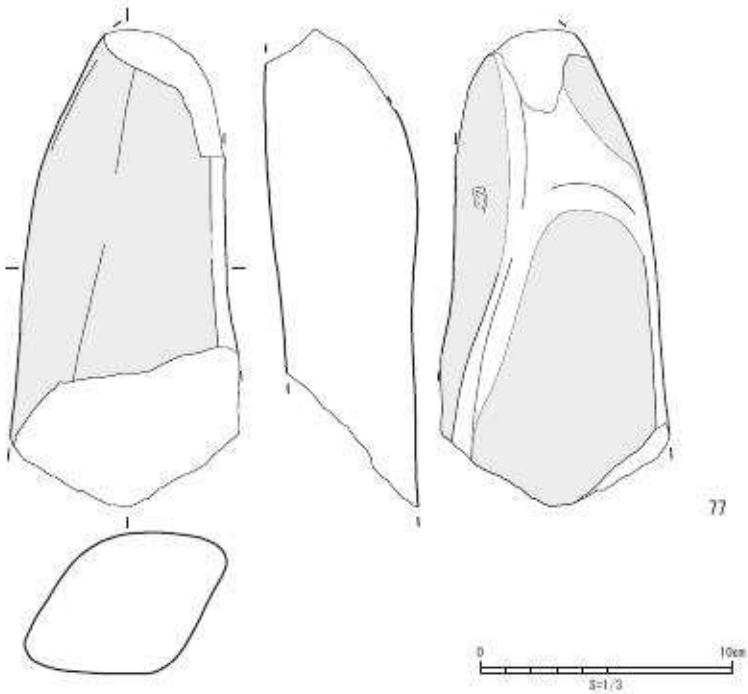
① 7.5YR3/1 黒褐
細粒砂混じり粘土質シルト
しまり弱（地山ブロック混じる）

S-041

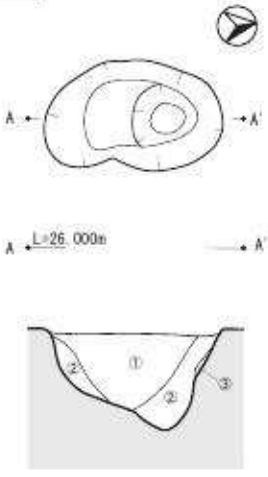


① 10YR2/3 黒褐
粘質シルト しまり中
（川砂岩土山ブロック有）

② 7.5YR4/4 褐
シルト しまり弱



S-042

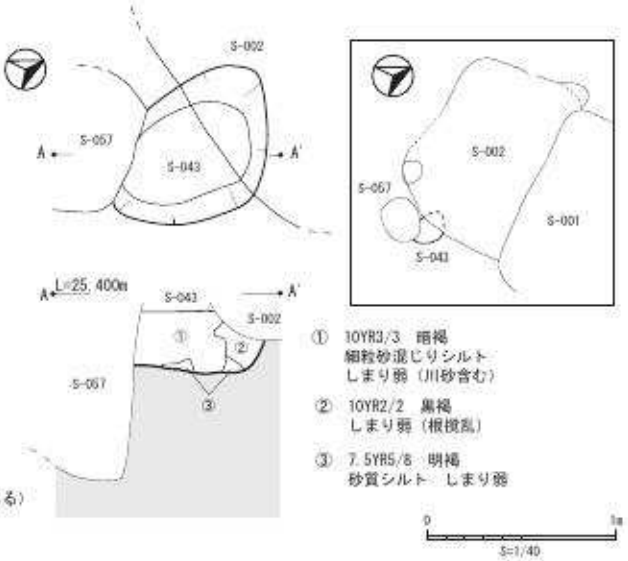


① 7.5YR3/1 黒褐
細粒砂混じり粘土質シルト
しまり中

② 7.5YR4/3 褐
粘土質シルト
しまり中

③ 7.5YR5/3 にぶい褐
シルト質粘土（細粒砂少量混じる）
しまり強

S-043

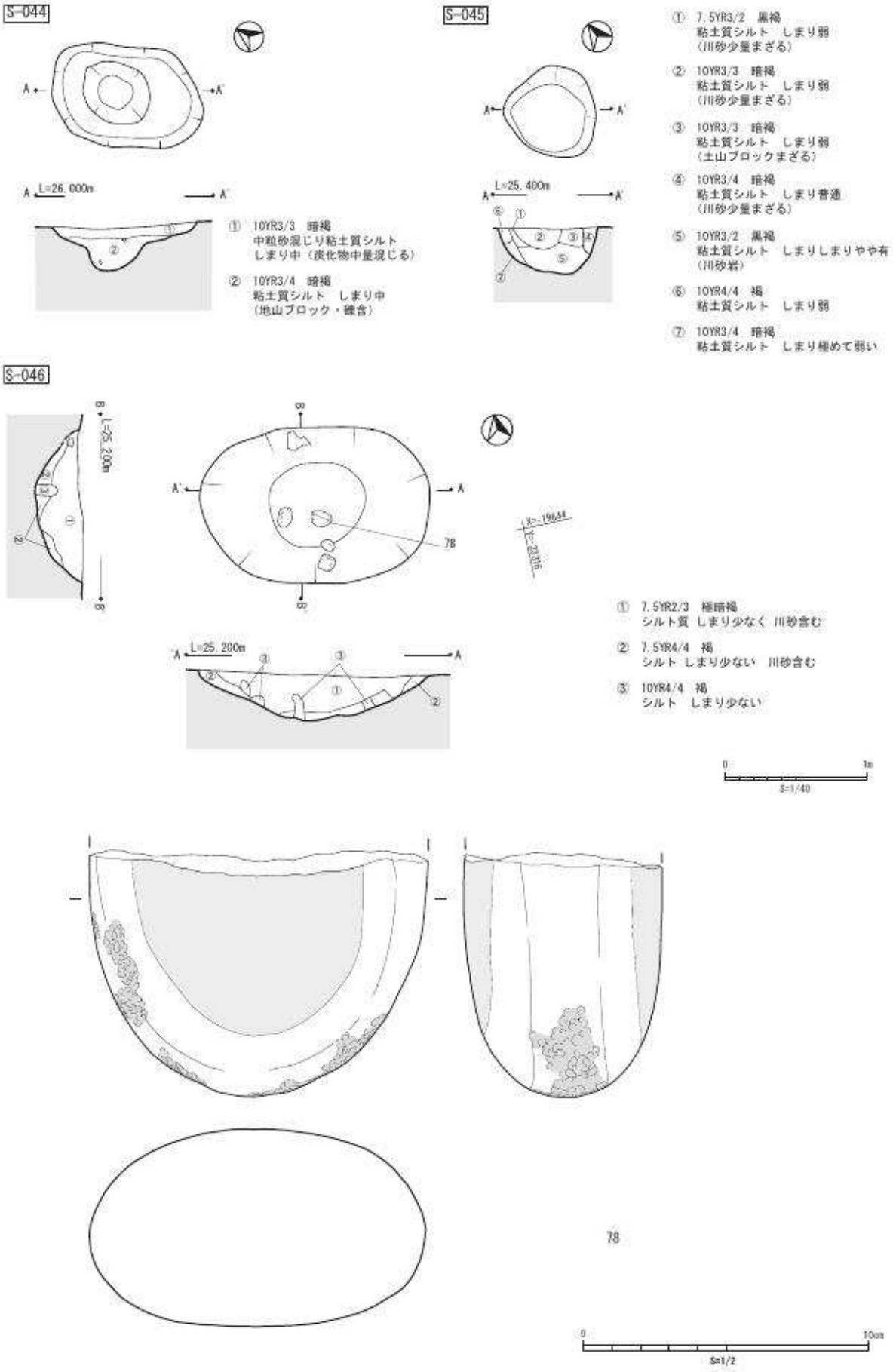


① 10YR3/3 暗褐
細粒砂混じりシルト
しまり弱（川砂含む）

② 10YR2/2 黒褐
しまり弱（根撹乱）

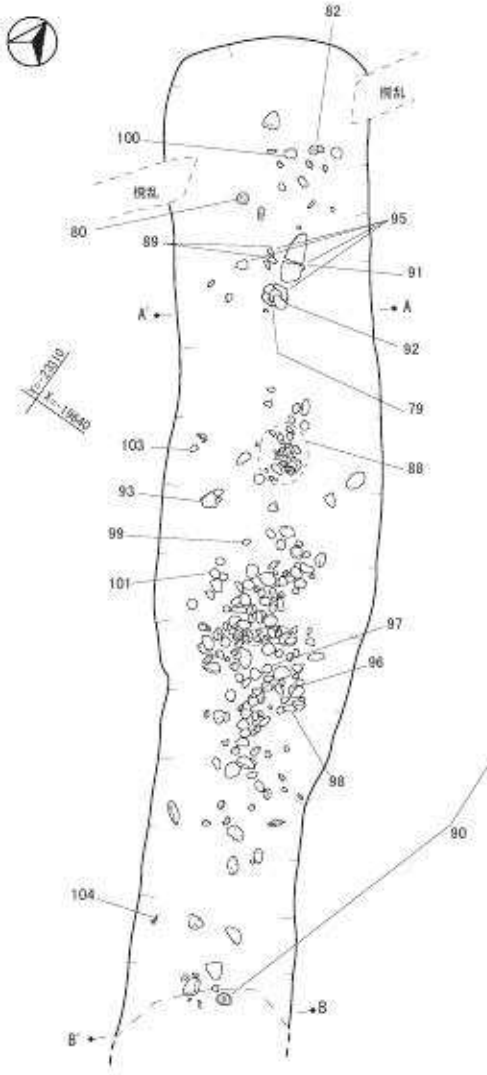
③ 7.5YR5/8 明褐
砂質シルト しまり弱

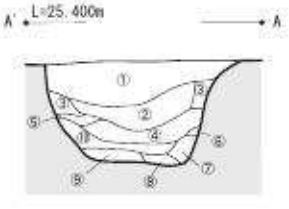
第58図 S-038・S-039・S-040・S-041・S-042・S-043完掘状況及び出土遺物実測図



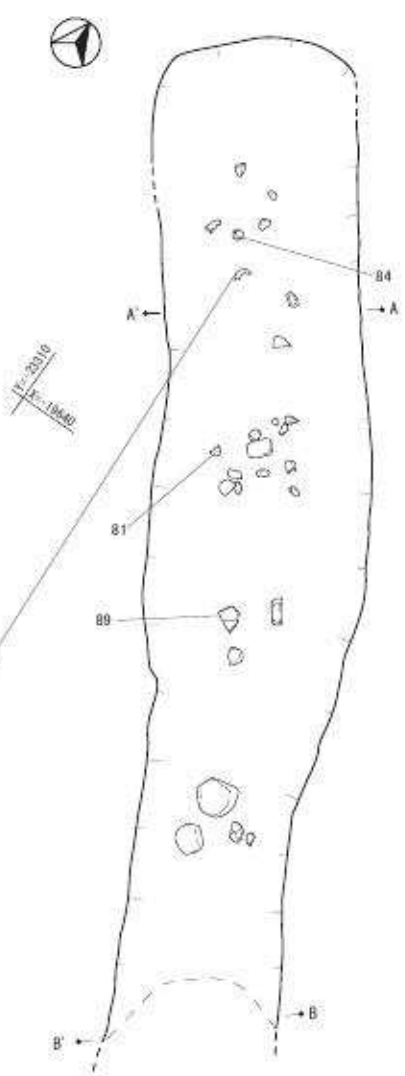
第59図　S-044・S-045・S-046完掘状況及び出土遺物実測図

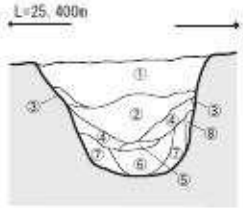
上面遺物出土状況

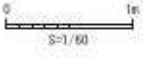




下面遺物出土状況







① 10YR3/3 暗褐 細粒砂混じり シルト
しまり弱 炭化物少量混ざる

② 10YR3/3 暗褐 細粒砂混じり シルト
しまり中 小口砂礫岩

③ 10YR5/6 黄褐 細粒砂混じり 粘土質シルト
しまり弱 土山ブロック岩

④ 7.5YR4/3 褐 粘土質シルト しまり中

⑤ ③と同じ

⑥ ③と同じ

⑦ ④と同じ 土山ブロック岩

⑧ 7.5YR5/4 にぶい褐 粘土質シルト しまり中

⑨ 10YR3/3 暗褐 粘土質シルト しまり中
土山ブロック少量混ざる

⑩ 7.5YR4/4 褐 粘土質シルト しまり中 土山ブロック混ざる

① 10YR3/2 黒褐 細粒砂混じりシルト
しまり弱 川砂岩

② 10YR2/2 黒褐 細粒砂混じりシルト
しまり中

③ 10YR4/4 褐 細粒砂混じりシルト
しまり中 土山ブロック岩

④ 10YR3/3 暗褐 細粒砂混じりシルト
しまり弱 土山ブロック岩

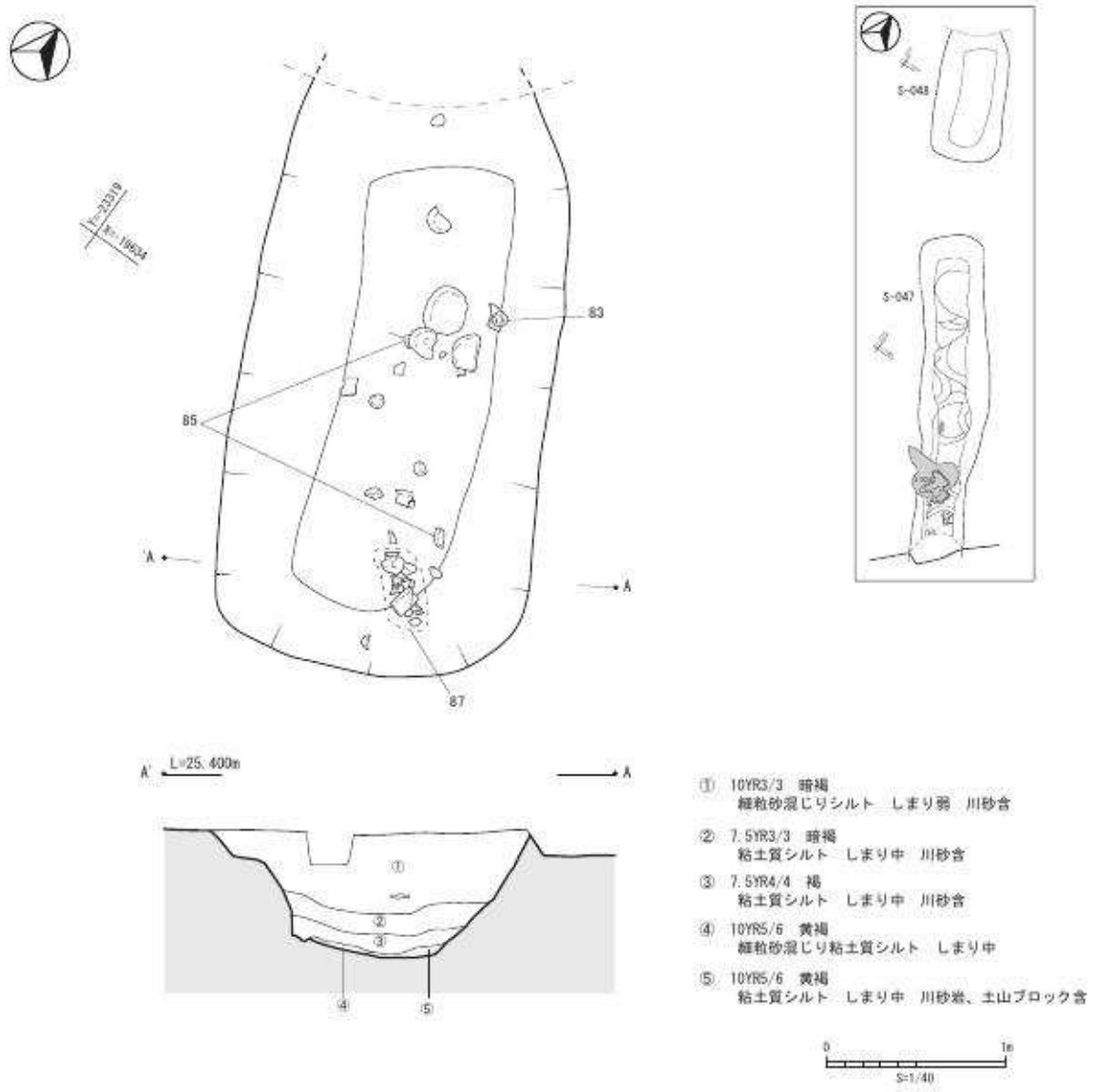
⑤ 10YR2/3 黒褐 粘土質シルト
しまり中

⑥ ⑤と同じ 砂岩少量岩

⑦ 10YR2/3 黒褐 細粒砂混じり粘土質シルト
しまり中 川砂、土山ブロック

⑧ 7.5YR5/8 明褐 砂質シルト しまり弱

第60図 S-047上面・下面遺物出土状況



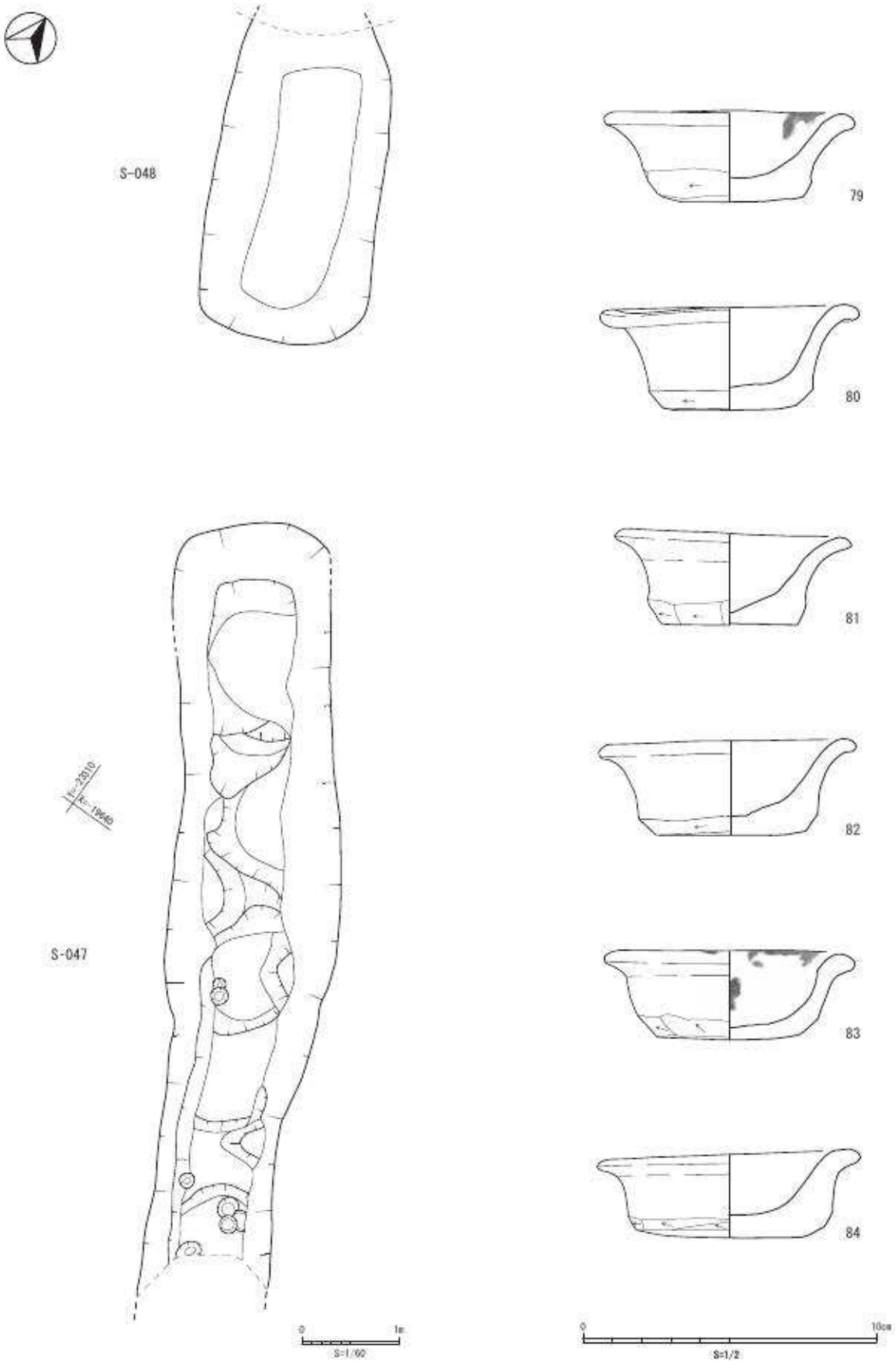
第61図　S-048遺物出土状況

（溝）

S-047（S-018　第60・62～65図）

1工区E-3・4、F-4グリッドにおいて検出した溝状遺構である。長さ約8.2m、幅約1.8mを測り調査区の南側に広がっている。主軸はN-36°-Wである。検出当初は多くの礫を伴う土坑と思いベルトを設定し掘削を行っていたが、礫の出土数が多い為検出を繰り返したところ溝状遺構と判明した。遺物は礫が上層下位（第①層）より夥しく出土し、下層では数点とその差は大きい。土層はA－A´は水平堆積、B－B´の下位はレンズ状堆積が観察される。また完掘状況を観察すると、床面は鱗状面（第62図）が見られる。これは人力掘削時の単位的な痕跡であろう。また礫出土の中心地の遺物出土状況は上層であり、また出土状況からは西側より放射状に廃棄されたようである。従ってこれらの遺物は遺構に伴うものでなく、後の廃棄であろう。皿状の不明遺物（79～84）について検討したが、口縁部に油煙が確認されることから照明具と想定している。また遺物中に鉄製品（刀子104）も出土している。廃棄遺物のピークから8世紀頃であろうか。

90は須恵器埦で高台を持つ。高台残存部は僅かで、大部分は欠損している。貼付け高台で、坏底部



第62図　S-047・S-048完掘状況及び出土遺物実測図

に細かな刻みを施しているのは接着を効果的にするためで、現代の陶芸でも行われている作業である。自然釉の灰釉が内器面ではなく高台裏と外器面に見られることから、焼成は逆さまにしていたことが分る。

91は須恵器の坏で焼成温度が低く、いわゆる生焼け状態でその発色は、にぶい橙色である。この遺物の内器面は青灰色をしているが、外器面は口唇部より下位に1cm強の輪状の発色で、胴部下位から底部まではにぶい黄橙の生焼けである。この発色は低温の際に発生しやすいため、この91は重ね焼きされた痕跡を現した遺物であると云えよう。86は土師器坏片である。外器面は赤彩色を施され、底部には墨書が確認されるが、断片資料のため判読は困難であった。内器面は油煙が付着し、灯明等の照明具としても使用されたか。87～89は土師器甕である。88・89は小型甕であるが二次焼成を受けており、これも煮炊き具の一つであろう。93は頸のある須恵器壺の肩から胴部屈曲部で、ここにつまみ状突起が付き さらに穿孔を施す。発色は赤褐色である。

92・94・95は須恵器で92は蓋片でつまみ部を欠損しているが天井部が平坦であることと端部の屈曲から本遺跡で出土している須恵器蓋と差異はない。94はやや大型の鉢で底部から口縁部に向かい、斜め直線に立ち上がる。復元ではあるが口径約21cmを測り、口唇部は小さく外反する。ナデ消してはいるが指圧痕、叩きが僅かに確認できる。95は短頸壺で基部はやや太く直立し端部は内傾する。胴部上位に最大径を持つ球体を呈するが、底部は不明である。僅かに高台が残存した。頸部に回転ナデ後、掻目を文様として意識したか。胴部下位は格子状叩き目が確認される。蔵骨器に見られる器形である。

96～99・101は楕円形の磨石類で、その平面を使用した遺物であるが、99以外は敲打痕を有する。また102は短冊状を呈している。100は判断に迷ったが磨石の痕跡はあるが、側面の打痕と対比する側辺にやや窪みがあることから石錘として仮置きした。103は砂岩製の棒状加工具で全体にていねいな磨きを施され、端部に極小の敲打痕がある。生産具とは考えにくく石棒端部であろうか。

S-048（S-060　第61～65図）

1工区D・E-3グリッドにおいて検出した溝状遺構である。長さ3.2m、幅約1.8m、深さ0.7mを測る。調査区の北側に広がっており、主軸はN-35°-Wである。遺構検出当初は土坑と思われた遺構であるが、遺構検出を繰り返したところ溝状遺構と判明した。

本遺構はS-047と検出面 規格、土層、遺物出土状態、主軸など類似しているため、これもS-047と連続した性格の遺構であろう。またS-047-S-048間は1.8m離れているためブリッジ状をもつ機能であったか。本遺跡ではS-047は調査区外、S-048は後世の溝（S-051）により消滅しているため詳細は不明であるが、水田等の生産に関与する機能や、鉄製品（刀子104）の出土より館の堀の可能性もあると想定した。85は土師器坏で口径約14cm高さ4.7cmを測る。底部は丁寧なナデ調整が施されているため不明瞭であるが、回転ヘラ切りのようである。

S-049（S-033　第66・67図）

2工区西側にあたるA～C-7・8グリッドにおいて検出された溝状遺構で、西北から南東へとさらに調査区外へ延びN-30°-Wを測る。完掘状況を観察すると、S-047と同様に床面は鱗状面（第66図）が見られる。これも人力掘削時の単位的な痕跡であろう。層は南西側から入り込んだ形成で人為的な埋め立てでなく、自然作用による時間経過を示す。断面はA－A´は三角形、B－B´は椀状と統一感に乏しいが、全体ではその断面は皿状を呈し安定する。S-020を切っていることから、この遺構以後になるであろうが、西北方向は河川が存在することから、後年の水田排水用の機能を持つものか。

遺物は流れ込みであるが、105・106は土師器浅鉢で105の外器面はハケ後ナデ後ミガキ、内器面は

ケズリを施す。口径はいずれも23㎝程であるが、105には口唇部に細い沈線が2条入るが、106はそれが明確でない。また残存資料からも器高に差異があるようである。107は土師器の小型甕で調整、口縁部の形成などから105と同時期であろう。108は須恵器壷の口縁部から頸部資料で外器面は格子目、内器面は同心円状の叩きがあり、当て具を使用したことが理解できる。残存としては僅かであるが、この遺物は大型の壺の様相を呈する。口縁は強く屈曲し、さらに口唇部には2条の沈線を施すていねいな造りである。外器面には焼成時の自然釉が一部釉垂れを発生させていることから、火力の強い位置に置かれていたのであろう。

S-050（S-003　第68図）

2工区j・i-26～30グリッドにおいて検出された西北西に長さ約24m　幅0.5mの溝である。深さは0.3mほどでN-72°-Wを測り、細長く浅い溝である。弥生住居S-006・S-007を切っているためこれ以降の時期であろうが、検出面からも古代遺構と考えにくく、また規格化され、工作も感じる。溝の深さは0.25m前後のほぼ水平であるため、溝と仮定したならばその流れは緩やかであり、また白川に沿い緩やかな角度を持つため水田排水の可能性が想定される。

109は径約8㎝の小皿で高台はなく底部は糸切り技法で、全体的に簡素な製作の感を受ける。内器面は褐色に変色しており、外器面は口縁部の一部に油煙も認められることから大量生産された灯明皿であろう。110は大型の棒状の磨石敲石であり平面使用であるが、端部に長さ3㎝　幅0.7㎝ほどのV字状の刻みがあり、これは磨き作業に使用されたのであろう。

S-051（S-062　第69図）

1工区A-6、B-5・6、C-4・5、D-3・4グリッドにおいて検出した溝状遺構である。長さ21.2m、最大幅は2.1m、深さは約0.7mであり調査区の北側に広がっている。当初は白川に近接し、且つ平行であり土層は粗砂を確認したため、白川が削平した落ち込みに溜まった自然地形であると考えた。掘削中S-047、S-048の軸とほぼL字状となることに気付き、遺構と意識して調査した。しかし、S-048はS-051に堆積していた粗砂を除去後検出した遺構である為、S-047、S-048とは埋土が異なりその関連性は不明である。

（ピット）

S-052（S-014　第70図）

1工区東側D-7グリッドにおいて検出されたピットである。大きさは径約0.4mの円形と考えられるが調査区外へ延びている。遺物は出土しなかった。周辺の遺構と並ぶ事が出来なかったため詳細は不明であるが、土層観察では縦状の第①層が認められることから、これは柱痕跡の可能性もある。

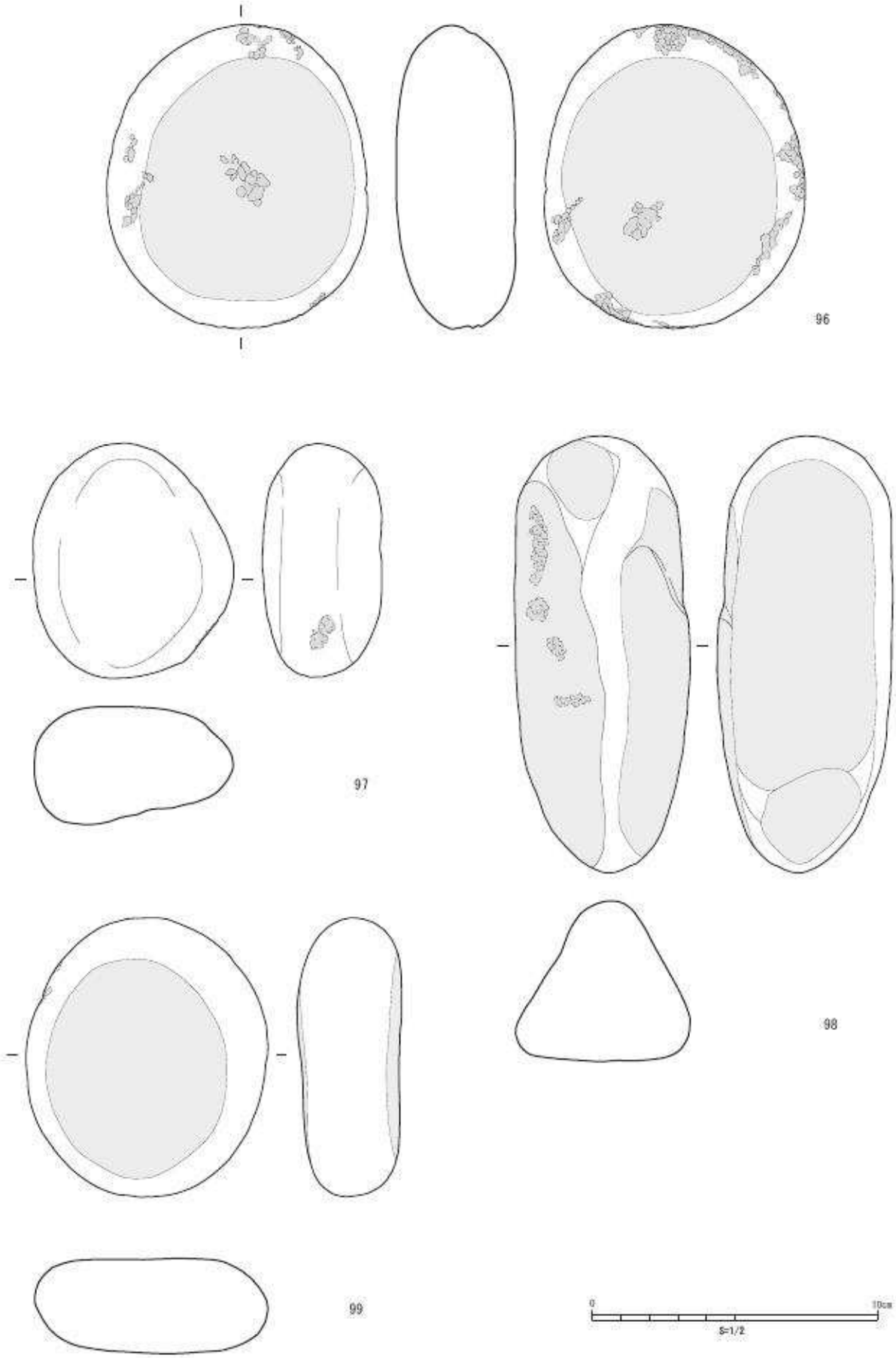
S-053（S-015　第70図）

1工区東側におけるD-6グリッドに位置するピットで，長軸約1.0m、短軸約0.7m、深さ約0.7mの楕円形状である。埋土から観察すると掘立柱は北東の方向から第④層、第①層の2回建てられた事が想定され、これは最初の柱位置に不都合が生じた場合に、新たに柱穴を構築する掘立建物の隅柱に見られる形状である。111は土師皿で復元口径約12㎝を測り、底部は回転ヘラ切りである。内器に油煙が一部見られることから、灯明皿等の照明具に用いたのであろう。

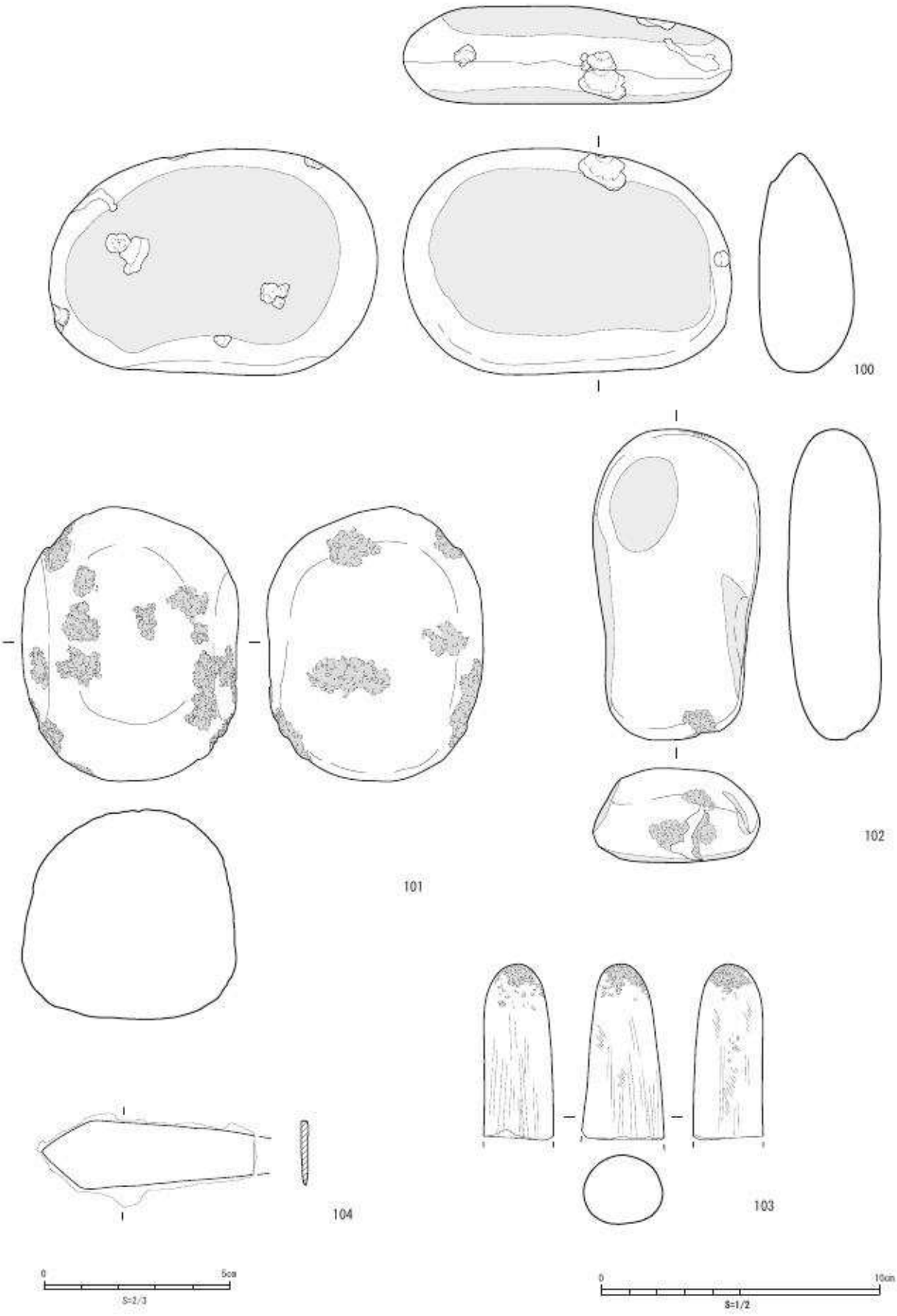
S-054・S-055（S-016・S-026　第70図）

1工区東側C-6グリッドに位置するピットで、重複している。双方径約0.5mの円形を呈しているが、深さには差異があり、S-055は約0.1m、S-054は約0.3mである。埋土は灰褐色及び黒褐色で構成されている。また平面及び断面を観察することでS-054が新しい事が確認できる。

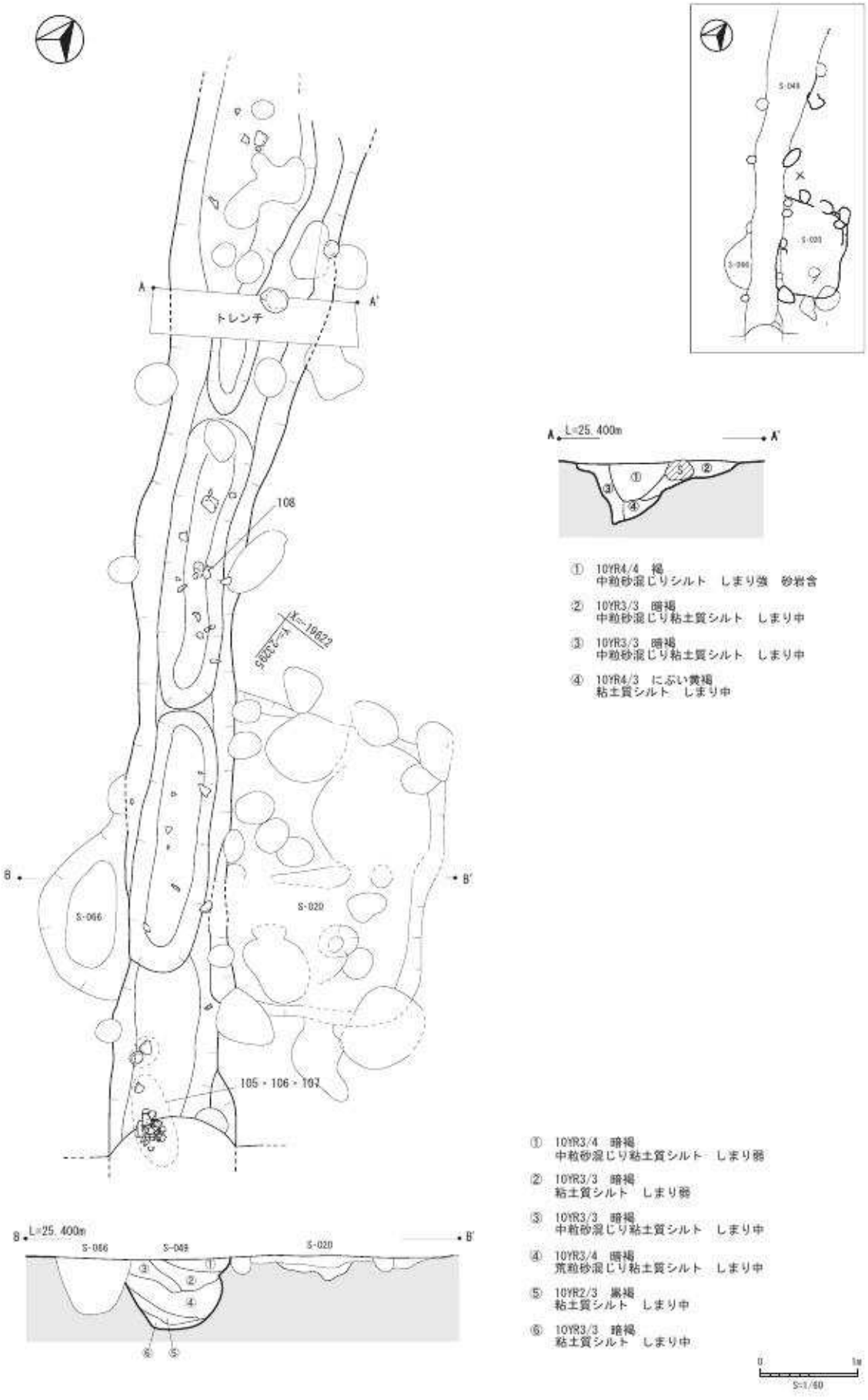
第63図　S-047・S-048出土遺物実測図1



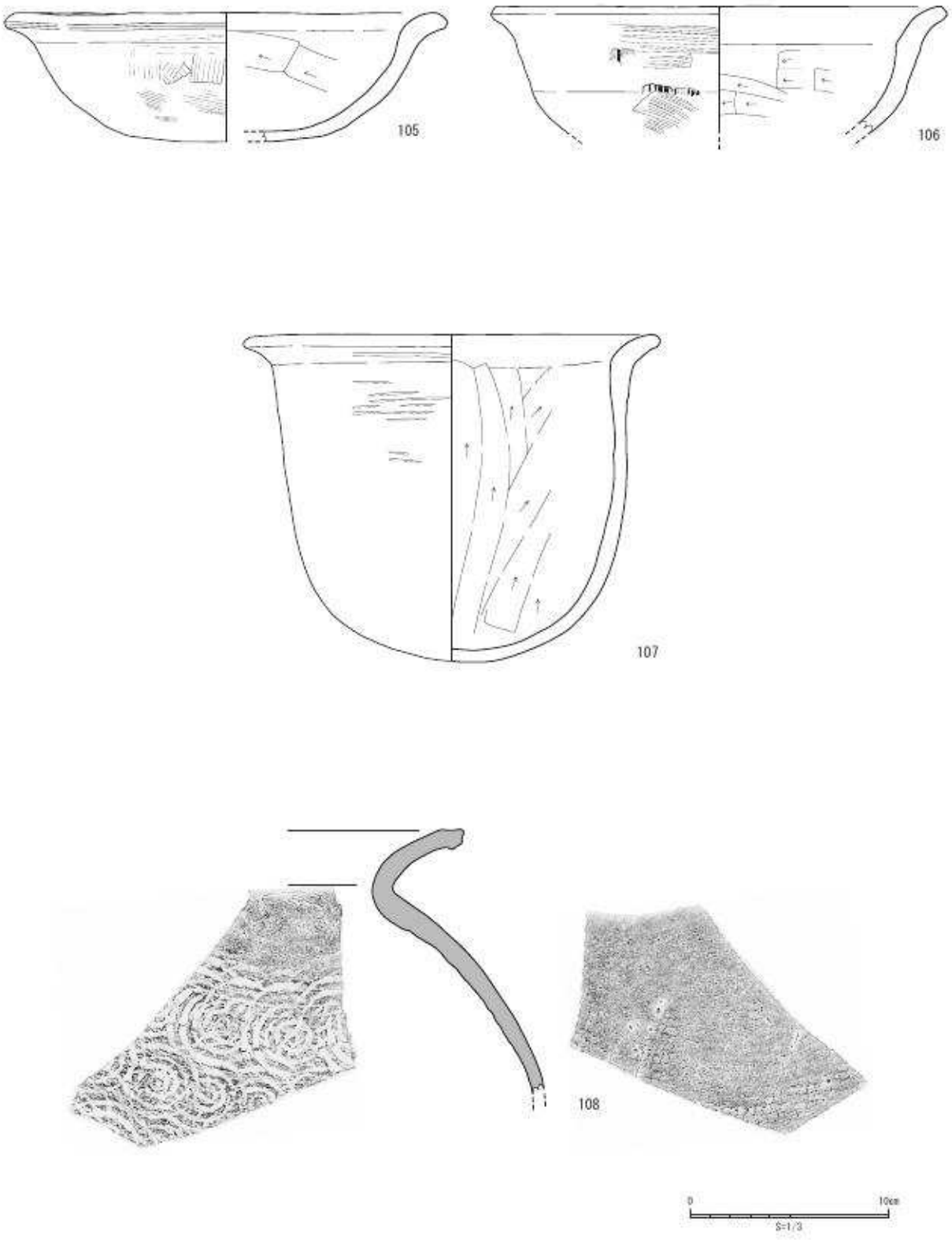
第64図　S-047・S-048出土遺物実測図2



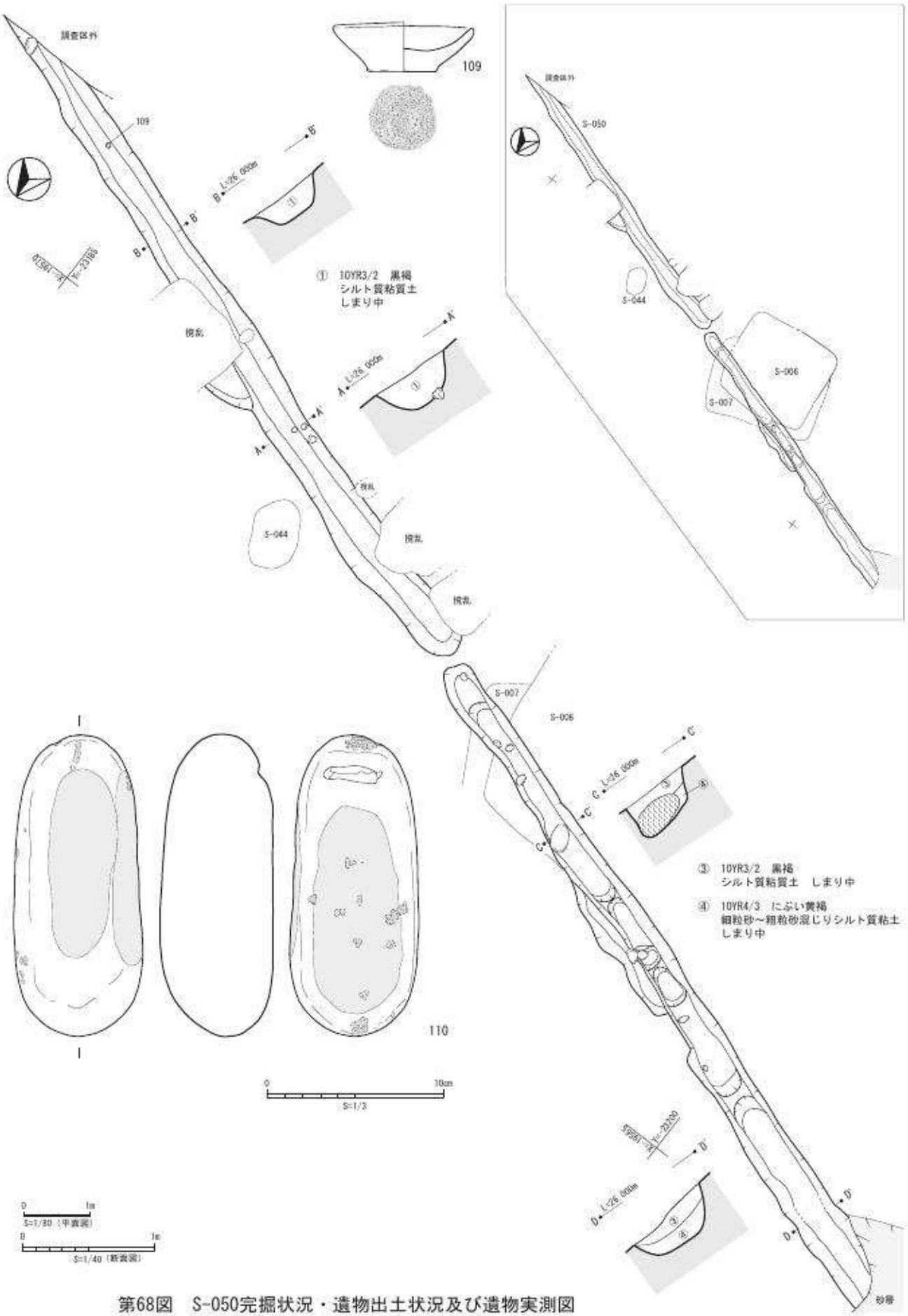
第65図　S-047・S-048出土遺物実測図3



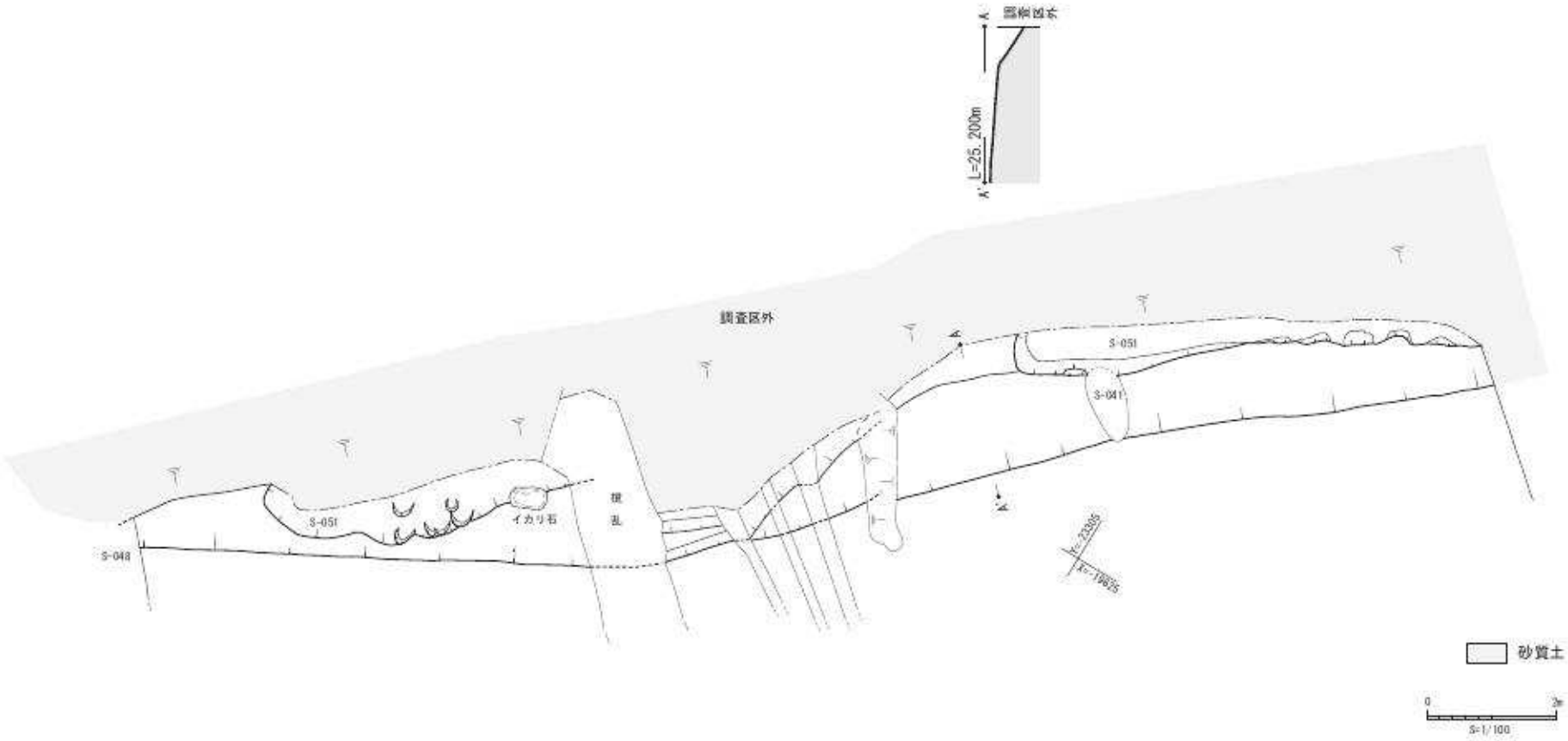
第66図　S-049完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図



第67図　S-049出土遺物実測図



第68図　S-050完掘状況・遺物出土状況及び遺物実測図



第69図　S-051完掘状況

S-056（S-020　第70図）

1工区東側におけるD-6グリッドに位置するピットで、長軸約1.0m、短軸約0.5m、深さ約0.7mである。これもS-057と性格が酷似し、ピット構築ならば、このような方法を行ったことを窺い知ることができる。

S-057（S-019　第70図）

1工区東側D-6グリッドに位置し、長軸約1.2m、短軸約1.0mの楕円形のプランであるが、掘り込み形状は最深部に向かい皿状からU字状に変化し、その深さは約0.9mある。埋土から観察すると先に皿状の掘削を行い、その後、深堀を行っているようである。これもピットの範疇であろうか。

S-058（S-054　第70図）

1工区東側D-6グリッドにおいて検出された土坑である。S-002と重複しているが、S-058がS-002より新しい。長軸約0.6m、短軸約0.5m、深さ約0.7mの円形であるが、全体はピット状の掘り込みのようで、特に最深部は柱が屋根等の重みで沈む際に見られるが、柱痕跡などは見られなかった。これは柱を後に抜取りしたのかも知れず。

S-059（S-048　第70図）

1工区D-5グリッドにおいて検出された土坑である。平面形態は円形を呈し、断面形態は凹字状を呈する。径0.6m、深さ0.45mの規模である。この遺構もS-058と同じように中央部に柱痕跡と思われる径0.15mの窪みを検出した。

S-060（S-045　第71図）

1工区D-4・5グリッドにおいて検出されたピットである。平面形態は円形を呈し、断面形態は凹字状を呈する。径0.45m、深さ0.6mの規模である。土層では上層に白色粘土（第①層）が混入し、下層には混入していない。この理由は不明であるが、この遺構が柱を伴うものであるならば、柱固定のため粘性のある素材を使用したのであろうか。

S-061（S-047　第71図）

1工区F-4グリッドにおいて検出されたピットである。平面形態は楕円形を呈し、断面形態はU字状を呈す。長軸0.35m、短軸0.25m、深さ0.35mの規模であることから、これも柱痕跡であろう。

S-062（S-034　第71図）

1工区東側D-5グリッドに位置するピットで、径約0.4mの楕円形状を呈しており、一部は撹乱（現代の導水管部分）に広がっているが、おおよそのプランは想定できよう。第①層、第②層が縦状に確認されることから、S-061と同じく柱痕跡と想定もできる。

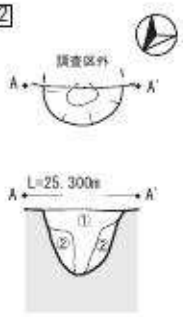
S-063（S-039　第71図）

1工区東側におけるB-6グリッドに位置するピットで約0.35mの円形の形状を呈しており深さが約0.2mのU字状を呈する。遺構検出時にはS-001に伴うピットと考えられていたため掘削を開始したが、半裁中に底部から鍍金製の耳環（112）が単独で出土した。6世紀の遺物であり本遺跡の弥生期、古代（8世紀）に伴わないため、この遺構は廃棄に伴うものか、他に目的があったのかその性格は不明の遺構である。

S-064（S-019　第71図）

2工区中央にあたるi-22グリッドに位置するピットで、約0.5mの円形の形状を呈しており深さが約0.4mのU字状を呈する。分層されているがほぼ同一層であり、このピットから遺物出土もなかったため性格は不明である。

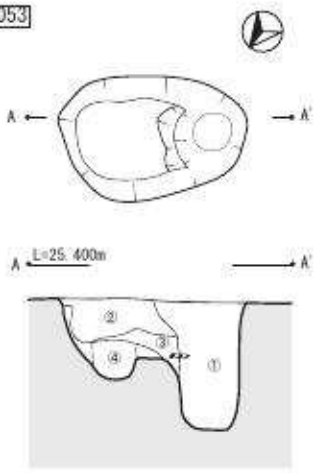
S-052

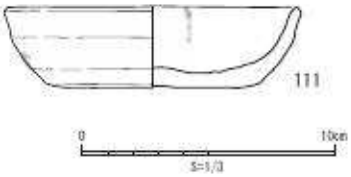


① 7.5YR2/3 極暗褐
砂質シルト
しまり弱く細粒砂混じる

② 7.5YR4/2 灰褐
砂質シルト
しまり弱く細粒砂混じる

S-053





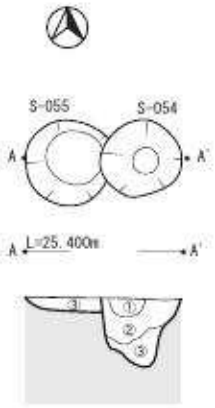
① 7.5YR3/3 暗褐
砂質シルト しまりなし 細粒砂 焼土混じる

② 10YR2/3 黒褐
砂質シルト しまりなし 細粒砂混じる

③ 10YR4/3 にぶい黄褐
シルト しまりなし 細粒砂混じる

④ 7.5YR3/4 暗褐
シルト しまりなし 細粒砂混じる

S-054 S-055

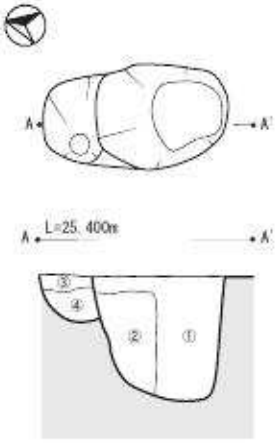


① 7.5YR4/2 灰褐
砂質シルト しまり弱い 細粒砂混じる

② 7.5YR3/2 黒褐
シルト しまり弱い 細粒砂混じる

③ 10YR4/3 にぶい黄褐
砂質シルト しまり弱い 細粒砂混じる

S-056



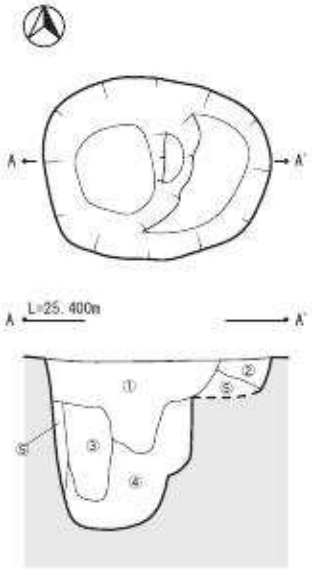
① 7.5YR3/3 暗褐
砂質シルト しまりなし 細粒砂混じる

② ①に10YR6/3 にぶい黄橙
砂質シルトのブロック土 しまりなし
粗粒砂混じる

③ 10YR3/4 暗褐
砂質シルト しまりなし 細粒砂混じる

④ 10YR4/1 褐灰
砂質シルト しまりなし 細粒砂混じる
7.5YR3/4暗褐色砂質シルトのブロック土

S-057



① 10YR4/6 褐
粘土質シルト しまり強（3cm程度の砂岩含む）

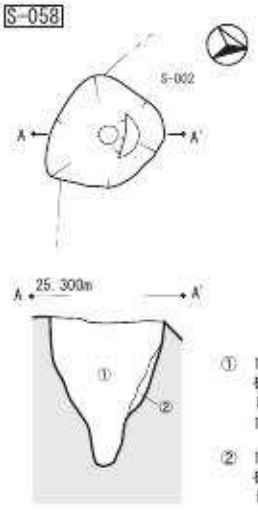
② 10YR2/3 黒褐
粘土質シルト しまり中（土山ブロック含む）

③ 10YR4/6 褐
粘土質シルト しまり中（川砂少量含む）

④ 10YR4/4 褐
粘土質シルト しまり弱（川砂少量含む）

⑤ 7.5YR5/6 明褐
シルト しまり弱

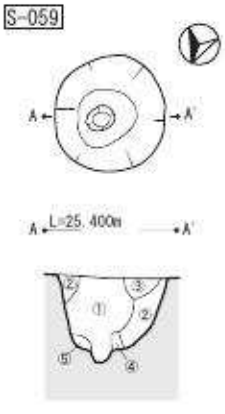
S-058



① 10YR3/4 暗褐
砂質シルト
しまり弱く細粒砂混じる
1cm程度の砂岩片含む

② 10YR2/3 黒褐
砂質シルト
しまり弱く細粒砂混じる

S-059



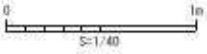
① 10YR3/3 暗褐
細粒砂シルト しまり弱（川砂含む）

② 10YR2/2 黒褐
粘土質シルト しまり中

③ 10YR4/3 にぶい黄褐
粘土質シルト しまり弱

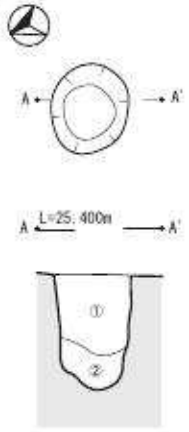
④ 7.5YR4/6 褐
シルト しまり弱（地山ブロック）

⑤ 7.5YR4/6 褐
シルト しまり弱（地山ブロック）



第70図 S-052・S-053・S-054・S-055・S-056・S-057・S-058・S-059完掘状況及び出土遺物実測図

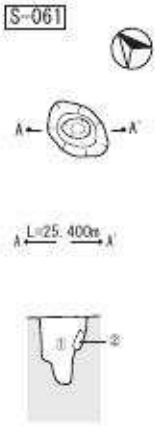
S-060



① 10YR2/3 黒褐
細粒砂まじり粘土質シルト
しまり弱（白色粒土（灰？）まじり）

② 10YR4/6 褐
粘土質シルト しまり弱
（地山ブロックまじり）

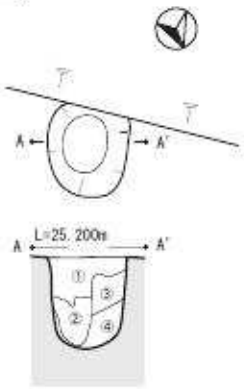
S-061



① 10YR3/3 暗褐
細粒砂混じり粘土質シルト
しまり弱

② 7.5YR3/4 暗褐
しまり極めて弱い
（地山ブロック混じる）

S-062



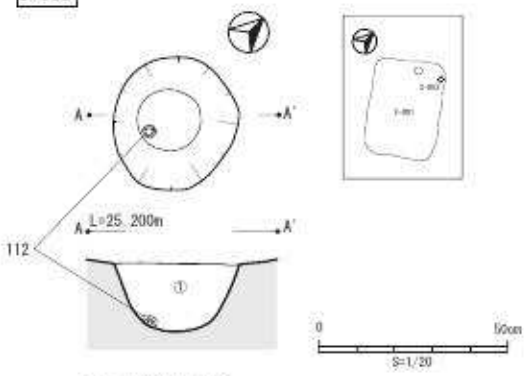
① 7.5YR3/3 暗褐
細粒砂混粘土質シルト
しまり弱（川砂岩）

② 7.5YR5/4 にぶい褐
シルト しまり弱

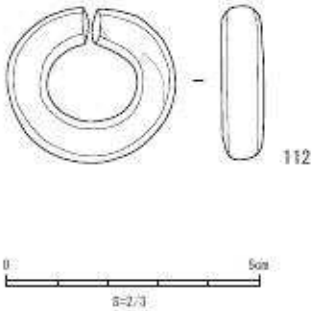
③ 7.5YR4/2 灰褐
細粒砂混じりシルト しまり弱

④ 7.5YR5/6 明褐
シルト しまり弱

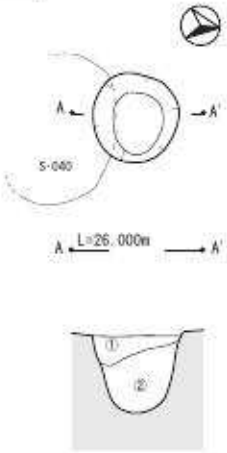
S-063



① 7.5YR3/3 暗褐
砂質シルト （しまりなし 細粒砂含む）

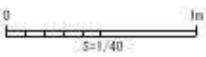


S-064



① 7.5YR3/2 黒褐
シルト質粘土 しまり弱

② 7.5YR3/1 黒褐
シルト質粘土 しまり中



第71図 S-060・S-061・S-062・S-063・S-064完掘状況及び出土遺物実測図

（集石）

S-065（S-007　第 72 図）

1 工区 D-2・3、E-2・3 グリッドにおいて検出された集石である。川原石 20 点を検出した。

検出を繰り返した結果、川原石のみが出土した遺構となり、下位の掘り込みは確認できなかった。やや大型である径 40cm 程の礫を 2 列分並べて敷き詰めている為、家屋等の建造物土台として使用されたか、またこの列間に空間があるため溝機能の要素も考えられるが、遺構把握としては残存部として僅かであるため情報が不足し、その性格は不明である。ここでは集石として仮掲載した。遺構からは近代以降の陶磁器片が出土したため、近現代であると考えられ近年構築されたものであろう。

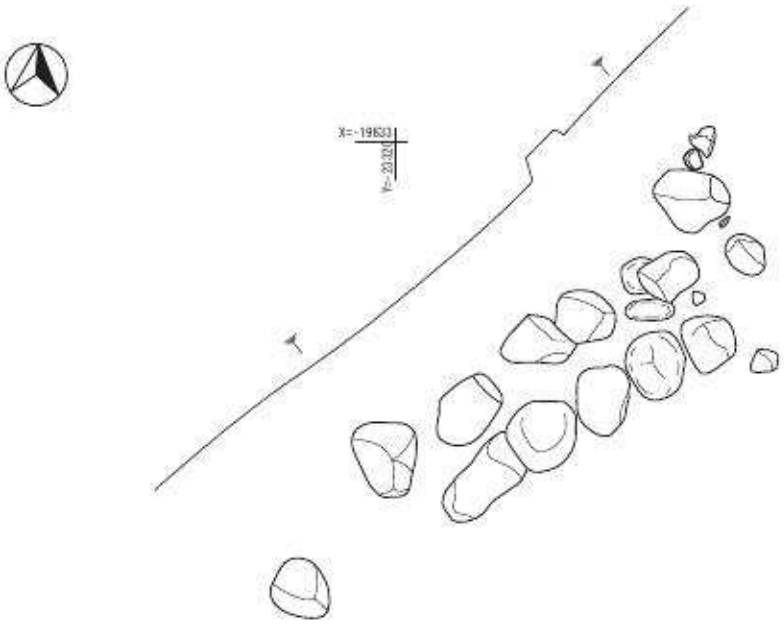
（不明）

S-066（S-049　第 72 図）

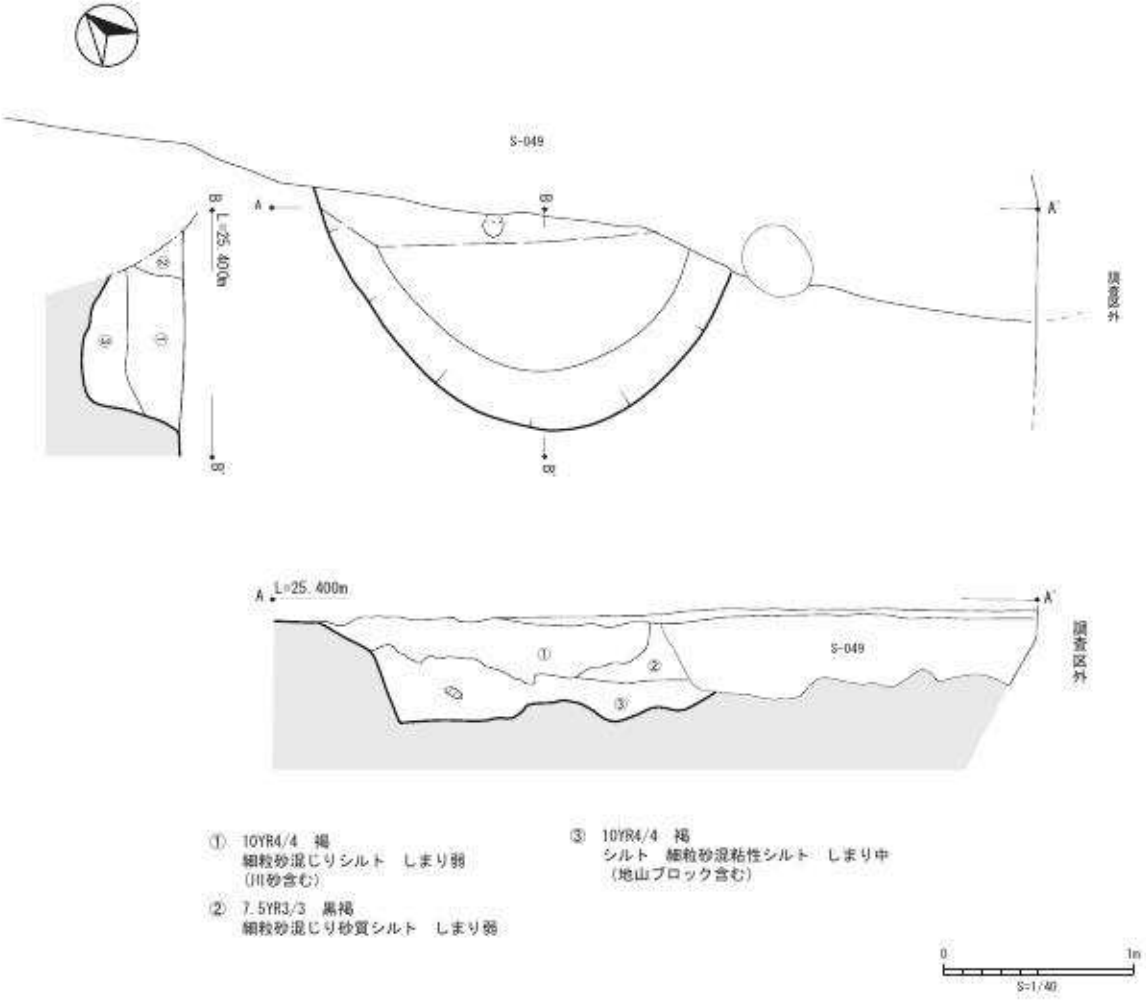
1 工区 C-8 グリッドにおいて検出された遺構である。

長軸残存 2.2m、短軸残存 1.0m の楕円形の一部が確認された。深さ 0.5 m でありその形状から土坑状であるが、S-049 に切られ、また出土遺物もないため詳細は不明である。

S-065



S-066



第72図　S-065・S-066完掘状況

第４章　遺物

縄文

早期（第 73 図 113）

113 は押型文土器で、その文様は楕円文の断片資料であるが、これは円筒形土器の胴部であろう。押型文の時期で早期に該当する。

後期（第 73 図 114 ～第 76 図）

この時期の遺物としては 114 の胴部下位から底部の資料である。胴部が底部に緩やかに向かい底部直前でやや窄まり、ここにケズリと指圧による調整を施す。底部はナデ調整を幾度も行い平面を形成している。南福寺式に該当するであろう。この遺物の中心は後期中葉の北久根山式が主である。この土器は口縁形態に把手や貼付け文を持つことが知られている。115 ～ 120 は把手の中に空間が生じ橋状を呈し、122・123 は口縁に沿って横に粘土紐を瘤状に貼付している。123 は口縁部欠損であるがこれも把手の痕跡が窺え、117・119 の口縁部には口唇部に注口状の貼付けが見られ、逆に 121・123・128 には穿孔が確認される。118・119 には渦巻状の沈線が施されており、これを受けて 124 は口唇部に S 字状渦巻文様を貼付けた特異なものであり、この系譜としてここに仮置きした。127 は僅かであるが波状口縁を確認でき頸部には大きく盛り上がる貼付けに沈線を施す。

口唇部に穿孔、注口などを意識した部位に突起状に貼付けるものが 142 であり、さらに穿孔を施すものが 138・139 である。一見、昆虫類の眼光のように見える。141 は注口が口縁部まで貫く特異な施工を施す。また口縁部及び口唇部に斜行刻みを施すのは 137・140・143 であり 146 は横施文である。145 は口縁から胴部に恵まれている。口縁は波状を呈しその山部は突起状を成し、さらに注口を形成する。口縁、胴部何れも施文はなく無文であるが全体にミガキが施されている。144 は斜行と横施文の複合体でこれを口縁部に施すが、口唇部には漏斗状の突起を形成している特異な土器である。147 は口縁部が帯状をなさず端部のみが少し肥厚し、この部位に線刻を斜行に施す。149 も同様であるが施文が貝殻によるもので観察ではハイガイを使用した感が見受けられる。150 は口縁端部が肥厚し、波状口縁を成す。斜行に線刻を施すが、これまでの北久根山式とは異なり、後続する中津式であろうか。また 148 は口縁部に綾杉状に施文しており、器形はやや外反する。これも土器形式は不明である。137・140 は口唇部に線刻を施すものであるが、137 は平口縁に連続線刻施文、そして穿孔も施す。

波状口縁は 145 で他は平口縁である。129 ～ 136 は平坦な口唇部に沈線を施す。さらに 129 ～ 131・133・134・136 には連続した刺突を施す。連続した刺突文の 129 ～ 131 もあれば 133・134・136 のように部分的な刺突文も見受けられる。口縁資料は頸部の文様まで理解出来る。文様の基本は単線を横、または斜行に連続し、その単線間に磨消縄文を施す。151 ～ 153・156・159 は口縁部と頸部から胴部資料で横 U 字状の単線であるが、151 ～ 153・155・156・159 は胴部最大径の屈曲部付近に渦巻状の施文を施す。この渦巻状の施文は他の単線にも影響を与え、残部資料であるが全体が斜行、または緩やかな線刻である。158 は口縁から頸部資料で深鉢であるが沈線間の磨消縄文は弱く、また黒色磨研が見られないが全体にミガキは施されている。157 は浅鉢の口縁から胴部資料で L 字線刻間に磨消縄文を施すが、胴部最大径から下位は残存資料では無文である。154 は口縁部資料で深く沈線を施し、そこには赤彩色が確認される。沈線は横、渦巻など複雑であり、全体的に精製されている。彩色が施されることから特異な遺物である。

160・162・163 は口縁から胴部資料で 160・162 は磨消縄文を施すが、160 はこれまでの北久根山式の沈線に比べてやや弱く、さらに 162 はさらに浅く沈線を施した北久根山式に後続する形式であろう。

161は頸部から胴部資料であるが、これも沈線の入り方が土器に対し直角に傾きを持つU字溝であり、胴部最大径から下位は無文である。全体にミガキを施し、精製されている。これも後続する鳥井原式に該当しそうである。163は口縁部資料で口唇部に刻みを施し、口縁部下位は刻目突帯であり、文様は波状に線刻を巡らす。黒色であるが磨研を施さず粗製土器である。164は底部資料であり、平底で底部近くに2条の沈線を巡らすが、これも細くやや浅い。黒色磨研で精製されている。

166は口縁から胴部最大径を含む資料である。胴部上位は棒状工具による緩やかな放射線の斜行状連続した調整を施す。胴部下位はナデ調整のみであり、最大径は意識しておりこの境界は一見、突帯形成にも見える。器形は深鉢であろう。167は口縁から胴部資料で全体をていねいな作りでこのまま底部へと窄まる鉢であり、165も口縁から胴部資料で口縁部に稜線を持ち、ここから胴部が膨らみ、底部へと向かう。無文であるが黒色磨研土器の浅鉢であろう。

晩期（第77図168～172）

168～172は晩期土器に見られる組織痕土器である。網目圧痕で168・169は網目が2㎜程の密で170～172は4～6㎜のやや幅広で、土器内面は丁寧なミガキを施している。型自体に由来する文様であろうが、何れも小破片であり、また点数も5点を数えるにすぎない。従ってこの資料から多くを述べることは困難であるが、黒川式土器の浅鉢にその傾向が見られることを付加しておきたい。また前述した土器内面の丁寧なミガキは浅鉢の内面を使用とそれを意識したことでもあろう。

弥生（第77図173～175）

173は弥生甕の底部であるが、この形式に近いのが174である。しかし輪積みによる空間が存在せず、塊を成している。明確な時期も不明であるが、ここに仮置きした。175は弥生土器の甕や高坏に見られる口縁部である。赤彩を施し暗文も確認できるが、口縁内部を欠損しているため明確な形式は不明であるが弥生中期に見られる器形である。

古代（第77図176～第78図）

176は土師器の坏で全体に彩色を施し、また輪状の暗文も確認できる。177は土師器埦である。全体に彩色を施しているが、内部口縁附近に黒煤が多く見られる。これは灯明の痕跡であろう。本来、器としての機能から照明具として転用されたものであろうか。179は土師皿で口径約16㎝を測る大振りである。彩色を施され底部には墨書が確認できるが摩耗し僅かに「和太□□」まで判別出来る。178も墨書土器で残存部は「木大□」と読める。底部資料の一部のため器形は不明であるが、何れも彩色土器に墨書が施されている。

180～185は生産具の範疇である。180は紡錘車で、残存は1/3ほどであるが円形状を呈する器形のため復元径は4.8㎝とした。181は移動式竈の上位部小破片で両面はていねいに成形されている。小破片のため全体構造は不明である。184・185はていねいな面取りを行っていることから硯と想定した。小破片のため時代設定は不明であるが、硯の出土により文字について連想が可能か。182・183は土錘で「孔径の2条値L　土錘の長さを最大幅で除した数値Pを計測すると$0 \leqq L \leqq 0.25$で、$1 < L < 7.0$の刺網のものと$1 < L < 3.0$の袋網（地曳網 底曳網）に大きく分けることができる」（真鍋篤行 1994）に照らし、183は完形資料ではないがこれも白川を対象とした小規模刺網の存在を窺わせる。186・187は近世磁器破片であるが、187は胴部下位、186は見込みを意図的に円形再加工している。これは中世輸入磁器二次加工の「瓦玉」に酷似しており、「瓦玉」が遊具と考えられているため、これらの遺物も同様の性格を持つものであろう。

石器（第 79 図～第 85 図）

188 ～ 195 は石鏃である。いずれも無茎鏃で、形状が正三角形に近く抉りが僅かな三角鏃の 188、二等辺三角形の 194・195。基部に抉りの入る 189・190。U 字状の深い抉りの 191 ～ 193 である。特に 191 は辺部に細やかな鋸歯状の剥離が確認される精巧な作りである。本遺跡での石鏃の材質は黒曜石 188・191・194、また肉眼観察では 194 は大分県姫島産黒曜石のようである。チャートは 189・190・195、安山岩は 192・193 である。196 は石核で全縁に点状打面があり、作業面に残る剥離痕から不定形な幅広で厚みのない剥片を取ることを目的とし、石鏃等の素材剥片獲得を目的とした石核であろう。石核として一度の使用で、作業面再生が見られないことから、次回に使用することを意図し保管したとも考えられる縄文の遺物である。出土状況は弥生住居地の埋土の中層下位であるため遺構には伴わないと判断し、ここに仮置きした。材質は安山岩である。

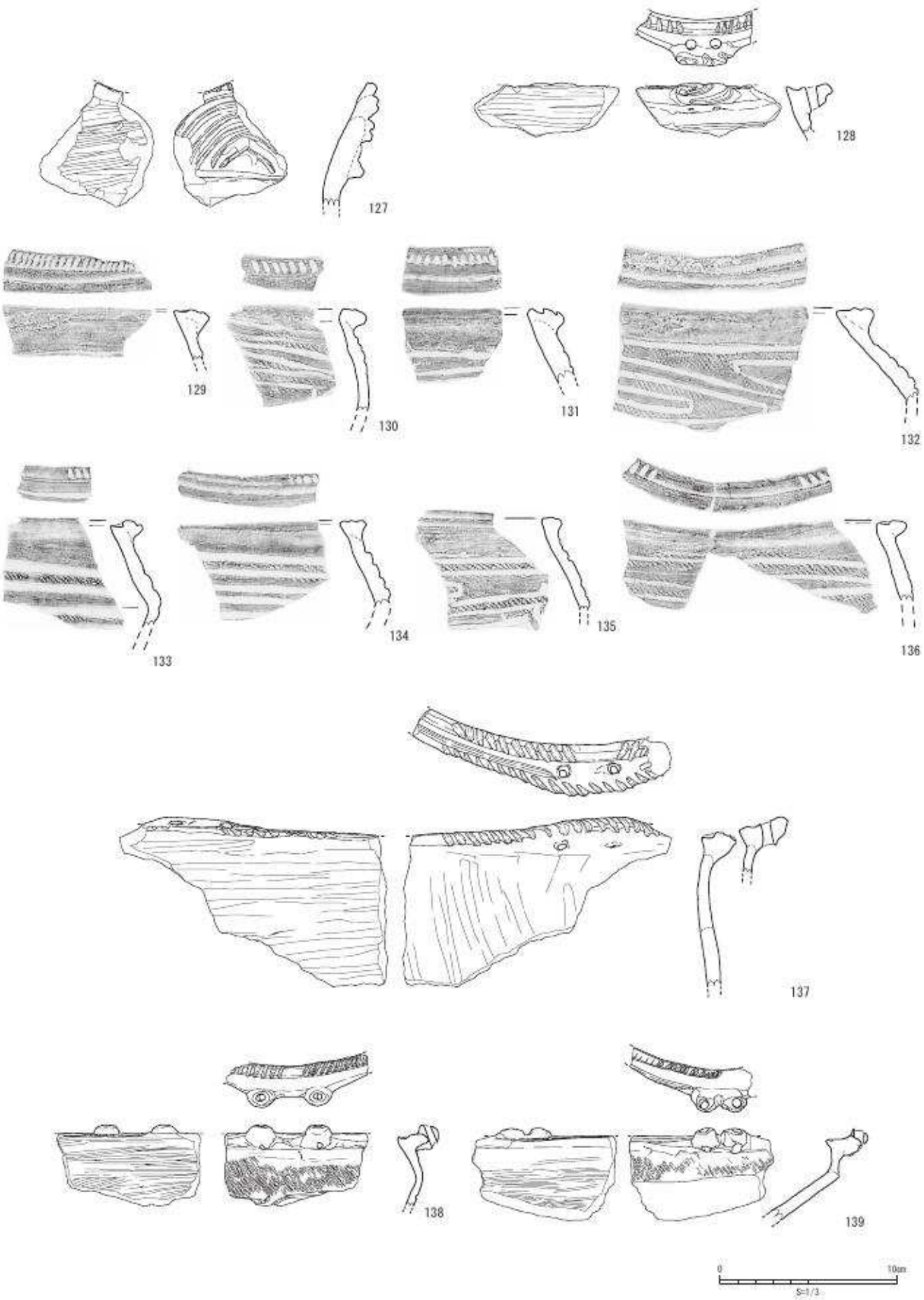
197 ～ 201 は二次加工剥片である。縦長剥片の 197 は側面に気泡を含む 198 は左側面に使用痕、200 は節理の多いチャート製のため石核状の剥離であり側辺に使用痕が見える。199 は安山岩製の縦長剥片で小判状を呈し、その側辺に二次加工、使用痕が確認される。この二次加工石器は削器として使用されたものであろう。何れも包含層出土で本遺跡の遺構からの出土ではない。201 はサヌカイト質の縦長剥片を二次加工した石器で自然面も残る。石匙（202・203）が出土している。この石匙の出土状況は遺構埋土中であり住居時期の遺物かの判断が困難であるが、包含層出土遺物としてここに掲載した。204 はサヌカイト製の円盤状石器である最大径 9 ㎝強を測り、片手で持ちやすい大きさのため手斧のように使用したのであろう。

205 ～ 208 までは打製石斧である。205 は小型の打製石斧で材質はサヌカイト質。206 は欠損している。207・208 は完形でやや小型の部類であろう。材質は安山岩である。209 は粘板岩製の局部磨製石斧であるが、これは素材的には強固な岩石ではなく、しかも厚みもないため倒木などの機能より捕種等の土掘り等に使用したものか。211 は磨製石斧の破片である。本来は残存部の半分から 1/3 近くを有していたか。全体に調整され、局部は丹念に磨かれている。半裁されたような残存状態で、これは局部に強い衝撃を受けたことによるものであろう。材質は輝石が確認されることから輝石安山岩である。210 も同様の磨製石斧であるが、この破片は中央部に斜行の窪み部が確認され、この部位は特に磨痕が見られることから、砥石的な二次使用が想定される。

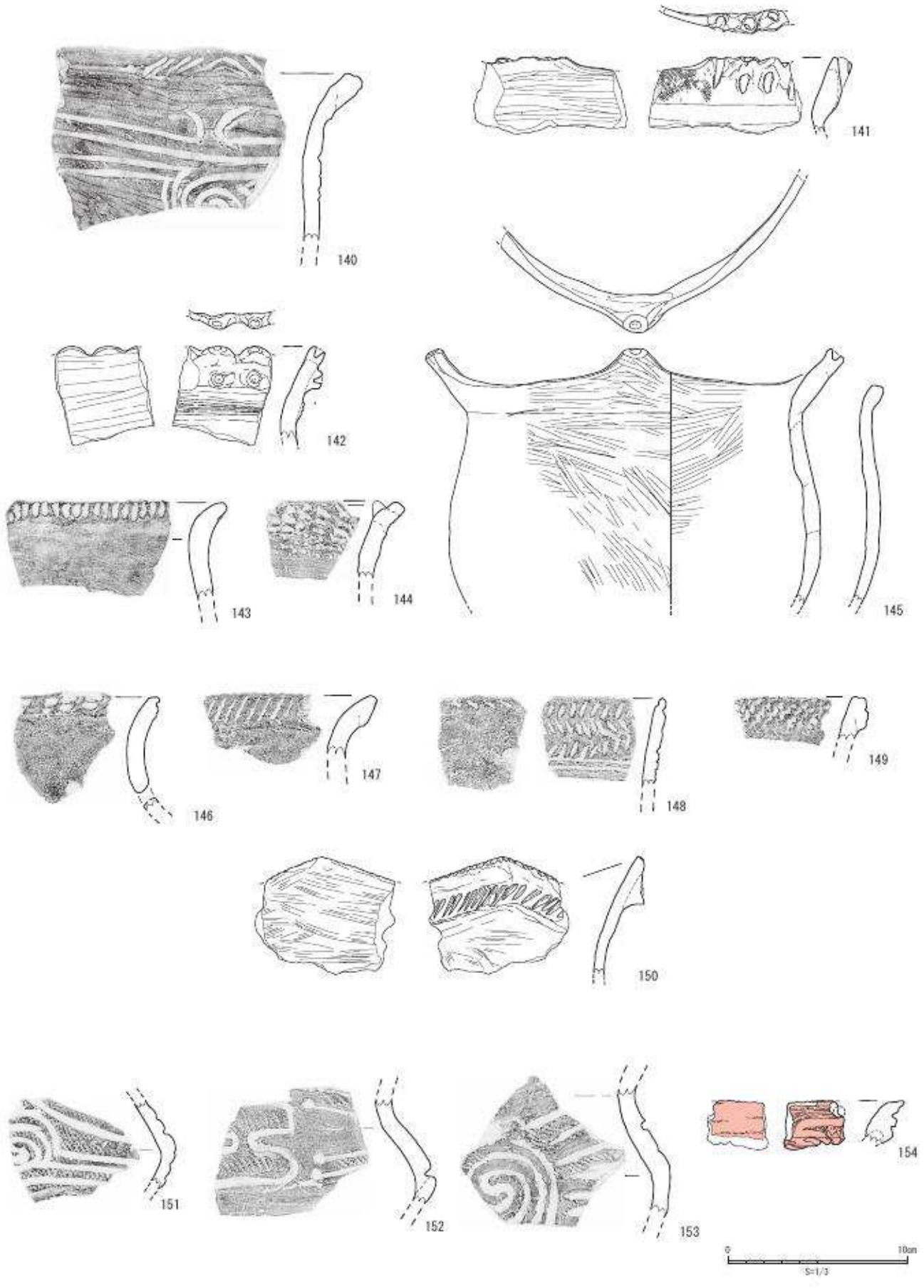
212 ～ 220 は敲石・磨石類である。212・214・215・218 は原形を保っているが、他は使用時に破損し廃棄したものであろう。棒状のものは 214・215 で他は楕円または円形を呈する。また 215 は 3 側面に僅かに擦痕が認められる。213 は打痕が多く認められることから使用時に破損し、廃棄されたものであろうか。218 も平面に多くの打痕が認められ、使用頻度が高いことを窺わせる。216 も破損後、廃棄された遺物でこれも本来は楕円形状を呈していたろう。したがって 213・216・217 は破損し本来の目的を消失したために廃棄した遺物である。219 は側面に磨痕が認められるがこれも廃棄された道具である。220 は風化の激しい安山岩で一見、脆い感じを受ける。これも廃棄された道具である。221 は本来、敲石であるが打痕の激しい箇所は抉り状を呈し、これにより大型石錘の形状を成すようにも見える。これが石錘としての根拠は乏しいが河川沿いの遺跡立地であることから、石錘の出土の可能性を示唆する遺物である。

222 は小型砥石破片で四面全て使用されている。先端に向けて幅広くなる形状であろう。これは近年においても使用されている砥石にも見られた。材質は天草砥石である。223 短冊型を呈し、その断面は三角形であるが、どの面も磨痕の頻度は多くトロトロする感触である。形状から片手で使用した砥石であろうか。

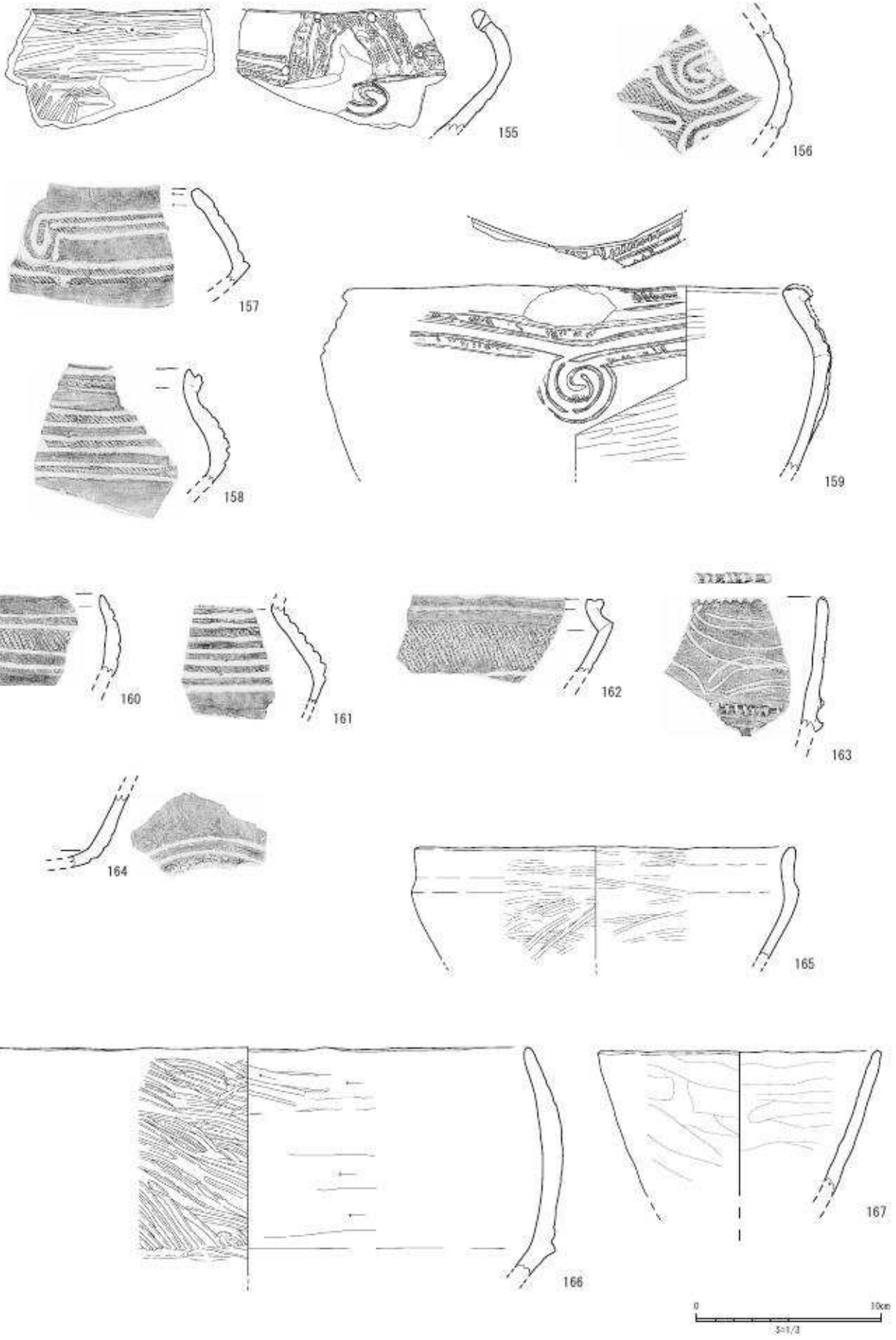
第73図　出土遺物実測図1



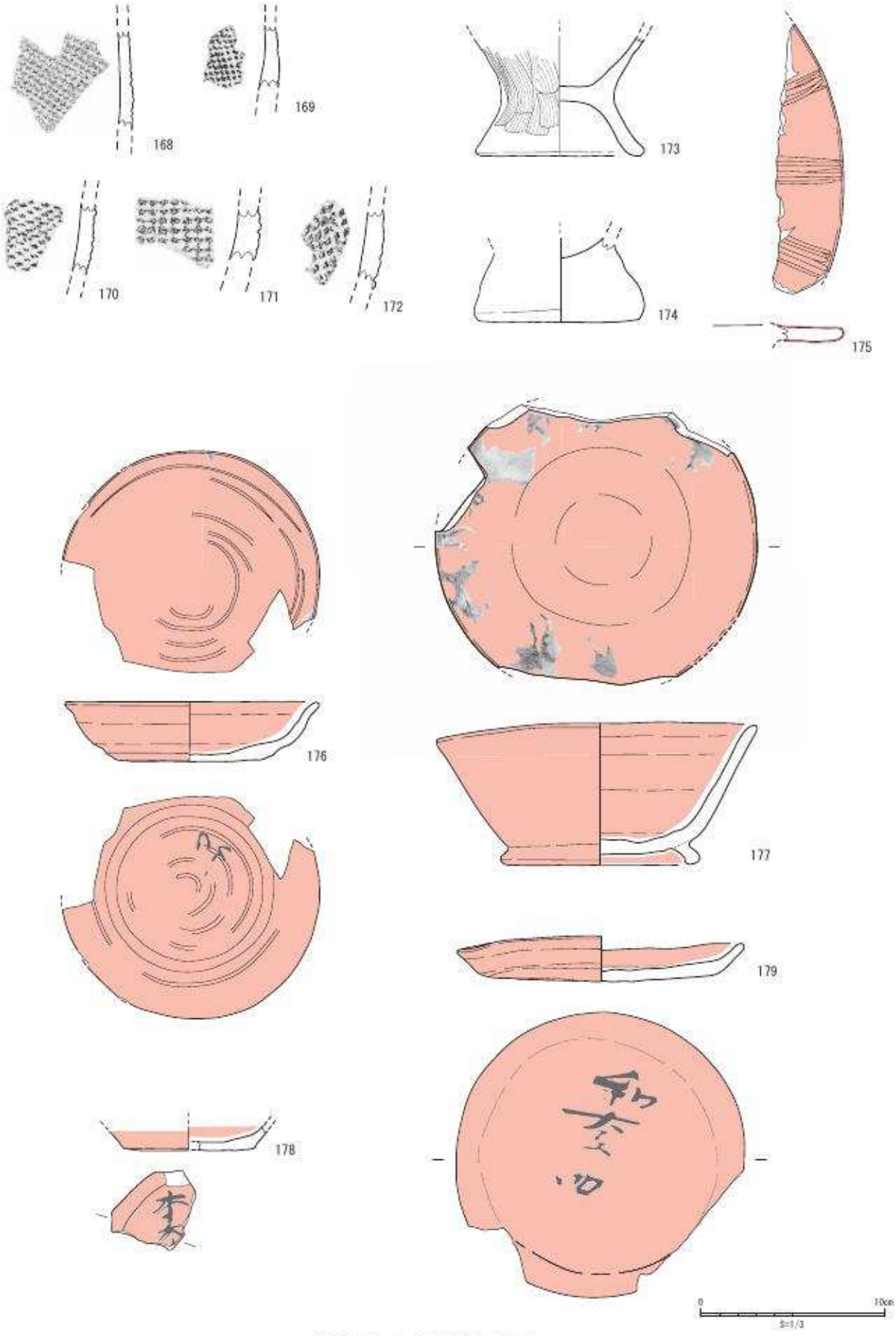
第74図　出土遺物実測図2



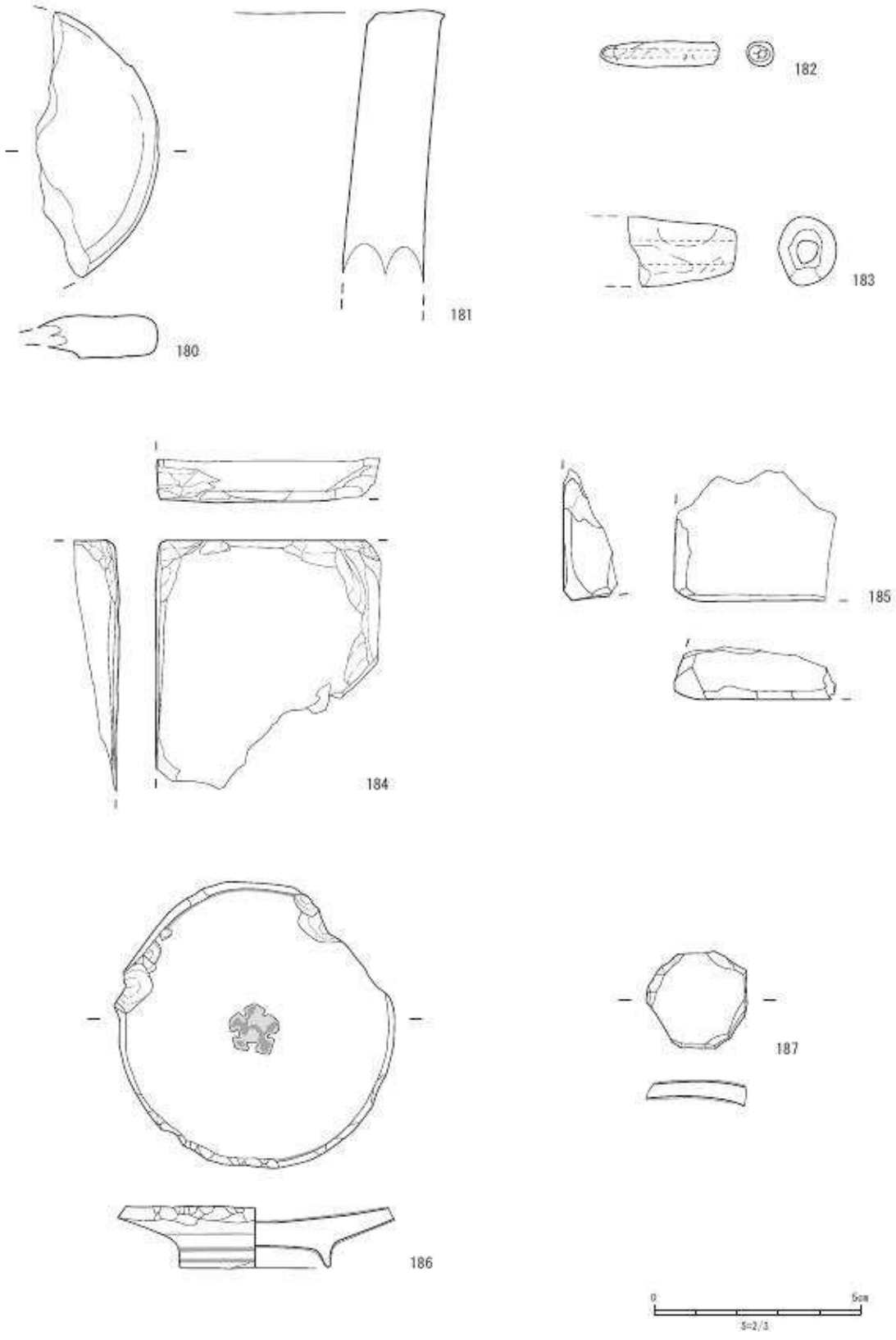
第75図　出土遺物実測図3



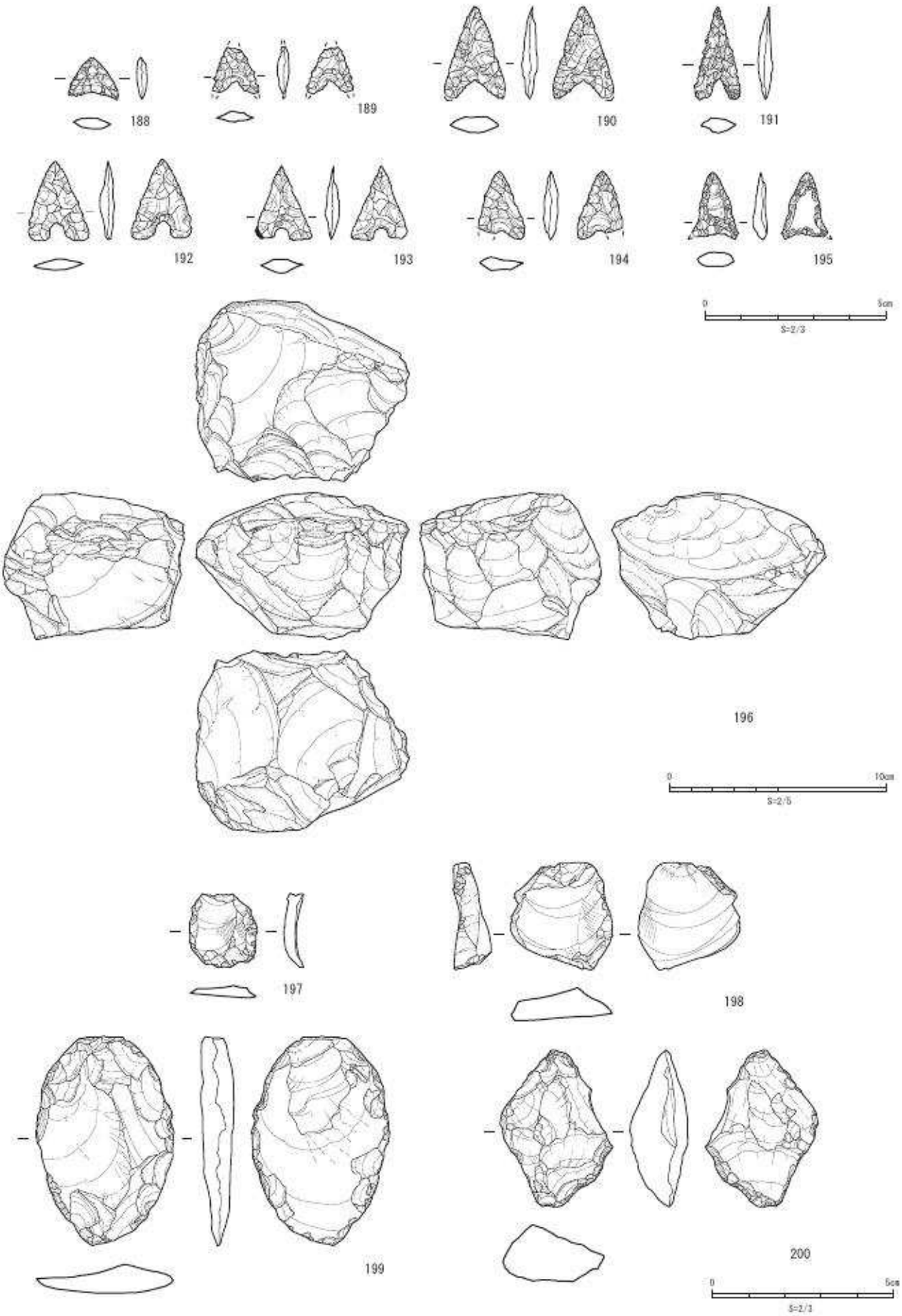
第76図　出土遺物実測図4



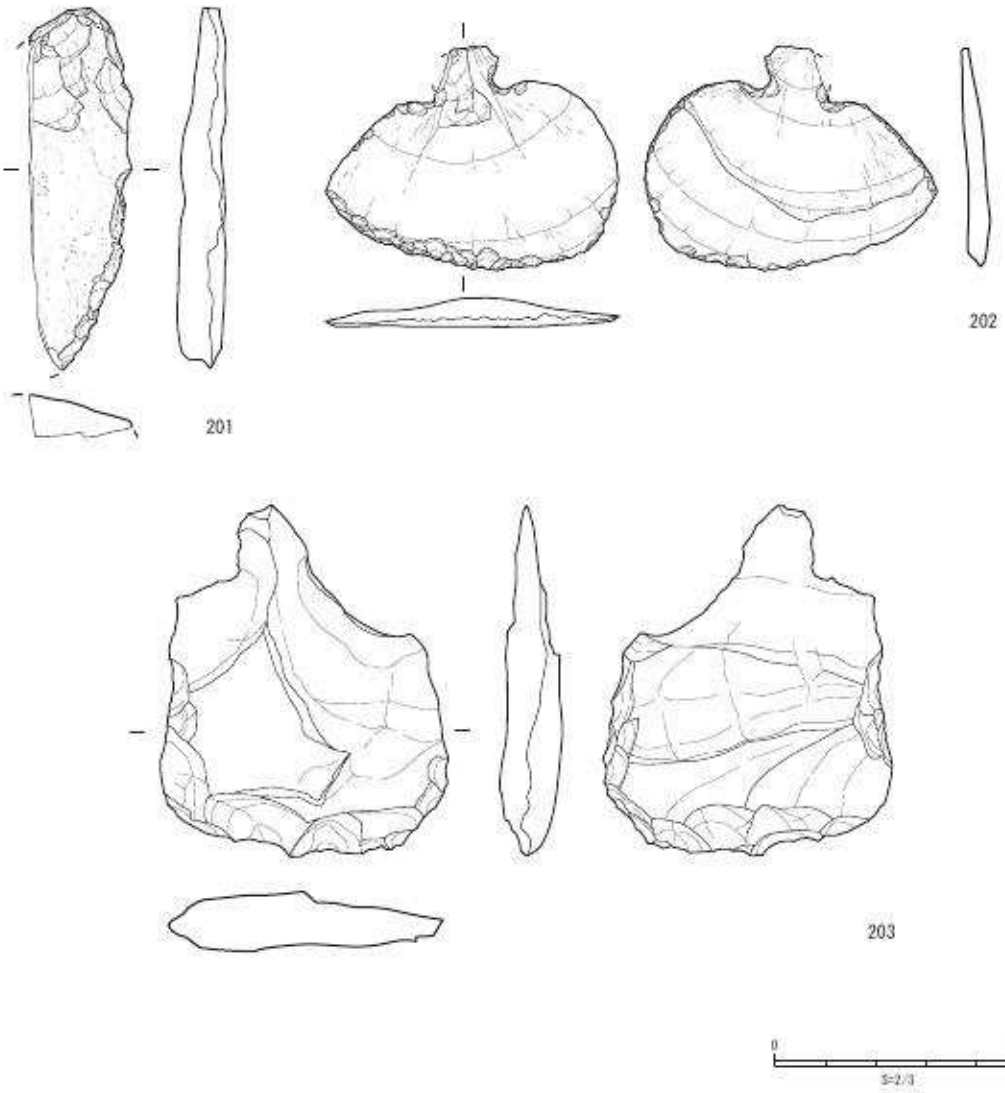
第77図　出土遺物実測図5

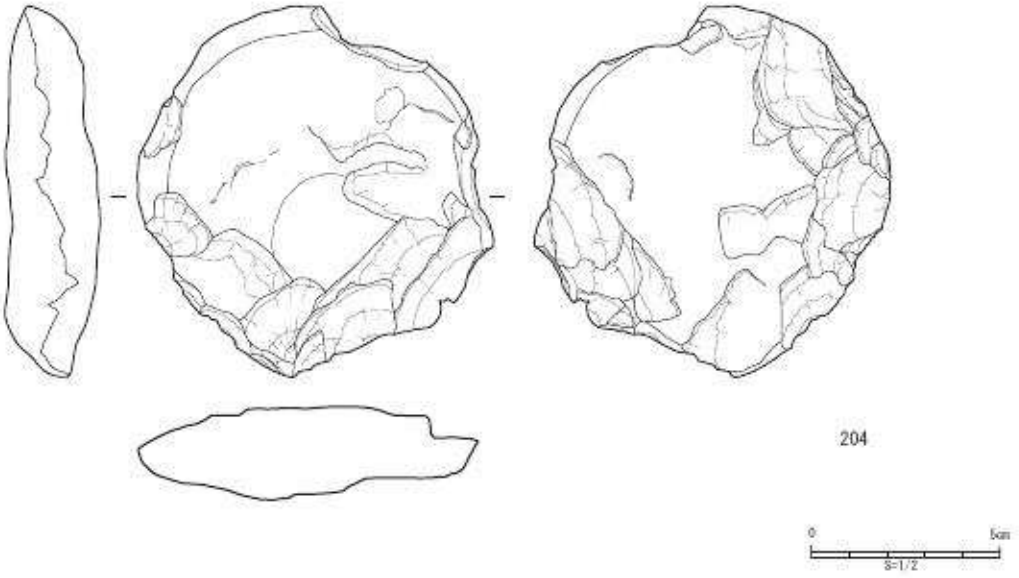


第78図　出土遺物実測図6

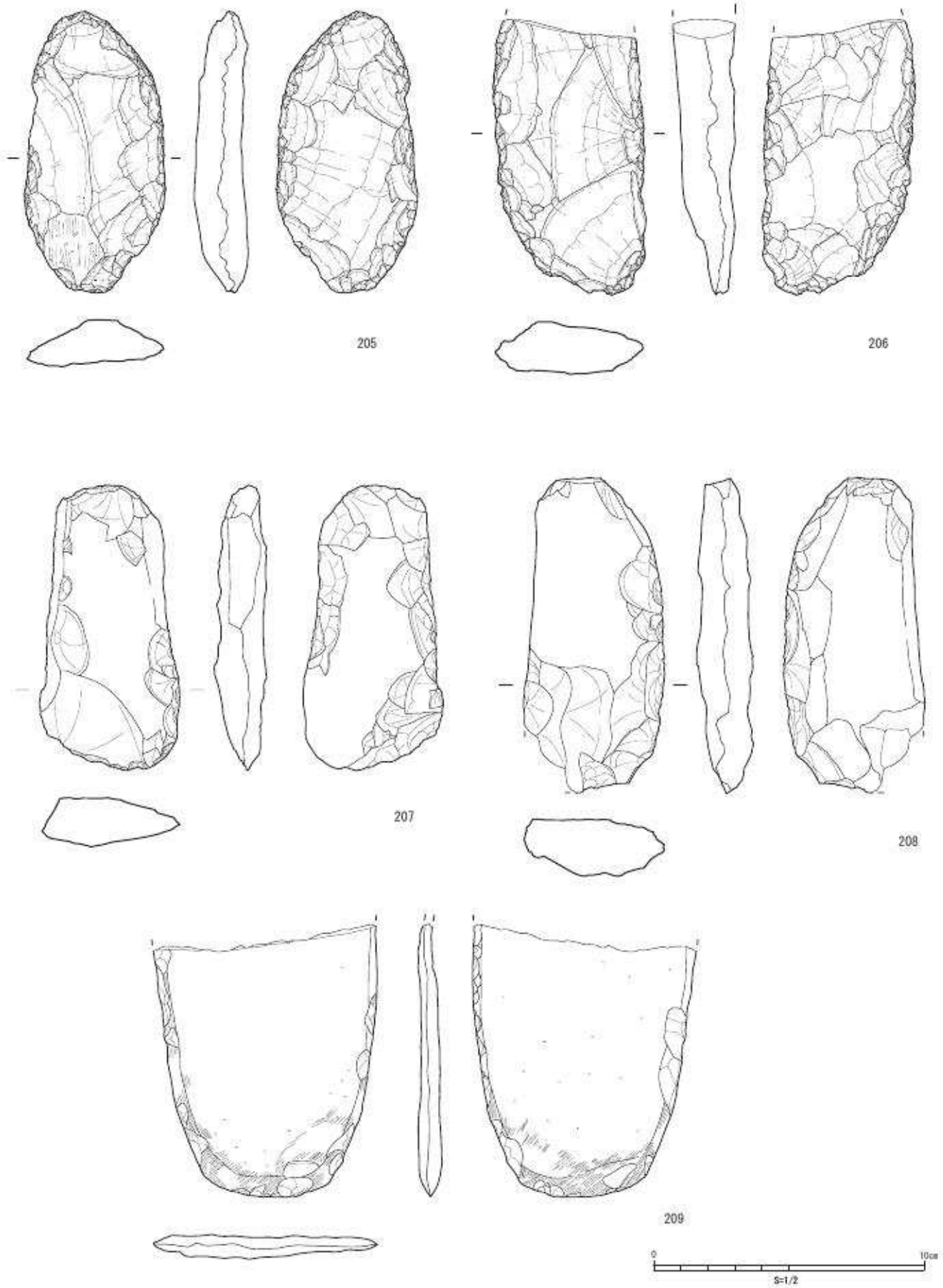


第79図　出土遺物実測図7

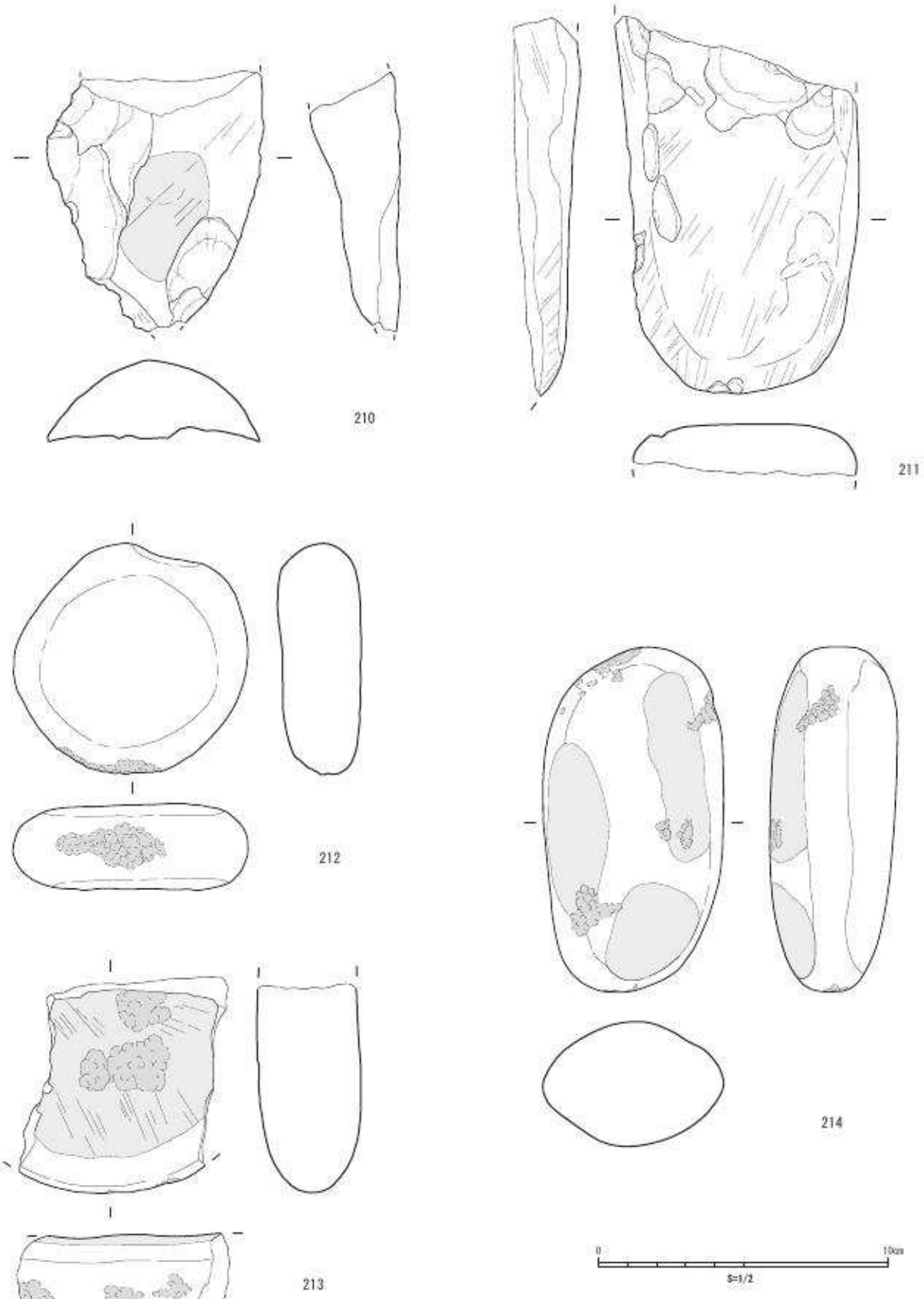




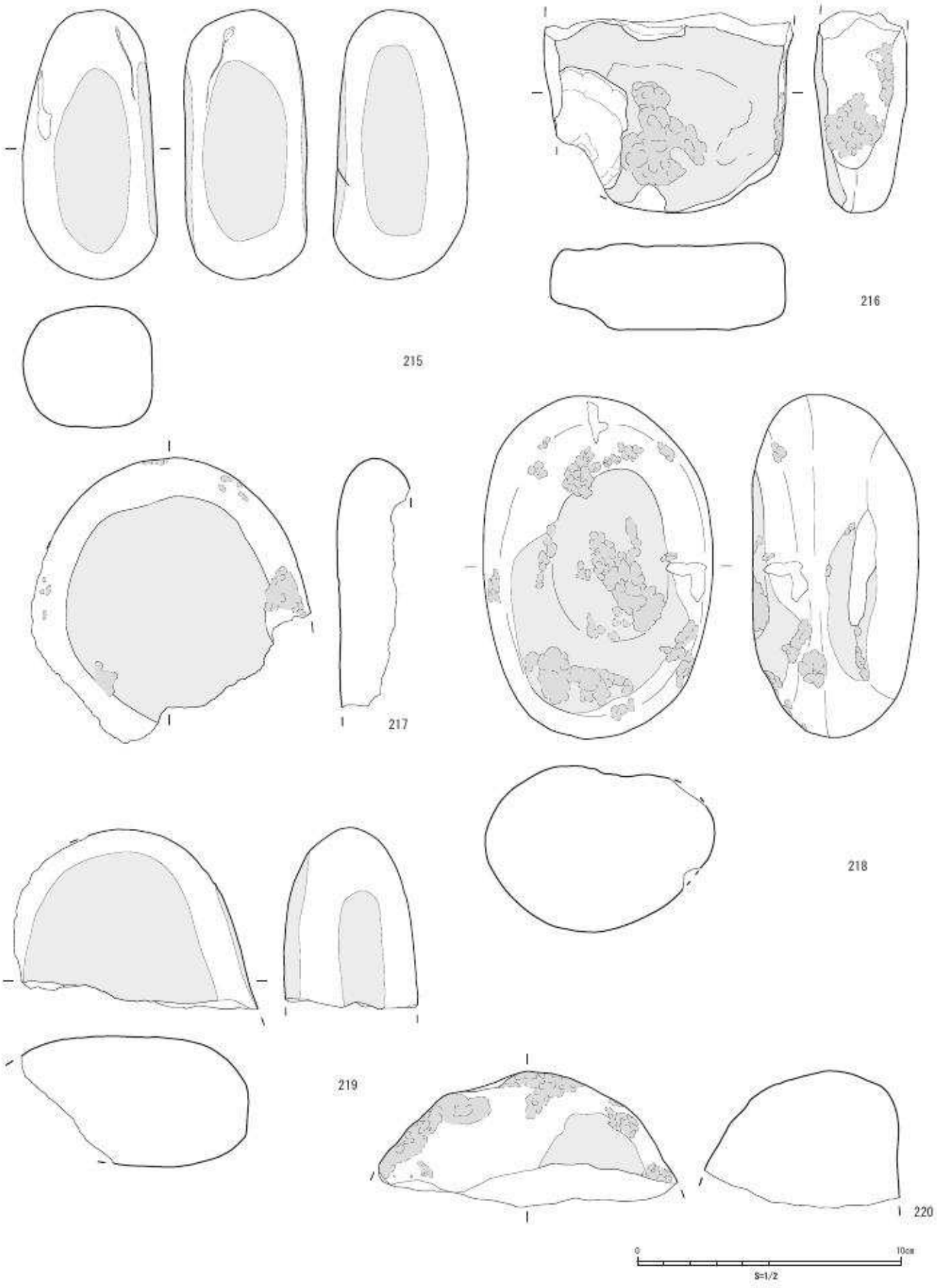
第80図　出土遺物実測図8



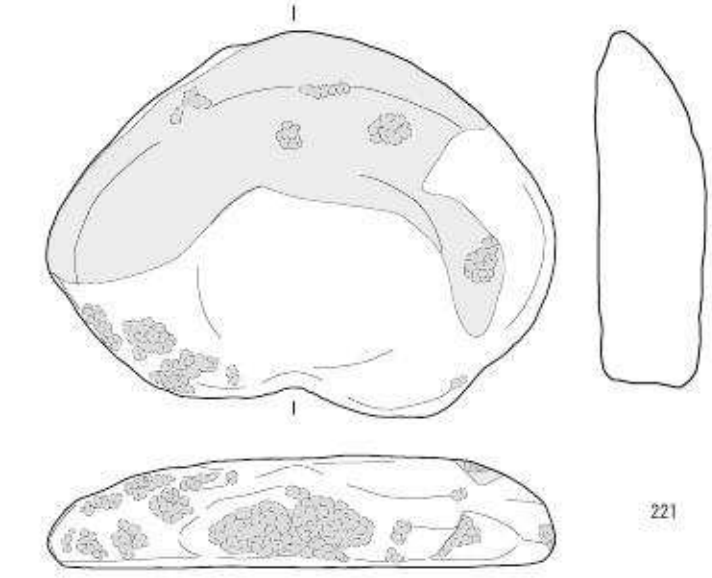
第81図　出土遺物実測図9

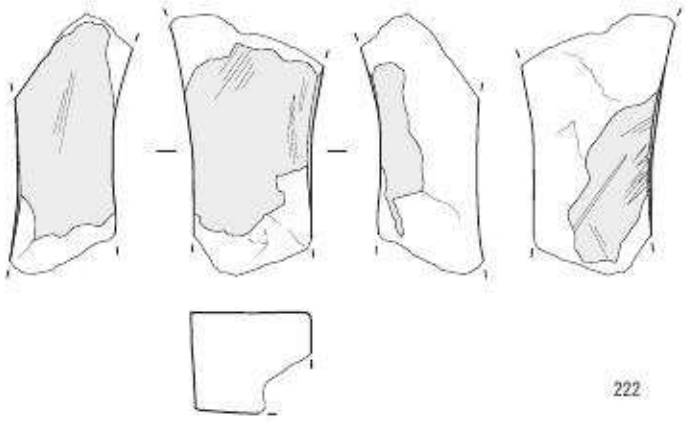


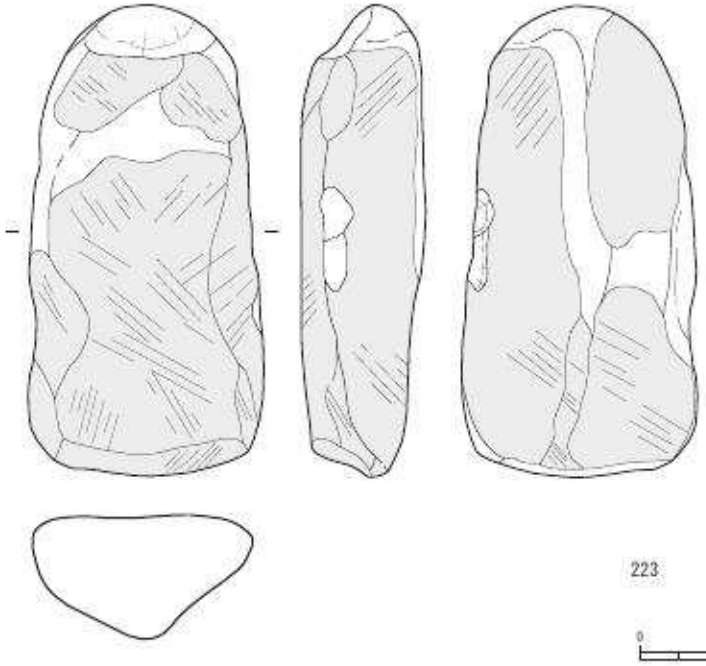
第82図　出土遺物実測図10



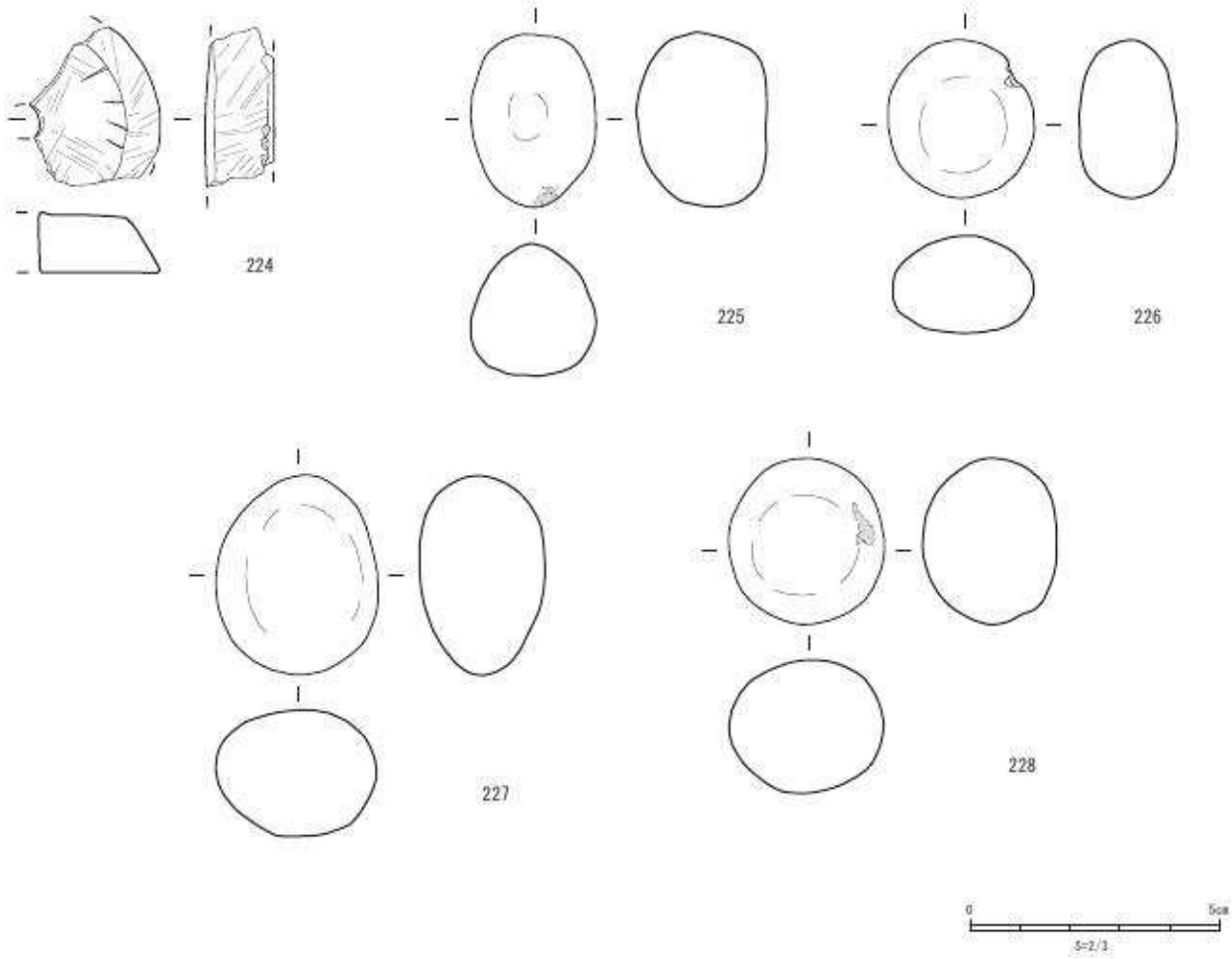
第83図　出土遺物実測図11







第84図　出土遺物実測図12



第85図　出土遺物実測図13

224は紡錘車の破片で円形を呈するため復元値として径5㎝程であろうか。またこの遺物を観察すると全体にていねいな磨きを施すが、上面に5～6㎜間隔で放射状の線刻があり、これを意図的におこなったならば、なにか目的があったのであろう。

225～228は小型石で特異な加工は見られない自然石であるが、これは菊池川に近接した弥生期水田遺跡の玉名平野条里跡（2014年）でも出土し、後日、山崎純男専門調査員より水田鳥害対策の投石と教示を受けた。この事例を参考とし、その形状も酷似しており、本遺物も掌に入る規格を河川にて容易に入手できる立地条件などもある。しかし本遺跡出土遺物は、安易に投石と断定はできないが、遺跡の周囲に水田の存在とその生業を想定させる一助にもなろうか。

第５章　総括

第１節　遺構

検出遺構は住居 23・土坑 23・溝 4・ピット 13・集石 1・不明遺構 1 である。住居は弥生中期と古代（8 世紀）に大別され、従ってこの遺跡はこの時期に比定されるであろう。弥生期の住居は 5 m四方の規模で、中央に炉を持ち 4 本柱が主であるが S-008 は特異な円形プランである。これまで円形住居地は上の原遺跡（熊本市南区城南町）、谷頭遺跡（阿蘇郡西原村）などで検出されている。また S-005 は 8 m強を測る円形住居地で、また住居地としてもかなり大型である。本遺跡の近隣では上南部遺跡（熊本市東区上南部）において S-005 と同様の遺構（上南部遺跡 3 号竪穴建物）が検出されている。この大型円形住居には中央部に土坑状の掘り込みが検出され、極小炭化物も存在していることから、この土坑が炉跡と想定されるが、全体の性格としての住居としての機能的な要素を含めうまく説明ができない。今後の類例を重ねていたきい。

古代住居は N-45° -E 前後で方位の規則性が見出されるようで、また住居内の竈位置の大半は北東側に位置する。これは竈の機能を高めるものか、またはムラの規則性であろうか。住居に関してさらに述べると、この白川河川一帯の検出住居地硬化面が明確でないのは氾濫堆積層の砂質土によるもので、また明確な焼土が検出できなかったのもこのことによる。これは類例として砂浜を踏み固めても硬化せず、また焚火をしても砂に熱が加わるだけで焼土は出来ない。そしてその残存としてのみカーボンが存在することと同じである。したがって硬化面や焼土から住居の期間を想定するのは困難であり、またこれに河川氾濫等の自然災害という係数が加わる。

S-012 から須恵器蓋が竈内で安置されたような状況で出土した。また天井部にヘラ記号を持つ一種の特殊な器のため、竈廃棄の儀礼に用いたのであろうか。この類例は新南部遺跡群 2（熊本市 2016）において SI1004 では住居内の燃焼部最奥部から逆位置に据えられた土師器高坏と土師器甕の出土例がある。火は照明、暖房、調理など生活におけるその効果は多大で、やがてそれは霊力を持ち、そして古代から信仰の対象になる。私的経験では県北の民家で「荒神様を拝見させて頂きたい。」と願ったところ、竈のある調理場に案内された。このように火を祀る家も存在することから、竈の機能を失うことは、住居を廃棄することで、それに伴う儀礼が存在すれば、高い精神性を持っていたと云えよう。

他の遺構として土坑が挙げられるが、その時期と性格は明確でなかった。S-041・S-046 などは礫や破損した石器などの出土により廃棄土坑が想定され、また S-027・S-028 は遺物出土もなかったが、この遺構はその隅丸長方形プランから土壙墓の可能性もあり、これらを土壙墓域と想定したならば遺跡北から西方面は墓域群を示唆するが、調査にてこの区域は後世の河川侵食を受けていることが判明しているため不確実ではあるが、墓域群はこれにより消滅したのであろう。

S-047・S-048 は古代の大型溝である。遺物は多彩で蔵骨器に用いられる須恵器の短頸壺（95）、鉢の 94 や 79 ～ 84 の照明具など特異な遺物が出土した。S-047・S-048 は連続した遺構であり、その間にはブリッジも存在することから、この遺構は溝というより堀の様相を呈し、また出土遺物もこれまで検出された住居等と異なる遺物のため支配者階級の存在を窺わせる。

第２節　遺物

土器・石器 他

土器は弥生中期の黒髪式土器が中心で、その器種は壺、甕で破片資料ではあるが甕棺（20）も出土した。また弥生土器口縁部を意図的に連続性の打ち欠き（6）や、胴部上位の穿孔（7）など意図的な作為

の土器も見られた。これらの行為の目的は不明であるが、この類例は近隣では新南部遺跡 10 次（2016 年）35 号建物出土の№ 123 の胴部下位に穿孔のある壺形土器として提示してある。またこの穿孔を施す彩色土器を多数出土した南小国町所在の地蔵原遺跡（2004 年）は、弥生中期後半の祭祀遺跡と想定されていることから、器としての機能を消失させる廃棄儀礼に伴うものであろうか。

古代は坏、甕など二次焼成を受けた土器の竈内からの出土が多く、これらは煮沸具として使用され、その食性の変化を窺わせる。また古代と推定される溝 S-047・S-048 から出土したこれまでと異なる照明具の灯明皿は、生活状況を窺い知る上で今後注目される。

石器は磨石・敲石の出土が顕著であるが、これは河川に近接しているためその供給が充分であったことによるもので、しかも使用による一部欠損もみられるが、その殆どが完形であることが、このことの理由によるものであろう。また棒状の形態を除く、扁平型の磨石には敲打痕も見られ、擦り、敲く、または小型台石的な多岐に亘る用途に使用されていたのか。現在のように道具は明確な細分化せず、この時代は多目的用途の使用が窺える。

また生業の一端として石錘（221 他）の出土は河川漁を想定させる。この扁平形は漁網を川底に定着させる機能を持ち、これは刺網系漁撈具「土錘」の素地でもあろうし、古代から川漁に適した刺網系漁法が存在していたのであろう。また近世磁器（186 ・187）を意図的に打ち欠く、いわゆる連続剥離を施した二次加工遺物が出土した。中世輸入磁器にその傾向が見られる「瓦玉」と同質であろうか。この「瓦玉」は遊具と考えられている。

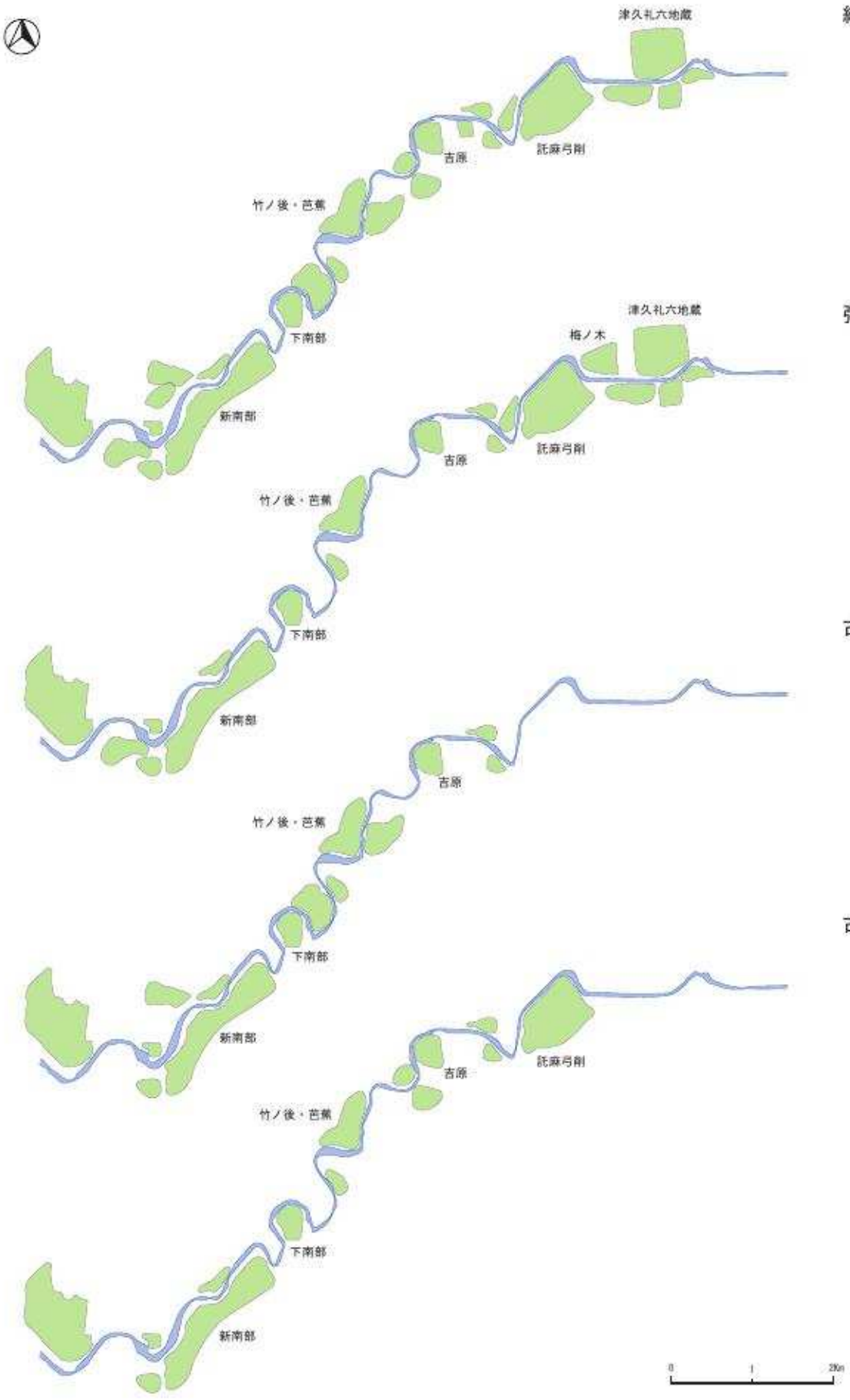
S-063 のピット状掘り込みの中層から耳環（112）が出土した。銅地銀張りで古墳期 6 世紀頃の遺物であろう。埋土は単一層であり、それは流れ込みでもなかった。伝世しやすい性格の遺物でもあるが、遺物だけが本遺跡の時期と異なるため、本遺跡内に古墳期の遺構も存在した可能性も想定される。また周囲にこの時期の遺跡の存在を窺わせるが、耳環という特殊な遺物がピット状掘り込みから出土したことも疑問に感じ、本遺跡では提示に留めたい。

第 3 節　結言

小規模調査地であったがその検出遺構・出土遺物から大別すると弥生時代と古代にピークを持つ遺跡である。本遺跡は遺跡中央部北側が河川氾濫により削平を受けた区域に、後年川砂堆積層が形成されるため、これにより弓状の調査区の中央部が抉れている感を受ける。この区域の情報が欠如しているが、弥生期はその住居跡から遺跡の東端と西端の両端に生活痕跡、古代になると中央よりやや西側と東部端に集中区が見られるように感じる。これは中央部の欠如部にも遺跡が存在していたならば、弥生期は遺跡西端から東端の手前、古代は西端手前から東端と想定され、これにより若干のずれはあるが、弥生期と古代はほぼ同位置に存在していたと想定される。

本遺跡は本体工事区内の調査であるため、その情報としては僅かであるが、この河岸段丘低位面の蛇行地帯突出部に存在し、弥生時代中期と古代の遺跡であることを改めて確認、そして周知された。そしてその位置と標高からこの突出部全体に広がることも推定される。また遺跡中央部南端、ほとんど調査区外に接する附近で北久根山式土器の出土を認めたため、縄文後期中葉の遺跡が本調査区の北側の突出部である河岸段丘の上位に存在することを窺わせ、近隣の調査報告の成果や、託麻弓削遺跡群 5 区調査（2015 年）の南福寺式土器の大量出土と合わせ、この白川流域に縄文中期から後期にかけて今後、注目する必要も生じる。

ここで本遺跡を中心にして白川流域の時代ごとの図示を試みた（第 86 図）。時代は縄文・弥生・古



第 86 図　白川流域時期別遺跡分布図

墳・古代と大別し、これによると縄文と弥生期について殆ど差異はないが、古墳と古代には白川上流の遺跡が姿を消す。これは遺跡地図を参考に作成した図版で、未調査遺跡も多く詳細な情報ではないため不確実な要素も多いが、「縄文・弥生」と「古墳・古代」に大別できる。縄文期の集落は河岸段丘の上位に形成される傾向があり、これが弥生期になると河岸段丘下位面から低位置に、そして古墳期にはさらに低位面に形成される傾向が指摘されており、古墳後期になると急激に立田山山麓から白川護岸にかけて群集した小型円墳や横穴墓が増加し、「古墳・古代」の遺跡が上流側に存在しないのは、大胆ではあるが遺跡の集約と生活形態の変化があり、ムラの単位も予想されるであろう。それは白川流域の恩恵をうける水田による生産形態が本格化することが想定され、その対象地は近接する上流域、現在での菊陽町辛川附近であり、さらに菊陽町から大津町にも広大な水田地帯が広がり、この近隣に集落の存在を窺わせる。

本県では、現在（2017年）、最古の水田は弥生中期の玉名平野（玉名市）であり、この地帯も菊池川に近接した位置に遺跡は存在し、したがって本遺跡も白川の恵みに適した近隣に水田地の存在を想定する。本遺跡での古代住居から検出された竈や、二次焼成を受けた土師器や投石と想定される遺物の出土が、この生産の基盤の変化を物語る。

本遺跡の内容は多岐に亘るが白川流域の僅かな事例であり、しかも本遺跡は小規模である。そしてその内容も僅かであるが、今後 周囲を含めた遺跡の存在とその様相を思考発信する一助になろう。

第４表　出土遺物観察表
（土器・土製品）

挿図番号	報番	実測番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			調整		色調		胎土	焼成	備考
			遺構	グリッド他	層位	取上げNo			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
8	1	委89	1-S-008		中層ベルト1 中層 床直上	No.1～4	弥生土器	壺	31.35		32.8+	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ ハケ目 ハケ目後ナデ	ヨコナデ ハケ目後ヨコナデ ハケ目	10YR6/4 にぶい黄橙 10R5/6 赤橙	10YR6/4 にぶい黄橙	石英・長石 雲母 砂粒	良	内外面に黒斑あり 内面スス付着 最大胴径 28.95 cm
	2	委94	1-S-008		ベルト1 床直上 中央 上層ベルト1 中層 トレンチ2	No.1～5	弥生土器	壺	28.75		17.85+	ヨコナデ ハケ目後ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ハケ目後ナデ 指頭圧痕	2.5YR5/6 橙 10YR7/4 にぶい黄橙	5YR7/6 橙	長石 石英 角閃石 砂粒	良	全体的に被熱している
	3	23	1-S-008		中層 C層	No.1	弥生土器	壺	(29.0)		13.4+	回転ナデ・ハケ目	ナデ後ハケ目・回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y7/3 浅黄	角閃石・長石 輝石	良	スス付着
	4	委104	1-S-009 1-S-008		中層	No.11～13	弥生土器	壺	(13.6)		12.55+	ヨコナデ ハケ目後ヨコナデ ハケ目・ハケ目後ナデ	ヨコナデ ナデ ハケ目	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	石英・長石 角閃石 雲母	良	内外面に黒斑あり スス付着 最大胴径 17.6 cm
9	5	委91	1-S-008		上層ベルト 上層 中層 床直上	No.1～5	弥生土器	壺	18.7		31.9+	ヨコナデ ハケ目 ハケ目後ナデ	ヨコナデ ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	長石・石英 角閃石 雲母 砂粒	良	内外面に黒斑あり 最大胴径 24.7 cm 暗文
10	6	委93	1-S-010 1-S-008		中層 ベルト1	No.3 No.1～4 No.6	弥生土器	壺			27.65+	ハケ目後ヨコナデ ハケ目 ハケ目後ナデ	ヨコナデ ナデ 指頭圧痕	7.5YR7/6 橙 2.5YR6/8 橙	2.5YR6/6 橙 2.5YR6/8 橙	長石・石英 角閃石 砂粒	良	口縁部打ち欠き 最大胴径 28.6 cm
11	7	委88	1-S-009			No.7	弥生土器	壺	21.4		28.7+	ヨコナデ ハケ目後ヨコナデ・ハケ目 貼付突帯・刻目突帯	ヨコナデ・ナデ ハケ目後ヨコナデ ハケ目後ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	石英・長石・角閃石・雲母 砂粒	良	内外面に黒斑あり 胴部上半部分に穿孔あり 最大胴径 30.9 cm
	8	委103	1-S-009 1-S-008		中層 清掃時	No.8・9	弥生土器	壺	(19.6)		16.95+	ハケ目後ヨコナデ ヨコナデ ハケ目後ナデ 貼付突帯 刻目突帯	ハケ目後ヨコナデ ナデ 指頭圧痕	10YR7/4 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	長石・石英 角閃石・雲母 砂粒	良	外面に黒斑あり 暗文
	9	8	1-S-009			No.9	弥生土器	壺	(28.4)		7.7+	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ハケ目	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	長石・石英・輝石 金雲母・赤色粒	良	
13	12	7	1-S-051		床直	No.1	弥生土器	壺	(39.0)		8.7+	ヨコナデ・ハケメ後ナデ	ハケ目ヨコナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	長石・石英・輝石 金雲母・角閃石	良	
14	16	92	2-S-001 東側			No.3	弥生土器	壺			3.3+	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	長石・石英・輝石	良	
17	18	89	2-S-005		上層堆土①	No.105	弥生土器	壺	(27.0)		22.5+	ハケ目・ナデ	ナデ	7.5Y6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	長石・石英・金雲母・輝石	良	胴部ゆがみ
18	19	91	2-S-005		上層堆土①	No.93 No.103	弥生土器	壺	(39.0)		12.0+	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	石英・長石・角閃石 金雲母	良	壺棺
	20	90	2-S-005		上層堆土①	No.89・90	弥生土器	壺	(46.0)		7.5+	ナデ・ハケ目	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	長石・石英・角閃石	良	壺棺（下カメ）
22	25	96	2-S-042		床直	No.12	弥生土器	壺	(29.4)		8.1+	回転ナデ・ナデ後ハケ目	ハケ目後ナデ・指頭圧痕	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR1.7/1 黒	角閃石・長石・金雲母 黒雲母	良	内外面スス付着
26	35	11	1-S-011 南			No.15	土師器	壺	(20.0)		7.1+	回転ナデ・ハケ目	回転ナデ・ヘラケズリ ハケ目・ケズリ後ナデ	7.5YR5/6 橙	7.5YR6/6 橙	赤色粒・長石・雲母	良	
	36	14	1-S-011			No.6	須恵器	坏			2.0+	回転ナデ 回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/1 灰白	長石・輝石	良	
27	39	12	1-S-012			No.12	土師器	壺	(18.0)		7.1+	回転ナデ・ハケ目	回転ナデ・ヘラケズリ	10YR7/4 にぶい黄橙 10YR3/1 黒褐	10YR6/3 にぶい黄橙 10YR3/1 黒褐	長石・赤色粒・輝石	良	内外面にスス付着
31	41	15	1-S-017			No.1	須恵器	蓋	14.0		3.8	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	長石・角閃石・黒雲母	良	外部にヘラ記号
33	42	委92	1-S-022 1-S-015 1-S-012 南			No.1	土師器	壺	(18.6)		14.45+	ハケ目後ヨコナデ ハケ目	ハケ目後ヨコナデ ケズリ後ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/3 にぶい橙	長石・石英・赤色粒 砂粒・小石粒	良	外面にスス付着
34	43	115	1-S-022			No.2	土製品	竜文柱			18.9	ナデ・指頭圧痕		10YR6/4 にぶい黄橙		長石・角閃石・白色粒	被熱	

挿図番号	報番	実測番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			調整		色調		胎土	焼成	備考
			遺構	グリッド他	層位	取上げNo			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
37	47	5	I-S-061 周			No.2	土師器	甕			4.6+	回転ナデ・ハケ目	回転ナデ・ヘラケズリ	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR3/1 黒褐	7.5YR5/4 にぶい褐 7.5YR3/1 黒褐	赤色粒・長石・輝石	良	内外面に油煙
	48	21	I-S-061 周			No.4	土師器	坏	16.8	11.6	5.8	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	長石・石英・輝石	良	底部打ち欠き
39	53	105	2-S-010 周内			No.13	土師器	甕	(25.8)		13.8+	回転ナデ	回転ナデ・ナデ後ヘラケズリ	7.5YR6/4 にぶい橙 5YR2/1 黒褐	5YR6/4 にぶい橙 5YR2/1 黒褐	長石・石英・赤色粒・輝石	良	内外面にスス付着
41	54	98	2-S-011		上層埋土③	No.34	須恵器	蓋	15.0		2.3	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	長石・輝石	良	
43	57	99	2-S-014			No.1	須恵器	蓋	14.8		2.85	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	7.5Y5/2 灰褐	7.5Y5/1 褐灰	長石・輝石	良	外面に自然釉
	58	110	2-S-014 2-S-038		上層 埋土①	No.4 No.5	須恵器	壺			8.9+	叩き後回転ナデ	あて具痕（同心円文） 回転ナデ	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰 10YR7/3 にぶい黄橙	赤色粒・輝石 長石	良	
45	60	111	2-S-015		床直	No.26	土師器	移動式竈			2.4+	ナデ	ナデ	10YR4/2 灰黄褐	10YR7/3 にぶい黄橙	長石・石英・赤色粒	良	庇の庇部分 一部黒色化
49	65	103	2-S-032		上層埋土①	No.4	土師器	坏		(9.8)	2.7+	回転ナデ 回転ヘラ切り後ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙 7.5YR1.7/1 黒	7.5YR7/6 橙 7.5YR1.7/1 黒	長石・角閃石・赤色粒	良	内外一部油煙
50	66	89	2-S-030		上層埋土①	No.2～4・6	土師器	甕	(26.6)		14.8+	回転ナデ・ナデ後ハケ目	回転ナデ・ケズリ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	角閃石・長石・輝石 赤色粒	良	
52	69	32	2-S-029			No.1	土製品	紡錘車	(径) 4.8		(厚さ) 1.6	ナデ・ミガキ	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR1.7/1 黒	10YR7/3 にぶい黄橙 10YT1.7/1 黒	黒雲母・長石・角閃石	良	孔径 0.5～1.0cm 一部黒色変化
53	70	6	I-S-028			No.3	須恵器	皿	(11.2)	(7.2)	2.8	回転ナデ・回転ヘラ切り離し	回転ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	長石・赤色粒	不良	
54	74	112	2-S-037			No.1	土師器	埦	(12.8)	(8.0)	4.4	回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ・ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	長石・石英・輝石	良	
	75	106	2-S-037			No.3	土師器	埦	(18.2)		5.7+	回転ナデ	回転ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	長石・輝石・赤色粒 角閃石	良	内外面に赤彩：5YR5/8 明赤褐
	76	107	2-S-037				須恵器	蓋	15.0		1.8	ナデ・回転ナデ	ナデ・回転ナデ	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	長石・角閃石	良	
62	79	委97	I-S-018			No.11	土師器	皿（灯明皿）	8.6	5.0	3.15	回転ナデ・回転ヘラケズリ ヘラ切り離し後ナデ	回転ナデ・ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	石英・長石・雲母	良	口縁部内外面に油煙付着
	80	壺98	I-S-018			No.2	土師器	皿（灯明皿）	8.85	4.5	3.6	回転ナデ・回転ヘラケズリ ヘラ切り離し後ナデ	回転ナデ・ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	石英・長石・雲母	良	
	81	委99	I-S-018			No.8	土師器	皿（灯明皿）	8.1	4.7	3.3	回転ナデ・回転ヘラケズリ ヘラ切り離し後ナデ	回転ナデ・ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	長石・石英・砂粒	良	
	82	壺100	I-S-018			No.1	土師器	皿（灯明皿）	8.8	5.15	3.3	回転ナデ・回転ヘラケズリ ヘラ切り離し後ナデ	回転ナデ・ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	石英・長石・雲母	良	
	83	委101	I-S-060			No.11	土師器	皿（灯明皿）	8.55	4.9	3.05	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	石英・長石・雲母	良	内外面に油煙付着
	84	委102	I-S-018		中・下層	No.2	土師器	皿（灯明皿）	9.0	6.35	3.05	回転ナデ・ヘラケズリ ヘラ切り離し後ナデ	回転ナデ・ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR8/6 浅黄橙	石英・長石・雲母・赤色粒	良	
63	85	1	I-S-060			No.3・10	土師器	坏	14.1	10.9	4.7	ヘラ切り離し・回転ナデ	指ナデ・回転ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	赤色粒・長石・石英	良	
	88	3	I-S-060				土師器	坏	(13.6)	(8.4)	4.5	ヘラミガキ	工具ナデ	5YR5/8 明赤褐	7.5YR7/4 にぶい橙	長石・輝石・石英	良	内面スス付着・外面赤彩：5YR5/8 明赤褐、外底部墨書
	87	28	I-S-060			No.13	土師器	甕	(27.2)		14.8+	ヨコナデ・ハケ目	ケズリ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄橙	長石・石英・輝石・金雲母	良	内外面にスス付着
	88	委96	I-S-018		清掃時	No.10・15	土師器	甕	27.76		15.5+	ヨコナデ・ハケ目後ヨコナデ ハケ目後ナデ	ヨコナデ・ケズリ後ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	長石・石英・角閃石 砂粒・小石粒	良	外面にスス付着
	89	壺106	I-S-018		清掃	No.5・7 No.12	土師器	甕			15.9+	ヨコナデ ハケ目後ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ケズリ	7.5YR7/4 にぶい橙 2.5YR7/6 橙	10YR6/3 にぶい黄橙	石英・長石 角閃石 雲母・赤色粒	良	内外面にスス付着 外面は被熱のためか赤変し器面が剥落している部分がある 最大頸径 15.9cm
	90	13	I-S-018		中・下層	No.3	須恵器	埦	(13.0)	(7.6)	5.0	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/1 黄灰	長石・輝石	良	外面に自然釉付着、口縁中ほみ有 貼付高台一部残し欠損
	91	10	I-S-018			No.9	須恵器	坏	14.8	9.2	4.15	回転ナデ 回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ 指ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙 2.5Y6/1 黄灰	10YR7/4 にぶい黄橙 2.5Y6/1 黄灰	長石・角閃石 輝石	不良	生焼け
	92	24	I-S-018				須恵器	蓋	18.15		1.65+	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y4/1 灰 5Y8/1 灰白	7.5Y3/1 オリーブ黒 2.5Y8/1 灰白	長石・黒色粒・角閃石	良	

挿図番号	報番	実測番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			調整		色調		胎土	焼成	備考
			遺構	グリッド他	層位	取上げNo.			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
63	93	16	I-S-018			No.17	須恵器	壺			10.3+	回転ナデ	回転ナデ	10YR6/2 灰黄褐 2.5YR4/4 にぶい赤褐	10YR6/1 褐灰 10YR6/4 にぶい黄橙	長石・輝石	良	胴部につまみ状突起（穿孔・指頭圧痕）
	94	委105	I-S-018		中下層	No.4	須恵器	鉢	20.65	(14.3)	14.8	回転ナデ・ハケ目後回転ナデ 回転ヘラケズリ後回転ナデ 丁寧なナデ・沈線	回転ナデ 指頭圧痕 ナデ	7.5Y6/1 灰	7.5Y5/1 灰	長石 石英 砂粒	良	外面に火だすき
	95	委90	I-S-018		ベルト 清掃	No.4・5 No.9～11	須恵器	壺	11.05		15.50+	回転ナデ 叩き後回転ナデ ナデ・カキメ	回転ナデ 回転ナデ後ナデ	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙 2.5YR6/8 橙	長石・石英 砂粒	良	最大胴径 20.7cm
67	105	26	I-S-031 2-S-033		上層	No.1	土師器	鉢	(23.4)	(10.2)	6.5	ヨコナデ・ハケ目後ミガキ	ケズリ・ヨコナデ	5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	石英・角閃石・輝石	良	口縁2条沈線 外面にスス付着
	106	29	I-S-031 2-S-033		上層 清掃	No.1	土師器	鉢	(23.0)		6.4+	ナデ後ハケ目・回転ナデ ハケ目	回転ナデ・ハケ目 ケズリ	5YR6/4 にぶい橙 5YR1.7/1 黒	5YR6/4 にぶい橙 5YR1.7/1 黒	角閃石・輝石 赤色粒	良	
	107	委95	I-S-031		上層	No.1	土師器	壺	21.0		16.0	ヨコナデ・叩き後ナデ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	長石・雲母・赤色粒・砂粒	良	
	108	97	2-S-033			No.8	須恵器	壺			13.3+	叩き後回転ナデ	当て具痕（同心円文） 回転ナデ	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰 2.5Y5/2 暗灰黄	長石・輝石	良	外器面に自然釉 口唇部に2条の沈線
68	109	94	2-S-003			No.1	土師器	灯明皿	8.2	3.8	2.7	ナデ	ナデ	2.5YR4/1 赤灰	2.5YR4/4 にぶい赤褐	長石・白色粒	良	糸切り底・内部黒色油煙
70	111	2	I-S-015				土師器	皿	(11.8)	(8.4)	2.2	回転ヘラ切り離し ヘラケズリ・回転ナデ	指ナデ 回転ナデ	5YR6/6 橙 10YR1.7/1 黒	5YR6/6 橙 10YR1.7/1 黒	角閃石・長石 石英	良	内外面に油煙
73	113	84		東側	清掃		縄文土器	鉢			4.8+	押型文（楕円文）	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	長石・石英・雲母・角閃石	良	
	114	104		j-23	5層		縄文土器	鉢		(11.2)	5.6+	ナデ後ヘラケズリ	ナデ後ヘラケズリ	2.5Y6/2 灰黄	2.5YR5/6 明赤褐	長石・輝石・金雲母	良	
	115	青委8		i-21	5層		縄文土器	鉢			9.5+	貼付文・把手状の貼付文 沈線文・刺突文・沈線・ナデ	粗いミガキ	2.5Y3/1 黒褐	2.5Y3/1 黒褐	長石・角閃石・雲母・赤色粒 砂粒	良	
	116	青委21		i-21	5層		縄文土器	鉢			5.1+	ミガキ・沈線文・貼付文 把手状の貼付文	ミガキ	2.5Y5/2 暗灰黄 2.5Y3/1 黒褐	10YR5/4 にぶい黄褐 2.5Y3/1 黒褐	石英・長石 角閃石・砂粒	やや不良	焼きむら
	117	青委15	2-S-010		上層 埋土①'		縄文土器	鉢			6.55+	ミガキ・刺目・沈線文 把手状の貼付文・穿孔	条痕後ミガキ	2.5Y3/1 黒褐	10YR3/3 暗褐	長石・石英・角閃石・砂粒	良	
	118	青委19		トレンチ100 試掘坑6 南側			縄文土器	鉢			2.9+	ナデ後ミガキ 貼付文	ミガキ ナデ後ミガキ	2.5Y3/2 黒褐	10YR4/2 灰黄褐	石英・長石 角閃石・砂粒	良	
	119	青委4		i-23	清掃		縄文土器	鉢			5.15+	ナデ後部分的にミガキ 把手状の貼付文 沈線文（渦巻状）	ミガキ	10YR4/3 にぶい黄褐	10YR4/3 にぶい黄褐	長石・石英・角閃石・砂粒	良	
	120	青委6		i-22	5層		縄文土器	鉢			4.95+	ミガキ・把手	ミガキ	7.5YR2/1 黒	7.5YR2/1 黒 7.5YR5/4 にぶい褐	長石・石英・角閃石・雲母 砂粒	良	
	121	青委9		j-23	5層		縄文土器	鉢			6.3+	ナデ・沈線文・磨消縄文 穿孔	ナデ・粗いミガキ	7.5YR6/3 にぶい褐	10YR6/4 にぶい黄橙	石英・長石・角閃石・砂粒	良	内外面に黒斑あり
	122	66		j-19	5層		縄文土器	鉢			5.7+	ミガキ・凹線文・刺突文	ミガキ	7.5YR5/4 にぶい褐 10YR4/1 褐灰	10YR5/2 灰黄褐	長石・石英・輝石・角閃石	良	口唇部に刺突文・沈線
	123	青委20	2-S-015 南内			No.15	縄文土器	鉢			3.4+	ミガキ・ナデ・貼付文 穿孔・刺目・磨消縄文	ミガキ	7.5YR4/2 灰褐 7.5YR5/4 にぶい褐	10YR3/2 黒褐	長石・石英・角閃石・赤色粒 砂粒	良	
	124	青委18		i-23	5層		縄文土器	鉢			3.2+	ナデ・貼付文・沈線文	ナデ・指頭圧痕	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	石英・長石・角閃石・砂粒	良	
	125	青委11		i-23	5層		縄文土器	鉢			2.65+	ミガキ・刺目（粗斜線） 刺突文 沈線文（渦巻状）	ミガキ	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	長石・石英・角閃石・砂粒	良	粘土貼付け部分、欠損
	126	青委5		j-24	清掃		縄文土器	鉢			4.75+	ナデ・貼付文・沈線文 刺突文	ミガキ・条痕後ナデ	2.5Y3/2 黒褐	2.5Y5/2 暗灰黄	石英・長石・角閃石・砂粒	良	
74	127	青委22		トレンチ100 試掘坑6 南側			縄文土器	鉢			7.0+	ナデ 貼付文 刺目・沈線	ナデ ミガキ	10YR4/1 褐灰	7.5YR4/1 褐灰	長石 雲母 砂粒	良	
	128	青委17		h-19	5層		縄文土器	鉢			3.05+	ミガキ・ナデ・貼付文・穿孔 刺目・沈線文	ミガキ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/4 にぶい黄褐	石英・長石・角閃石・砂粒	良	
	129	64		j-23	5層		縄文土器	鉢			2.8+	ミガキ・沈線	ミガキ	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR3/1 黒褐	長石・輝石・雲母・輝石	良	口唇部に沈線2条・刺突文 外面赤彩：10R5/8 赤
	130	67					縄文土器	鉢			5.7+	ナデ後ミガキ・沈線 磨消縄文	ナデ後ミガキ	2.5Y4/2 暗灰黄	2.5Y3/1 黒褐	長石・輝石	良	内外面に赤彩：10R5/8 赤
	131	63		トレンチ100 試掘坑6 南側			縄文土器	鉢			4.2+	ミガキ・沈線・刺突文	ミガキ	10YR3/1 黒褐	7.5YR4/1 褐灰	長石・輝石・白色粒	良	口唇部に沈線1条・刺突文

挿図番号	報番	実測番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			調整		色調		胎土	焼成	備考
			遺構	グリッド他	層位	取上げNo.			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
74	132	55		h-21	5層		縄文土器	鉢			5.5+	沈線・磨消縄文	ナデ・ミガキ	7.5YR5/3にぶい褐	10YR6/4にぶい黄橙	長石・黒色粒	良	口唇部に沈線2条
	133	61		j-19	5層		縄文土器	鉢			6.0+	ミガキ・沈線・磨消縄文 刺突文	ミガキ	10YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	石英・長石・角閃石・白色粒	良	口唇部に沈線1条・刺突文
	134	60		j-22	5層		縄文土器	鉢			4.9+	ナデ後ミガキ・磨消縄文 沈線・刺突文	ナデ後ミガキ	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR4/1 褐灰	長石・赤色粒・輝石	良	口唇部に沈線2条
	135	56		中央東側	包含層		縄文土器	鉢			5.4+	ナデ後ミガキ・磨消縄文 沈線	ナデ後ミガキ	5Y2/1 黒	5Y2/1 黒	長石・輝石	良	口唇部に沈線2条
	136	72	2-S-042		①層 堆土		縄文土器	鉢			4.6+	ミガキ・磨消縄文・沈線 刺突文	ミガキ	7.5YR6/3にぶい褐 7.5YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	長石・輝石・白色粒	良	口唇部に刺突文
	137	青委3		i-19	5層		縄文土器	鉢			9.65+	ナデ・刻目・沈線・穿孔 工具ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/2灰黄褐	石英・長石・角閃石・砂粒	良	
	138	青委14	2-S-013		下層②	No.26	縄文土器	鉢			4.6+	ミガキ・刻目・縄文・沈線文 貼付文・穿孔	ミガキ	10YR5/3にぶい黄褐	7.5YR4/3 褐	長石・石英・角閃石	良	
	139	青委7		i-24	5層		縄文土器	浅鉢			5.2+	ミガキ・縄文後ナデ・貼付文 穿孔・刻目・沈線文	ミガキ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	石英・長石・角閃石・砂粒	やや不良	摘まむら
75	140	67		h-22	5層		縄文土器	鉢			9.5+	ナデ後ミガキ・沈線	ナデ後ミガキ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR4/1 褐灰	長石・角閃石・輝石	良	
	141	青委16		j-22	5層		縄文土器	鉢			4.2+	縄文後ナデ・ナデ・貼土貼付 穿孔	ミガキ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	石英・長石・角閃石・赤色粒 砂粒	良	
	142	青委13		i-19	5層		縄文土器	鉢			5.5+	ナデ・指頭圧痕・貼付文 穿孔 沈線文	ミガキ・ナデ	10YR3/1 黒褐	10YR6/4にぶい黄橙	長石・石英・角閃石・砂粒	良	外面スス付着
	143	71		トレンチ100 試掘坑C 南側			縄文土器	鉢			5.5+	ナデ後ミガキ・刺突文	ナデ後ミガキ	10YR6/3にぶい黄橙 2.5Y3/1 黒褐	10YR6/3にぶい黄橙 2.5Y3/1 黒褐	石英・長石・角閃石	良	
	144	77		j-24	撹乱		縄文土器	鉢			4.4+	ナデ・ミガキ・刺突文	ミガキ	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR4/1 褐灰	長石・輝石・雲母・白色粒	良	口縁部に指押え
	145	青委1		j-23	5層		縄文土器	深鉢	(23.30)		14.2+	粗いミガキ・穿孔	粗いミガキ	10YR6/4にぶい黄橙	2.5Y5/2暗灰黄 2.5Y4/1 黄灰	長石・石英・角閃石・砂粒	やや不良	摘まむら 波状口縁
	146	69		i-24	5層		縄文土器	鉢			6.2+	ナデ後ミガキ・刺突文・ナデ	ナデ	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	長石・輝石・角閃石・金雲母	良	穿孔
	147	79		i-22	5層		縄文土器	鉢			3.5+	ナデ・沈線	ナデ	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	輝石・長石・金雲母	良	
	148	70	2-S-040		上層 堆土① 床直	No.10	縄文土器	鉢			5.0+	ナデ・刺突文・沈線	ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	角閃石・長石・金雲母	良	
	149	81	2-S-016		上層 撹土①		縄文土器	鉢			2.3+	ナデ後ミガキ・貝殻刺突文	ナデ・縄文	7.5YR3/1 黒褐 2.5Y7/2 灰黄	7.5YR6/4にぶい橙	長石・輝石・赤色粒	良	
	150	青委10	2-S-038		下層 ②	No.8	縄文土器	深鉢			6.55+	ナデ・条痕・刻目	条痕	5YR5/4にぶい赤褐	10YR6/3にぶい黄橙	石英・長石・角閃石・雲母 砂粒	良	
	151	57		トレンチ100 試掘坑C 南側			縄文土器	鉢			4.9+	ナデ後ミガキ・磨消縄文 沈線	ナデ後ミガキ	5Y4/2 灰オリーブ	5Y4/2 灰オリーブ	長石・角閃石・黒雲母	良	
	152	68	2-S-016		下層 ③		縄文土器	鉢			5.8+	ナデ後ミガキ・沈線 磨消縄文 刺突文	ナデ後ミガキ	10YR5/2 灰黄褐	10YR1 7/1 黒	長石・輝石	良	
	153	78		j-22	5層		縄文土器	鉢			7.3+	磨消縄文・沈線文・曲線文 ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR1.7/1 黒	10YR6/3にぶい黄褐	長石・輝石・白色粒	良	
	154	青委12	2-S-038 範内				縄文土器	鉢			2.75+	ミガキ・沈線文・赤彩	縄文後ナデ・赤彩	10YR3/1 黒褐	2.5Y3/1 黒褐	石英・長石・角閃石・砂粒	良	内外面に赤彩：10YR4/6，10YR5/8 赤
76	155	青委23		j-27 東側清掃	5層		縄文土器	鉢			6.4+	ミガキ・磨消縄文・沈線文 渦巻状の沈線文 刺突文・穿孔	ミガキ	10YR3/1 黒褐	10YR4/2 灰黄褐	石英・長石 角閃石 赤色粒・砂粒	良	
	156	58		h-20	5層		縄文土器	鉢			6.2+	ナデ後ミガキ・磨消縄文 沈線	ナデ後ミガキ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	長石・輝石・金雲母	良	
	157	59		i-24	5層		縄文土器	鉢			4.4+	ナデ後ミガキ・沈線 磨消縄文	ナデ後ミガキ	2.5YR2/1 赤黒 10YR5/4にぶい黄褐	2.5YR2/1 赤黒	長石・輝石・黒雲母	良	
	158	61		i-24	清掃		縄文土器	鉢			6.2+	ナデ後ミガキ・沈線 磨消縄文	ナデ後ミガキ	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	長石・角閃石・輝石	良	
	159	青委2		i-24	5層		縄文土器	深鉢	(25.4)		10.15+	沈線・刻目・磨消縄文 沈線による渦巻文・ミガキ	ミガキ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	石英・長石・雲母・砂粒	良	剥落しているが，口縁部に貼付文があったと思われる
	160	73	2-S-038		下層 ②	No.10	縄文土器	鉢			4.5+	ナデ後ミガキ・沈線 磨消縄文	ナデ後ミガキ	2.5Y3/1 黒褐	2.5Y5/2暗灰黄	長石・輝石・石英	良	

挿図番号	報番	実測番号	出土地点				種別	器種	法量（cm）			調整		色調		胎土	焼成	備考
			遺構	グリッド他	層位	取上げNo			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
76	161	62		j-26	包含層		縄文土器	鉢			4.25+	沈線・扇状縄文	ミガキ	5YR4/2 灰褐	5YR3/1 黒褐	長石・輝石	良	外面赤彩：2.5YR5/8 明赤褐
	162	75		i-23	5 層		縄文土器	鉢			4.0+	ナデ後ミガキ・沈線 扇状縄文	ナデ後ミガキ	2.5Y7/4 浅黄 2.5Y2/1 黒	2.5Y7/4 浅黄 2.5Y2/1 黒	長石・輝石	良	
	163	74		東側	撹乱		縄文土器	鉢			7.3+	ナデ・沈線・刻目突帯	ナデ	10YR3/1 黒褐	10YR6/3 にぶい黄橙 10YR5/1 褐灰	長石・輝石・角閃石	良	
	164	80		トレンチ100 試掘坑C 南側			縄文土器	鉢			3.3+	ナデ後ミガキ・沈線	ナデ	5Y2/1 黒	2.5Y5/2 暗灰黄	長石・角閃石・輝石・金雲母	良	
	165	108		j-24	5 層 撹乱		縄文土器	鉢	(22.0)		6.2+	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	10YR3/2 黒褐	10YR3/1 黒褐	長石・黒色粒・赤色粒	良	
	166	93		j-25 j-24	清掃 包含層		縄文土器	深鉢	(31.0)		12.5+	棒状工具による調整	ケズリ・ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/1 褐灰	長石・輝石・金雲母	良	
	167	109		j-24	清掃		縄文土器	鉢	(14.4)		7.9+	条痕文	条痕文	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	長石・輝石・角閃石・雲母	良	
77	168	76		トレンチ100 試掘坑C 南側			縄文土器	鉢			5.3+	組織痕	ナデ後ミガキ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/1 灰白	長石・石英・輝石・雲母 白色粒	良	
	169	83		j-26	包含層		縄文土器	鉢			3.5+	組織痕	ナデ後ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR5/3 にぶい黄褐	長石・石英・輝石・雲母	良	
	170	96		j-24	清掃		縄文土器	鉢			3.8+	組織痕	ナデ後ミガキ	7.5YR5/3 にぶい橙	7.5YR4/2 灰褐	長石・石英・角閃石・輝石	良	
	171	82		j-23	投下げ		縄文土器	鉢			3.0+	組織痕	ナデ後ミガキ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR3/1 黒褐	長石・角閃石・輝石	良	
	172	85		トレンチ100 試掘坑C 南側			縄文土器	鉢			4.3+	組織痕	ナデ後ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/2 灰褐	長石・石英・角閃石・輝石 雲母	良	
	173	102		j-24	撹乱	No.1	弥生土器	壺		9.2	6.5+	ナデ・回転ナデ ナデ後ハケ目	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙 2.5Y2/1 黒	長石・角閃石・金雲母 黒雲母	良	内面にスス付着
	174	100		j-28	包含層		弥生土器	擬形状の土製品		9.3	4.6+	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	10YR7/3 にぶい黄橙	長石・角閃石	良	
	175	9	I-S-008 I-S-015		中層ベルト 清掃		弥生土器	不明			0.9+	回転ナデ	回転ナデ	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR4/6 赤褐	長石・輝石	良	暗文・赤彩：2.5YR4/6 赤褐
	176	22		D-3 D-4	清掃		土師器	坏	14.0	8.0	3.3	回転ナデ・回転ヘラケズリ	ナデ・回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	赤色粒・輝石	良	内外面に赤彩：5YR6/8 橙 底部墨書　暗文
	177	18		D-4	清掃		土師器	埦	17.65	11.0	7.8	回転ナデ 回転ヘラ切り後ナデ	ナデ・回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙 10YR1.7/1 黒	長石・赤色粒・輝石	良	内外面に赤彩：2.5YR5/6 明赤褐 内面に油煙
	178	20		F-3 G-3	清掃		土師器	坏		(7.4)	1.3+	回転ナデ 回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ・ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	長石・輝石・赤色粒	良	内外面に赤彩：2.5YR5/6 明赤褐 底部墨書
	179	19		G-4	清掃		土師器	皿	15.7	12.5	2.5	回転ナデ	回転ナデ	2.5YR6/6 橙 10YR2/1 黒	2.5YR5/6 明赤褐	石英・輝石・金雲母・赤色粒	良	内外面に赤彩：2.5YR5/6 明赤褐 外面底部に墨書 全体的にいびつ
78	180	33		トレンチ 102			土製品	紡錘車	(径) (4.8)		1.0	ナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	赤色粒・長石・角閃石	良	表面赤色土：5YR6/6 橙
	181	101		b-13	撹乱		土師器	移動式竈			6.6+	工具ナデ	工具ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	長石・赤色粒	良	
	182	35	2-S-042				土製品	土錘	(長さ) 2.9	(幅) 0.69	(孔径) 0.18	ナデ		10YR7/3 にぶい黄橙		長石・輝石・雲母	良	指頭圧痕
	183	36		中央東側	清掃一括		土製品	土錘	(長さ) (2.65)	(幅) 1.7	(孔径) 0.55	ナデ		7.5YR7/4 にぶい橙		長石・輝石・雲母	良	指頭圧痕
	186	31		A8 落ちこみ			磁器	碗員		3.7	1.5	施釉	施釉	C-282　雪の反白	C-282　雪の反白	きめ細かい	良	肥前系（江戸中期）の二次加工　瓦玉 中央に五弁花（C-265 鉄絵）
	187	30		中央西側	包含層		磁器	碗員		(幅) 2.5	(厚み) 0.5	施釉	施釉	C-144　反白	C-144　反白	きめ細かい	良	磁器の二次加工　おはじき

（ 石器・石製品 ）

挿図番号	報番	実測番号	出土地点				器種	石材	法量 （ ）は現存値				備考
			遺構	グリッド他	層位	取上げNo.			長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	
12	10	委42	I-S-009 Pit4			No.5	南支柱	安山岩	23.00	15.65	16.40	7250.00	表面以外ほぼ全面に被熱あり。礫石を転用
	11	委46	I-S-009 Pit4			No.6	南支柱	安山岩	24.30	11.75	10.20	4190.00	表面一部を除き、ほぼ全面に被熱あり。礫石を転用
13	13	委30	I-S-051				投石	安山岩	4.40	3.10	2.50	45.00	被表面の黒色部分は、後に二酸化マンガンが付着（コーティング）していると思われる
	14	委31	I-S-051				投石	安山岩	3.70	3.20	2.05	30.70	
	15	委35	I-S-051		床直	No.1	礫石	砂岩	12.80	6.20	6.30	800.00	長軸の全面に使用痕あり。周縁に敲打痕あり
14	17	45	2-S-001		下層 壊土①		石錘	安山岩	7.90	6.15	2.10	127.53	
18	21	委56	2-S-005		上層	No.67	台石	安山岩	21.35	19.60	5.60	3884.80	
19	22	委63	2-S-005		上層	No.31	磨石	安山岩	10.05	8.90	4.80	616.20	
	23	委62	2-S-005		上層	No.109	磨石	安山岩	12.05	10.75	5.70	1083.00	
21	24	委79	2-S-041		壊土③ 相当	No.1	台石	安山岩	32.45	28.55	14.80	17010.00	全面に使用痕あり
23	26	委77	2-S-042		床直	No.8	敲石	安山岩	9.50	7.40	5.30	425.50	
	27	委78	2-S-042		床直	No.18	敲石	安山岩	9.30	4.45	3.45	208.50	長軸の両端に敲打痕あり
	28	委54	2-S-042			No.14	敲石	安山岩	11.60	8.60	6.90	948.50	
	29	委75	2-S-042		床直	No.15	敲石	安山岩	12.20	4.00	3.10	202.00	棒状の長軸の一端に敲打痕
24	30	委60	2-S-042			No.1	磨石 敲石	安山岩	12.95	13.00	3.90	941.40	表面にくぼみ有
	31	委61	2-S-042			No.10	磨石 敲石	安山岩	8.80	5.90	2.50	199.00	
	32	委76	2-S-042		床直	No.17	磨石	安山岩	15.00	10.00	4.30	991.00	
	33	委64	2-S-042			No.3	磨石 敲石	安山岩	(9.95)	9.50	(5.90)	838.90	一部欠損
	34	委58	2-S-042			No.11	磨石 敲石	安山岩	7.80	7.15	4.40	389.00	
26	37	委50	I-S-011		下層	No.19	礫石	砂岩	(31.05)	17.70	13.00	8650.00	上部を欠損、上半部分に被熱あり
	38	委52	I-S-011		下層	No.18	礫石	安山岩	28.25	14.55	11.55	5550.00	全面に使用痕あり
30	40	委41	I-S-013		南上	No.1	磨石 敲石	安山岩	11.45	8.90	3.00	590.00	表裏、裏面に使用痕あり
34	44	委39	I-S-022			No.1	南支柱	砂岩	13.90	15.05	13.65	2060.00	上半部分に被熱あり
	45	委36	I-S-022			No.1	南支柱	砂岩	(16.15)	(11.35)	(13.40)	1700.00	風化著しく、被熱範囲は不明瞭
	46	委37	I-S-022		貼床直上	No.2	南支柱	安山岩	19.20	14.30	13.50	4840.00	全体的に被熱
37	49	委34 委44	I-S-061			No.2 No.3	南支柱	安山岩	(38.35)	(14.15)	(17.15)	11350.00	部分的に欠損。上部被熱、加工痕あり

挿図番号	報番	実測番号	出土地点				器種	石材	法量 （ ）は現存値				備考
			遺構	グリッド他	層位	取上げNo.			長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)※	
37	50	委45	I-S-061			No.5	南支柱	砂岩	(18.35)	(13.15)	(15.70)	3350.00	全体的に被熱していると思われるが、風化著しく、被熱範囲は不明瞭
38	51	委32	I-S-061			No.1	南支柱	貴岩	24.55	19.40	19.70	13725.00	全体的に被熱あり
	52	委33	I-S-061			No.4	南支柱	砂岩	(14.25)	(19.90)	(16.50)	6490.00	風化著しく、被熱範囲は不明瞭
42	55	委72	2-S-011		上層 埋土①	No.1	磨石	安山岩	8.70	6.20	3.50	235.00	作業面の確認は難しい
	56	委73	2-S-011		上層	No.2	磨石 敲石	安山岩	14.65	8.90	4.20	765.50	
44	59	40	2-S-014				砥石	安山岩	3.80	4.60	2.10	35.59	
46	61	委74	2-S-015		旅直	No.2	磨石	安山岩	9.25	6.20	2.80	269.50	
	62	委71	2-S-015		上層	No.1	敲石	安山岩	14.90	12.35	4.35	904.70	表裏の縁は明瞭に出ている
48	63	委57	2-S-016			No.4	磨石	安山岩	14.60	10.25	4.80	1003.30	炭化物付着
	64	委55	2-S-016		下層	No.6	石錘	安山岩	8.95	7.10	3.00	271.80	
51	67	39	2-S-013 Pit1				磨石	安山岩	5.10	4.40	3.75	72.37	
	68	34	2-S-013		上層 埋土①		孔のある石製品	不明	(4.60)	(1.80)	(1.50)	13.77	孔径1.1+cm
53	71	委48 委49	I-S-028			No.4 No.5	南支柱	安山岩	(27.80)	(30.9)	(13.25)	9950.00	約1/2残存。全体的に被熱あり
	72	委51	I-S-028			No.6	南支柱	安山岩	29.20	12.90	8.45	4899.00	表面全面被熱し、わずかに裏面まで
	73	委53	I-S-028			No.4	敲石	安山岩	5.50	5.10	1.80	50.70	小形
58	77	委43	2-S-021				砥石	安山岩	(18.95)	(9.10)	(6.10)	1230.00	上部および下部欠損。全面に使用痕あり　被熱痕
59	78	委38	I-S-010			No.5	磨石 敲石	安山岩	(8.75)	(11.90)	6.95	1100.00	約1/2残存。表面・裏面・周縁に使用痕あり
64	96	委81	I-S-018			No.147	磨石	安山岩	10.70	8.15	4.20	625.40	
	97	委83	I-S-018			No.127	敲石	安山岩	8.25	7.05	4.20	344.00	敲痕の確認は難しい
	98	委84	I-S-018			No.150	敲石	安山岩	15.35	7.15	5.65	690.70	砥石としても使用
	99	委82	I-S-018			No.1	磨石	安山岩	9.80	8.50	3.70	479.20	
65	100	委85	I-S-018			No.11	石錘	安山岩	11.80	8.10	3.50	562.20	
	101	委80	I-S-018			No.54	敲石	安山岩	9.90	7.80	7.55	814.30	
	102	委86	I-S-018			No.13	敲石	安山岩	11.20	6.00	3.40	363.70	一部欠損
	103	委87	I-S-018			No.25	石棒	砂岩	(6.35)	(2.95)	(2.50)	60.20	1/2欠損
69	110	委59	2-S-003		②層	No.1	敲石 敲石	安山岩	17.15	7.30	6.40	1373.50	

挿図番号	報番	実測番号	出土地点				器種	石材	法量（ ）は現存値				備考
			遺構	グリッド他	層位	取上げNo.			長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)※	
78	184	17		C-4	清掃		硯	粘板岩	(6.050)	(5.40)	(1.05)	35.39	裏面は剥離欠損
	185	37		中央東側	包含層		硯	泥岩	(3.20)	(3.90)	(1.30)	12.98	高温焼成
79	188	委2		C-6	清掃時		石鏃	黒曜石	1.20	1.40	0.30	0.30	
	189	51		J-25	撹乱		石鏃	チャート	(1.30)	(1.30)	0.30	0.36	先端と基部欠損
	190	53		中央西側	包含層		石鏃	チャート	2.60	1.70	0.45	1.18	
	191	委1		F-2	清掃時		石鏃	黒曜石	2.60	1.30	0.50	0.70	
	192	49	2-S-032 2-S-033				石鏃	安山岩	2.20	1.70	0.40	0.92	
	193	54		東側	撹乱一括		石鏃	安山岩	2.10	1.60	0.40	0.71	
	194	50		東側	段掘り		石鏃	黒曜石 (姫島産)	1.90	(1.30)	0.40	0.64	基部欠損
	195	52		J-25	撹乱		石鏃	チャート	1.90	(1.30)	0.40	0.65	一部欠損
	196	委66	2-S-040	I・J-27	上層 埋土① 相当	No.7	石核	安山岩	6.80	9.90	8.40	641.00	かなり大型の豊角礫の水磨礫を母岩とした，極めて大型厚手の剥片を素材とした石核
	197	委10		D-6	清掃時		二次加工のある剥片	黒曜石	2.05	1.85	0.55	1.50	
	198	委5		B-5	清掃時		二次加工のある剥片	黒曜石	3.00	2.80	1.05	6.90	
	199	委22		H-2	清掃時		使用痕のある剥片	安山岩	5.85	3.85	0.90	19.40	スクレイパーとして使用した可能性あり
	200	委13		C-5	撹乱		二次加工のある剥片	チャート	4.35	3.10	1.60	16.90	
80	201	委67	2-S-005		上層	No.10	二次加工のある剥片	サヌカイト	(7.20)	(2.05)	(0.95)	13.30	一側と裏面欠損
	202	委70	2-S-005		上層	No.65	石匙	安山岩	4.45	5.80	0.55	10.70	一部欠損
	203	46	2-S-005		上層		石匙	粘板岩	7.00	5.80	1.10	39.3	打製石斧を転用
	204	委19			清掃時		円盤状石器	サヌカイト	9.80	9.40	2.50	257.20	
81	205	委69	2-S-005		上層		打製石斧	サヌカイト	10.45	5.25	2.30	110.20	
	206	委28		C-7	清掃時		打製石斧	安山岩	(10.20)	5.65	2.30	141.00	基部欠損
	207	48		表土掘削 トレンチ100 試掘坑C 南側			打製石斧	安山岩	10.60	5.20	1.95	119.13	
	208	47		I・J-24	5層 掘り下げ		打製石斧	安山岩	(11.70)	5.20	2.10	146.3	刃部一部欠損
	209	43		I-23	5層 掘り下げ		局部磨製石斧	粘板岩	(10.10)	8.25	0.90	89.60	基部欠損

挿図番号	報番	実測番号	出土地点				器種	石材	法量　（　）は現存値				備考
			遺構	グリッド他	層位	取上げNo.			長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)※	
82	210	委26		D-6	撹乱		磨製石斧	安山岩	(9.00)	(7.50)	(3.10)	171.90	破片。磨製石斧を砥石に転用
	211	委18			清掃時		磨製石斧	輝石安山岩	(13.05)	(8.40)	(2.30)	309.30	破片
	212	委47		D・E-4		No.1	敲石	安山岩	8.00	8.10	3.00	303.00	縁辺部に浅い敲打痕あり
	213	委12			清掃時		磨石 敲石	安山岩	(7.25)	(7.20)	(3.60)	315.40	
	214	委23		D-4	清掃時		磨石 敲石	安山岩	11.90	6.25	4.30	桁1.10	
83	215	委27		D-6	清掃時		磨石	安山岩	10.25	5.10	4.70	419.00	
	216	委14		F-3	清掃時		磨石 敲石	安山岩	(7.70)	(9.50)	(3.50)	335.70	大部分欠損。風化著しい
	217	委25		G-2	清掃時		磨石 敲石	安山岩	(10.85)	(10.60)	(2.75)	171.90	下部欠損。周縁に敲打痕あり
	218	委15		F-3	清掃時		磨石	安山岩	13.05	8.20	6.30	872.20	
	219	委21		H-2	清掃時		磨石	安山岩	(6.90)	(9.30)	(5.10)	395.50	1/2～1/3残存
	220	委20		H-2	清掃時		磨石 敲石	安山岩	(5.20)	(11.25)	(7.40)	369.30	破片。風化著しい
84	221	委40			清掃時		石錘	安山岩	13.45	10.20	3.00	583.90	表裏および右側面に使用痕あり
	222	38		A-8	撹乱		砥石	泥岩	(6.60)	(4.00)	(2.80)	89.42	天草砥石
	223	委65	2-S-040		②相当	No.17	砥石	安山岩	12.45	6.20	3.30	359.40	全面に使用痕あり
85	224	委11		E-3	清掃時		紡錘車	珪質頁石反岩	(径) (5.0)		1.20	11.70	1/4弱残存　上面に放射状の線刻
	225	委24		G-2	清掃時		投石	安山岩	3.50	2.50	2.65	29.70	
	226	委29	1-S-049				投石	安山岩	3.20	2.90	2.00	20.40	
	227	委17		F-2	清掃時		投石	安山岩	4.00	3.35	2.55	39.40	
	228	委16		F-2	清掃時		投石	安山岩	3.25	3.10	2.70	38.30	

（金属製品）

挿図番号	報番	実測番号	出土地点				器種	種別	法量 (cm)				備考
			遺構	グリッド他	層位	取上げNo.			長	幅	厚	重(g)	
65	104	実114	1-S-018			No.194	刀子		5.70	1.85	0.20	10.04	
71	112	実113	2-S-039				耳環		3.00	3.40	0.85	23.61	

遺構一覧表

新遺構番号※	工区	旧遺構番号
S-001	1	S-008
S-002	1	S-009
S-003	1	S-051
S-004	2	S-001
S-005	2	S-005
S-006	2	S-040
S-007	2	S-041
S-008	2	S-042
S-009	1	S-011
S-010	1	S-012
S-011	1	S-013
S-012	1	S-017
S-013	1	S-022
S-014	1	S-061
S-015	2	S-010
S-016	2	S-011
S-017	2	S-014
S-018	2	S-015
S-019	2	S-016
S-020	2	S-032
S-021	2	S-038
S-022	2	S-013
S-023	2	S-029
S-024	1	S-028
S-025	2	S-012
S-026	2	S-037
S-027	2	S-022
S-028	2	S-023
S-029	2	S-031
S-030	2	S-004
S-031	1	S-023
S-032	1	S-024
S-033	1	S-063
S-034	1	S-064
S-035	1	S-052
S-036	1	S-037
S-037	1	S-040
S-038	2	S-024
S-039	2	S-021
S-040	2	S-020
S-041	1	S-021
S-042	2	S-017
S-043	1	S-053
S-044	2	S-002
S-045	1	S-029
S-046	1	S-010
S-047	1	S-018
S-048	1	S-060
S-049	2	S-033
S-050	2	S-003
S-051	1	S-062
S-052	1	S-014
S-053	1	S-015
S-054	1	S-016
S-055	1	S-026
S-056	1	S-020
S-057	1	S-019
S-058	1	S-054
S-059	1	S-048
S-060	1	S-045
S-061	1	S-047
S-062	1	S-034
S-063	1	S-039
S-064	2	S-019
S-065	1	S-007
S-066	1	S-049

１工区　全景　　東→

２工区　全景

図版 2

S-005 完掘状況
西→

S-008 遺物出土状況
南西→

S-010 完掘状況
北西→

S-013 竈部分検出状況
東→

S-015 完掘状況
南西→

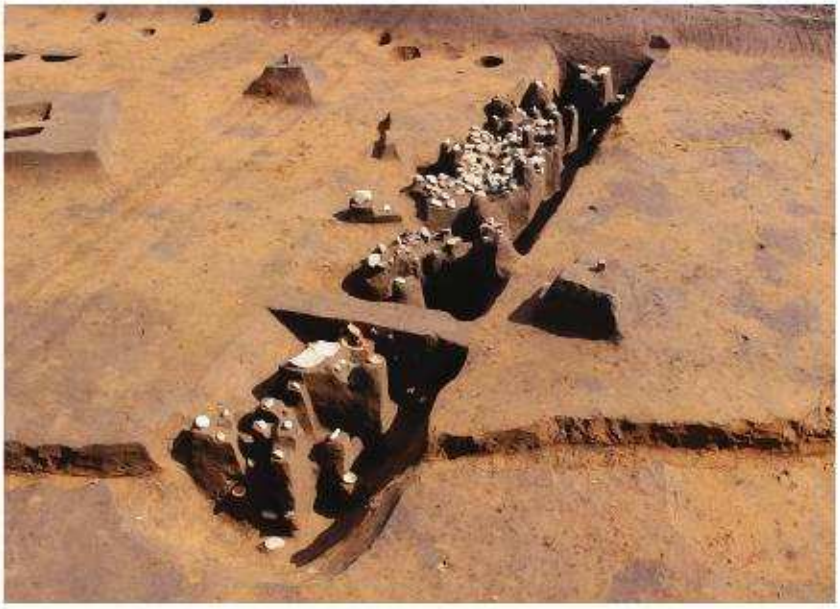
S-016 遺物出土状況
南西→

図版 4

S-022 完掘状況
北東→

S-017 遺物出土状況
北西→

S-018 遺物出土状況
南西→



S-047 遺物出土状況
北西→

S-027 完掘状況
北西→

S-063 耳環(112)出土状況
南東→

図版 6

1

2

3

4

5

6

7

8

9

12

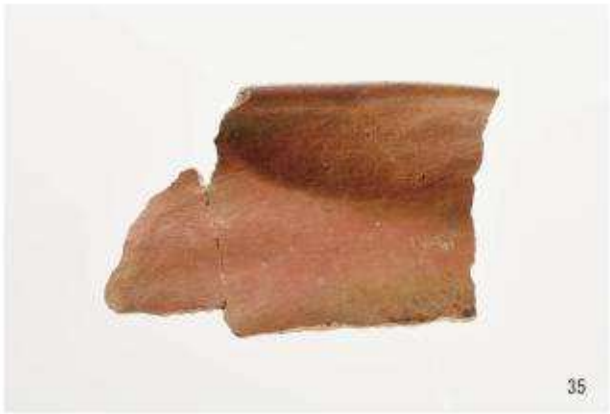
16

18

19

20

25


35

図版 8

36

39

41

42

43

47

48

53

54

57

58

60

65

66

70

75
74
76

図版 10

92

93

94

95

105

106

107

108

109

111

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

図版 20

175

176

178

177

181

179

30

103

196

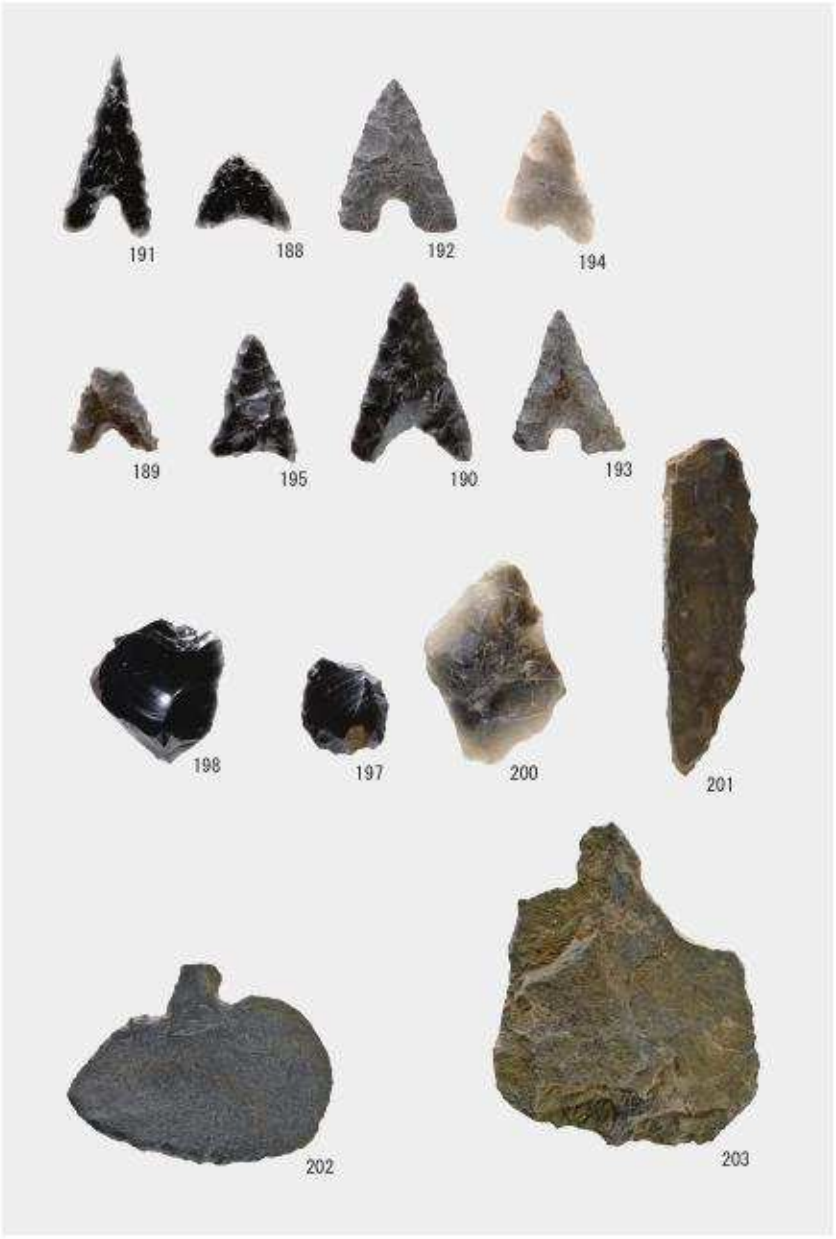
199

204

224

112

104


191
188
192
194
189
195
190
193
198
197
200
201
202
203

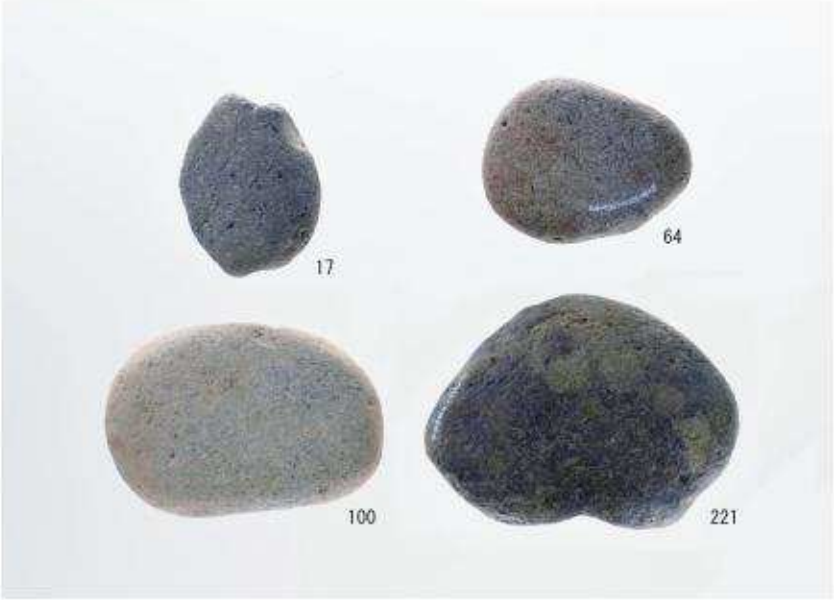
206
208
207
205

210
209
211

63
218
56
23
96
67

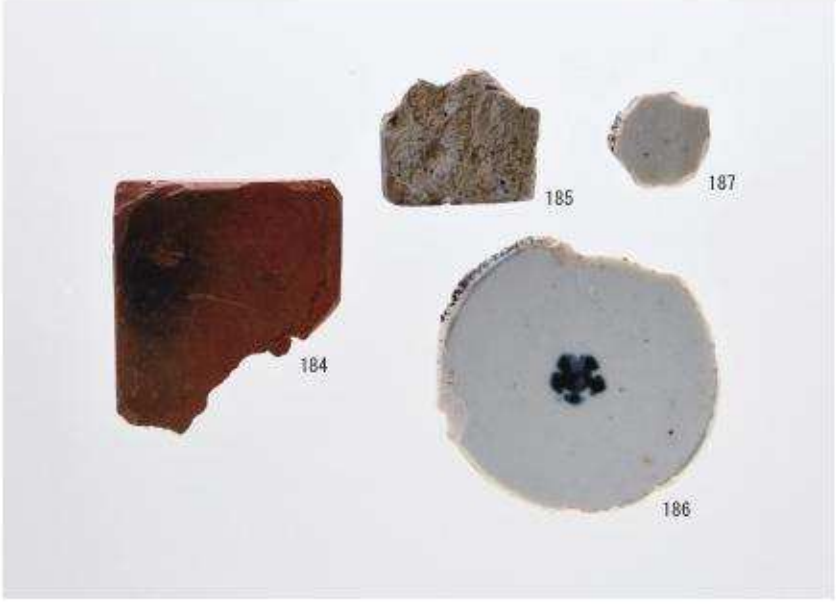
28
214
110
98
101
102
212

図版 24



180
69

227
228
14
226
225
13


184
185
187
186

1工区　調査最終日にて　　2016. 10. 17

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しんなべいせきぐん
書　　名	新南部遺跡群（12 次）
副　書　名	白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シ リ ー ズ 名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第 329 集
編 著 者 名	山下義満
編 集 機 関	熊本県教育委員会
所　在　地	〒 862-8609　熊本県熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
発 行 年 月 日	2018 年 3 月 31 日

ふりがな	ふりがな	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
新南部遺跡群（しんなべいせきぐん）	熊本県（くまもとけん） 熊本市（くまもとし） 東区新南部（ひがしくしんなべ）	43 201	332	130° 45′ 2″	32° 49′ 19″	2016年8月16日 ～ 2017年2月23日	約3,100㎡	白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新南部遺跡群	生活	弥生 古代	住居	縄文土器 弥生土器 土師器 石器	縄文後期土器「北久根山式」出土 弥生時代の竪穴住居 8 軒 古代時代の竪穴住居 15 軒 白川に近接した弥生、古代の集落

要　約	本遺跡は白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財調査で、調査期間は 2016 年 8 月 16 日～2017 年 2 月 23 日である。調査結果、遺跡は弥生中期と古代（8 世紀前半）の時期とに想定される。調査成果は住居地やその生業に使用された道具類の出土も顕著であった。 調査区は東西に弓状に細長く河川台地の先端部で、遺跡全体としては未確定部分も多いが、この遺跡の時期、白川に多く存在する遺跡の一つであり、本遺跡の調査は今後の白川流域の様相解明の一助となる遺跡である。

熊本県文化財調査報告　第329集
新南部遺跡群（12次）
－白川河川激甚災害対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－

平成30年3月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

印刷　ホープ印刷株式会社
〒861-8007　熊本市北区龍田弓削1丁目4番12号

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第３２９集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：新南部遺跡群（１２次）
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺６丁目18番１号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦２０１９年８月３０日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/